

か じょう
嘉 門 貝 塚 A

— 牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書Ⅱ —

1991年3月

沖縄県浦添市教育委員会

あ い さ つ

嘉門貝塚発掘調査は、牧港補給地区内に於ける建設工事に係る緊急発掘調査として実施したものであります。ご存じのように同貝塚は、昭和55年に実施した遺跡分布調査の際に発見された遺跡であります。範囲確認調査が実施されていない地域であったため、城間遺跡、小湾遺跡と共に建設工事に先立ち試掘調査を行い、昭和62年度に開発に係る区域（約12,350m²）について発掘調査を行った成果をまとめたものであります。

今回の調査成果としては、沖縄貝塚時代後期中葉の頃の集落が明らかになり、遺物包含層からは貝層や純黒色土層の広がり、居住区と見られるピット群、石皿、ゴホウラ貝、アンボンクロザメ貝の集積等、相互の位置関係がおさえられるなど貴重なものになっています。

嘉門貝塚の発掘調査に係る全体像は、嘉門貝塚B区の調査報告の成果も総合しないと判断できない部分もありますが近隣の遺跡群との関わり等非常に興味深いものがあります。

今後は発掘調査で得られた貴重な資料を広く公開し、活用を図っていく所存であります。

最後になりましたが本報告書発刊にあたり、指導助言を賜わりました諸先生方に対しお礼を申し上げると共に本報告書が歴史的、学術的な解明の一助になれば幸いです。

平成3年3月

教育長 保久村 昌伸

例　　言

1 本報告書は牧港補給地区の開発工事に伴う嘉門貝塚の緊急発掘調査成果の記録である。嘉門貝塚の発掘調査は開発工事の工程上から2区(A・B区)に分けて行ない、本報告はA区の調査成果を収めたものである。

2 調査は那覇防衛施設局からの委託を受けて、浦添市教育委員会が実施した。

3 発掘調査にあたり次の方々から指導・助言をいただいた。記して、感謝申し上げる次第である。

　上村俊雄(鹿児島大学)・安里嗣淳(県文化課)・池田栄史(琉球大学)・知念 勇(県立博物館)・木下尚子(日本考古学会員)・呉屋義勝(宜野湾市教育委員会)

4 陶磁器の指導・助言、石質、獸・魚骨、貝類の同定については下記の方々による。記して、感謝申し上げる次第である。

陶 磁 器 池田栄史(琉球大学)

石 質 大城逸朗(県立教育センター)

獸・魚骨 金子浩昌(早稲田大学考古学研究室)

貝 類 黒住耐二(沖縄生物学会員)・久保弘文(県水産試験場)

5 本書に掲載した地形図は浦添市都市計画部都市計画課所収の1/2,500地形図を複製した。

6 遺物の写真撮影は沖縄考古学会員宮里信勇氏のご協力をいただいた。記して、感謝申し上げる次第である。

7 本報告書の執筆は下記のメンバーで分担し、編集は松川が行なった。

松川 章 第I・III章、第IV章第2節、第3節2・7~11

安里 進 第II・V章

下地安広 第IV章第1節、第3節1

高良京子 第IV章第3節3・4、第4節1

池田栄史 第IV章第3節5

金子浩昌 第IV章第4節2

8 出土した資料については浦添市教育委員会教育部文化課で保管している。

目 次

あいさつ

例 言

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第Ⅱ章 位置と環境	3
第Ⅲ章 調査の経過	9
第Ⅳ章 調査の成果	12
第1節 層序	12
第2節 遺構	15
第3節 人工遺物	
1 土器	21
2 石器	44
3 貝製品	57
4 骨製品	68
5 陶磁器	69
6 土製品	79
7 古錢	79
8 雁首	79
9 琥	80
10 古瓦	80
11 円盤状製品	81
第4節 自然遺物	
1 貝類遺存体	85
第5節 嘉門貝塚A区出土の動物遺体	94
第Ⅴ章 ま と め	111
図 版	113

第Ⅰ章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

昭和61年6月9日に那覇防衛施設局より牧港補給地区における建設工事計画について本市に通知があった。

建設工事計画地区は牧港補給地区の西側一帯で、販売所地区、倉庫地区、診療所・野球場地区、住宅地区の合わせて150,000m²である。

本市教育委員会は牧港補給地区の埋蔵文化財については十分に把握していないので、埋蔵文化財の確認作業が必要であり、建設工事にあたっては本市教育委員会と協議を要する旨の報告を行った。その後、那覇防衛施設局と本市教育委員会で協議を行い、昭和61年10月22日から同年11月20日の期間で埋蔵文化財の有無の調査を実施することになった。

調査は那覇防衛施設局が主体になり、開発工事計画内に30m間隔の方眼を組み本市教育委員会の職員立会いのもと重機による試掘調査と表面踏査による調査を行った。調査の結果、販売所地区で古墓群(城間古墓群)と近世および貝塚時代の遺跡(城間遺跡)、診療所・野球場地区で近世の遺跡(小湾遺跡)が確認された。住宅地区では昭和55年度に実施された市内遺跡分布調査の際に発見された嘉門貝塚が開発工事計画内に大部分が含まれることが明らかとなった。

本市教育委員会では埋蔵文化財の有無の調査の成果を踏まえ、那覇防衛施設局と確認された埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った。数度にわたる協議の結果、小湾遺跡については野球場の付帯施設であるバックネット、ベンチ等の配置及び設計変更を行ない、盛土保存することになった。しかし、城間古墓群、城間遺跡、嘉門貝塚については事業計画が既に確定しており、当該区域以外に建設用地の確保が困難であること、設計変更を行い現状保存が不可能であること等から、本市教育委員会が発掘調査事業を受託して実施することになった。

第2節 調査体制

事業主体 浦添市教育委員会 教育長 西原正次 (昭和63年3月まで)

〃 保久村昌伸 (昭和63年4月より)

事業所管 〃 教育部 部長 名嘉原安栄 (昭和63年3月まで)

〃 比嘉靖芳 (昭和63年4月～平成元年1月まで)

〃 東一男 (平成元年2月より)

〃 文化振興担当参事 西原廣美 (平成2年4月より)

事業総括 〃 教育部 文化課

課長 宮里良一 (昭和62年3月まで)

		タ	豊里友建	(昭和62年4月～平成2年3月まで)
		タ	宮城 勝	(平成2年4月より)
事務総括	タ	文化財係長	前津政廣	(昭和63年3月まで)
		タ	仲宗根盛栄	(昭和63年4月より)
事業事務	タ	主 事	小浜恵子	(昭和63年3月まで)
		タ	小波津春美	(昭和63年4月より)
		タ	下地安広	
		タ	松川 章	(昭和62年4月より)
		臨時職員	嘉数喜久子・運天純子・川満美和子・喜舎場涼子・ 棚原明子・大城政子	
調査員	タ	主 事	下地安広	
		タ	松川 章	
調査補助員	タ	臨時職員	宮城義明・比嘉 聰・島袋春美・大湾政人・下地 傑・高良京子・又吉純子・仲宗根菊枝	

発掘作業員

金城光子・比嘉サダ・石川チヨ・上地孝子・渡名喜悟・高嶺清子・崎浜良枝・宮城静子・石川
ヨシ子・森本和子・棚原弘春・宮城春美・高野キク・玉江秋子・阿嘉節子・福嶺信吉・比嘉ト
シ・玉那覇スミ・豊平マサ子・宮城良子・宮城光子・島袋正助・平良米子・与那覇浩・宮城美
代子・古堅厚徳・城間昌貞・城間辰重・宮城清子・宮城ユキ子・金城 清・宮城清子・上原ミ
ヨ・宮平良子・秋吉慎一・上里恵子・豊元充子・翁長静江・諸見里ユキ・宮城ミネ・前里定
勇・諸見太郎・宮平美千代・伊波盛吉・平山次郎・棚原キク・宮城昭善・嘉手納良信・横田政
雄・久手堅ミヨ・仲松 章・仲間節子・永山ケイ子・西原節子・西里光夫・平安山寛三・平安
山トヨ・栗国キヨ・垣花良子・山里 栄・當山玄昌・宮城ヨシ子・平良トミ・伊波富子・玉城
キヨ・叶 ハツ・比嘉 澄・上地善一・宮城吉子・津堅ノブ子

整理作業員

比嘉典子・仲地智子・住友千恵子・安和千代子・大湾政人・宮城 敦・大城研一・大城広輝・
宮平留美子・仲宗根菊枝・比嘉清美・波名城和枝・運天順子・儀間るみ子・金城京子・渡具知
征子・嵩原朋子・与那嶺文子・大浜利子・中野洋子・又吉純子・富里順子・上地孝子・上里恵
子・当間初江・大城洋子・国中恵子・古堅禎子・平田サヨ子・渡具知孝江・菊池絹子・徳村カ
ツ江・玉寄敏子・銘苅才子・奥原玲子・宮国福子・前川安美・真栄城由記子・又吉美佐江・栄
あゆみ・宮城律子・宮城明美・謝花トキ子・嶺間信子・吉村優喜江・親富祖直美・小嶺千鶴
子・仲間教子・比嘉郁子・安次富純子・佐和田悦子・銘苅尚子・小渡重成・仲松浩光・大見謝
哲郎・翁長律子

第Ⅱ章 位置と環境

—浦添の遺跡群と石灰岩台地と礁湖—

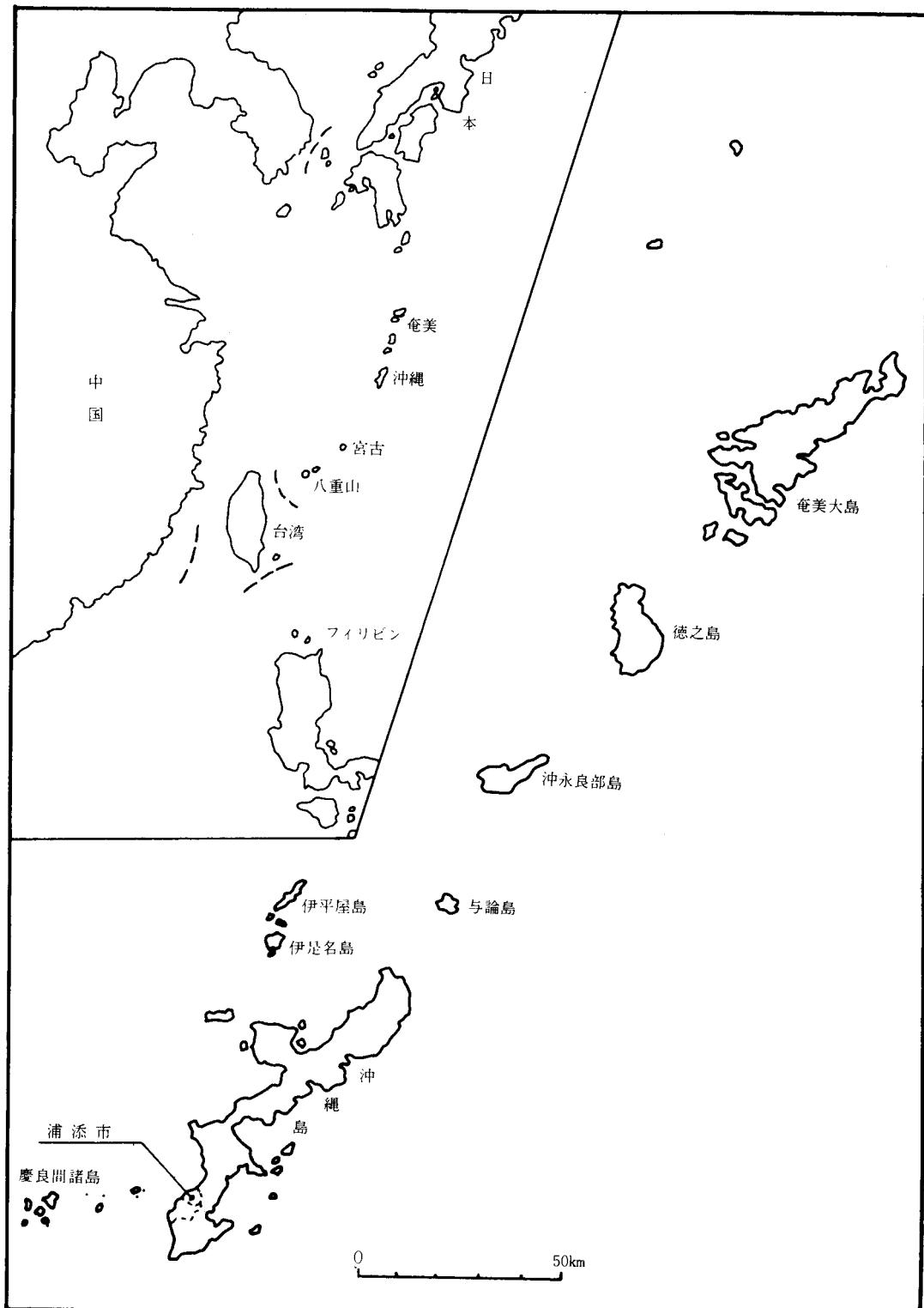
浦添は、13、4世紀の中山王国の王都として栄えた地域である。13世紀には伊祖グスクを居城とした英祖王統が、14世紀には浦添グスクを拠点にした察度王統が、天然の良港・牧港をひかえて海外交易で栄えたと伝えられている。

浦添が中山の王都として発展した背景として、この地域の農業生産力が高かったことも指摘しておかねばならない。グスク時代の農業は、石灰岩台地では、麦・粟畑作、谷底低地・海岸低地では水稻作を行う複合農耕であった。浦添は石灰岩台地が広がるとともに、牧港川・シリン川・小湾川・安謝川などの小河川流域に谷底低地も展開しており、畑作と水稻作を複合的に行える地域として生産力は比較的安定していたとみられる。浦添の石灰岩台地の縁辺には、伊祖グスク、浦添グスクという大型城塞的グスクを中心に、グスク時代の集落遺跡が多数存在し、遺跡群を形成しているが、これはこの地域の生産力が豊かであったことを物語っている。そして浦添と同様な地形の糸満、今帰仁から山南、山北という小王国も形成されてきたのである。

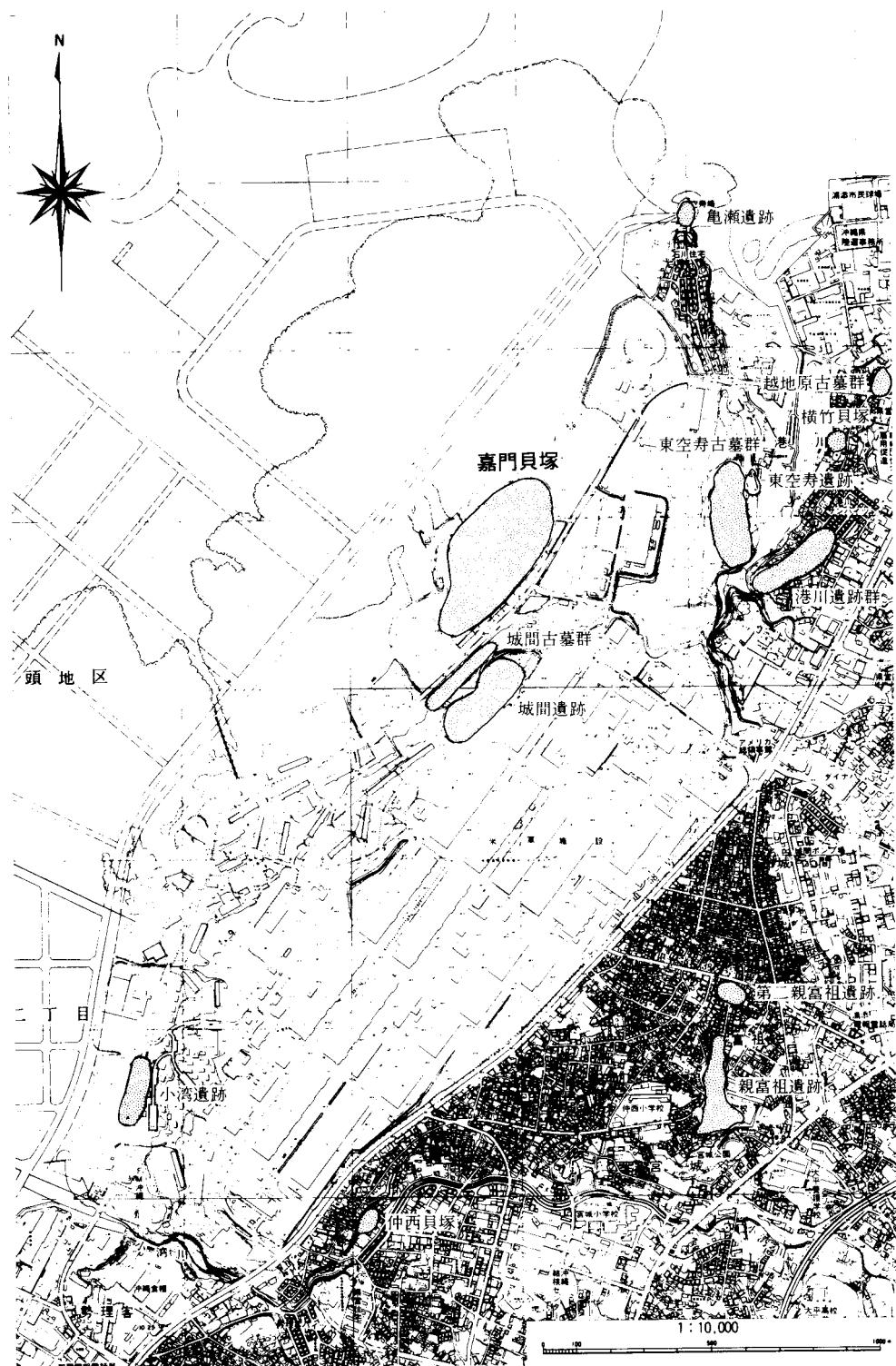
しかし、浦添グスクを拠点にした察度王統は、武寧王代の15世紀初頭に佐敷から興った思紹・尚巴志父子に滅ぼされた。そして思紹・尚巴志父子は、1420年代に山南、山北の二国を併合して琉球王国を打ち立て、中山の王都も首里に移され、王都としての浦添の歴史は終焉した。15世紀中葉の「琉球国之図」では浦添は「浦傍城」と記載されているが、尚真王代(1477~1526年)には、行政の単位としての間切・島制度が敷かれ、浦添間切となつた。初期の浦添間切は、宜野湾市南部を含む広い地域であったが、近世の1671年に浦添間切などの一部をさいて宜野湾間切が新設された。こうしてほぼ現在の浦添市域の原型は成立した。

さて、嘉門貝塚からは15~19世紀の陶磁器などの遺物と、近世18、9世紀の畠道・畠区画の遺構が発見されている。この遺跡に最も近い位置にあった近世集落が、城間村であるが、この集落は、嘉門貝塚の南西方向1km余りの石灰岩台地上にあった。城間集落は、すでに16世紀の古歌謡集である『おもうさうし』に「くすくま」という地名で登場し、17世紀中葉の『絵図郷村帳』・『琉球国高究帳』の「城間村」をへて現在まで継続してきている(戦後、米軍基地に収容されたため現在地に集落移動)。嘉門貝塚が所在する小字「嘉門原」はこの城間村の村域内であり、嘉門貝塚の15~19世紀の遺物・遺構は、城間村との関係において理解されるべきであろう。

『琉球国高究帳』によると城間村は石高515石余高となっている。この石高は当時の村の石高(40~200石の間に集中)に比べると飛び抜けて高い。このことは城間村の人口がきわめて多かったことを示唆している。近世前期の羽地間切では、飛び抜けて人口が多かった田井等村の集落・屋敷が各所に分散していたことが知られている。また、近世前期には、集落・屋敷が



第1図 浦添市の位置



第2図 遺跡の位置と周辺遺跡

分散していた村が多かったことも指摘されている。したがって城間村も、その周辺に小集落・屋敷が散在していた可能性が強い。嘉門貝塚の15世紀以後の遺物は、そうした城間村の小集落・屋敷が嘉門貝塚付近に存在してしていたことを示唆している。

ところで、『琉球国高究帳』に記載された城間村の石高のうち59.8%は畠方、40.2%は田方である。近世琉球においては田方(稻)の石高は畠方(雜穀)の2倍に見積もられ、また、石高の算定も各村の生産等級を定めた「村位」の評価ともかかわっているので、この田畠石高の比率がそのまま田畠の面積比にはならない。それでも城間村の畠方の割合は沖縄の一般的な村と比べてみると高く、畠卓越の村に属していたことがわかる。

1713年に編集された『琉球国出来記』には各村の農耕祭祀が記載されている。稻穂祭・稻大祭は近世沖縄のほとんどの村で行われていたが、麦穂祭・麦大祭を行う村は少なく、石灰岩台地地帯に集落が立地し、『琉球国高究帳』の田畠石高比も畠方が60%以上の村で行われていた。さらに、栗穂祭・栗大祭となると稻作がまったく行われていない伊江島や粟国島に限られていた。このことは、城間村が石灰岩台地での麦栽培を主生業とする村であったことを意味している。

こうした傾向は浦添間切全体についててもいえる。王国末期19世紀の『琉球藩雑記』に記載された浦添間切全体の田畠面積を比較してもやはり畠面積が卓越しており、また、貢納した麦・粟の石高をみても貢麦が圧倒的に多い。こうした近世史料とさきにのべたグスク時代の農業形態、そして石灰岩台地が広がる地形からみて、城間村そして浦添はグスク時代以来、麦畠作が卓越する地域であったと考えられる。

さて、嘉門貝塚の主な遺物・遺構の時期は沖縄貝塚時代後期であり、今回の発掘でこの時期の集落址であることが明らかになった。グスク時代が農業生産を基礎に窯業や海外交易が展開し、各地に城塞的グスクが出現した生産経済と政治の時代であったのにたいし、沖縄貝塚時代後期は、漁労を主要な生産部門にした採取経済的様相が濃い時代であるという大きな時代の差異がある。したがって、沖縄貝塚時代後期の嘉門貝塚と浦添の状況についてはグスク時代・古琉球とは別の観点からながめてみなければならない。

沖縄貝塚時代後期の遺跡については海岸の「砂丘」に立地していることが強調されている。しかし、遺跡群としての立地をみると、リーフで囲まれて珊瑚礁が発達した礁湖(ラグーン)を前面にひかえ、背後には石灰岩台地がひろがる地域に群をなして分布することが指摘されている。沖縄本島中・南部では、糸満、具志頭、読谷、具志川にそれぞれ沖縄貝塚時代後期の遺跡群が存在するが、宜野湾市南部を含む旧浦添地域でも、こうした典型的な立地条件のもとに大小20余の遺跡が群を形成している。

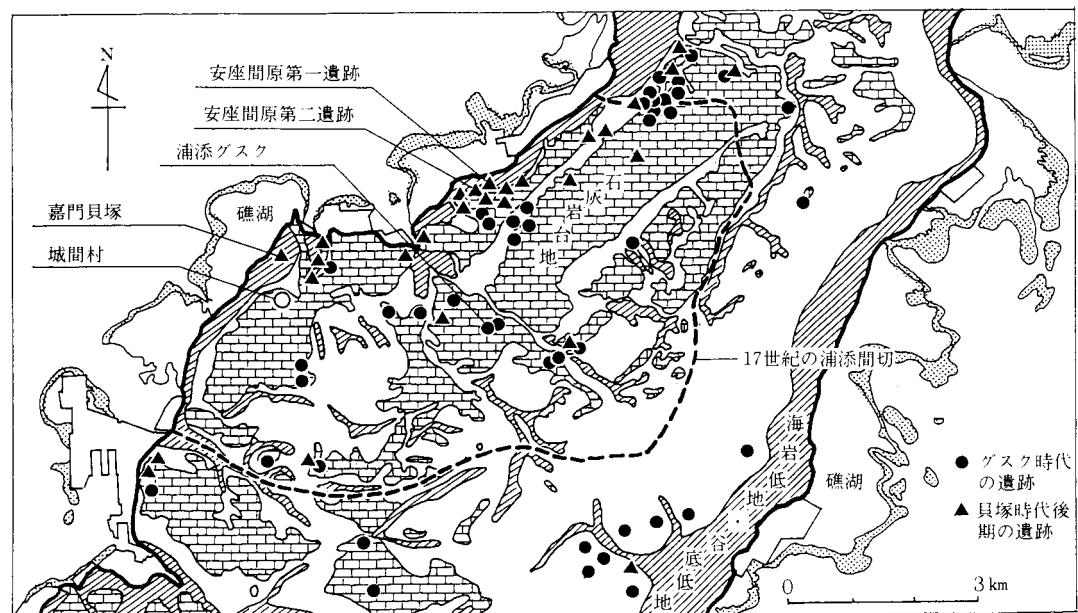
この浦添群ともいべき遺跡群の中心的集落遺跡が、宜野湾市の真志喜安座間原第一・第二遺跡であろう。安座間原の二つの遺跡では、多数の重複した住居址と貝層、墓地、ゴホウラやアンボンクロザメなどの貝集積などが発掘されており、浦添群の拠点的な集落だと考えられる。嘉門貝塚でも居住区・貝層・土壙墓・貝の集積などが発掘されたが、安座間原第一・第二遺跡

よりも規模が小さいので、枝集落だと考えられる。これらの集落では貝層が広がり、漁網具や叩き石などの漁労具も多数出土しているので、漁労が活発だったことがわかる。遺跡群の主要な立地条件である礁湖は、珊瑚礁が発達して格好の漁場となっている。こうした礁湖を単位に遺跡群を構成している各集落は礁湖内での漁労の協業を軸にした漁労共同体を形成していたとみられる。

いっぽう、沖縄貝塚時代後期には弥生時代九州と貝をめぐる交易を活発に行っていた。沖縄からは九州の首長たちの権威を象徴する腕輪素材のゴホウラ貝が搬出され、九州からは弥生文化の文物がもたらされた。さらに弥生文化の墓制などの習俗も受容されるなど弥生文化の影響も強く受けていることが明らかにされてきている。嘉門貝塚や安座間原第一・第二遺跡も弥生時代九州との交易のネットワークに組み込まれていた。嘉門貝塚や安座間原遺跡からはゴホウラ貝の集積が発見され、そして九州方面から搬入された弥生土器とゴホウラ貝製腕輪も出土している。

しかし、このような沖縄と九州との貝をめぐる交易のあり方の解明には、九州対嘉門集落の交易という形態ではなく、浦添群という共同体を媒介にした交易という観点が不可欠である。個々の遺跡の分析だけではなく、浦添群というような遺跡群全体を一つの社会ととらえ、その社会内部における各集落の機能的役割という観点から考えなくてはならない。そのためにも宜野湾市の安座間原第一・第二遺跡やそのほかの小遺跡との比較分析が今後の重要な作業となるであろう。

ところで、嘉門貝塚からは小量ではあるが、沖縄貝塚時代前期以前(縄文時代)の土器も出土



第3図 貝塚時代後期・グスク時代の遺跡分布と17世紀の浦添間切

※地形分類は『土地分類基本調査－沖縄本島中南部地域』(国上調査・沖縄県 1983) から作成

した。そこでこの時代の浦添の遺跡をみると、研究史上著名な大山貝塚と、九州から運ばれてきた市来式土器が出土した浦添貝塚がある。これらもやはり、宜野湾市南部を含む旧浦添地域の石灰岩台地の段丘崖下や台地縁辺に立地しつつ、沖縄貝塚時代前期以前の遺跡が群をなして存在している。

珊瑚礁が発達した礁湖と石灰岩台地地帯が広がる旧浦添地域には、沖縄貝塚時代前期以来グスク時代にいたるまで、立地条件は変わりながらも各時代の遺跡群が形成されてきた。つまりこの地域には沖縄貝塚時代以来、一つの地域的まとまりが存在してきたと考えられる。このような伝統のうえに、古琉球から近世琉球の浦添間切という行政単位も設定されてきたのであろう。

参考文献

- 三島 格『南島考古学』(南島文化叢書10、第一書房、1989年)
高宮廣衛『先史時代の沖縄』(南島文化叢書12、第一書房、1990年)
安里 進『考古学からみた琉球史・上』(ひるぎ社、1990年)
浦添市教育委員会『浦添市史・第6巻資料編』(1986年)
浦添市教育委員会『浦添市史・第1巻通史偏』(1989年)
宜野湾市教育委員会『土に埋もれた宜野湾』(1989年)

第Ⅲ章 調査の経過

発掘調査は昭和62年8月17日から同年11月15日の期間で実施した。

本地区における試掘調査の結果、客土が調査区全体を被覆しており、そのため昭和61年3月に客土の除去作業を実施しておいた。

調査は客土の残土がみられることから、グリッド設定は残土を除去した段階で行なうこととし、遺物包含層の正確な範囲を把握することから始めた。

調査区を縦横断するトレンチを東西方向に2本(A・Bトレンチ)、南北方向に3本(1~3トレンチ)を任意に設定した。範囲確認は遺物包含層あるいは地山を確認しながら漸次西側に移動していくこととし、部分的に地山の赤土が露出する調査区東側から発掘調査を開始した。また、表面で採集される遺物については各トレンチで区画される区域に北から0・A・B、東から西へ1~4として取り上げた。

東西方向のA・Bトレンチと南北方向の1トレンチの客土を除去していくと、大部分で地山の赤土が露呈し、遺物包含層は確認されなかった。しかしながら、Bトレンチでは南北方向に連なる約11mの石列が検出され、また、地山面においては褐色の落ち込みが確認された。落ち込みからは近世の陶磁器を包含するものもみられた。その外にセメント製の排水溝、電信柱の掘削孔などの戦後遺構と考えられる構築物も検出された。褐色の落ち込みや石列が検出されたことから近世期の遺構の存在が考えられたことから、トレンチを東西方向に4本(C・D・E・Fトレンチ)、南北方向に2本(4・5トレンチ)を新たに設定した。6本のトレンチの客土を除去すると、褐色の落ち込みがBトレンチ近くで2例が確認されたのみであった。

調査区の中央部ではAトレンチで褐色の混土砂層が露呈し、表面に貝殻、土器等の先史遺物が認められた。また、Bトレンチにおいても同様の褐色混土砂層が確認された。褐色混土砂層は赤土(地山)の西端と接し、西側への展開がみられた。Bトレンチの南側は琉球石灰岩が露頭し、周辺では地山の赤土が露呈していた。

西側ではA・Bトレンチと南北方向に設定した3トレンチの発掘から本地区には淡茶褐色砂層が広く分布していることが分かった。また、全体的に客土が未だ残っており、パワーショベルとトラックでその除去を行なうことにした。今回の調査では作業効率を高めるためにベルトコンベアと廃土運搬用の2tトラックを発掘調査開始後に導入して調査を進めた。

客土を取り除くと水道管理設溝、電信柱等の掘削孔が多く検出された。客土除去作業中に北西隅で青磁と古銭の出土があった。淡茶褐色砂層面で先史遺物は石器(磨石)1点が確認され、南西隅では調査区東側で検出された石列と類似する石灰岩礫を1列に並べた石列が出土した。

淡茶褐色砂層の状況確認のため、テストピットを3ヵ所に設定した。その結果、テストピットNo.1・2では淡茶褐色混土砂層下は白砂層で、遺物は唯一No.1で白砂層直上から古瓦が1点得られただけであった。No.3は中央部付近に設定したもので、淡茶褐色砂層下に褐色混土

砂層が確認され、少量の貝殻と土器、多量の軽石が出土した。

淡茶褐色砂層はテストピットと電柱等の設置孔の壁面観察から遺物包含層ではないことが確認され、調査の主体は中央部へと最終的には絞られた。

客土が大方取り除かれたので、調査区の南東側を走る道路を軸ラインとした8m四方のメッシュを組み、北西から南東方向に五十音、北東から南西方向に算用数字を付した。グリッド番号は南隅の杭で表し、「さ-17、さ-18・・・」とした(第4図参照)。

客土と淡茶褐色砂層を除去すると「さ-18」グリッド一帯で石灰岩礫による石列が2列並行して検出された。石列は砂丘上に黄褐色土を盛土し、その上に構築される。石列の南側には産業廃棄物の投棄穴があり、石列の一部はその際に壊されている。石列を露出させ、撮影と実測を行なった後、礫と黄褐色の盛土の除去を始めた。

黄褐色土の下位の大部分は褐色混土砂層が露呈したが、東側の赤土と接する部分ではグスク時代の遺物を包含する黒褐色土層が表れた。本地区で確認できた遺物包含層はこの2枚である。黒褐色土層は今回の嘉門貝塚A区でのみ確認されたもので、嘉門貝塚B区では確認されてない。

以上のことから、赤土部にグスク時代の遺物包含層が存在していたと考えられ、それは戦後、米軍が本地区を利用する際に削平されたものと考えられた。

褐色混土砂層は砂丘と赤土の境界が内湾状地形を呈する西側一帯に分布し、東から西へ傾斜を示す。露出させた褐色混土砂層には土層観察用の畦を「こ・さ・し」ラインと16・17・18ラインに設け、発掘を開始した。

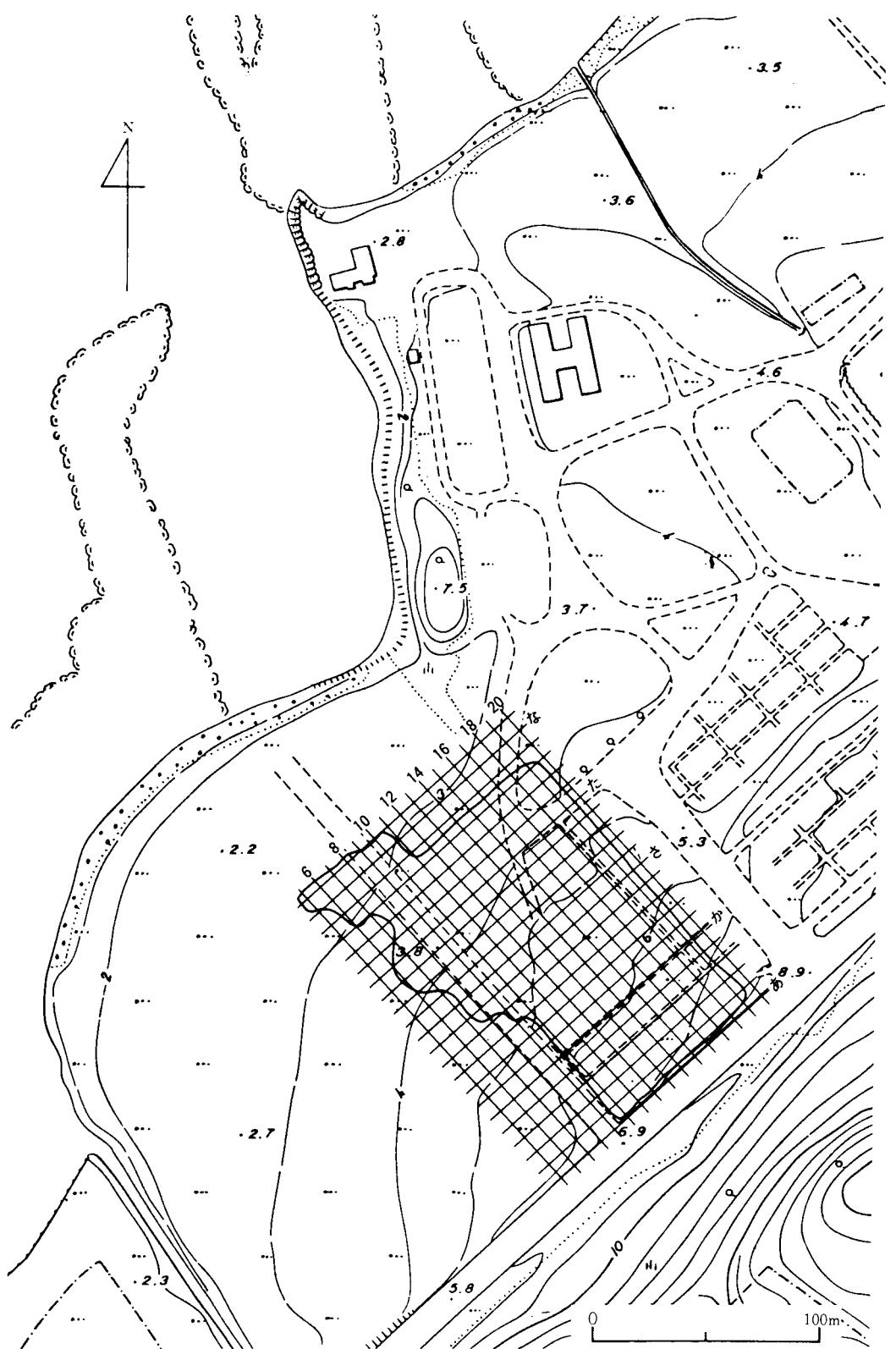
褐色混土砂層は表層において遺物は少ないが、直径1cmから拳大の軽石が多くみられた。軽石は西側の淡茶褐色砂層では散見される程度であり、テストピットNo.3の出土状況もあわせて考えると、軽石は遺跡が廃棄された後に打ち寄せられたものと解釈された。なお、軽石については理科学的な分析を行うことにより、産出地、生成年代の把握が可能かと考えるが、未調査のため、別の機会で調査を依頼し、報告したい。

遺物の出土状況は「さ-18」グリッドで顕著で、特にグリッドの北東隅に位置する石灰岩の南側で比較的集中して検出された。遺物では貝殻が多くみられるが、貝層を形成する程ではない。

貝殻の中では交易品として考えられているアンボンクロザメとゴホウラの集積が検出された。

「さ-17」グリッドでイノシシの骨の集積もあった。出土した人工遺物について出土地点を平板図にプロットし、標高値を測定した後に取り上げることとした。

褐色混土砂層を掘上げた後、地山移行層の黄褐色砂層を露呈させ、地山面に残る遺構の検出作業を行った。その結果、合計51例の柱穴様のピットが検出された。特に「さ-18」グリッドの北西隅と「し-18」グリッドの北東隅に集中していたが、明確なプランを把握するまでには至らなかった。また、大型の石皿が出土した「さ-16」グリッドにおいても住居址の可能性が考えられたものの、検出されなかった。柱穴様のピットの写真撮影と実測を行なった後、パワーショベルで地山の白砂層を掘削し、基盤の琉球石灰岩を確認して調査を終えた。



第4図 グリッド設定図

第Ⅳ章 調査の成果

第1節 層序

発掘調査区は土質で見ると基本的には2地区に大別される。すなわち、調査区の内陸側に位置するところの石灰岩の基盤と赤土(地山)からなる地区と海岸寄りに位置する海浜砂丘からなる地区である。昭和61年度に実施した試掘調査により砂丘部分に包含層が確認されていたため、砂丘部分と砂丘後背にある赤土接点部分に焦点をあててグリッド設定を行い調査を実施した。

しかし、前述の内陸側は、調査区の約4分の1に相当する面積を有することからトレンチ発掘調査を東西に4本、南北に6本それぞれ入れ、埋蔵文化財の見逃しがないかをチェックした。この部分の層は、先に剥ぎ取った上部搅乱層が40~60cm有り、その下層に赤土(地山)が認められた。赤土面には、ところにより黒褐色を呈する部分や石列・柱穴が確認されたが、何れも米軍提供施設として利用された前後のものと推察された。

砂丘部分は、調査区の約4分の3に相当する。同部分も前者同様、上部搅乱層が60~80cmあり、その下に褐色を呈する硬く締まった混土砂層の広がりがあった。なお、同層の一部に包含層の広がりを確認することができた。グリッドで示すと「け～せー15~19」の地区で、時代的には高宮暫定編年時期区分後期と推察された(詳細は、まとめを参照)。また、前述の地区を含めた発掘全域にゲスク時代および近世沖縄の陶磁器・瓦等の遺物、ところによっては比較的新しい時代の所産と思われる石列遺構が散見された。以上の状況から推察できるように土層の変化は少なかった。よって、層序は、砂丘部分で重要な位置を占めるグリッド設定図で示すところの18ライン(南東から北西に走る)の一部を代表的な層序として略述する。しかし、前述のとおり先に重機を導入して上部搅乱層(第Ⅰ層)を剥ぎ取ったため、層の記述は実質的には上位より数えて2番目の層からの記述である。

◇18ラインの層序(第6図)、本ラインは赤土と砂丘の移行部分を含む位置である。

第Ⅱ層 茶褐色土層

近世の石垣を積む際に入れた部分的な土で、グリッドにすると「こ」「さ」一帯のみに認められた。層の厚さは10~40cmを測った。また、同層には部分的に溝状の掘り込みがあり、溝の底には褐色土の堆積が認められた。

第Ⅲ層 黒色土層

二次的堆積土で、前記の層の下方に狭い範囲に認められる粘質性が強い土である。層の厚さは厚いところで約8cmを測るが、部分的に上層の掘り込みがあるため、同層が切断されるところもある。遺物はゲスク時代のものが散見された。

第Ⅳ層 褐色混土砂層

同層は、18ラインを含め砂丘地区全域に平均して認められる層で、部分的に高宮暫定編年後期相当の包含層の広がりが確認された。前述の状況から同層は部分的に区別すべきと考えたが、調査においても地区として、分けて発掘調査を行ったものの、層としては識別できなかったことから一つの層として扱った。また、後期相当の包含層以外のところでは、青磁、染付、陶器、かんざし(青銅製)、古錢、古瓦等の遺物のみが散見された。層の厚さは平均すると約20cmを測った。

同層は全体に堅くしまっており、水の透水性は若干あるものの侵透は悪く、雨が多少降ると雨水が溜る程であった。この層の特記事項として、内陸寄りの「さ」・「し」ライン一帯に直径1~5cmの軽石の分布が確認された。

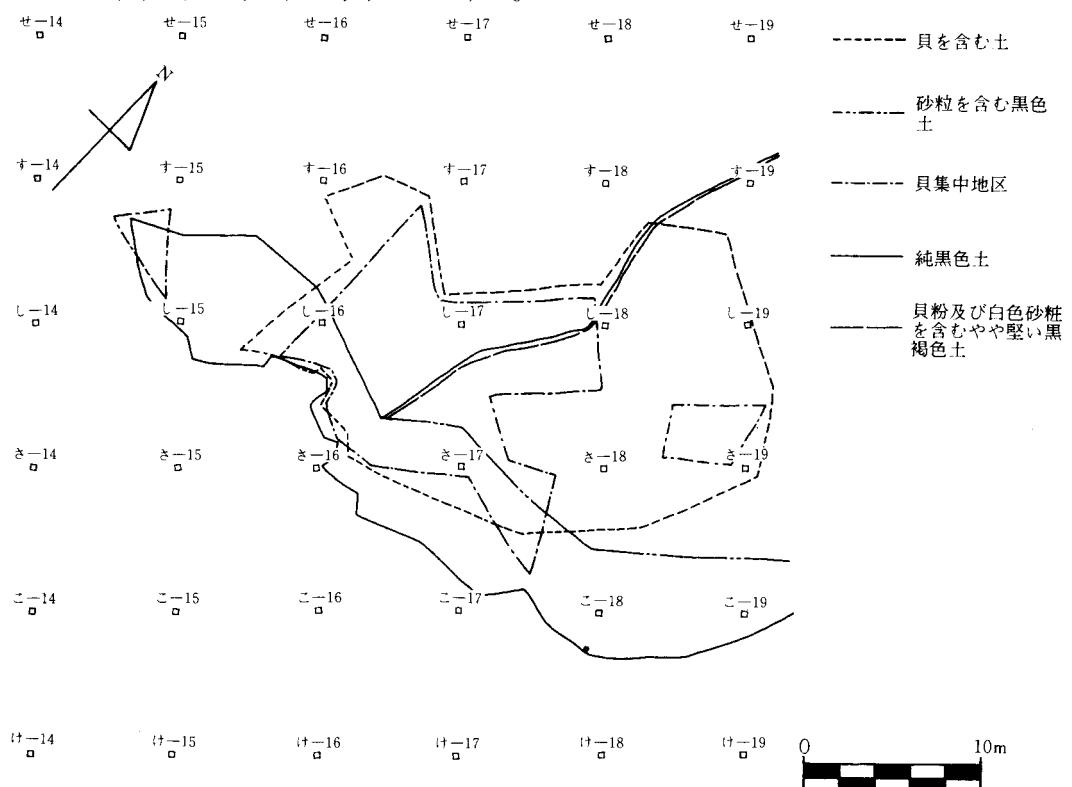
第V層 白色砂層(地山)

同層は、砂丘部分のいわゆる地山で50~200cmの厚さを有する。その下はサンゴ枝からなるジャリ層が約50cm程あって、さらに下方には、基盤の琉球石灰岩が認められた。また、ジャリ層および琉球石灰岩基盤は、海岸線側に移行するにつれ、次第に深い位置で認められた。

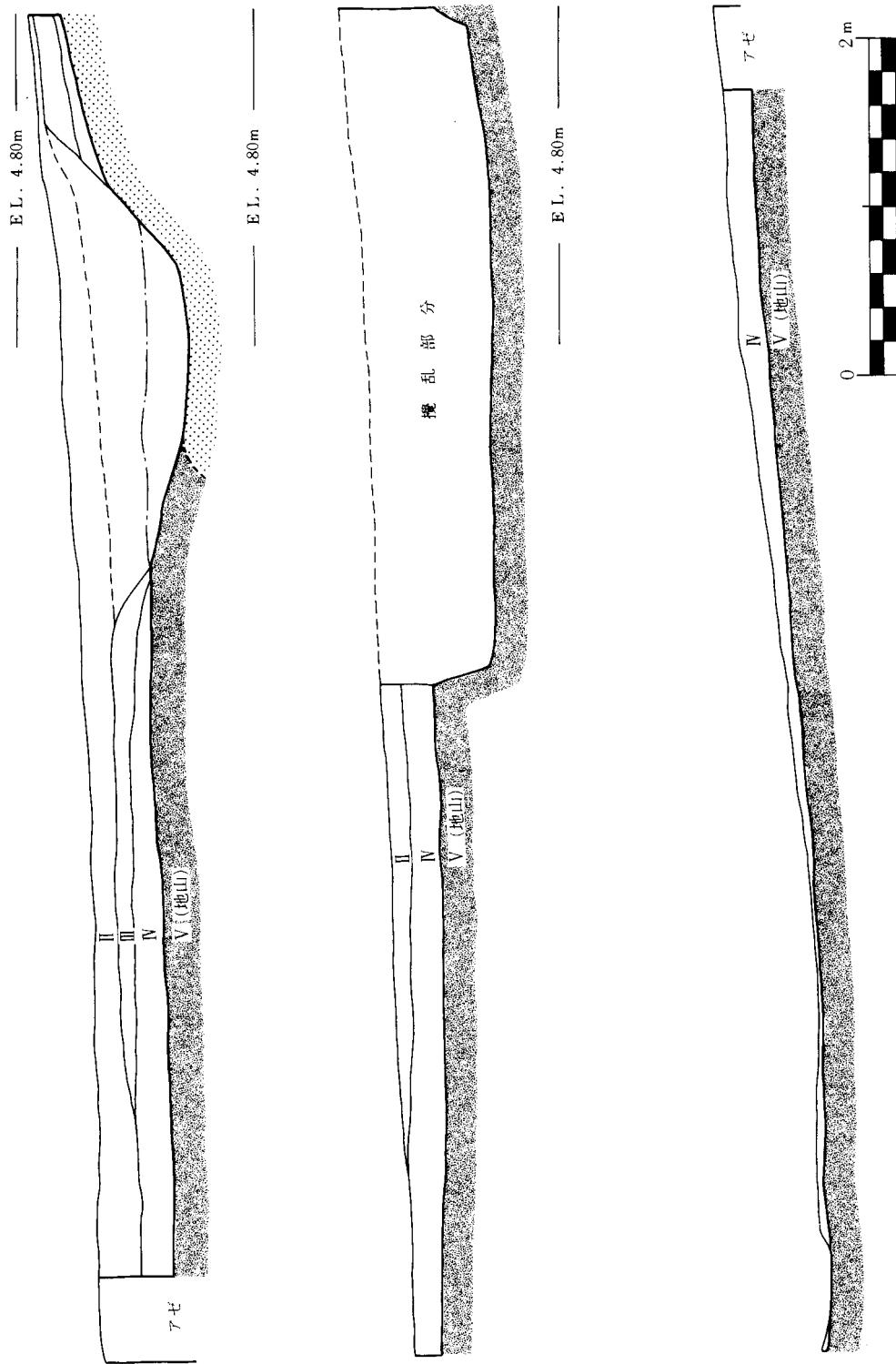
第VI層 赤土(地山)

同層は、「こ」—18グリッドの内陸寄りで認められた。調査区全体ではグリッド設定の名称で言うと「こ」~「せ」ラインを起点に内陸側の地山は赤土であった。

以上、層序を略述したが、前述のように層位的に後期の包含層部分を検出出来なかったことから、これを補足する資料として貝殻の分布と代表的人工遺物の分布を図化した貝殻および人工遺物分布平面図を第5図に示すこととする。



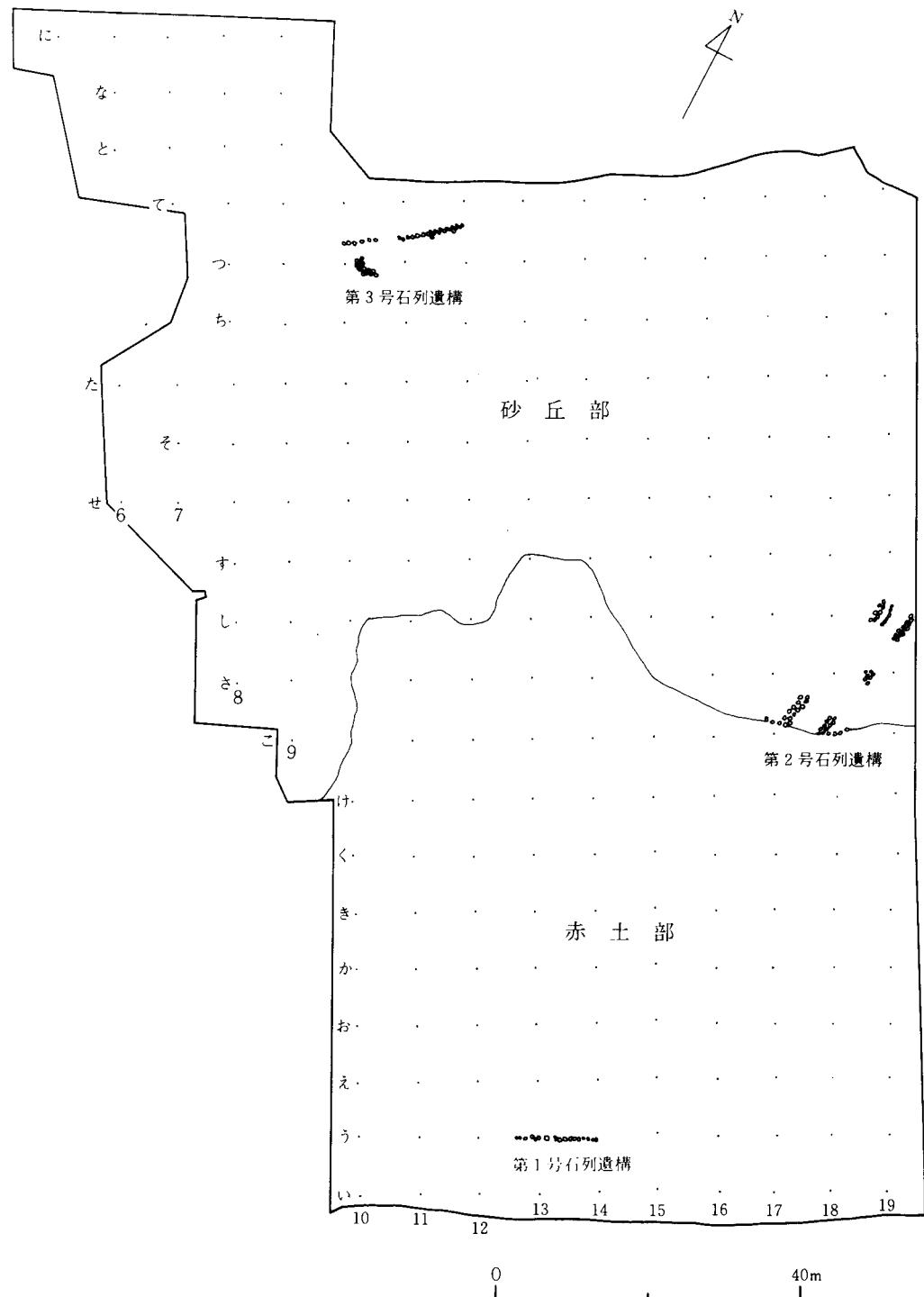
第5図 貝殻および人工遺物分布図



第6図 18ラインの層序

第2節 遺構

検出された遺構は石列遺構、貝集積遺構、柱穴状遺構の3種で、石列遺構は近世期に属し、後2者は沖縄貝塚時代後期の遺構である。



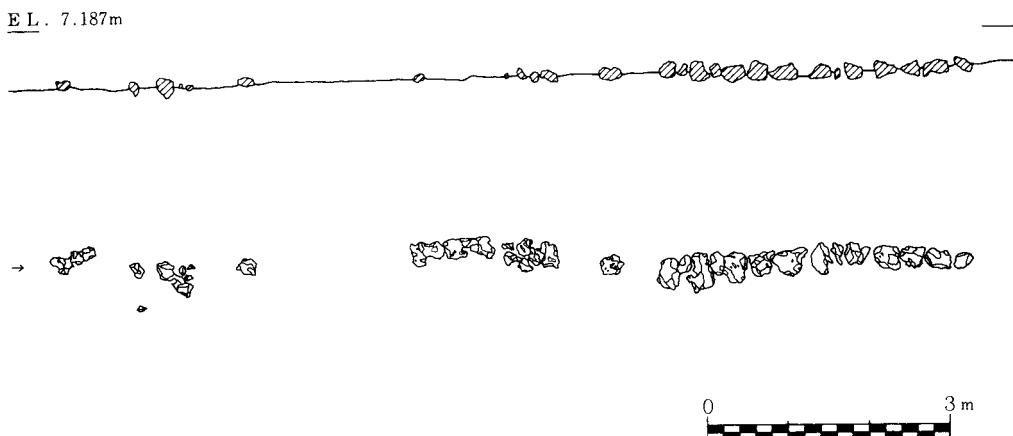
第7図 石列遺構位置図

1 石列遺構

石列遺構は3基が検出された。石列遺構には検出された順に第1号石列遺構、第2号石列遺構、第3号石列遺構とした。石列の性格については、嘉門貝塚一帯は戦前において住宅ではなく、畠地として利用されていることから、第1・3号石列遺構は畠地等の境界として並べられた石列ではないかと考えられる。第2号石列遺構は砂丘地に盛土して構築されており、また、規模も大きいこと等から道路としての利用が考えられる。

第1号石列遺構(第8図)

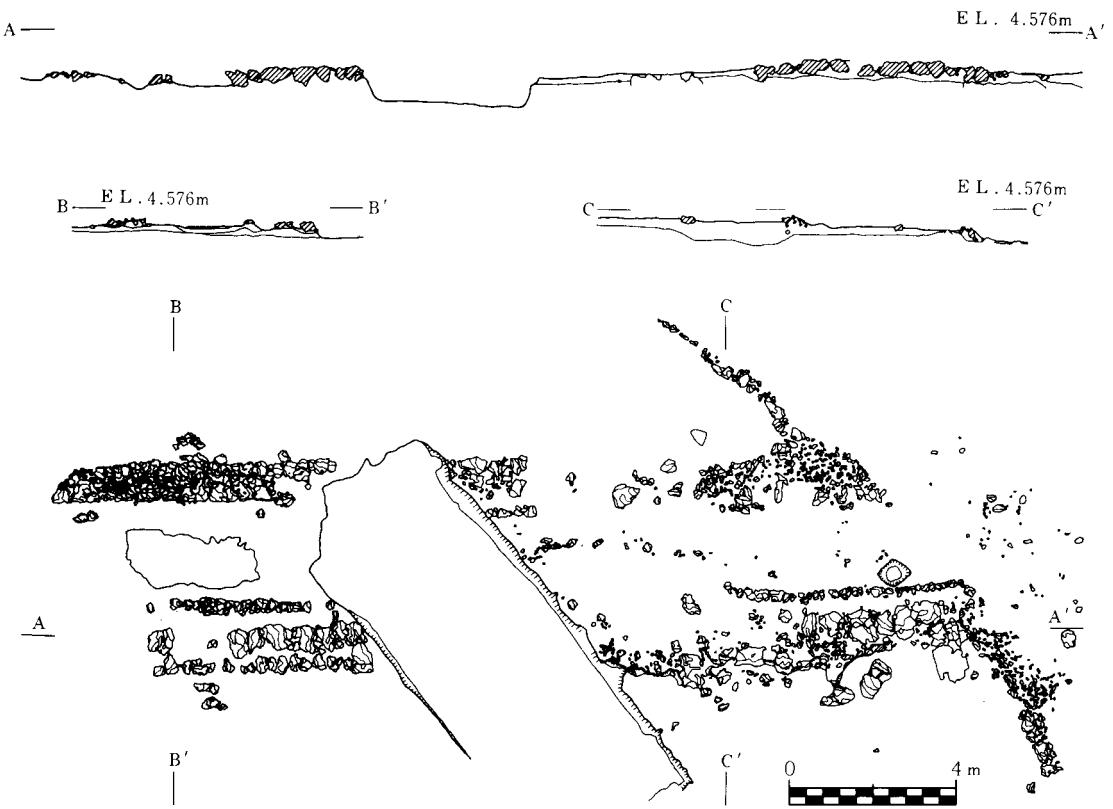
調査区の東側で検出されたもので、人頭大の石灰岩礫を北27°東の方向に並べる。石列は地山の赤土上に配されるが、緩やかな波状を呈する。南側の保存は良好であるものの、北側では大部分欠落している。全長は約11mを測る。周辺からは、本石列遺構に関連する遺構はみられない。



第8図 第1号石列遺構

第2号石列遺構(第9図)

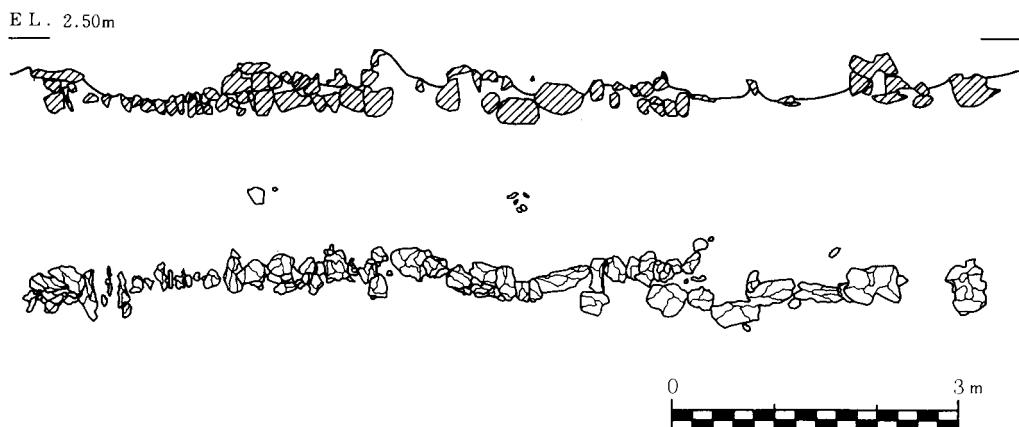
調査区の中央部で検出されたもので、北19°西の方向に列間1.1mで並列する2列の石列である。石列は産業廃棄物の投棄穴掘削等により部分的に欠落し、また、北側部分も終結せず欠けている等、後世の搅乱がみられる。砂丘部(褐色混土砂層)は黄褐色土を南側の石列から調査区の北壁まで、厚さ約30cm盛土し、その上に構築される。境界部から北側へ約30mの長さを有し、境界部ではそれぞれ境界にそって外側へ屈曲する。2列の石列の内、北に位置する石列の西側は石灰岩礫が約50cmの幅で敷かれるが、東側では後世の搅乱のため大部分が欠落している。南に位置する石列は比較的大きな石灰岩礫が並べられる。西側の石列間に長径120cm、短径50cm、厚さ8cmの貝殻の集中部がみられ、陶器片等を混入する。北側の延長部分については嘉門貝塚B区(平成4年度報告予定)において確認されているが、後世の搅乱により終結部は認められなかった。



第9図 第2号石列遺構

第3号石列遺構(第10図)

調査区の南西隅で検出されたものである。調査区の西端は人為的に掘削され、溝状を呈しており、その斜面の縁に沿って北49°西の方向に並べられる。石列は人頭大の石灰岩礫で約8.5mの長さを有するが、後世の搅乱を受けたとみられ、部分的に欠落し、第1号石列遺構のような整然とした状態にはなかった。石列の南半部の東側には「L」字状の石敷も見られる。



第10図 第3号石列遺構

2 貝集積遺構

貝集積遺構はアンボンクロザメの集積2基、ゴホウラの集積1基の合わせて3基の集積遺構が検出されている。3基とも比較的近位置で出土しており、集積する場所は特定されていたものと考えられる。アンボンクロザメの集積を第1・2号貝集積遺構とし、ゴホウラの集積を第3号貝集積遺構とした。

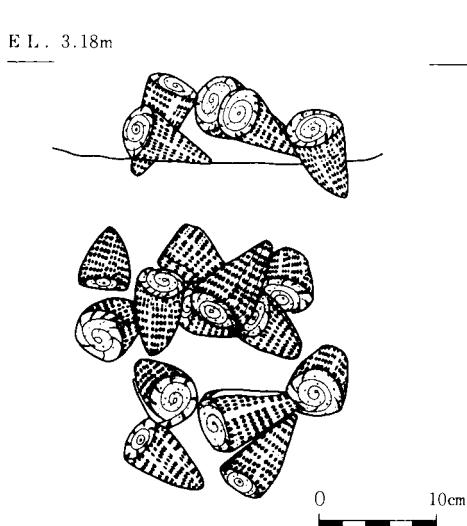
貝集積遺構については交易品のストックとして考えられている。貝種はゴホウラ、イモガイ、オオソデガイ、アツソデガイ、マガキガイの4種が確認されており、それらは単独あるいは数種が混在して集積される。時期的には沖縄貝塚時代中期から後期初頭に比定されている遺跡でみられ、特に後期に集中する。現在のところ、本遺跡を含め19遺跡で合計55基の貝集積遺構が検出されている(註1)。

第1号貝集積遺構(第11図)

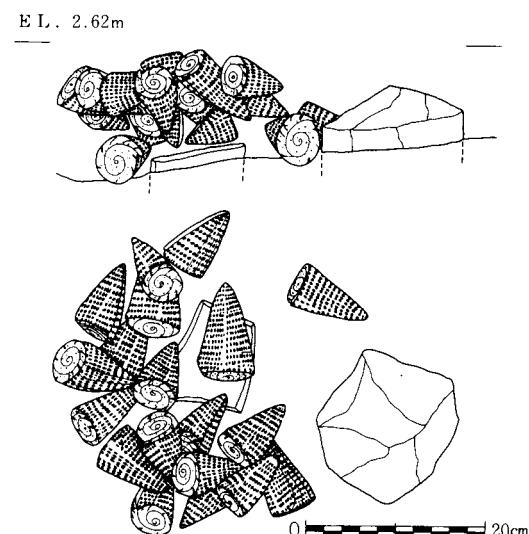
さー19グリッドの西隅で検出されたもので、貝種はアンボンクロザメである。褐色混土砂層の下層で検出され、集積下部は黄褐色の地山層の上に配される。集積状況は下部では殻頂部を外側に向け、上部はその外側に不規則に配置される。集積時においては上下2段に積まれていたものと考えられる。集積個数は14個で、貝殻に加工痕は認められない。貝殻は比較的同じ大きさのものが集められ、最小殻高は9.0cm、最大殻高は10.4cmで、平均は9.7cmである。

第2号貝集積遺構(第12図)

こー18グリッド東側の石灰岩が半円状を呈する内側で検出された集積で、貝種はアンボンクロザメを集積するものである。集積は褐色混土砂層の最下部から地山移行層の黄褐色砂層を掘り込み、殻頂部を南側に向けて弧状に配している。採集された貝殻に人為的な加工痕は認められない。集積個数は32個が検出されている。貝殻の最小殻高は9.3cm、最大殻高は12.9cm、平均の殻高は10.5cmである。



第11図 第1号貝集積遺構



第12図 第2号貝集積遺構

第3号貝集積遺構

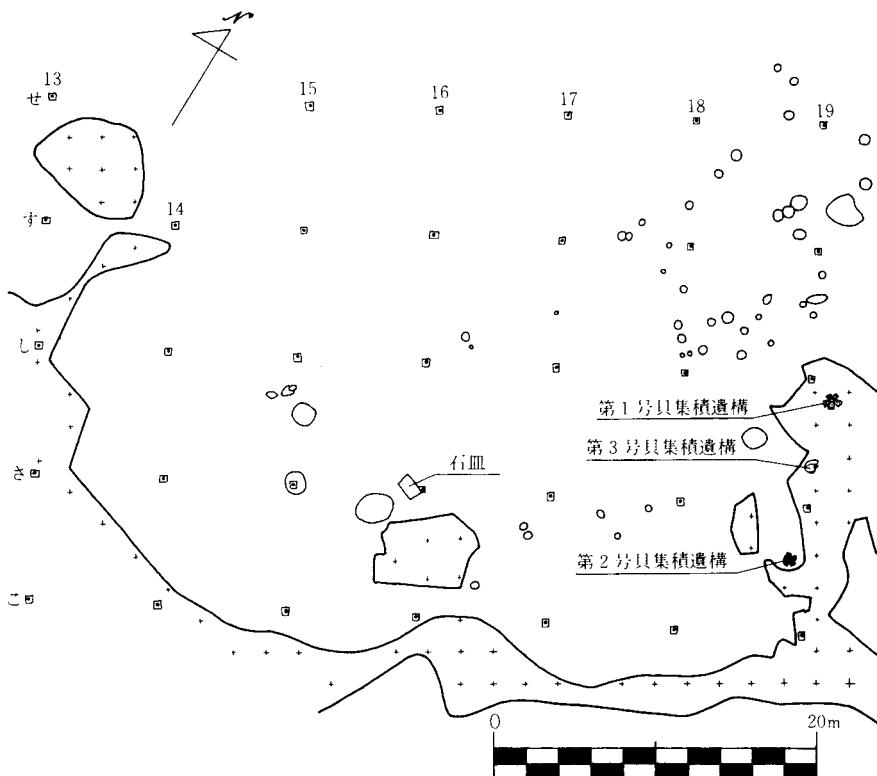
ゴホウラを集積するもので、さー18グリッド北側に位置する石灰岩に接して出土した。ゴホウラは3個が検出され、1個は立位状態で置かれ、他の1点は背面部を下にして出土している。加工痕は1個にみられ、背面部に小孔を有するだけで、他に加工痕はみられない。

(註) 1 島袋春美「南島からみた貝の交易」—弥生時代を中心に—『考古学ジャーナル』311、

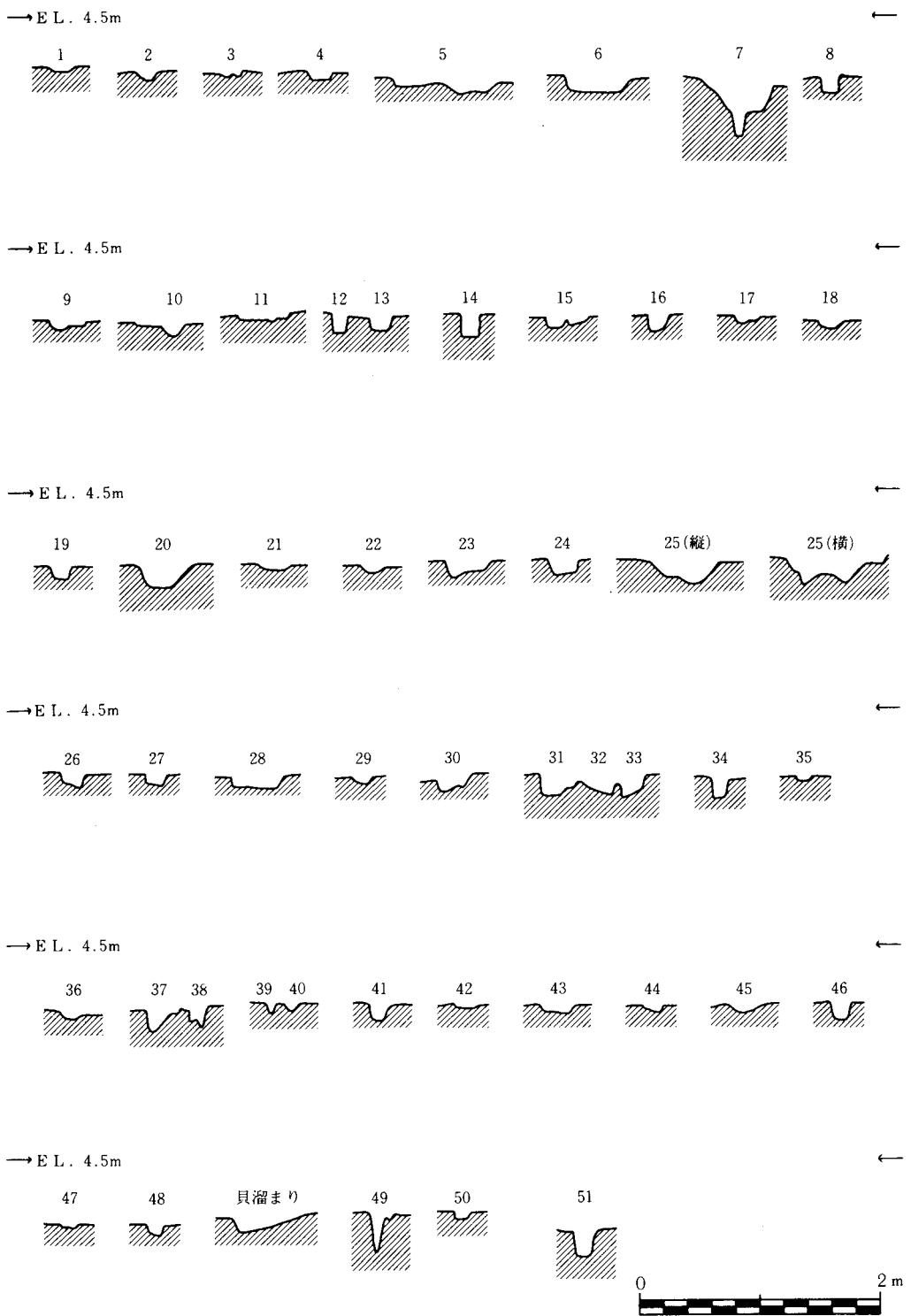
1989

3 柱穴状遺構(第13図)

調査区東側の赤土部と中央部の砂丘地で検出され、赤土部では近世の柱穴が2例検出された。中央部では地山移行層である黄褐色砂層面で褐色の落込みが51例検出された。さー18グリッドの北西部で比較的集中してみられた。平面形状は円形をなすものがほとんどで、その外に橢円形、いびつな方形状を呈するものもある。深さは10cm前後のものが多く、20cmを越すものは少ない。したがって、検出された51例の柱穴状遺構が住居址にかかる柱穴かは判然とはしないが、積極的に考えるならば、柱穴状遺構が集中する地点で空白部を開むように柱穴状遺構が位置することから、住居址が存在していたと考えられる。



第13図 貝集積遺構および柱穴状遺構



第14図 柱穴状遺構断面図

第3節 人工遺物

1 土器

嘉門貝塚A区出土の土器は、その特徴から見て、大半は高宮暫定編年(註1)後期(沖縄貝塚時代後期)に属すると思われるものと、高宮暫定編年前IV期(沖縄貝塚時代前期)相当の土器8,975点、近世の軟質陶器(俗称：陶質土器)が1,422点得られた。その中から紙面の都合により、包含層一帯から確認された高宮暫定編年前期および後期の土器に焦点をあて略述することにする。以下、時期別に略述する。

高宮暫定編年前IV期に相当する土器

この時代に相当する土器は、神野D・E式、伊波式、荻堂式、大山式、室川式等の土器がある。本貝塚A区では、前述の型式の中から荻堂・大山式期に相当すると思われる土器と奄美諸島の遺跡において型式設定された面縄東洞式土器等が得られた。以下、型式別に略述する。

第15図1・2は面縄東洞式土器の口縁部付近の破片と思われるものである。3も前者の型式になる可能性が考えられるが、判然としない。4・5・6は、荻堂・大山式期に相当すると思われる口縁部及び文様帶部分の破片である。4は、叉状施文具による点刻文を描くもの。5は、単範による凹線文と押し引き文が認められる肥厚口縁部である。6は、先端がやや平たい叉状施文具で点刻文を描いたものである。

高宮暫定編年後期に相当する土器

この時代に相当する土器は、高宮廣衛氏の研究によると後I期に属する真栄里式土器、後II期に属する具志原式土器、後III期に属するアカジャンガー式土器、後IV期に属するフェンサ下層式土器が報告されている(註2)。がしかし、高宮氏(註3)も述べているように、沖縄におけるこの時期の編年は未だ流動的であると同時に、この時期の土器型式の大半が判かっていると云った状況はない。

ここで扱う嘉門貝塚A区出土の土器の大半も、前述した型式の何れに属するか判断し難いものである。しかし、沖縄県教育委員会において、今まで沖縄貝塚時代後期に属するとして扱われている(註4)後述の遺跡等から検出される土器に特徴が類似すること等から後期の土器として扱った。以下、後期の土器とする。

ここで扱う土器は、嘉門貝塚A区出土の後期の土器の中から沖縄で製作されたと推察されるものである。出土した資料には、口縁部から底部までそろうもの、あるいは復元できるものが得られなかつたため、口縁部から底部まで一括して検討できなかつた。そのため、土器の口縁部および胴部については大型の破片資料を中心に、器形の違い、口縁の形態等の諸特徴から分析を試み、底部は、形態の違い等を中心に分析を試みた。

嘉門貝塚A区の土器は、これまでに調査された遺跡の報告を見る限り、具志原貝塚出土の土器(註5)、ナガラ原西貝塚出土の土器(註6)、宇堅貝塚出土の土器、アカジャンガー貝塚出土

の土器(註7)に類似する資料が認められた。また、近年発掘調査が行われ報告されているところの清水貝塚(註8)の土器にも類似する資料が認められたことから、前述の遺跡の中から、何れの遺跡の土器により類似するのか、おおまかな方向性を見いだすため、具志原貝塚、清水貝塚、宇堅貝塚、アカジャンガー貝塚の4遺跡の土器資料と嘉門貝塚A区出土の土器を直接比較する方法を少々試みた。土器の比較の状況は、下記のとおりである。

具志原貝塚出土の土器群については、嘉門貝塚A区出土の土器より堅く、器壁はやや薄かった。器面の整形も嘉門貝塚の土器よりは丁寧な仕上げとなっていた。嘉門貝塚A区の土器との類似点は少ないように思われた(註9)。

宇堅貝塚、アカジャンガー貝塚の土器については、宇堅貝塚A地区出土の沖縄後期土器とアカジャンガー貝塚の土器は器面に凹凸が見られ、輪積みと指圧調整の痕が認められた。土器の胎土は細かく、やや泥質であった。報告(註10)では、無文の外反口縁で口唇部の尖る土器(I類a種)は久高島シマシヤーマ貝塚、津堅貝塚に類例が認められ、口縁にU字状の鞍状凸帯を貼り付ける土器(I類b種)の貼り付け文は伊江島ナガラ原西貝塚、本部町兼久原貝塚の土器と近縁を示すとしている。嘉門貝塚A区の土器にも、前述の土器にほぼ類似する資料が認められた。しかし、微妙な違いとして嘉門貝塚A区の土器の器面調整が僅かに雑で、土器面の凹凸が顕著なものが多く認められた(註11)。

清水貝塚の土器については、甕形(深鉢形)Ⅲ類としている資料に、器形、器面の調整、器面の起伏の状態等に嘉門貝塚の土器との類似点があった。また、同貝塚の浮文にも類似する文様構成が見られた。同貝塚は報告(註12)にあるように、甕形(深鉢形)土器の検討、有文土器の検討から伊江島ナガラ原西貝塚との類似性が指摘されている(註13)。

以上、4遺跡の土器と比較した私見を略述した。その中でも、清水貝塚のⅢ類の土器とアカジャンガー貝塚の土器に、もっとも類似性が見られたことから、嘉門貝塚A区の土器は両貝塚相当の土器と想定したい。

以下、ここで扱う土器には、胎土・器面調整・土器の厚さ等による変化が認められることから、前述の視点による分類を行った後、次に器種別の形態による分類を試みながら略述する。

胎土・器面調整・土器の厚さ等による分類

I・胎土はやや泥質で、混和材に細かい砂粒と赤色粒を主体に含む。器面調整は、ナデ調整、範ナデ、刷毛目状調整が主に認められる。器面には土器整形時の指圧痕や土器製作の輪積み痕が顕著に認められるため、器面はやや凹凸を呈する。土器の厚さは平均7~8mmを測る。

II・胎土と混和材は前記Iと変わりない。器面調整も前記Iと基本的には変わりないが、前者Iよりも器面の凹凸はなく、器面調整はやや丁寧である。中には器面が光沢を呈するものもある(範ナデ?)。土器の厚さは平均1cmを測る。前者に比較して重厚な感じを受ける。

III・胎土は前記のI・IIとほぼ変わりない。しかし、土器の厚さは均一で、5ないし6mmと比較的薄く、器面調整は丁寧で土器製作の輪積み痕や指圧痕は外面では容易に認められない。

IV・胎土は、前述の三者に比較するとやや砂質的なもので、手触りはややザラザラする。混和材は細かい石英、黒色を呈する細長い鉱物等を含む。器面調整は丁寧で、器面は部分的にやや光沢を呈するところもある。この胎土等の土器は、九州の弥生土器の可能性も考えられる(註14)とされているものと同類の資料と推察する。

壺形土器

壺形土器は、口縁部破片3点と頸部破片2点の計5点の資料が確認できた。これらの資料を前述の胎土等の分類で分けると、I・IIIの2つに大別される。以下、これらの資料について概述する。

第15図7は胎土等の分類IIIに属する口縁部資料である。口縁部は肥厚し、口唇部を平坦に整形する。口径は、外径推算で6.7cmを測る。

同図8～11は分類Iに属するものである。8は口縁部資料で粘土紐を逆U字状に貼り付け、口径は外径推算4.5cmを測る。口縁平面形が橢円状を呈することからして、口径は、長径・短径を検討する必要があるかもしれない。9も口縁部資料である。平面形橢円状の中央部を僅かに埋めた粘土板を口縁に沿って貼り付けている。10は口縁部に近い頸部破片で、推算の径は上位で4.9cm、下位で7.9cmを測る。11は壺形の肩部に近い資料で、輪積みの痕跡と思われる横走する稜が2本認められる。推算の径は上位で12.6cm、下位で26.0cmを測る。

甕形(鉢形?)土器

甕形(鉢形?)土器は前述した胎土等の分類に加え、無文口縁部の形態から下記のとおり分類を試みた。

1. 口縁が外反するもの。

- a) 口縁から約4～5cm下位の肩部に屈曲状の稜を明瞭に作るもの。
- b) 口縁から約2cm下位に弱い屈曲状の稜を作るもの。
- c) 口縁縦断面がS字を延ばした形状を呈するもので、中には、内面に屈折の稜を残すものもある。
- d) 口縁下部がほぼ直口のもの。

2. 口縁が内湾するもの。

- a) 肩部から頸部にかけて内湾し、口縁の端部が外反するもの。
- b) 口縁の下位で屈曲して内傾するもの。
- c) 肩部から口縁にかけて、僅かに内湾するもの。
- d) 口縁縦断面が逆S字状を呈し、口縁端部が内湾するもの。

3. 口縁が直口するもの。

- a) 肩部に横走する稜が見られるもので、外見は土器の肩部で屈曲しているように見える。
- b) 口縁部及び肩部に前者a、後者c、dの特徴が認められない、直口口縁のもの。
- c) 口縁部外面の厚さが、口縁端部にかけ次第に厚さが薄くなり、外見は口縁端部が内傾

しているように見えるもの。

d) 口縁の端部が肥厚するもの。

以上、無文の甕形(鉢形?)土器についての分類の考え方を略述した。しかし、有文の土器については、前述の形態分類から除き、後でまとめて略述することにする。以下、分類して個々の資料を概述する。

I—1—aに属するもの。

第17図1～7、第18図1・2の9点で、第17図1は口径推算20.4cmを測った。4・5は、口縁がやや波状を呈していたと思われるものである。第18図2は口縁の一部がやや強く外反し、片口状を呈するものである。この種の土器は器面の凹凸が著しいため、同資料が片口かどうかは判然としないが、可能性は薄いと推察する。

I—1—bに属するもの。

第18図3～6の4点がこれに含まれる。しかし、4については稜が弱いことから、あるいは口縁形態細分dになる可能性もある。

I—1—cに属するもの。

第18図7・8、第19図1～3の5点が得られた。第18図8と第19図1は胎土等の諸特徴から同一個体と推察されるもので、口縁の形状は後者の資料が保存は良い。第19図2・3は口縁形態細分のaあるいはdになる可能性も考えられるが、口唇部が尖ることから一応ここで扱った。

I—1—dに属するもの。

第19図4～9、第20図1～6の12点が得られた。第19図4は口縁部の図上復元を試みたもので、口径は推算20.5cmを測った。9と第20図3は、肩部下位に縦走する籠ナデ整形が顕著に認められる。4～6は僅かに外反するもので、5の口縁部の膨らみは部分的なものである。6の口径は推算20.0cmを測る。

I—2—aに属するもの。

第21図1・2の2点が得られ、いずれも図上復元を試みた。1は口径推算22.0cm、2は口径推算19.0cmを測った。

I—2—bに属するもの。

第21図3～5の3点が得られた。3は肩部の屈曲が割にやわらかいもので、4・5は裏面でも屈折が確認できるものである。3・4は、肩部以下に縦走する刷毛目状の器面調整が認められる。

I—2—cに属するもの。

第22図1～3に図示した3点が得られた。1・2は同一個体と推察されるもので、1の口径推算は19.8cmを測る。

I—3—aに属するもの。

第23図1～5の5点が得られた。1は表面の肩部以下に縦走する籠ナデ、裏面には横走する

刷毛目状の器面調整が認められる。2はやや開き気味の器形が想定されるものである。4は口縁部に縦走する3本の浅い凹線文が認められる。本来、有文資料として後にまとめるべき資料である。

I—3—bに属するもの。

第23図6・7、第24図1～8、第25図1～3の13点とした。しかし、典型的な資料(第23図7、第24図1・6・8)以外は口縁部の小破片のため、肩部では屈曲状の稜を有することも考えられる。第24図8は口径推算19.2cmを測った。第25図2・3は胎土等の特徴からすると分類IIの特徴を有するが、土器の厚さが若干薄かったためここで扱った。しかし、分類Iとは分けた方が妥当かも知れない。

I—3—cに属するもの。

第25図4～8に図示した5点が得られた。これらの資料は、小破片のため器形は判然としないが、口縁部が開き気味の器形が想定される。

I—3—dに属するもの。

第25図9の1点をここにあてた。しかし、この土器は口縁部の肥厚を意識したものではなく、口縁に粘土紐を貼り付けたものが、肥厚しているように見えるものである。前記の点からすると細分する必要はなかったのでは、との意見も考えられるが、この資料の場合、器以外の資料も想定されたことから敢て分けた。

II—1—aに属するもの。

第16図1～4がこれに属すると推察する。がしかし、2については肩部の稜は殆ど意識していないように思われた。図上復元を試みた1は推算口径25.2cm、2は推算口径21.8cmを測った。

II—1—dに属するもの。

第16図5がこれにあたるもので、斜行する力強いナデが肩部以下に認められる。

II—2—dに属するもの。

第22図4・5の2点が得られた。4は僅かに口縁が肥厚しているように見えるもので、内面には横走する刷毛目状の器面調整痕も認められる。

胎土等の分類IIに属する口縁部の資料は上記した7点で、分類組合せ上、想定される他の資料は得られなかった。

III—1—dに属するもの。

第26図1～5に図示した5点が得られた。図上復元を試みた1は推算口径21.1cmを測った。また、4は胎土等の諸特徴からして、1と同一個体と推察する。

III—2—aに属するもの。

第26図6に図示した1点で、小ぶりの甕形が想定される。図上復元を試みたところ、推算口径は9.8cmを測った。

III—2—bに属するもの。

第26図7に図示した1点が得られた。表裏面に刷毛目状の器面調整が認められる。

IV-1-bに属するもの。

第26図8に図示した1点を含め、口縁部破片2点が得られた。図示した資料は、口縁部の図上復元を試みたもので口径は推算21.3cmを測った。

IV-1-dに属するもの。

第25図10の1点のみ得られた。

有文土器

沈線文と浮文(粘土紐貼り付け文)が得られたが、2つの文様を施文したものも認められた。

第27図1~8に図示した8点が有文土器である。

1・2は沈線文が認められるもので、1は頸部及び口縁裏面に文様が見られる。推算口径は7.4cmを測った。2は4本の横走する沈文と波状文を描くもので、内面に粘土紐の貼り付けた痕のようなものが観察できることから、浮文が口唇部にかけてあった可能性もある。胎土等の分類は判然としない。

3・4・5はボタン状の円盤や偏楕円状の粘土を口縁に貼り付けて、文様としたものである。胎土等の分類はI類である。

6は逆U字状の粘土紐を口縁に配したもので、口縁端部は外反する。胎土等は分類I類。

7は沈線文と浮文が認められる胴部破片で、胴部の図上復元を試みたところ、胴径は最も張った部分で推算19.0cmを測った。胎土等の分類は判然としない。

8は小破片ため、浮文の構図、胎土等の分類も判然としない。

他の土器

第27図9~13に図示した5点がそれである。

9は口縁形態分類で、肩部が屈曲状の稜を有するものの胴部破片と推察されるが、得られた資料の中では稜の部分が著しく、一見、凸帯のように見える資料であることから特記した。胎土等の分類はI類である。

10~13の4点は、口縁を弧状、口縁裏面はやや平坦に整形するものである。想定できる器形が思いつかないため、紹介して指導を仰ぎたい。

底 部

底部の資料は総数74点得られた。これらの資料は、器種別に分け、次に形態から分類を試みることが出来たら良かったが、それは前述した理由からできないため、前述した胎土等の分類と形態からの分類を試みた。以下、分類の考え方と個々の資料について略記する。

分類I(胎土・器面調整・土器の厚さ等による分類)

1. ボリュームのある乳頭状の膨らみを有する乳房状尖底で、乳頭状部分の直径は4cmを越える。
2. 乳頭状の膨らみを有する乳房状尖底で、乳頭状部分の直径が2.5~3.5cmのもの。この

場合、①底部先端が円味を呈するものと②底部先端をやや平たく整形するものに分けられる。後者の底面には、砂の付着が認められるものもある。

3. 丸底状尖底のもの。前記1が非常にルーズになったものの可能性も想定される。
4. 径の小さい平底のもの。中には底部外面をくぼめ、凹面に整形するものもある。
5. 乳房状尖底のもの。中には底部先端をくぼめ、凹面に整形するものもある。ここで扱ったものは、基本的に乳頭状部分が膨らみを持たないものをここにまとめた。

分類II(胎土・器面調整・土器の厚さ等による分類)

1. 尖底のもの。
2. 台つきのもの。

分類III(胎土・器面調整・土器の厚さ等による分類)

1. 底部外面の底面から約1cmの部分でくびれるもので、一般にくびれ平底と呼ぶものである。
2. クビレ平底で、底面近くで僅かにくびれるもの。

分類IV(胎土・器面調整・土器の厚さ等による分類)

1. 乳頭状部分を有する、乳房状尖底のもの。
2. クビレ平底で、底面近くで僅かにくびれるもの。

以上、分類の表現については、沖縄に後期の底部で定着している乳房状尖底の名称から乳房に関連する用語を利用した。以下、個々の資料の特徴的なものについて略記する。

分類Iに属するもの。

- 1に分類できるものは5点得られ、第28図1～5に図示した。
- 2-①に分類できるものは、総数13点得られ、うち6点を第28図6～11に図示した。
- 2-②は総数22点得られ、うち11点を第28図12～22に図示した。
- 3に分けられるものは9点得られ、うち2点を第29図1・2に図示した。
- 4に分類できるものは4点得られ、うち3点を第29図3～5に図示した。4・5は底部外面をくぼめ、底面を凹面に整形する。
- 5に分けられるものは7点得られ、うち4点を第29図6～9に図示した。7・8・9は底部先端をくぼめるもので、底部先端は凹面を呈する。

分類IIに属するもの。

- 1に分けられるものは、第29図10に示した1点が得られた。
- 2に分類できるものは、第29図11に示した1点のみで、脚の端部を欠損する。脚の根元あたりの直径で5.3cmを測る。

分類IIIに属するもの。

- 1に分類できるものは、第29図12・13に図示した2点が得られた。前者の底径は8.0cm、後者の底径は推算7.6cmを測った。

2に分類できるものは4点得られ、うち3点を第29図14・15・16に図示した。3点とも底径の推算を試みたところ、14は底径6.1cm、15は底径6.4cm、16は底径6.6cmを測った。

分類IVに属するもの。

1に分類できるものは、第29図17に図示した1点が得られた。

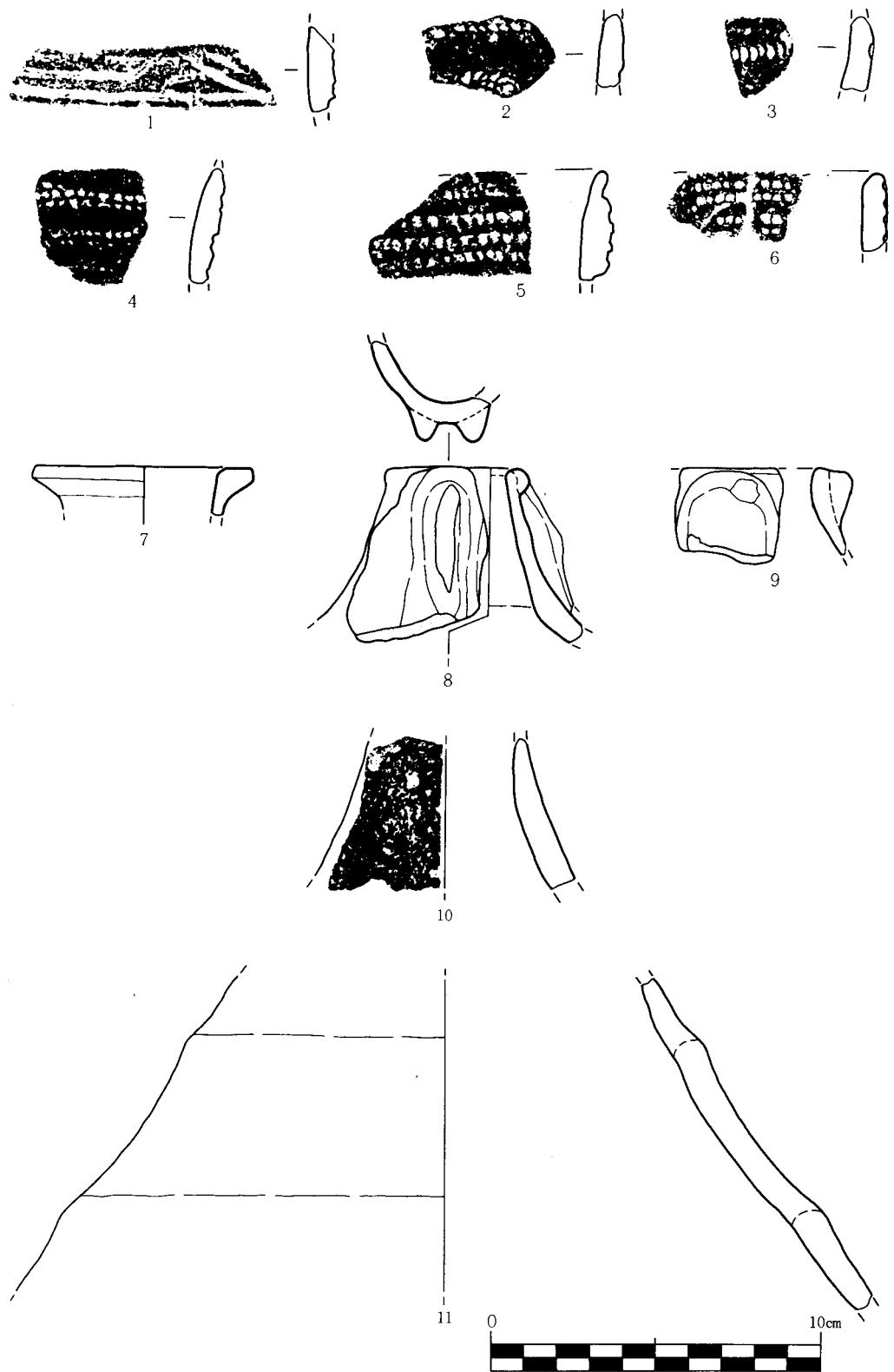
2に分類できるものは2点得られたが、うち1点を第29図18に図示した。推算底径は7.3cmを測った。

その他の底部

胎土等の分類からすると、分類IIIの特徴を有すると考えるが、今一つ、判断しかねる資料を第29図19・20・21に図示した。19は径の小さな平底で底径3.2cmを測る。20はラグビーボールの尖り部分状の尖底である。21は僅かな尖りが認められる尖底である。

註、

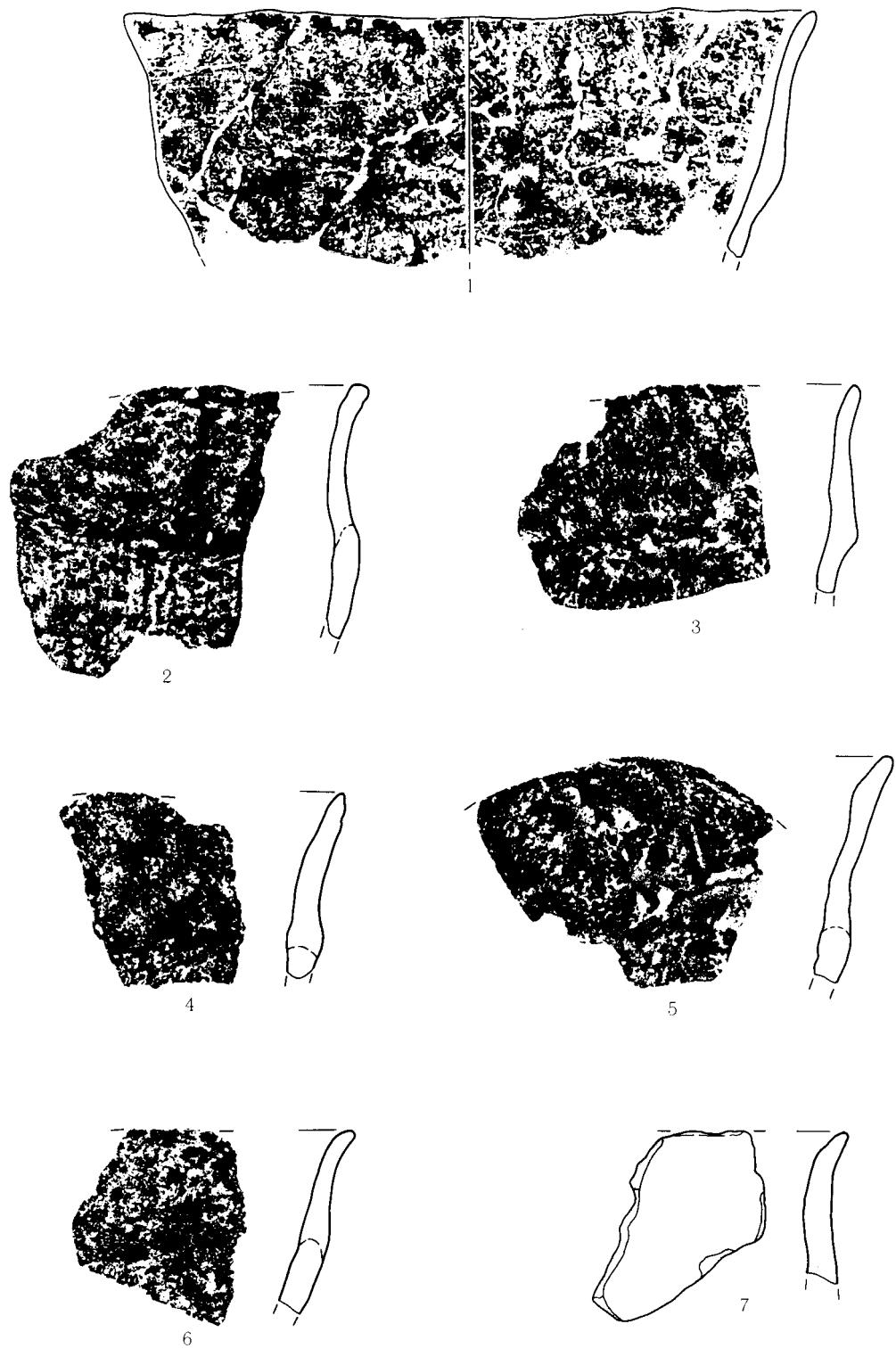
- 1) 高宮廣衛「滄海に列なる南島」『図説検証 現像日本』旺文社 1988年
- 2) 高宮廣衛「沖縄のいわゆる後期遺跡について—弥生文化との関連において—」八幡一郎先生頌寿記念考古学論集『日本史の黎明』六興出版 1985年
- 3) 註1と同じ。
- 4) 沖縄県教育委員会『沖縄考古展 掘り出された沖縄の歴史』—発掘調査10年の成果— 1982年
- 5) 友寄英一郎・高宮廣衛「伊江島具志原貝塚調査概報」『琉球大学文学部紀要社会篇第一二号』1968年
- 6) 沖縄県伊江村教育委員会『伊江島ナガラ原西貝塚緊急発掘調査報告書』—概報篇・自然遺物篇— 1979年
- 7) 沖縄県具志川市教育委員会『宇堅貝塚・アカジャンガー貝塚発掘調査報告書』1980年3月
- 8) 沖縄県具志川村教育委員会『清水貝塚発掘調査』1989年3月
- 9) 池田栄史氏の御配慮で、琉球大学法文学部史学科池田研究室において具志原貝塚の無文口縁部資料を実見させて頂いた。
- 10) 註7と同じ。
- 11) 大城 剛・照屋 孝両氏の御配慮で、具志川市教育委員会保管の宇堅貝塚・アカジャンガー貝塚の資料を実見させて頂いた。
- 12) 註8と同じ。
- 13) 島袋 洋・金城亀信両氏の御配慮で、沖縄県教育委員会保管の清水貝塚の資料を実見させて頂いた。
- 14) 註7と同じ。



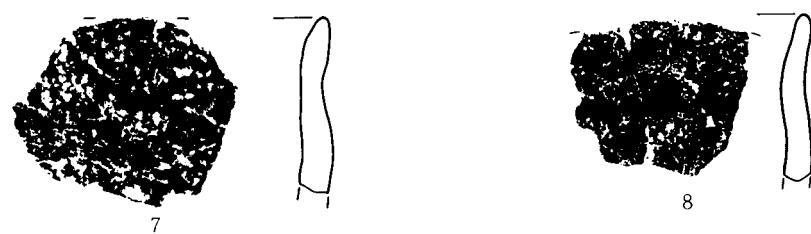
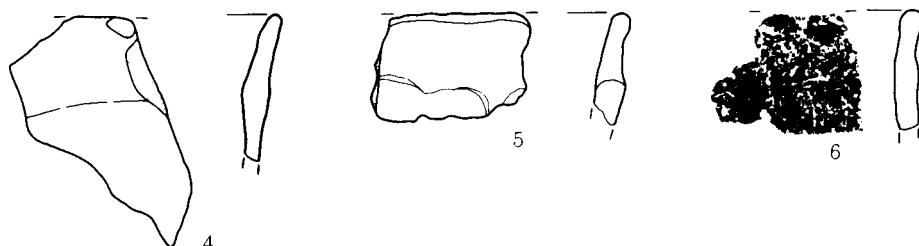
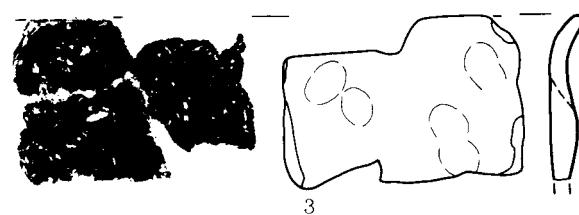
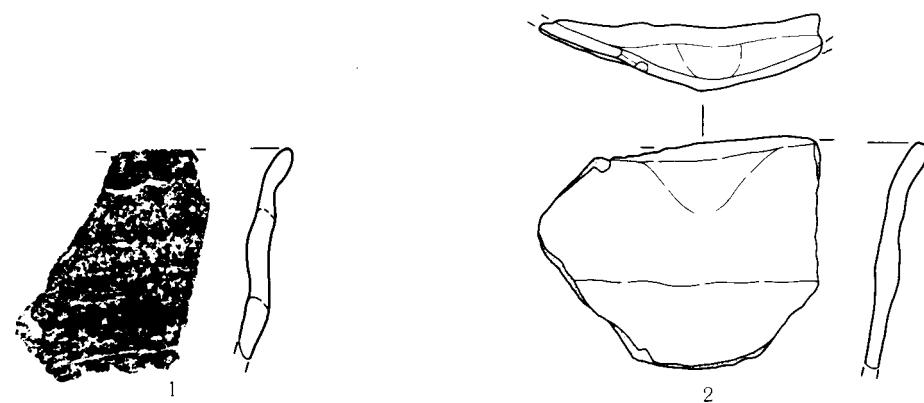
第15図 土器(高宮暫定編年前IV期相当1~6、後期相当壺形土器7~11)



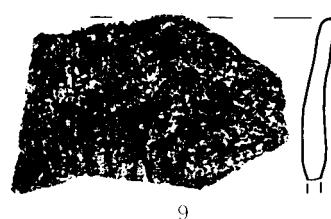
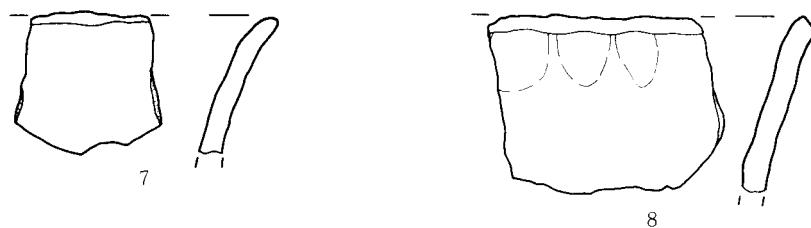
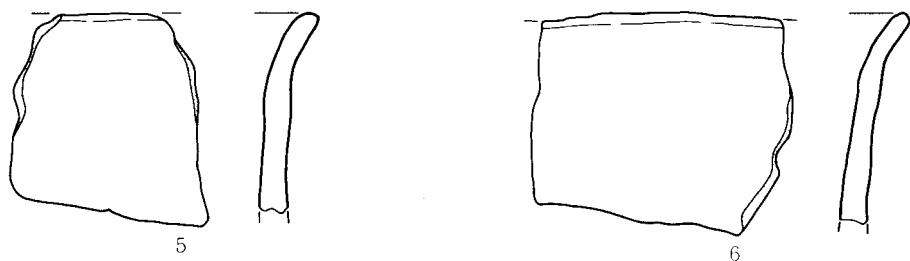
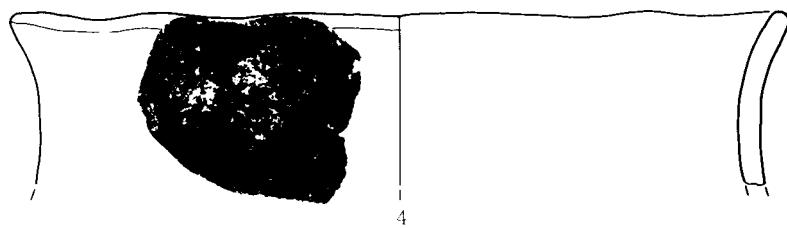
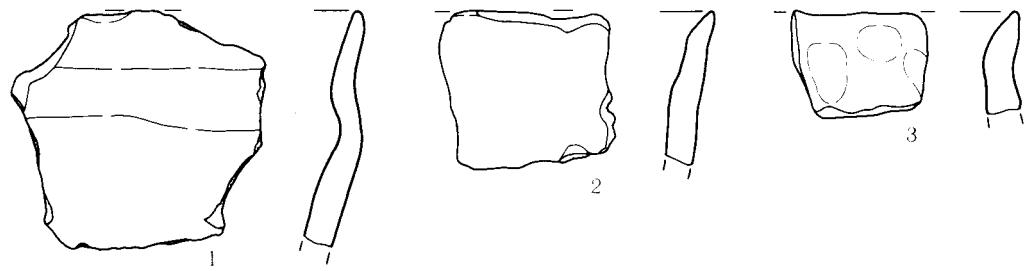
第16図 土器(高宮暫定編年後期相当壺形土器 1~5)



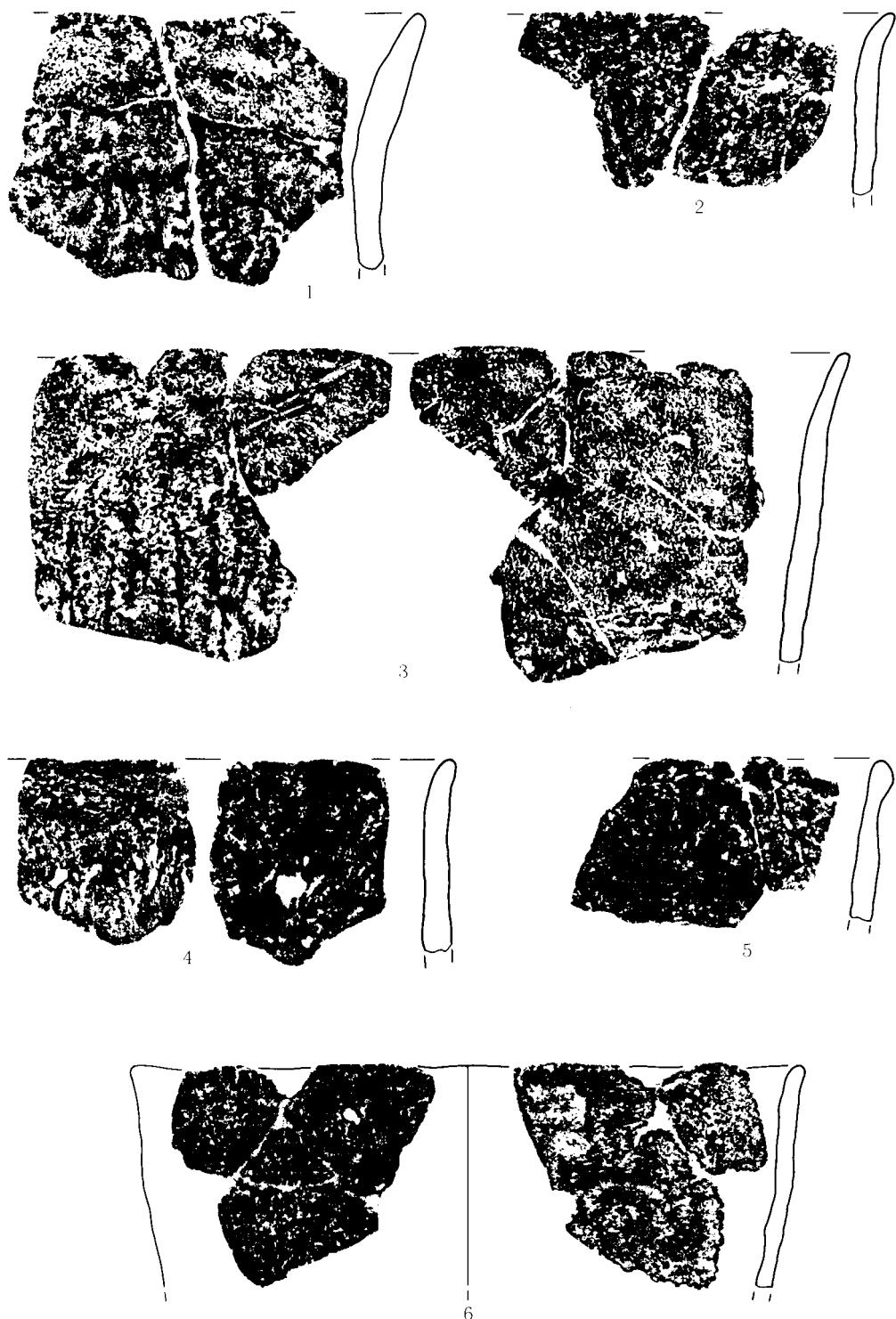
第17図 土器(高宮暫定編年後期相当壺形土器 1～7)



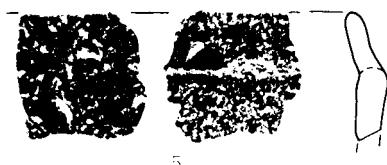
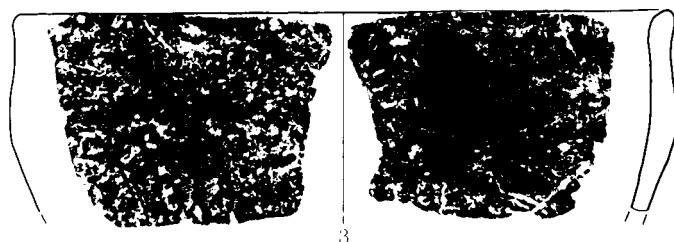
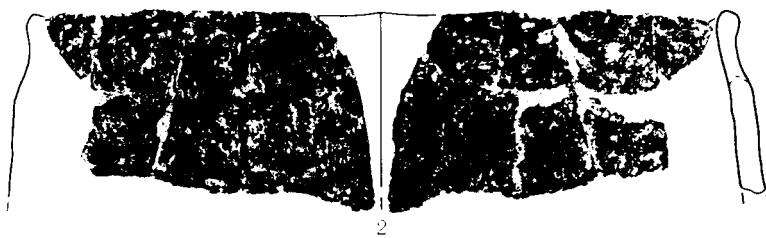
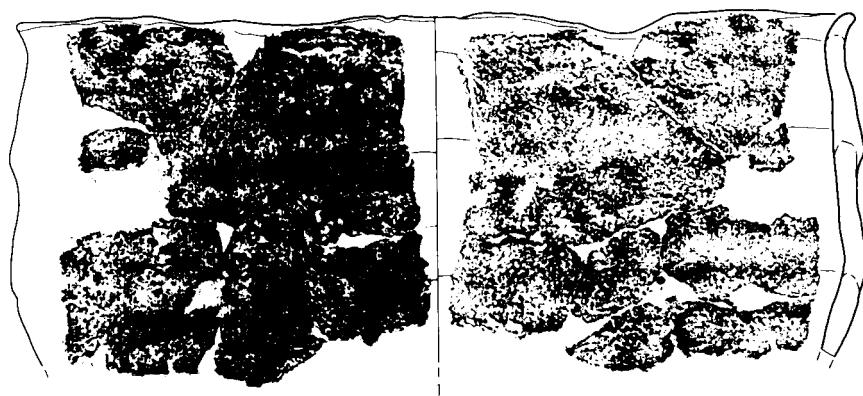
第18図 土器(高宮暫定編年後期相当變形土器 1~8)



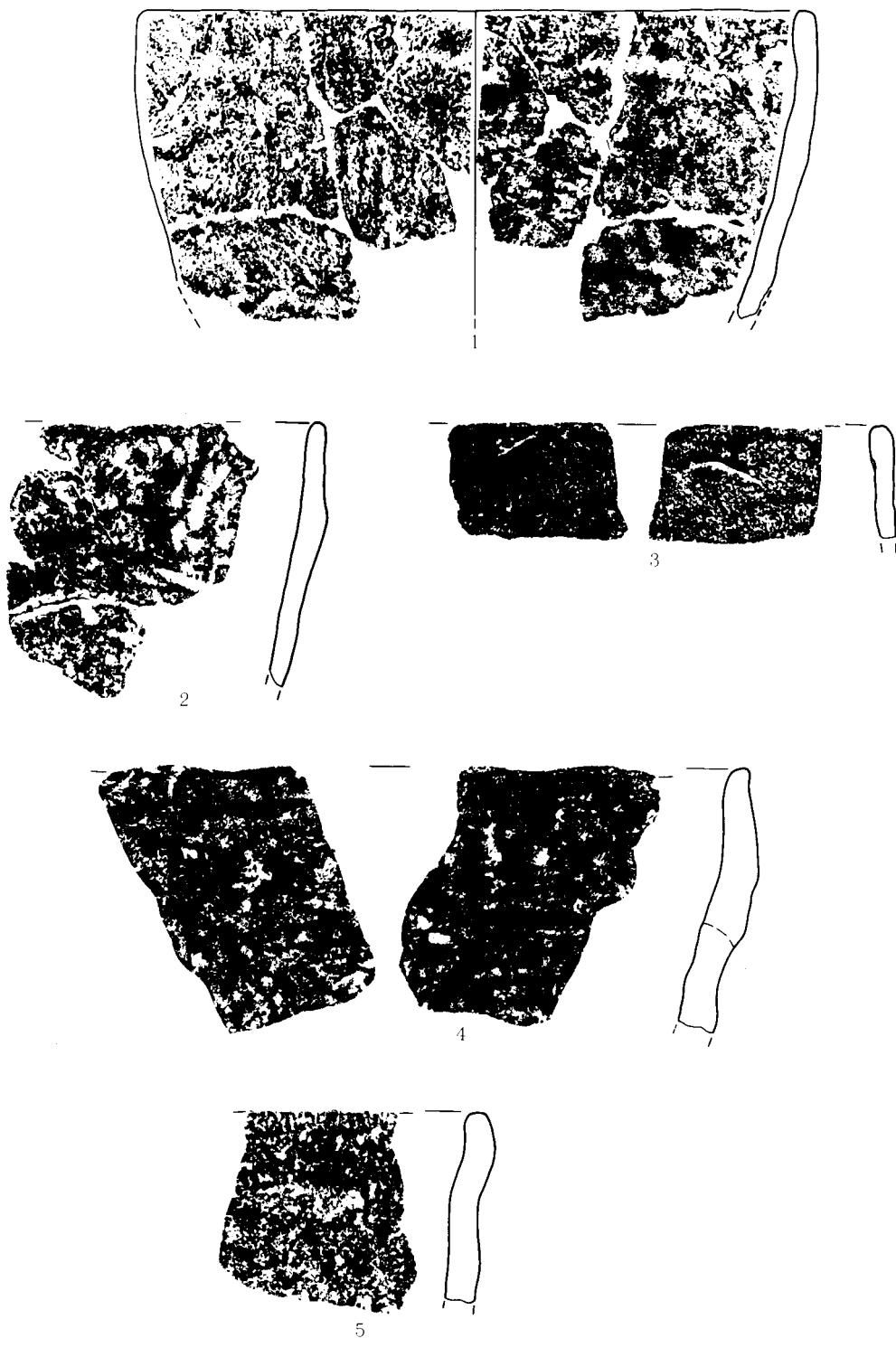
第19図 土器(高宮暫定編年後期相当甕形土器 1～9)



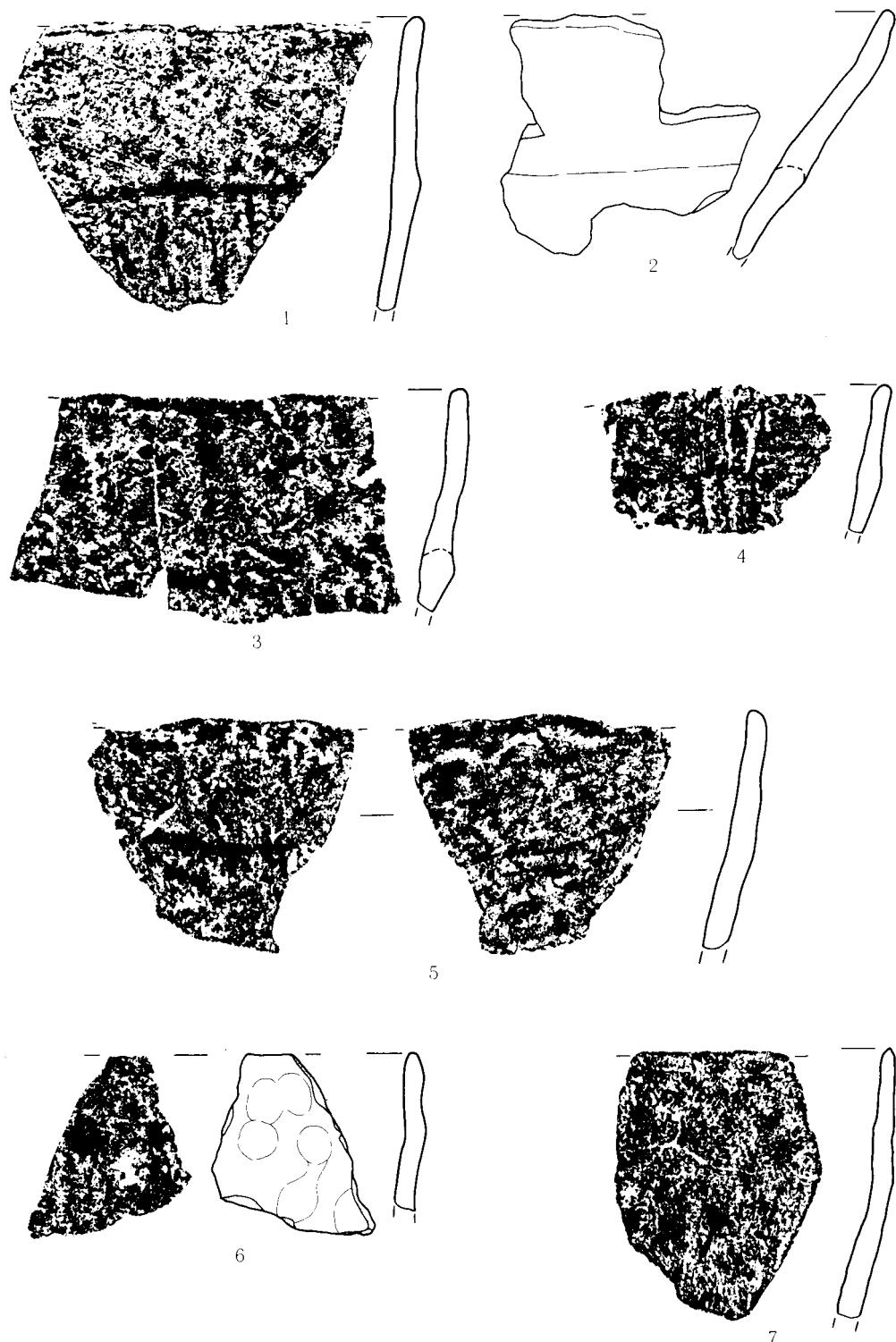
第20図 土器(高宮暫定編年後期相当變形土器 1～6)



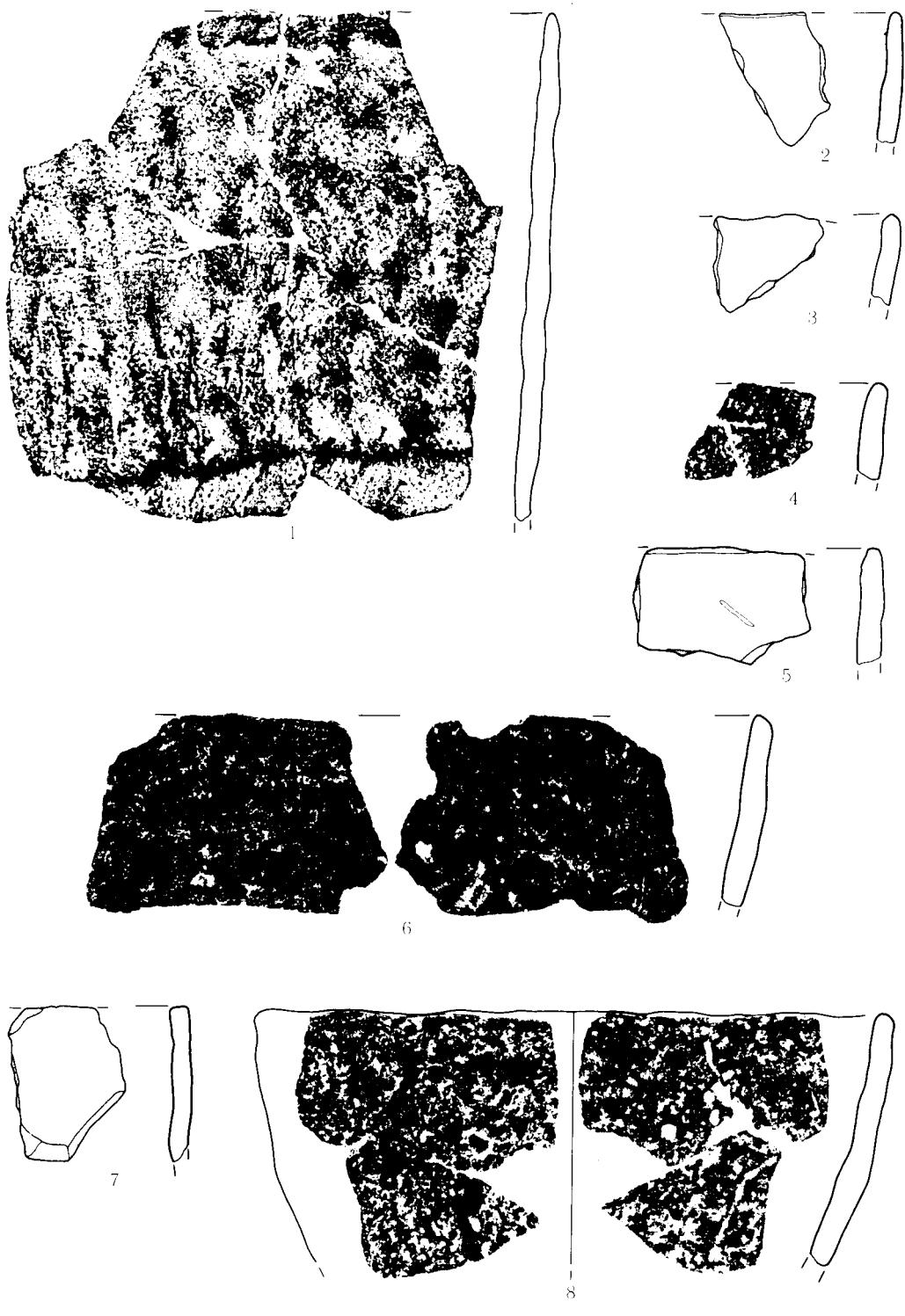
第21図 土器(高宮暫定編年後期相当変形土器 1～5)



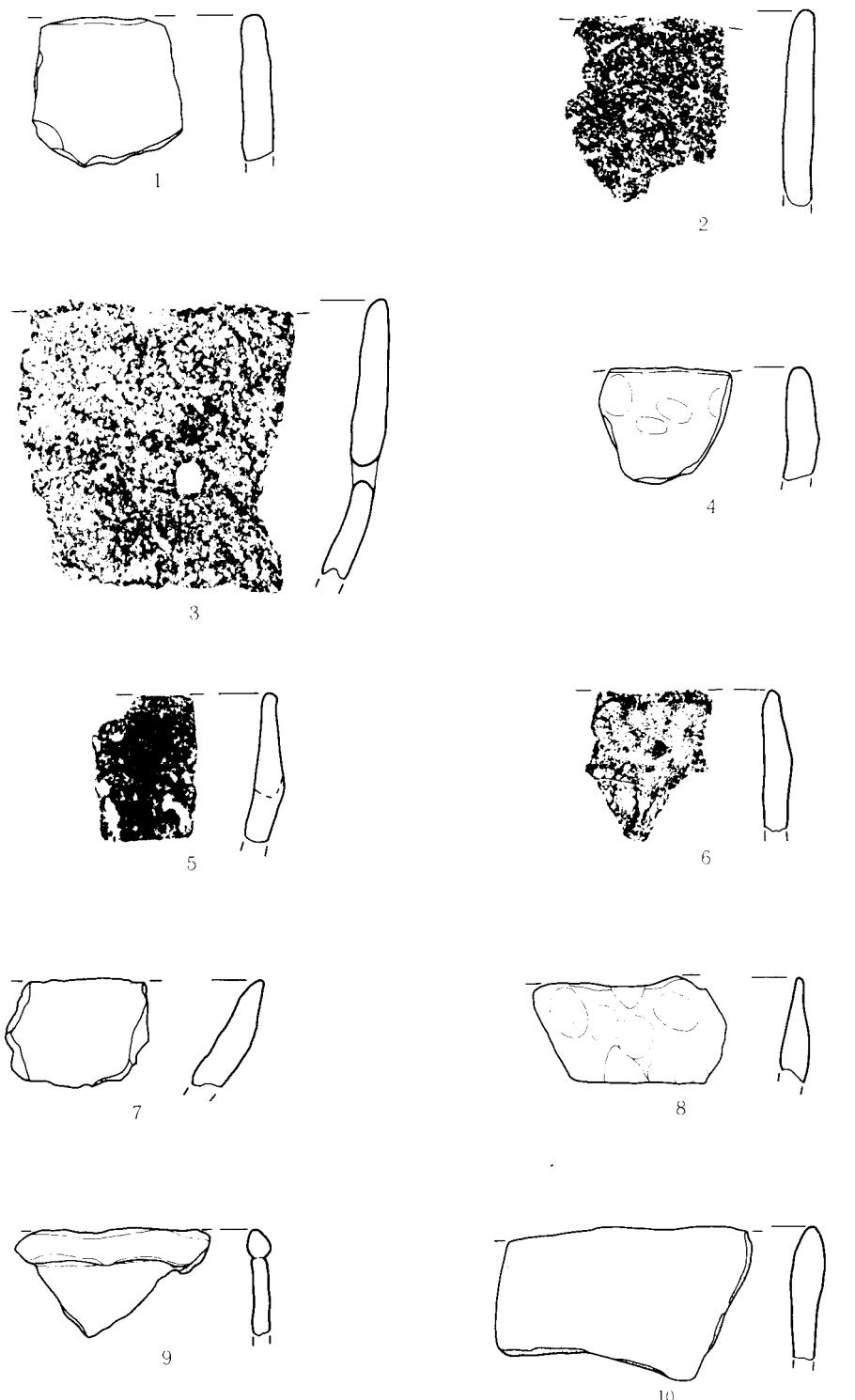
第22図 土器(高宮暫定編年後期相当壺形土器 1～5)



第23図 土器(高宮暫定編年後期相当甕形土器 1～7)

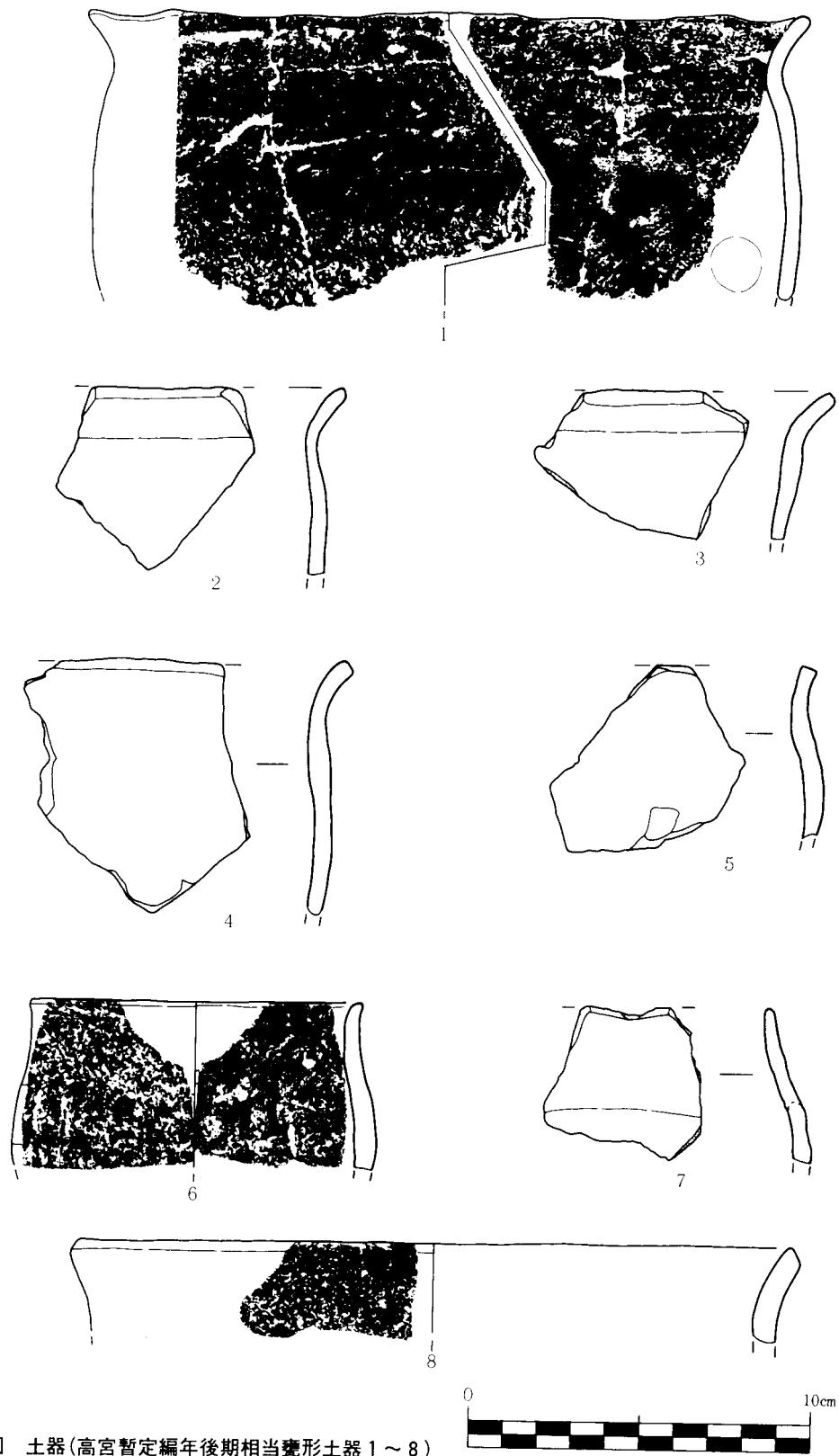


第24図 土器(高宮暫定編年後期相当甕形土器 1~8)

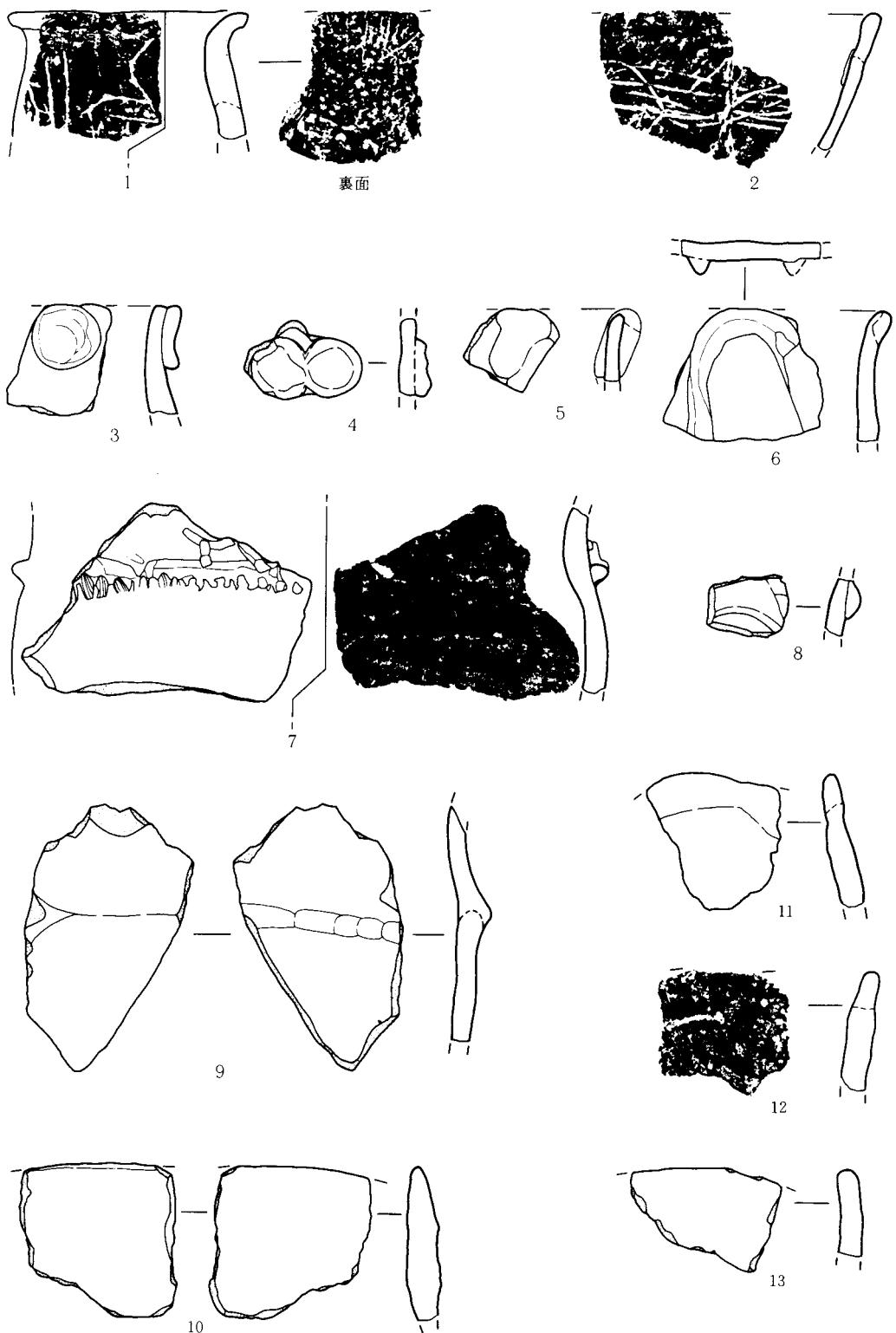


第25図 土器(高宮暫定編年後期相当変形土器 1~10)



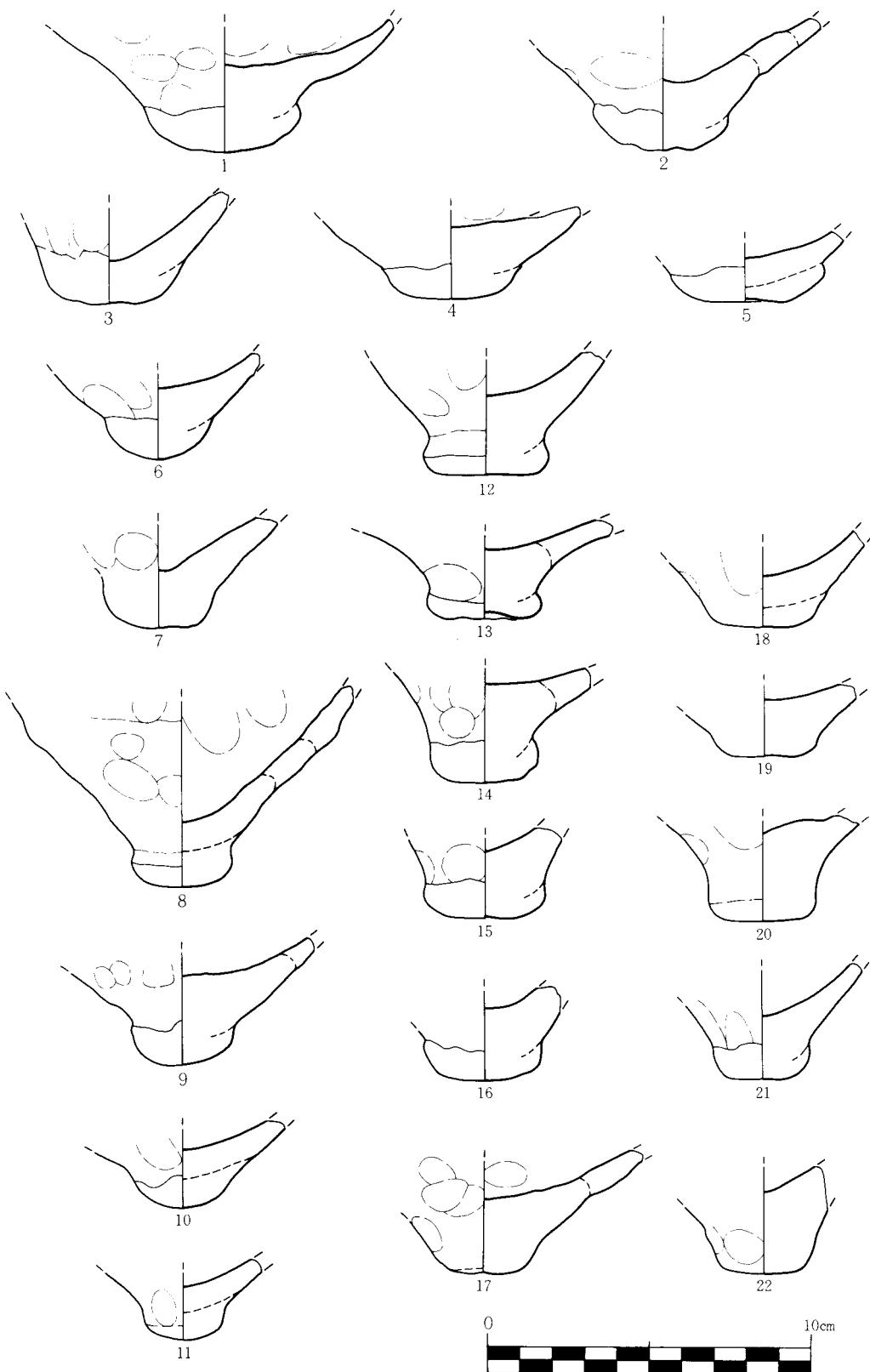


第26図 土器(高宮暫定編年後期相当變形土器 1~8)

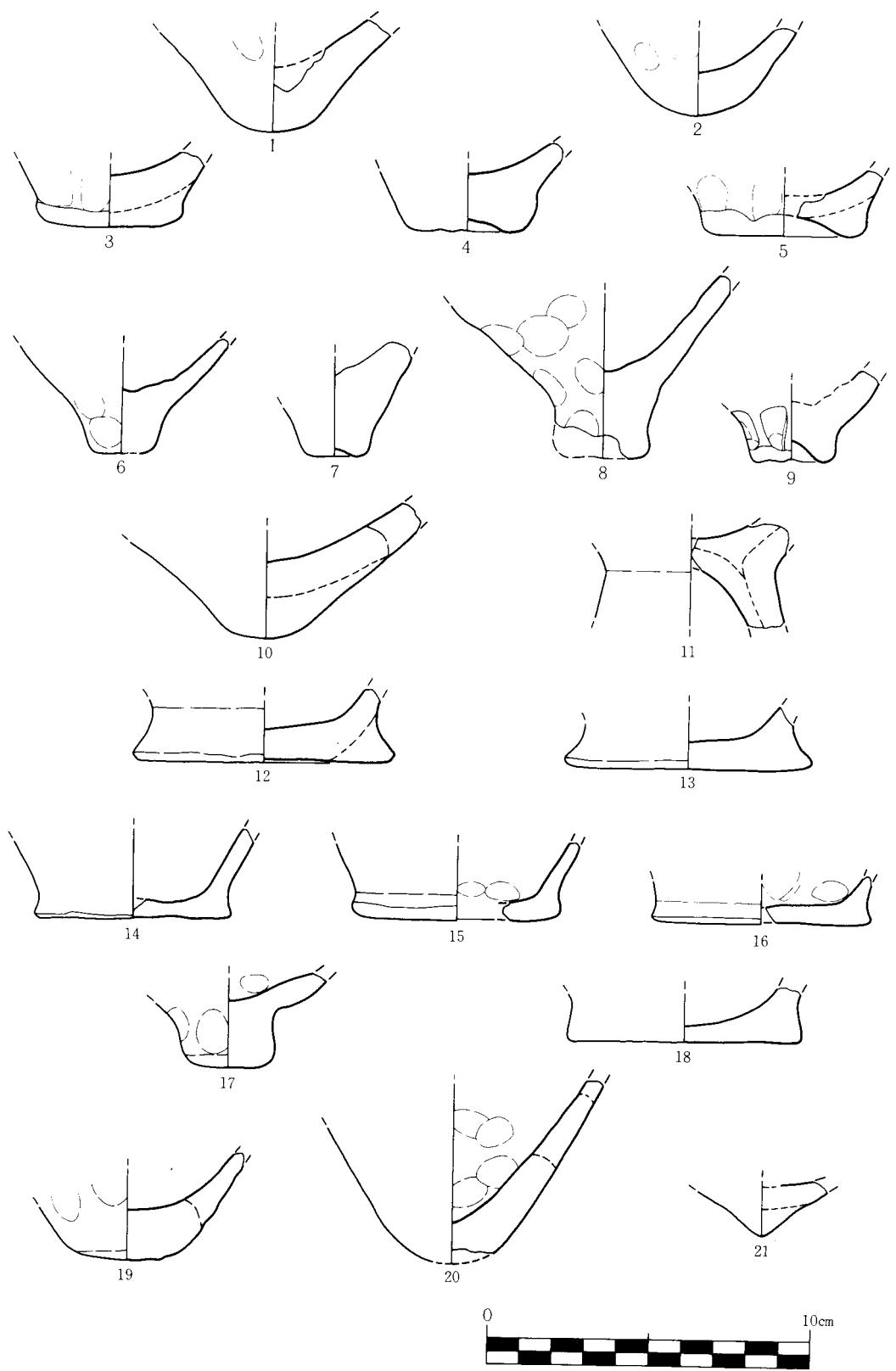


第27図 土器(高宮暫定編年後期相当變形土器 1~8、
その他の土器 9~13)





第28図 土器(底部 1~22)



第29図 土器(底部 1~21)

2 石 器

今回の調査では総数84点の石器が得られ、それらはすべて実用品と考えられるものである。

内訳は石斧22点、敲石28点、磨石7点、石皿8点、砥石1点、扁平小型石器1点、有孔石器1点、器種不明16点である。出土状況は表-1に示すとおりである。特徴的な45点を図示し、略述することにする。

石斧(第31・32図、第33図1・2、表-2)

22点が得られ、石器全体の26.2%を占める。完形品は6点で、他は刃部を欠損するもの4点、基部を折損するもの5点、未製品と考えられるもの7点である。

形態的には幅の最大長が刃部にあるバチ形と長方形状の短冊形の2種がみられる。量的には完形品6点と刃部および基部欠損資料の中で形態の推測できる11点からみると、バチ形14点、短冊形3点である。バチ形石斧のうち第31図7・8は基部の厚みの薄い扁平な石斧であるが、他の5点は身の長さ、幅の関係からすると厚みのある石斧である。

刃部の形状はほとんどが両刃で、完全な片刃と認められる資料はないが、第32図1の刃部は片面からの研ぎだしが強く、片刃的なものである。刃縁は円刃で、正面観は弧状を呈する。出土資料中、唯一横斧と考えられるものである。

製作状況をみてみると、素材の形態を活かし、打削調整と刃部の研磨を施したものもあるが、多くは打削、敲打、研磨痕等を残す。研磨をほぼ全面に施すものは第31図1の1例のみで、他は表裏面あるいはその片面と刃部が研磨の対象となる。したがって、側面に敲打調整痕を残すものが多くみられる。

石質は輝緑岩(11点)、ハンレイ岩(3点)、緑色片岩(4点)、片状砂岩(1点)の4種がある。

表-2 石斧観察表

() は残存値

插図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法 量	長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 重量(g)	石 質	観察事項
第31図1 図版33-1	表採		10.60 6.80 2.60 286.00	輝緑岩	平面観がバチ形を呈するもので、比較的重量感のある刃部磨製石斧である。裏面は自然面で、表面は打削後に敲打調整されるが、研磨は施されない。研磨は裏面刃部の一部に認められる。
〃 2 〃 -2	さ-17 第IV層		(8.30) 4.50 2.66 (158.00)	輝緑岩	基端が破損するものの、ほぼ全形の窺えるバチ形蛤刃石斧である。右側刃と表面刃部の一部に敲打痕を残す以外は全面に研磨を施す。刃縁は使用のため破損する。
〃 3 〃 -3	こ-18 第IV層		(8.35) 4.18 2.00 (119.00)	輝緑岩	刃部が片刃的な両刃を呈する石斧で、表裏面は部分的に敲打痕を残すものの、大部分は研磨が施される。側刃は敲打後、研磨仕上げされる。刃縁は使用のため丸く潰れ、僅かに弧状を呈する。

タ 4		(7.74)	輝 緑 岩	平面觀がバチ形を呈する石斧の基部資料である。
タ — 4	表 採	(5.24) (2.60) (156.00)		全体的に研磨を施すが、裏面と側辺部は徹底せず、製作時の敲打痕を残す。刃部の折損は使用時の衝撃によるものであろう。
タ 5		(6.80)	ハ ン レ イ 岩	バチ形石斧の基部資料である。全面に細かい敲打痕がみられる。基部折損は敲打調整時のものと考えられる。
タ — 5	表 採	(5.40) 3.00 (178.00)		
タ 6	東 側	(6.74)	輝 緑 岩	基部資料である。手ごろな自然礫を利用しており表面は自然面である。裏面と側辺は打削後、敲打調整される。刃部の折損は使用時におけるものであろう。
タ — 6	第 I 層	(4.66) 2.80 (145.00)		
タ 7	さ—18	(8.50)	輝 緑 岩	扁平の自然礫を利用するもので、側辺を打削で整え、刃部、裏面、側面が研磨仕上げされる。右側辺は製作時の打削調整が強くなされ、身のバランスがとられてない。
タ — 7	第 IV 層	5.54 1.54 (127.00)		
タ 8	こ—18	(10.57)	綠 色 片 岩	バチ形の石斧で、基端を僅かに欠くもののほぼ全形の窺えるものである。表面は自然面、裏面は割面で、側辺には製作時の剝離痕と敲打調整痕がみられる。研磨は側辺部と刃部に施される。
タ — 8	等 IV 層	5.38 1.50 (196.00)		
第 32 図 1 図版34—1	さ—18 第 IV 層	12.34 4.58 1.12 132.00	輝 緑 岩	平面形が長方形をなす扁平石斧で、裏面は割面で部分的に研磨が施される。表面、側面、基端は研磨されるが、表面に自然面、左側面に敲打痕を残す。刃部は裏面から強く研ぎだされ、したがって片刃的様相を呈する。
タ 2	し—15	(6.10)	綠 色 片 岩	刃部を欠失する基部資料である。素材は扁平の自然礫で右側辺に剝離痕、基端に敲打痕が認められる。表裏面に研磨痕はみられない。
タ — 2	第 IV 層	(5.50) 1.70 (98.00)		
タ 3	こ—17	(6.85)	綠 色 片 岩	バチ形石斧の基部資料で、扁平な自然礫の側辺と基端を打削調整して、形を整えている。側辺は研磨されるが、徹底していない。
タ — 3	第 II 層	(4.55) (1.15) (52.00)		
タ 4	こ—17	(6.40)	綠 色 片 岩	基部上半部を欠くもので、表面は自然面、裏面は割面である。側辺に製作時の剝離痕を残す。刃部は両面から研ぎだされるが、使用のため丸く潰れている。基部折損は使用時におけるものであろう。
タ — 4	第 IV 層	6.58 11.80 (102.00)		
タ 5		(6.40)	ハ ン レ イ 岩	バチ形を呈するものである。裏面は割面で、周縁には剝離痕を残す。側辺と上端には細かい敲打痕がみられる。表面の上部には研磨が施される。
タ — 5	表 採	(4.64) (1.97) (100.00)		
タ 6	こ—17	(6.40)	ハ ン レ イ 岩	刃部資料で、表裏面とも打削後、敲打調整される。研磨は刃部のみ施される。刃部は使用により破損している。基部の折損は使用時におけるものであろう。
タ — 6	第 II 層	5.26 2.10 (117.00)		
タ 7		(9.50)	輝 緑 岩	下部を欠く資料で、側辺部は表面より打削される。基端は表裏面から打削後に敲打調整を部分的に行っている。研磨痕は認められない。石斧製作時の破損品であろうか。
タ — 7	表 採	6.80 2.60 (223.00)		
タ 8	4 トレンチ	9.10	片 状 砂 岩	平面形がバチ形をなすもので、表裏面とも割面である。周縁は打削調整時の剝離痕と敲打痕がみられる。研磨痕はみられない。
タ — 8	第 I 層	5.40 1.80 100.00		
第 33 図 1 図版35—1	0—2 第 I 層	18.40 7.30 3.87 820.00	輝 緑 岩	手頃な自然礫を裏面より打削調整し、形を整えている。敲打痕、研磨調整痕は認められない。未製品であろうか。
タ 2	さ—16	(7.55)	輝 緑 岩	製作途中で破損したと考えられるものである。表面は自然面、裏面は割面である。裏面の左側には打削痕、右側には細かい敲打痕がみられる。
タ — 2	第 IV 層	4.83 3.20 (206.00)		

敲石(第33図4~6、第34・35・36図、表-3)

28点が得られた。石器の中では最も多く、全体の33.3%を占める。

当該石器は素材として橢円形の河原礫を加工せずに使用する例が多くみられが、本遺跡では28点のうち9点が河原礫を用いる。

敲石は機能として石器等の製作工具あるいは堅果類などを敲き潰す道具として想定されている。また、表裏面に磨面を有するものもあり、磨石の機能を兼ねるものもある。

採集された資料は使用状況から敲打器としての機能を有するもの(I類)と敲打器と磨石の機能を兼ねるもの(II類)の2類に大別される。量的にみるとI類-3点、II類-25点である。

敲打部位としては上下端と両側縁が使用されるが、中には表裏面の中央部に敲打痕を有するものもある。敲打痕は粗いものと細かいものがみられるが、全体としては細かいものが多い。形態的にみると扁平橢円形、長方形、不定形なものがみられ、扁平橢円形の標品以外は比較的厚手のものが多い。扁平橢円形はII類とした磨石兼用の資料においてみられ、使用目的による素材選択の動いた結果と考えられる。

石質は輝緑岩と砂岩系統が多い。

表-3 敲石観察表

挿図番号 図版番号	出土地区 出土層位	法 量	長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 重量(g)	石 質	観察事項
第32図-3 図版35-3	さ-16 第IV層		(7.95) 7.50 3.34 (350.00)	輝緑岩	上部を欠損するものである。側辺と下部を敲打部として使用される。表裏面は若干、研磨を施してある。
〃4 〃-4	不明 不明		8.24 5.33 5.93 350.00	輝緑岩	偏橢円形の自然礫を利用するもので、上下端と右側辺部に敲打痕がみられる。
〃5 〃-5	さ-16 不明		7.30 8.10 5.40 500.00	輝緑岩	身の半分を欠くもので、上下端と側辺の中央部を敲打部位として使用される。表面中央は僅かに凹部を形成する。
〃6 〃-6	こ-17 第II層		8.60 6.30 4.14 300.00	ハンレイ岩	平面形がバチ形を呈するもので、石斧からの転用品である。表裏面の側縁には打削時の剥離痕を残すものの、側面は細かい敲打調整がなされる。表面の中央部には研磨が施される。
第33図1 図版36-1	さ-16 第IV層		(9.00) (8.24) (7.10) (800.00)	砂岩	身の大部分を欠失するもので、表面左側と下端に敲打痕を有する。
〃2 〃-2	こ-16 第IV層		(8.40) (9.50) (6.16) (700.00)	輝石安山岩	横断面が橢円形をなす不定形の自然礫を用いるもので、側面の中央部を敲打部位として使用する。
〃3 〃-3	し-16 第IV層		(6.70) (7.27) (3.70) (200.00)	輝緑岩	身の大部分を欠失するもので、下端に敲打痕が受けられる。

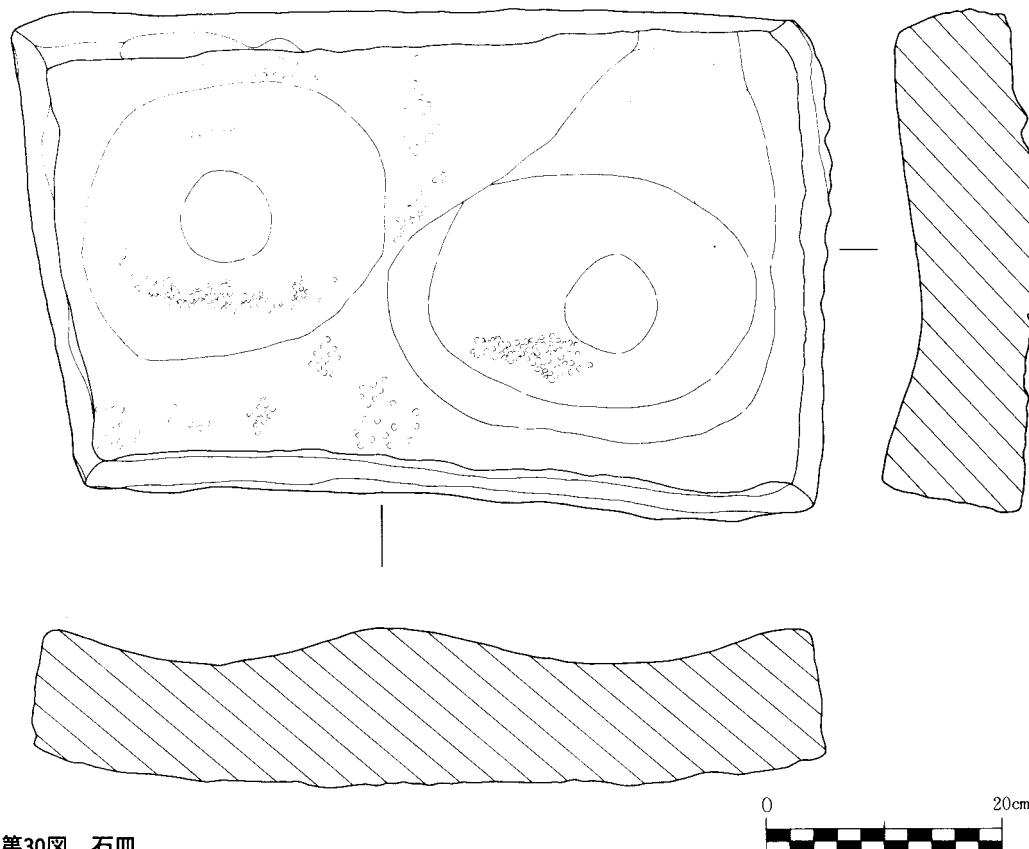
タ 4 タ — 4	さ—16 第IV層	(6.50) (7.05) (5.65) (350.00)	砂岩	半欠品で、横断面は三角形を呈する。敲打部は下端とその両側に認められる。
タ 5 タ — 5	不 明	17.50 9.00 7.00 1.95	細粒砂岩	平面形が長方形をなすもので、上下面と右側面中央部に敲打痕が認められる。上下端の使用頻度は高い。表裏面には凹部が形成される。
タ 6 タ — 6	不 明 第IV層	12.30 6.60 4.27 450.00	細粒砂岩	平面観が長方形状を呈するもので完形品である。横断面はひし形をなし、表裏面と両側辺の中央部、上下端の6面が敲打部位として使用される。側辺の使用頻度は高いようである。
第35図1 図版37—1	ニ—17 第III層	15.90 7.90 4.53 950.00	ハシレイ岩	平面観がバチ形を呈するもので、横断面は三角形をなす。敲打部は上下端と表面頂部の3カ所で、敲打部以外は研磨が施される。
タ 2 タ — 2	不 明 第IV層	(6.64) (8.50) 4.66 (350.00)	砂岩	楕円形の自然礫を利用したと考えられるもので、半欠品である。折損後も利用され、破損面の縁は潰れている。敲打部位としては主に下端が用いられるが、両側辺にも細かい敲打痕を残す。
タ 3 タ — 3	表 採	12.80 (7.10) 6.27 (900.00)	輝緑岩	平面観が直角三角形状を呈するもので、下端と左側面に敲打痕がみられる。裏面は割面である。右側面は磨面が認められる。
タ 4 タ — 4	Aトレンチ 第I層	(6.66) (9.33) (5.86) (600.00)	輝緑岩	平面観が三角形状を呈するもので、上面は節理面で割れる。裏面は割面である。下端が敲打部位として使用される。表面と左側辺は磨面である。
タ 5 タ — 5	そ—19	(13.67) 12.00 7.00 1800.00	角閃石斑岩	身の始を折損するものの、比較的重量感のある製品である。平面形が楕円をなす自然礫を用いるもので、下端と側辺を敲打部として使用する。表裏面は磨られている。
第36図1 図版38—1	す—17 第IV層	11.72 7.50 6.18 800.00	砂岩	長楕円形を呈する自然礫を利用する。上下端と両側辺中央部を敲打部として使用する。表裏面の中央部は磨られている。
タ 2 タ — 2	さ—17 第IV層	13.00 9.00 4.45 800.00	砂岩	平面形が楕円形を呈するもので、上下端と両側辺が敲打部位として使用される。側辺の使用頻度は上下端に比して高い。磨面は表裏面の中央部分にみられる。
タ 3 タ — 3	し—15 第IV層	10.00 7.80 5.60 600.00	片状砂岩	長方形状を呈するもので、裏面には凹部を有する。周縁の上下左右の4カ所が敲打部位として使用される。裏面に磨面が認められる。
タ 4 タ — 4	さ—17 第IV層	(8.80) 8.00 3.83 (400.00)	片状砂岩	平面形が方形状をなすもので、周縁が敲打部位として使用される。上端と右側辺は破損後も使用されている。表裏面の中央部は僅かに凹部を形成する。
タ 5 タ — 5	し—16	12.84 9.20 6.50 1500.00	輝緑岩	横断面が三角形をなす自然礫を利用するもので、上下端と表面頂部を敲打部として使用する。上端の使用頻度は高い。裏面は磨面として使用される。
タ 6 タ — 6	不 明 第VI層	13.00 10.72 6.51 1250.00	片状砂岩	平面観が楕円形をなすもので、周縁の4カ所に敲打痕がみられる。側辺部の使用頻度は高く、凹んでいる。表面中央部は僅かに凹部を形成し、敲打痕がみられ、周辺は磨面として使用される。

石皿(第37図4・5、第30図)

8点が採集された。1点は長さ70.2cm・幅43.9cm・厚さ13.4cm・重量77.5Kgを測る大型品で、他の7点は小型の扁平方形状を呈する。当該製品は敲石あるいは磨石と併用されることから、使用面は比較的平滑であるもの、敲打痕を有するものがある。第36図5は表面に稜がみられる事から砥石としての機能も合わせもつものと考えられる。石質は細粒砂岩が使用される。

表-4 石皿観察表

捕団番号 図版番号	出土地区 出土層位	法 量	長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 重量(kg)	石 質	観察事項
第36図3 図版39-4	こ-17 第IV層		(17.0) (14.76) 3.32 1.45	細粒砂岩	表面の右下部に小さな凹部を形成する。凹部内には敲打痕を残す。
〃5 図版39-5	さ-19 第IV層		19.77 18.50 7.90 4.50	細粒砂岩	表面の右下部に凹部が形成され、その上部に荒目の敲打痕を残す。
第29図 図版39-6	さ-16 第IV層		70.20 43.90 13.40 77.50	細粒砂岩	凹部を上下に各1面有するものである。凹部以外の面には敲打痕が見られる。



第30図 石皿

扁平小型石器(第37図1・2)

1は全面打製の石器で、左側縁はほぼ直線状をなし、右側縁は基部中央部から基端に湾曲する。左側縁の基部は裏面から打剥され、刃状を呈する。長さ7.96cm・幅4.70cm・厚さ1.50cm・重量78.0gで、輝緑岩製である。さー18グリッド第II層出土。

同図2は平面形が縦長の楕円形をなすもので、縦断面は弧状を呈する。側面に敲打痕を有し、上下端には剥離痕が認められる。研磨痕は見られない。長さ10.16cm・幅4.50cm・厚さ1.70cm・重量150gを測る。緑色片岩製。さー16グリッド第IV層の出土。

有孔石器(第37図4)

資料の上部に1孔を有するもので、それ以外に加工痕はみられない。最大長6.97cm・最大幅4.90cm・厚さ2.40cm・重量100gである。シルト岩製。さー16グリッド第IV層の出土。

小 結

今回の調査で採集された石器の石質は10種が確認された。浦添市の市域及びその周辺において石材として得られるのは細粒砂岩のみで、それ以外は、すべて搬入品と考えられる。

沖縄貝塚時代後期において、石斧が減少し、他の石器(敲石・磨石)が増加することは既に指摘されていることで、今回、調査を実施した嘉門貝塚A区においても変わるものではない。

石斧出土割合の相対的減少する理由としては、それに変わる利器の存在が考えられ、具志川市宇堅貝塚(註1)出土の板状鉄斧はそれを証明するものである。しかしながら、石斧は鉄斧の出現があっても、石斧が引き続き使用されることは後期に属する遺跡から少量ながら出土する状況から窺うことができる。石斧の減少については鉄斧の出現の他に、生業活動等の生活的変化に起因するものと思われ、その結果、加工工具、調理具としての敲石・磨石の増加があると考えられる。

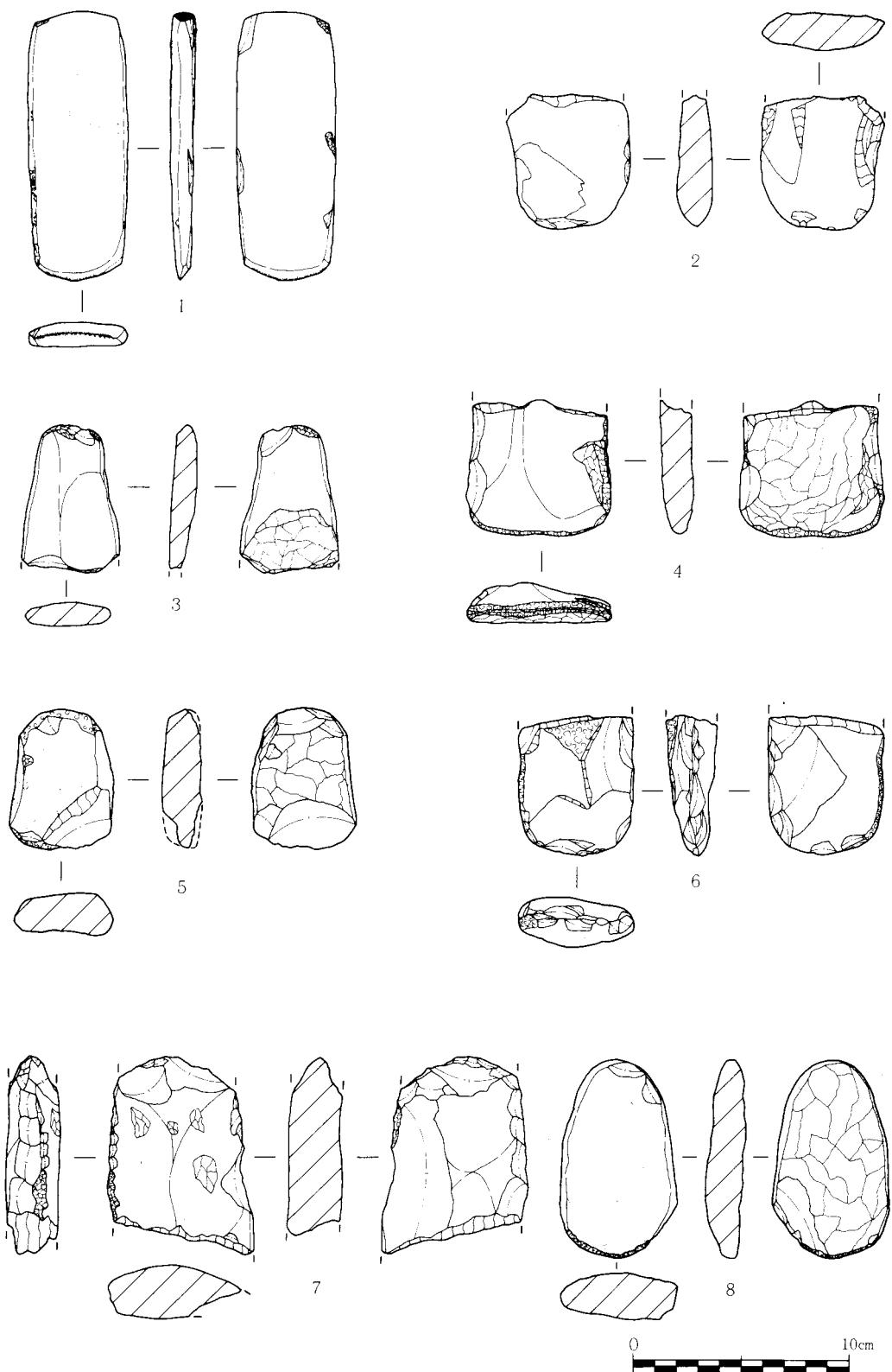
本遺跡の石器の特徴として、発掘調査面積等の制約はあるものの石斧の石器全体に占める出土頻度が、他の後期遺跡に比して高く、敲石と量的に大きな開きはみられない。

本遺跡は例言において記述したとおり、発掘調査を2区にわけて実施しており、嘉門貝塚B区と接する同一の遺跡である。嘉門貝塚B区においても石斧の出土が多い傾向がみられており、嘉門貝塚出土石器に関する検討は嘉門貝塚B区の報告において行いたい。

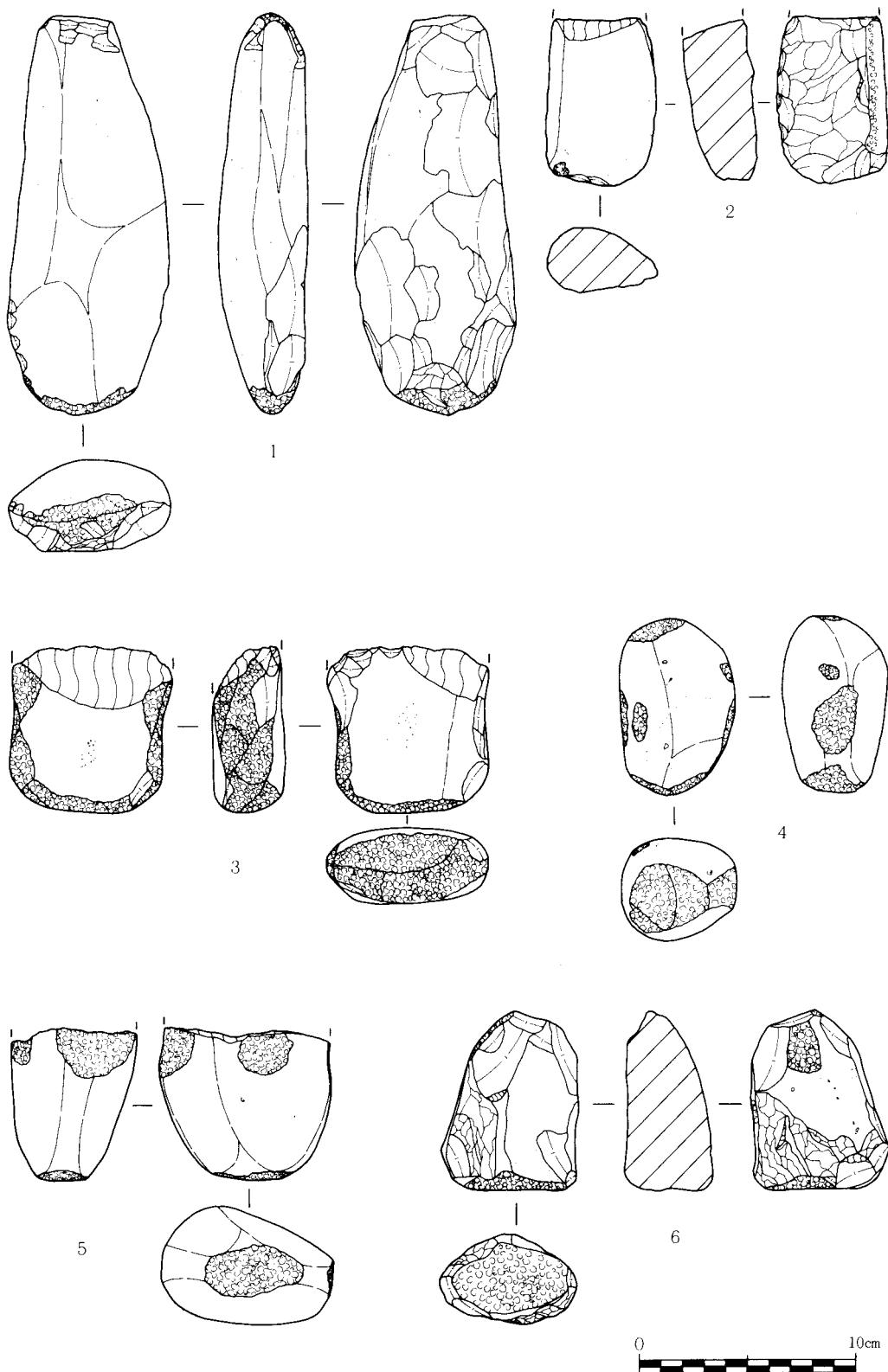
(註)1 金武正紀他『宇堅貝塚群・アカジャンガ貝塚発掘調査報告書』具志川市文化財調査報告書第4集 昭和55年3月



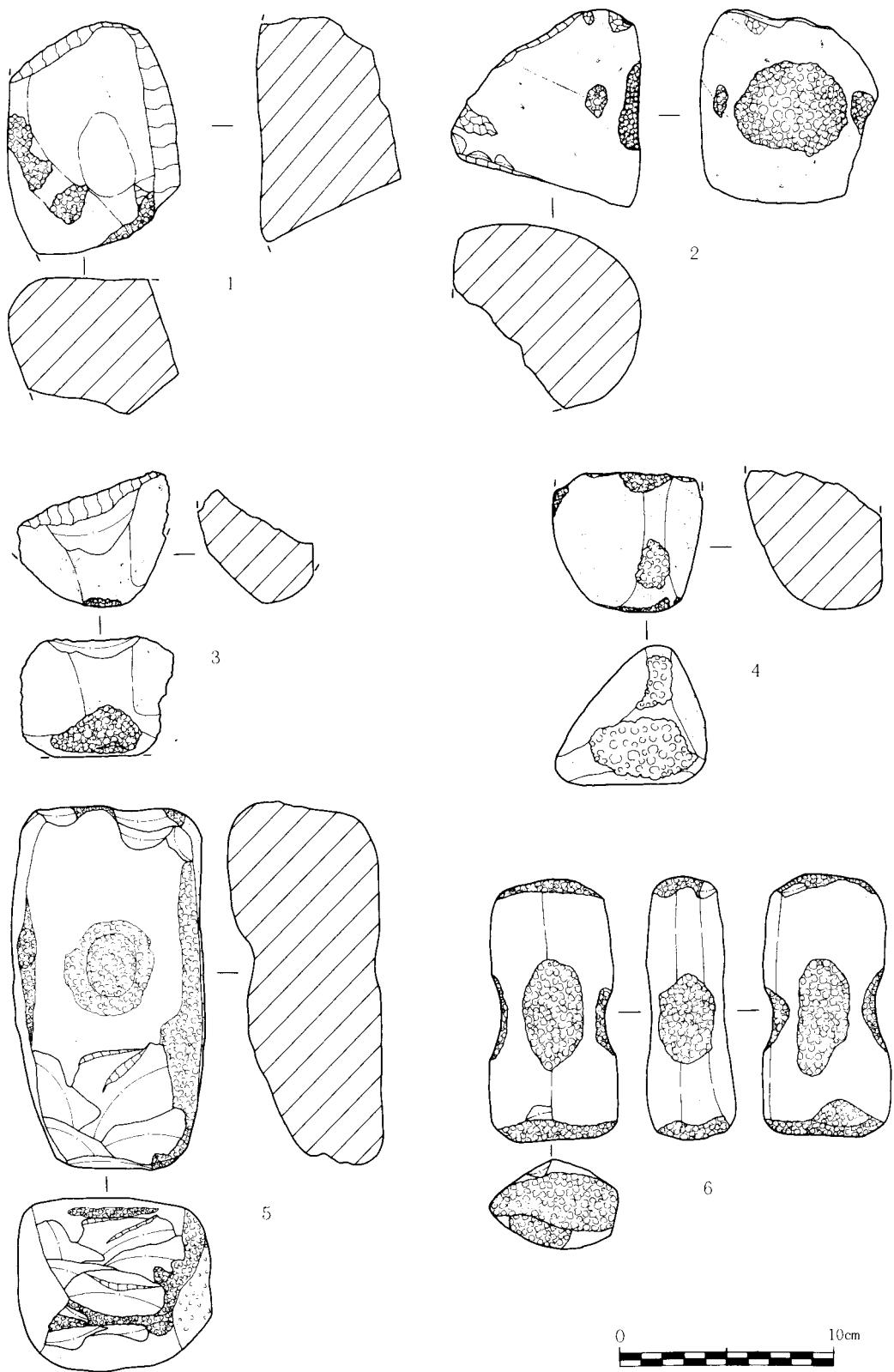
第31図 石斧



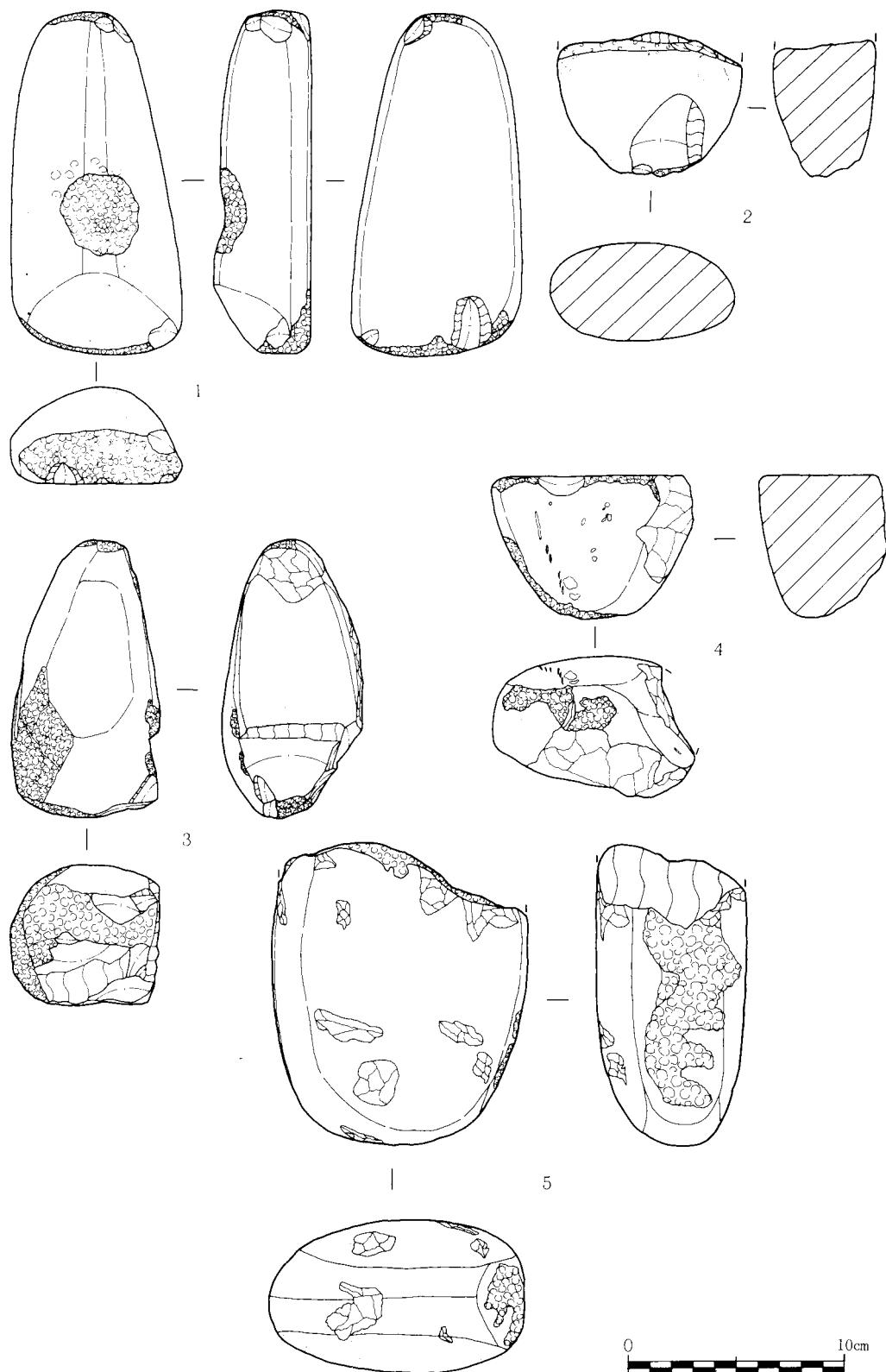
第32図 石斧



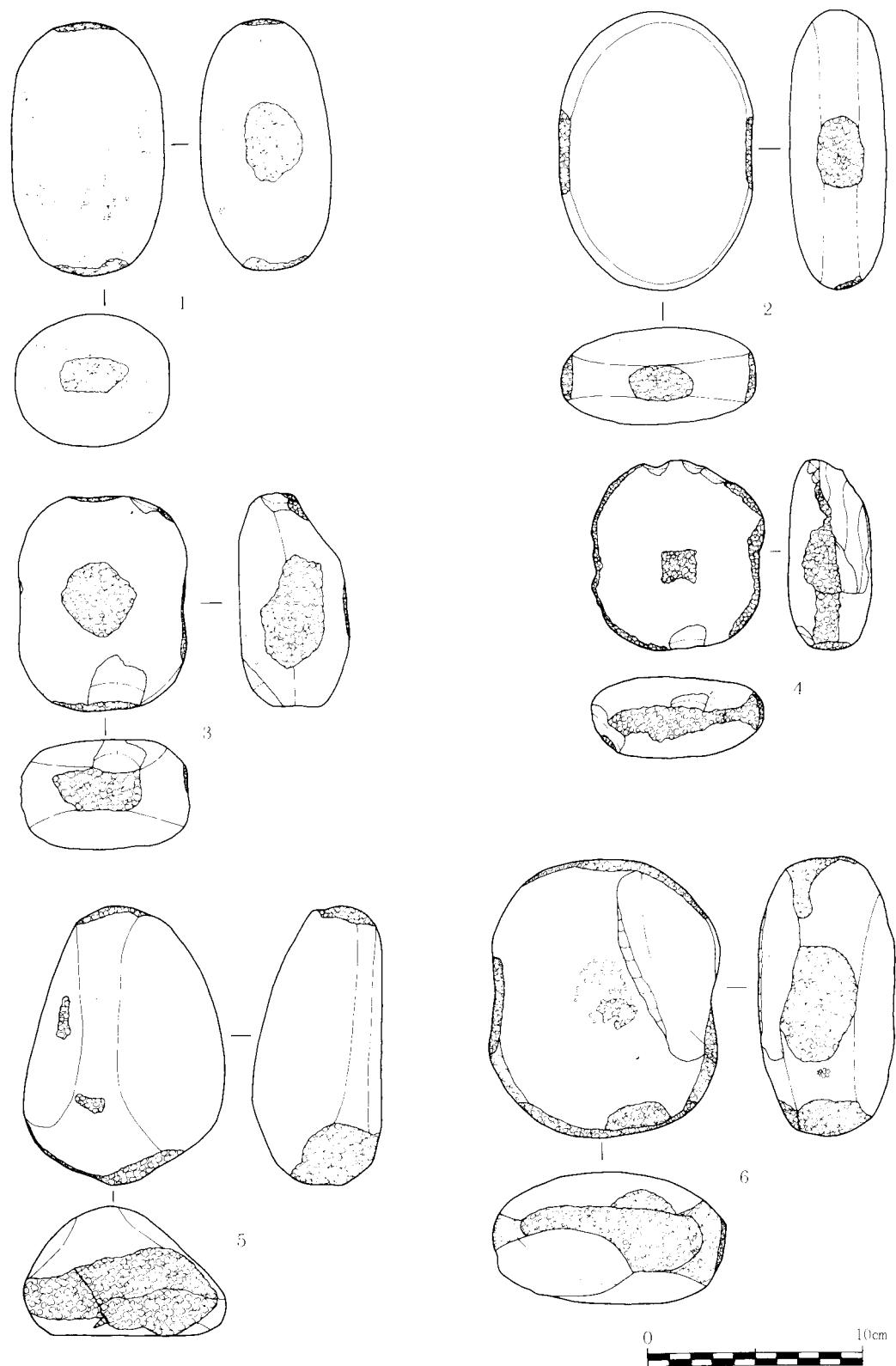
第33図 石斧(1・2)、敲石(3~6)



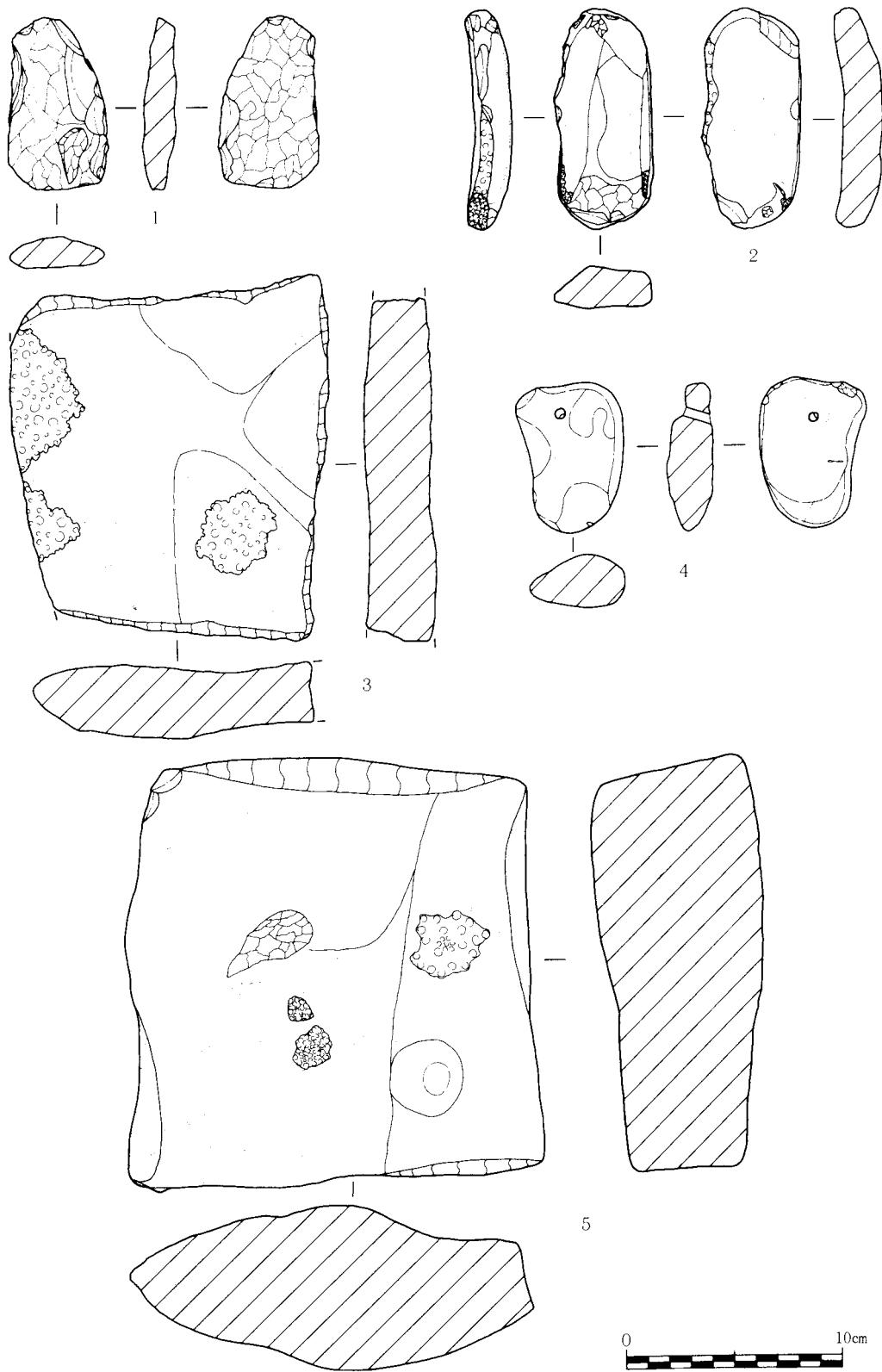
第34図 敲石



第35図 敲石



第36図 敲石



第37図 扁平小型石器(1・2)、有孔石器(4)、石皿(3・5)

3 貝製品

本貝塚出土の貝製品は総数262点採集され、その内訳は実用品236点、装飾品20点、遊具1点、用途不明品5点の出土が認められた。実用品は杓子状製品(3点)、二枚貝有孔製品(233点)の2種、装飾品は貝輪(20点)の1種、遊具は貝製碁石(1点)、用途不明品はスイジガイ有孔品(1点)、ゴホウラ有孔品(1点)、ホラガイ有孔品(1点)、イモガイ製品(2点)の4種で、内35点を図示した。以下に、これらについて略記する。

実用品

①杓子状製品(第38図1・2)

これまで貝匙として扱われていたもので、久米島清水貝塚(註1)で形態から杓子状製品と匙状製品の2種に分類された。本貝塚では前者の資料が3点得られ、内2点を図示した。いずれもヤコウガイ製で、破損しているが、残存形態から柄の部分と思われる。1は周縁に抉りが入っており、丁寧な研磨調整が見られる。径3.5×3.0cmを測る孔が穿たれ、更にそれを縦断する溝が表裏に施されている。残存部の長さ4.7cm、幅3.9cm、厚さ0.5cm、重量13gを測る。2は研磨調整等の痕が見られないことから未製品か粗製品であったと思われる。残存部の長さ5.3cm、幅4.9cm、厚さ0.5cm、重量19gを測る。

②二枚貝有孔製品(第38図3~9)

233点出土している。貝種別に見ると、アコヤガイ、シレナシジミ、リュウキュウサルボウ、カワラガイ、ヒメジャコ、シラナミ、カブラツキガイ、ハイガイ、メンガイ、エガイ、ミドリアオリガイ、リュウキュウシラトリ等の出土が認められる。リュウキュウサルボウ(2点)、ヒメジャコ(2点)、シラナミ(3点)の3種を図示した。いずれも殻頂部又はその付近に穿孔されている。表-5に観察表を示した。尚、孔の形状及び計測の方法はカンドウ原遺跡(註2)に準じた。

表-5 二枚貝有孔製品観察一覧

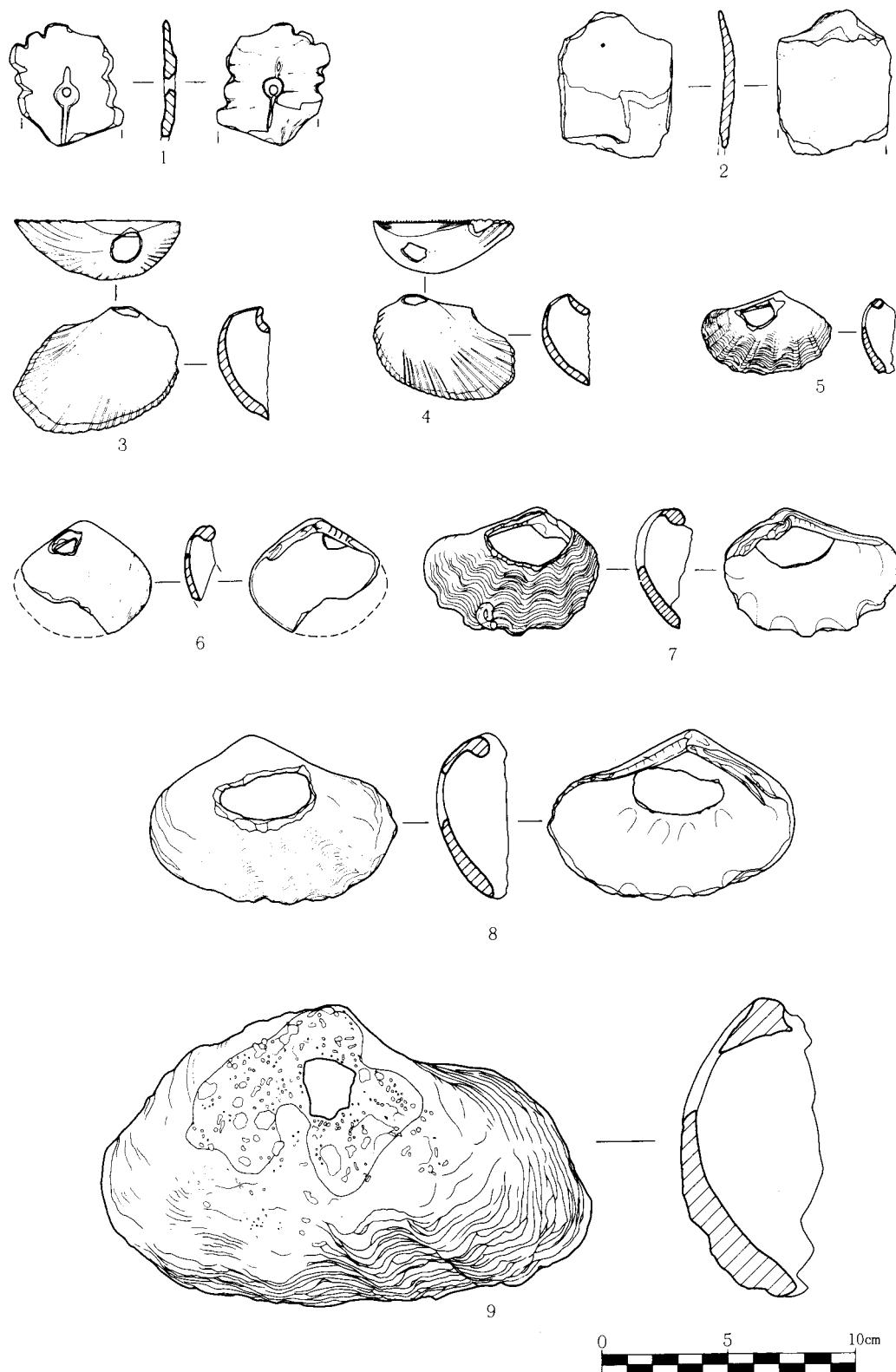
No.	出土地点 グリッド層	貝種	殻高 cm	殻長 cm	重量 g	使用殻 左 右	孔径 縦 横 cm	備考
1	0-2	I アコヤガイ	4.5	4.2	7.1	○ ○	1.4 1.2	破片
2	し-11	I カワラガイ	4.2	4.3	8.9	○ ○		破片
3	0-4	I カワラガイ	3.6	3.5	4.5	○ ○	0.6 0.5	完形
4	0-3	I カワラガイ	5.0	4.5	11.8	○ ○	0.9 1.1	完形
5	こ-17	I シラナミ	3.3	4.7	6.4	○ ○	1.0 1.2	完形
6	不明	I シラナミ	4.0	6.8	20.3	○ ○	1.4 1.0	完形
7	0-2	I シラナミ	6.3	8.9	60.0	○ ○	1.6 2.5	完形
8	0-2	I シラナミ	4.1	6.1	13.0	○ ○	1.1 0.9	完形
9	さ-17	I シラナミ	4.1	6.3	17.2	○ ○	0.8 1.0	完形
10	し-15	I シレナシジミ	5.1	5.8	12.5	○ ○	1.3 1.0	破片
11	不明	I ハイガイ	3.4	3.9	12.5	○ ○	0.4 0.5	完形
12	し-14	I ヒメジャコ	5.5	7.8	40.0	○ ○	1.4 1.2	完形
13	不明	I ヒメジャコ	2.2	3.5	3.3	○ ○	0.7 0.8	破片
14	さ-18	I ヒメジャコ	4.3	6.3	18.9	○ ○	1.0 1.2	完形
15	0-2	I ヒメジャコ	3.5	6.0	12.3	○ ○	0.7 0.8	完形
16	こ-16	I ヒメジャコ	6.0	8.0	38.0	○ ○	1.4 1.1	破片
17	0-2	I ヒメジャコ	3.8	4.9	10.0	○ ○	0.9 1.0	破片

No.	出土地点 グリッド層	貝種	殻高 cm	殻長 cm	重量 g	使用殻 左	孔径 cm		備考
							縦	横	
18	A-3	I ヒメジヤコ	7.0	9.1	80.0	○	1.7	2.1	完形
19	さ-18	I ヒメジヤコ	4.5	6.8	17.4	○	0.7	0.7	完形
20	さ-18	I メンガイ	5.2	4.7	14.3	○	1.3	1.3	破片
21	0-4	I メンガイ	6.3	5.7	21.2	○	0.9	0.8	完形
22	A-4	I メンガイ	7.4	6.4	24.2	○	1.3	1.4	完形
23	0-4	I リュウキュウサルボウ	3.9	6.2	24.8	○	0.8	0.8	完形
24	さ-17	I リュウキュウサルボウ	3.3	4.9	10.6	○	1.4	1.1	完形
25	A-4	I リュウキュウサルボウ	4.0	5.6	16.4	○	1.2	1.1	完形
26	A-2	I リュウキュウサルボウ	3.9	5.0	15.1	○	0.9	0.8	完形
27	A-2	I リュウキュウサルボウ	3.9	7.3	30.0	○	1.1	0.9	完形
28	0-3	I リュウキュウサルボウ	3.3	5.4	11.9	○	0.6	0.8	完形
29	不明	表 リュウキュウサルボウ	4.0	5.8	13.0	○	1.3	1.3	完形
30	さ-18	II ヒメジヤコ	5.8	9.6	40.2	○	1.5	1.7	完形
31	不明	II ヒメジヤコ	4.4	6.9	21.5	○	1.0	1.2	完形
32	さ-16	II ヒメジヤコ	3.5	6.0	11.8	○	0.9	0.9	完形
33	し-15	II ヒメジヤコ	5.1	7.5	27.1	○	0.7	0.6	完形
34	さ-16	II ヒメジヤコ	3.0	4.7	6.7	○	1.1	1.4	完形
35	不明	II ヒメジヤコ	4.2	6.2	14.2	○	1.7	1.3	完形
36	さ-18	II リュウキュウサルボウ	4.2	6.7	30.2	○	0.8	1.0	完形
37	こ-17	II リュウキュウサルボウ	4.0	5.5	16.3	○	0.8	0.9	完形
38	し-16	II リュウキュウサルボウ	4.0	5.7	22.2	○	0.7	1.0	完形
39	さ-18	II リュウキュウサルボウ	3.9	6.0	18.9	○	0.6	0.8	完形
40	こ-17	II リュウキュウサルボウ	3.9	4.6	11.2	○	0.8	1.2	破片
41	さ-19	IV カワラガイ	5.5	4.8	18.5	○	1.3	1.1	完形
42	せ-12	IV カワラガイ	4.5	3.9	11.7	○	0.3	0.4	完形
43	さ-16	IV カワラガイ	3.8	2.7	4.2	○	0.9	0.6	破片
44	拡張区	IV カワラガイ	3.8	3.5	5.3	○	0.8	0.7	完形
45	さ-16	IV カワラガイ	3.7	3.6	6.7	○	3.7	3.6	完形
46	こ-18	IV カワラガイ	4.1	3.7	8.3	○	0.6	0.6	完形
47	拡張区	IV カワラガイ	5.1	4.1	14.4	○	1.3	1.2	完形
48	さ-18	IV カワラガイ	5.2	4.7	22.5	○	1.0	0.8	完形
49	こ-17	IV カワラガイ	4.4	3.9	8.4	○	0.3	0.3	完形
50	し-18	IV カワラガイ	4.3	3.8	8.1	○	0.3	0.4	破片
51	し-18	IV カワラガイ	3.6	3.4	7.0	○	0.4	0.3	破片
52	拡張区	IV カワラガイ	4.2	4.1	7.5	○	0.9	0.8	完形
53	拡張区	IV ザルガイ	3.4	3.2	2.9	○	0.6	0.7	完形
54	し-15	IV リュウキュウシラトリ	4.0	5.3	13.8	○	1.3	1.4	完形
55	し-16	IV リュウキュウシラトリ	5.0	5.9	14.1	○	1.1	0.9	完形
56	し-14	IV シラナミ	5.1	6.5	18.1	○	1.2	1.6	完形
57	さ-18	IV シラナミ	7.3	9.5	70.0	○	2.3	2.1	完形
58	Pit43	IV シラナミ	3.4	4.9	8.4	○	1.0	1.1	完形
59	さ-19	IV シラナミ	7.0	10.1	90.3	○	1.8	2.3	完形
60	さ-17	IV シラナミ	—	6.2	10.4	○	—	—	完形
61	し-16	IV シレナシジミ	6.4	7.6	30.7	○	1.7	1.7	破片
62	こ-18	IV シレナシジミ	6.5	7.2	30.2	○	1.2	0.8	完形
63	し-18	IV ハイガイ	3.4	4.4	12.1	○	1.5	1.1	完形
64	し-15	IV ハイガイ	4.6	6.2	27.7	○	0.9	1.0	完形
65	さ-17	IV ハイガイ	3.8	4.2	16.2	○	0.4	0.6	完形
66	さ-18	IV ハイガイ	3.7	3.9	13.6	○	0.6	0.7	完形
67	こ-16	IV ヒメジヤコ	5.4	7.3	30.0	○	1.4	1.6	完形
68	さ-17	IV ヒメジヤコ	3.4	4.2	6.8	○	1.2	1.0	破片
69	こ-18	IV ヒメジヤコ	5.1	6.3	30.0	○	0.9	0.9	完形
70	さ-17	IV ヒメジヤコ	—	7.1	18.5	○	—	—	破片
71	こ-17	IV ヒメジヤコ	3.3	4.1	7.9	○	0.7	0.9	完形

No.	出土地点 グリッド層	貝種	殻高 cm	殻長 cm	重量 g	使用殻		孔径 cm 縦 横	備考
						左	右		
72	こ-18	IV ヒメジヤコ	4.3	6.3	16.9			0.6 0.8	完形
73	さ-18	IV ヒメジヤコ	3.0	3.9	5.5	○		0.4 0.7	破片
74	さ-16	IV ヒメジヤコ	4.0	6.8	15.8	○		0.5 0.8	完形
75	さ-18	IV ヒメジヤコ	4.3	6.5	15.4		○	1.0 1.1	完形
76	し-16	IV ヒメジヤコ	5.0	7.1	20.0		○	1.4 1.3	完形
77	さ-18	IV ヒメジヤコ	4.2	6.7	16.5	○		1.5 1.2	完形
78	こ-18	IV ヒメジヤコ	5.3	7.3	30.0		○	1.0 0.9	完形
79	さ-18	IV ヒメジヤコ	5.4	7.7	30.0		○	1.4 1.4	完形
80	こ-18	IV ヒメジヤコ	4.3	5.7	10.0		○	1.7 1.7	完形
81	し-16	IV ヒメジヤコ	5.2	7.2	25.5		○	1.3 1.1	完形
82	さ-16	IV ヒメジヤコ	3.9	5.5	10.9		○	0.8 0.8	完形
83	さ-16	IV ヒメジヤコ	3.9	6.1	14.3	○		0.8 1.0	完形
84	さ-18	IV ヒメジヤコ	5.2	7.5	30.0	○		1.3 1.3	完形
85	こ-17	IV ヒメジヤコ	3.5	5.7	8.9		○	1.5 0.9	完形
86	さ-16	IV ヒメジヤコ	3.9	4.9	10.1	○		0.7 0.7	完形
87	さ-16	IV ヒメジヤコ	3.2	4.9	7.2	○		0.6 1.2	完形
88	こ-17	IV ヒメジヤコ	4.8	6.7	17.3	○		1.5 0.6	完形
89	こ-17	IV ヒメジヤコ	3.8	5.3	9.9	○		0.6 0.7	完形
90	し-16	IV ヒメジヤコ	4.5	7.5	18.0		○	0.9 1.2	完形
91	さ-17	IV ヒメジヤコ	4.4	6.5	20.3		○	0.8 1.0	完形
92	し-16	IV ヒメジヤコ	3.8	6.4	11.8	○		0.7 0.9	完形
93	し-16	IV ヒメジヤコ	3.5	5.3	8.9		○	0.8 0.7	完形
94	さ-17	IV ヒメジヤコ	4.0	4.6	14.5		○	1.2 1.6	完形
95	こ-18	IV ヒメジヤコ	4.1	6.3	13.5		○	1.1 0.8	完形
96	さ-17	IV ヒメジヤコ	3.9	6.0	18.6		○	— —	破片
97	さ-18	IV ヒメジヤコ	3.4	5.3	6.1	○	—	—	完形
98	さ-16	IV ヒメジヤコ	7.0	9.4	60.0		○	1.9 2.1	完形
99	し-16	IV ヒメジヤコ	5.2	6.9	21.6	○		1.0 1.0	破片
100	こ-17	IV ヒメジヤコ	4.8	7.9	26.3	○		0.9 1.4	完形
101	さ-16	IV ヒメジヤコ	4.6	6.1	13.4		○	0.7 0.7	完形
102	こ-16	IV ヒメジヤコ	3.5	4.6	9.1		○	0.8 0.9	完形
103	こ-17	IV ヒメジヤコ	4.3	6.3	17.6		○	0.8 1.0	完形
104	し-15	IV ヒメジヤコ	5.2	7.9	30.0		○	1.1 0.9	完形
105	さ-16	IV ヒメジヤコ	5.3	7.1	30.0		○	0.9 1.1	完形
106	す-15	IV ヒメジヤコ	5.5	7.8	20.0		○	1.1 1.4	完形
107	さ-16	IV ヒメジヤコ	3.2	4.6	6.7	○		1.0 1.2	破片
108	こ-18	IV ヒメジヤコ	4.2	5.0	10.8	○		0.6 1.0	破片
109	し-19	IV ヒメジヤコ	5.9	7.4	40.0		○	1.2 1.3	完形
110	こ-17	IV ヒメジヤコ	4.2	5.9	15.9		○	1.1 0.9	完形
111	さ-18	IV ヒメジヤコ	4.4	7.4	24.4		○	1.5 1.8	完形
112	さ-18	IV ヒメジヤコ	3.8	4.7	9.2		○	1.3 0.9	完形
113	し-15	IV ヒメジヤコ	6.0	7.7	30.0	○		1.0 1.6	完形
114	こ-16	IV ヒメジヤコ	6.7	7.9	40.0		○	1.0 1.0	完形
115	こ-17	IV ヒメジヤコ	4.8	6.6	30.0		○	1.7 1.8	完形
116	し-18	IV ヒメジヤコ	7.3	10.6	70.0		○	1.0 1.0	完形
117	こ-16	IV ヒメジヤコ	4.2	6.1	15.6	○		0.5 0.6	完形
118	さ-16	IV ヒメジヤコ	3.9	5.5	10.4		○	0.6 0.7	完形
119	さ-18	IV ヒメジヤコ	4.0	6.8	16.1		○	— —	破片
120	し-16	IV ヒメジヤコ	4.4	5.9	11.4		○	1.5 2.1	完形
121	さ-18	IV ヒメジヤコ	3.9	5.8	11.9	○		1.0 1.2	完形
122	A-3	IV ヒメジヤコ	3.1	5.1	7.2	○		0.6 0.5	完形
123	し-18	IV ヒメジヤコ	4.2	6.1	13.1			1.0 1.1	完形
124	さ-16	IV ヒメジヤコ	4.9	5.9	12.3		○	0.6 0.6	完形
125	こ-18	IV ヒメジヤコ	4.4	6.9	22.1		○	1.1 0.9	完形

No.	出土地点 グリッド層	貝種	殻高 cm	殻長 cm	重量 g	使用殻 左右	孔径 cm		備考
							縦	横	
126	せ-18	IV ヒメジヤコ	5.7	8.1	40.0	○	0.9	1.2	完形
127	し-16	IV ヒメジヤコ	4.4	6.2	16.3	○	0.9	1.0	完形
128	し-16	IV ヒメジヤコ	4.1	4.8	10.9	○	1.2	1.0	完形
129	し-15	IV ヒメジヤコ	4.1	6.1	12.3	○	1.4	0.8	完形
130	こ-17	IV ヒメジヤコ	3.5	5.3	10.7	○	0.6	0.9	完形
131	こ-17	IV ヒメジヤコ	3.0	4.0	4.0	○	1.1	0.9	破片
132	さ-16	IV ヒメジヤコ	3.2	5.8	12.3	○	—	—	破片
133	し-16	IV ヒメジヤコ	4.5	6.4	16.0	○	0.9	1.2	完形
134	不明	IV ヒメジヤコ	3.4	5.8	10.4	○	0.9	0.7	完形
135	し-17	IV ヒメジヤコ	5.2	7.6	21.6	○	1.6	0.8	完形
136	さ-18	IV ヒメジヤコ	3.8	5.9	12.2	○	1.5	0.9	完形
137	し-15	IV ヒメジヤコ	4.3	5.6	14.9	○	1.3	1.1	破片
138	こ-18	IV ヒメジヤコ	3.8	6.0	13.7	○	0.5	0.6	完形
139	こ-16	IV ヒメジヤコ	6.1	11.3	70.0	○	2.7	2.4	完形
140	Pit25	IV ヒメジヤコ	3.9	5.8	13.1	○	0.8	1.1	完形
141	こ-18	IV ヒメジヤコ	4.5	6.1	21.0	○	1.2	1.1	完形
142	さ-16	IV ヒメジヤコ	7.5	9.0	50.0	○	1.6	2.2	完形
143	さ-17	IV ヒメジヤコ	6.2	9.9	50.0	○	1.4	1.6	完形
144	こ-16	IV ヒメジヤコ	6.5	9.4	50.2	○	1.7	0.8	完形
145	さ-17	IV ヒメジヤコ	4.1	5.9	16.4	○	0.9	0.7	完形
146	こ-18	IV ヒメジヤコ	4.0	5.7	10.7	○	1.1	0.9	完形
147	さ-17	IV ヒメジヤコ	5.3	7.8	28.3	○	1.5	1.3	完形
148	さ-16	IV ヒメジヤコ	3.6	5.2	8.0	○	1.2	0.7	完形
149	し-15	IV ヒメジヤコ	4.1	6.1	12.3	○	1.3	0.7	完形
150	し-16	IV ヒメジヤコ	3.2	4.8	6.1	○	0.9	1.2	完形
151	Pit25	IV ヒメジヤコ	4.3	6.4	19.9	○	0.6	0.7	完形
152	さ-16	IV ヒメジヤコ	3.5	5.0	6.4	○	0.8	1.1	破片
153	こ-17	IV ヒメジヤコ	5.3	7.5	30.0	○	1.1	1.0	完形
154	し-15	IV ヒメジヤコ	8.5	10.0	80.0	○	—	—	破片
155	こ-18	IV ヒメジヤコ	4.1	6.1	12.6	○	0.9	1.4	完形
156	Pit5	IV ヒメジヤコ	5.1	6.7	21.3	○	1.0	1.0	完形
157	表採	IV ヒメジヤコ	4.3	6.5	15.7	○	1.4	1.1	完形
158	し-16	IV ヒメジヤコ	4.7	5.8	17.5	○	0.9	1.0	完形
159	し-16	IV ヒメジヤコ	3.5	5.7	9.7	○	0.7	0.8	完形
160	し-16	IV ヒメジヤコ	7.5	9.5	60.0	○	2.3	2.9	完形
161	不明	IV ヒメジヤコ	6.2	7.1	24.4	○	1.2	1.3	破片
162	さ-18	IV ヒメジヤコ	3.7	5.6	13.8	○	0.9	0.9	完形
163	さ-16	IV ヒメジヤコ	4.6	6.7	14.5	—	1.5	1.2	完形
164	さ-16	IV ヒメジヤコ	5.4	7.9	30.0	○	0.8	1.3	完形
165	さ-16	IV ヒメジヤコ	3.8	4.8	7.2	○	1.2	0.7	完形
166	こ-17	IV ヒメジヤコ	4.2	6.2	13.6	○	0.7	0.8	完形
167	こ-17	IV ヒメジヤコ	3.8	5.7	12.8	○	0.6	0.7	完形
168	し-18	IV ヒメジヤコ	3.5	5.2	8.5	○	0.6	0.6	完形
169	こ-18	IV ヒメジヤコ	3.1	4.4	5.2	○	0.4	0.6	完形
170	さ-16	IV ヒメジヤコ	4.8	6.6	19.4	○	0.9	1.1	完形
171	さ-16	IV ヒメジヤコ	4.6	6.4	25.0	○	0.9	0.6	完形
172	さ-17	IV ヒメジヤコ	4.6	6.5	20.5	○	0.9	0.6	完形
173	し-18	IV ヒメジヤコ	4.2	5.8	14.0	○	0.9	0.8	完形
174	し-15	IV ヒメジヤコ	3.9	6.3	15.7	○	0.9	1.1	完形
175	し-16	IV ヒメジヤコ	4.8	7.4	16.2	○	1.2	0.6	完形
176	さ-16	IV ヒメジヤコ	4.8	7.0	30.0	○	0.9	1.3	完形
177	さ-18	IV ヒメジヤコ	3.5	5.1	9.7	○	0.7	1.1	完形
178	さ-16	IV ヒメジヤコ	5.5	7.3	30.0	○	0.9	1.1	完形
179	こ-18	IV ヒメジヤコ	4.7	5.8	17.8	○	1.3	2.1	完形

No.	出土地点 グリッド層	貝種	殻高 cm	殻長 cm	重量 g	使用殻		孔径 cm	備考
						左	右		
180	さ-16	IV ヒメジヤコ	3.8	6.0	13.0	○		0.7	1.1 完形
181	さ-19	IV ヒメジヤコ	6.2	8.8	30.2	○		1.4	1.4 完形
182	さ-18	IV ヒメジヤコ	5.1	7.6	25.3		○	1.4	0.8 完形
183	さ-16	IV ヒレジヤコ	3.8	6.4	12.6		○	0.7	0.9 完形
184	こ-18	IV メンガイ	7.2	5.7	30.2		○	1.1	1.1 完形
185	さ-18	IV リュウキュウサルボウ	4.0	5.7	22.1		○	0.6	1.1 完形
186	こ-17	IV リュウキュウサルボウ	4.7	6.7	19.0	○		1.7	2.2 完形
187	こ-18	IV リュウキュウサルボウ	4.0	5.8	21.8		○	0.5	0.6 完形
188	し-16	IV リュウキュウサルボウ	5.1	5.9	20.0		○	1.0	1.0 完形
189	さ-16	IV リュウキュウサルボウ	4.3	6.6	20.0		○	1.5	2.0 完形
190	せ-10	IV リュウキュウサルボウ	5.0	8.2	60.0		○	0.8	1.0 完形
191	さ-18	IV リュウキュウサルボウ	3.6	5.2	17.0		○	1.1	0.7 完形
192	さ-16	IV リュウキュウサルボウ	4.5	7.4	40.0		○	1.3	1.3 完形
193	さ-18	IV リュウキュウサルボウ	4.1	5.2	23.6	○		1.2	1.1 完形
194	さ-18	IV リュウキュウサルボウ	4.7	7.9	50.0	○		0.4	0.7 完形
195	さ-16	IV リュウキュウサルボウ	3.3	5.1	12.0		○	0.8	0.5 完形
196	さ-17	IV リュウキュウサルボウ	3.6	4.4	15.1		○	1.2	1.1 完形
197	せ-18	IV リュウキュウサルボウ	4.7	6.9	50.0	○		0.6	0.8 完形
198	さ-17	IV リュウキュウサルボウ	3.5	5.3	12.7	○		0.8	0.8 完形
199	し-16	IV リュウキュウサルボウ	4.0	5.6	18.0		○	1.1	0.9 完形
200	さ-16	IV リュウキュウサルボウ	4.2	6.3	17.2		○	0.9	1.0 完形
201	こ-17	IV リュウキュウサルボウ	4.4	6.2	21.8		○	0.6	0.9 完形
202	さ-15	IV リュウキュウサルボウ	2.9	3.8	7.2		○	1.1	0.8 完形
203	こ-17	IV リュウキュウサルボウ	4.6	6.1	22.6		○	1.4	0.8 完形
204	こ-18	IV リュウキュウサルボウ	4.2	6.2	22.5	○		1.2	1.0 完形
205	し-16	IV リュウキュウサルボウ	4.0	6.4	24.4		○	0.8	1.1 完形
206	さ-19	IV リュウキュウサルボウ	3.2	5.2	14.2	○		0.5	0.8 完形
207	こ-18	IV リュウキュウサルボウ	5.5	6.7	30.0	○		1.2	1.1 完形
208	さ-16	IV リュウキュウサルボウ	4.4	6.3	30.0	○		0.7	1.0 完形
209	こ-16	IV リュウキュウサルボウ	4.1	6.4	30.0	○		—	— 破片
210	こ-18	IV リュウキュウサルボウ	4.7	7.3	30.2		○	0.6	0.7 完形
211	し-19	IV リュウキュウサルボウ	3.8	5.0	17.5		○	1.0	0.7 完形
212	す-17	IV リュウキュウサルボウ	4.8	6.5	30.0		○	0.8	1.0 完形
213	さ-16	IV リュウキュウサルボウ	4.2	6.4	29.0		○	0.6	0.8 完形
214	し-17	IV リュウキュウサルボウ	4.1	5.8	22.4		○	0.6	0.9 完形
215	こ-17	IV リュウキュウサルボウ	3.7	5.5	16.4	○		1.1	1.3 完形
216	し-18	IV リュウキュウサルボウ	3.7	5.5	19.9	○		0.4	0.6 完形
217	こ-18	IV リュウキュウサルボウ	3.7	6.0	16.8		○	2.2	1.4 完形
218	こ-17	IV リュウキュウサルボウ	3.2	4.4	6.8	○		0.7	0.9 完形
219	こ-18	IV リュウキュウサルボウ	4.0	6.1	17.0		○	0.8	0.9 完形
220	さ-16	IV リュウキュウサルボウ	3.9	6.4	23.2	○		1.4	1.7 完形
221	し-15	IV リュウキュウサルボウ	4.2	6.4	25.6	○		1.1	1.6 完形
222	さ-18	IV リュウキュウサルボウ	4.3	6.9	24.2	○		1.2	1.4 完形
223	さ-16	IV リュウキュウサルボウ	3.1	4.6	6.1		○	1.2	0.8 完形
224	し-16	IV リュウキュウサルボウ	4.0	5.1	21.1		○	1.0	1.4 破片
225	さ-16	IV リュウキュウサルボウ	3.9	4.6	12.3		○	1.1	0.9 破片
226	せ-18	IV リュウキュウサルボウ	4.0	4.7	23.8		○	0.8	1.5 破片
227	さ-18	IV リュウキュウサルボウ	4.5	7.2	30.0	○		0.5	0.9 完形
228	さ-16	IV リュウキュウサルボウ	4.2	6.9	30.0	○		0.9	1.1 完形
229	A-3	IV リュウキュウサルボウ	4.1	6.1	17.0	○		0.5	1.0 破片
230	さ-16	IV リュウキュウサルボウ	3.8	5.7	15.5		○	0.9	1.3 完形
231	し-16	IV リュウキュウサルボウ	3.5	5.5	13.0	○		0.9	0.9 完形
232	し-15	IV リュウキュウサルボウ	3.7	5.5	13.7		○	0.9	0.8 完形
233	せ-16	IV カワラガイ	4.0	3.8	7.7		○	0.9	0.9 破片



第38図 枠子状製品(1・2)・二枚具有孔製品(3~9)

装飾品

貝輪(第39・40図)

ゴホウラ製10点、オオツタノハ製6点、メンガイ製1点、オオベッコウカサガイ製3点の合わせて20点が出土した。ゴホウラは背面利用品と腹面利用品がある。表-6に観察表を示した。

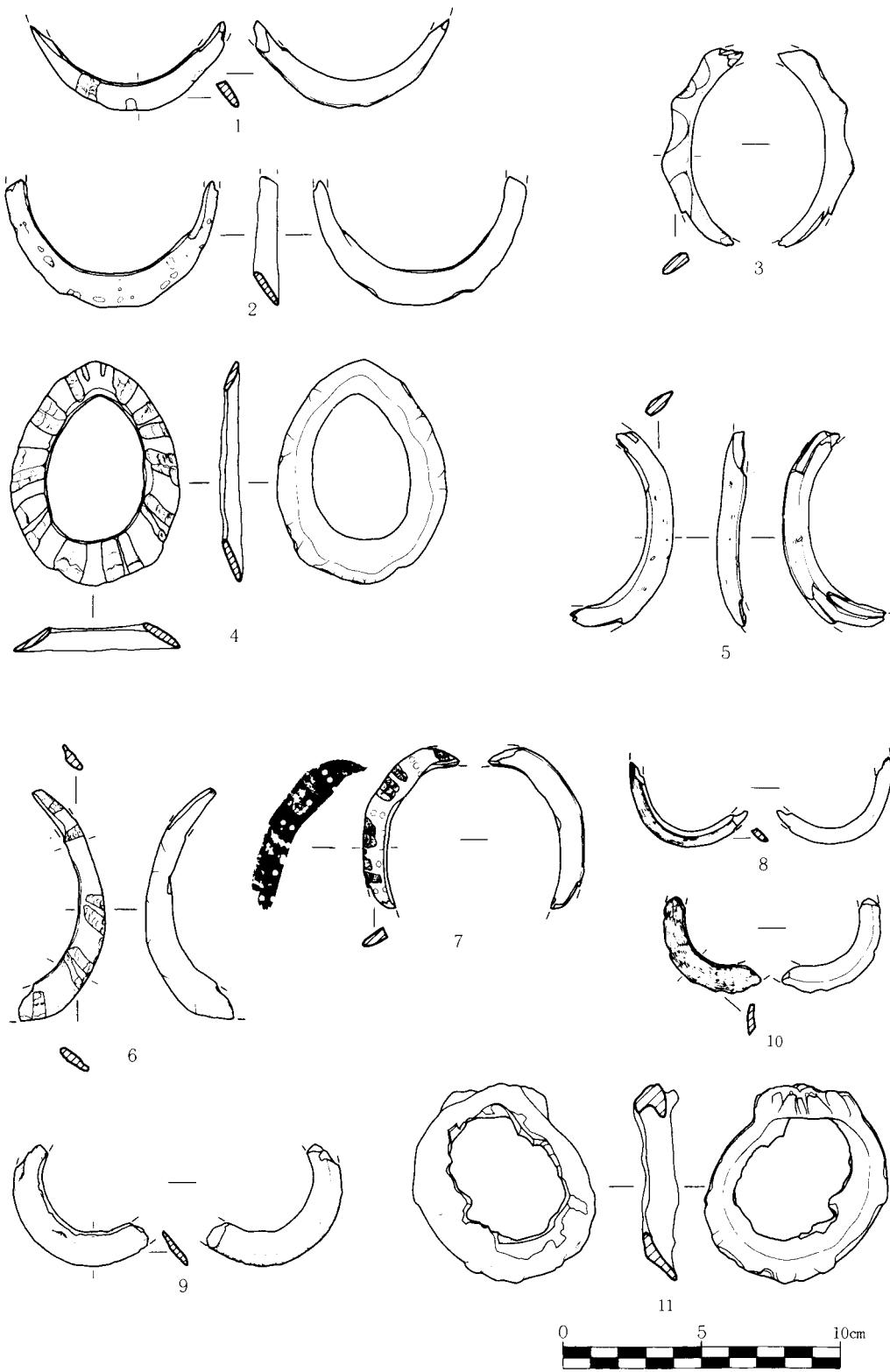
表-6 貝輪観察一覧

単位:mm/g

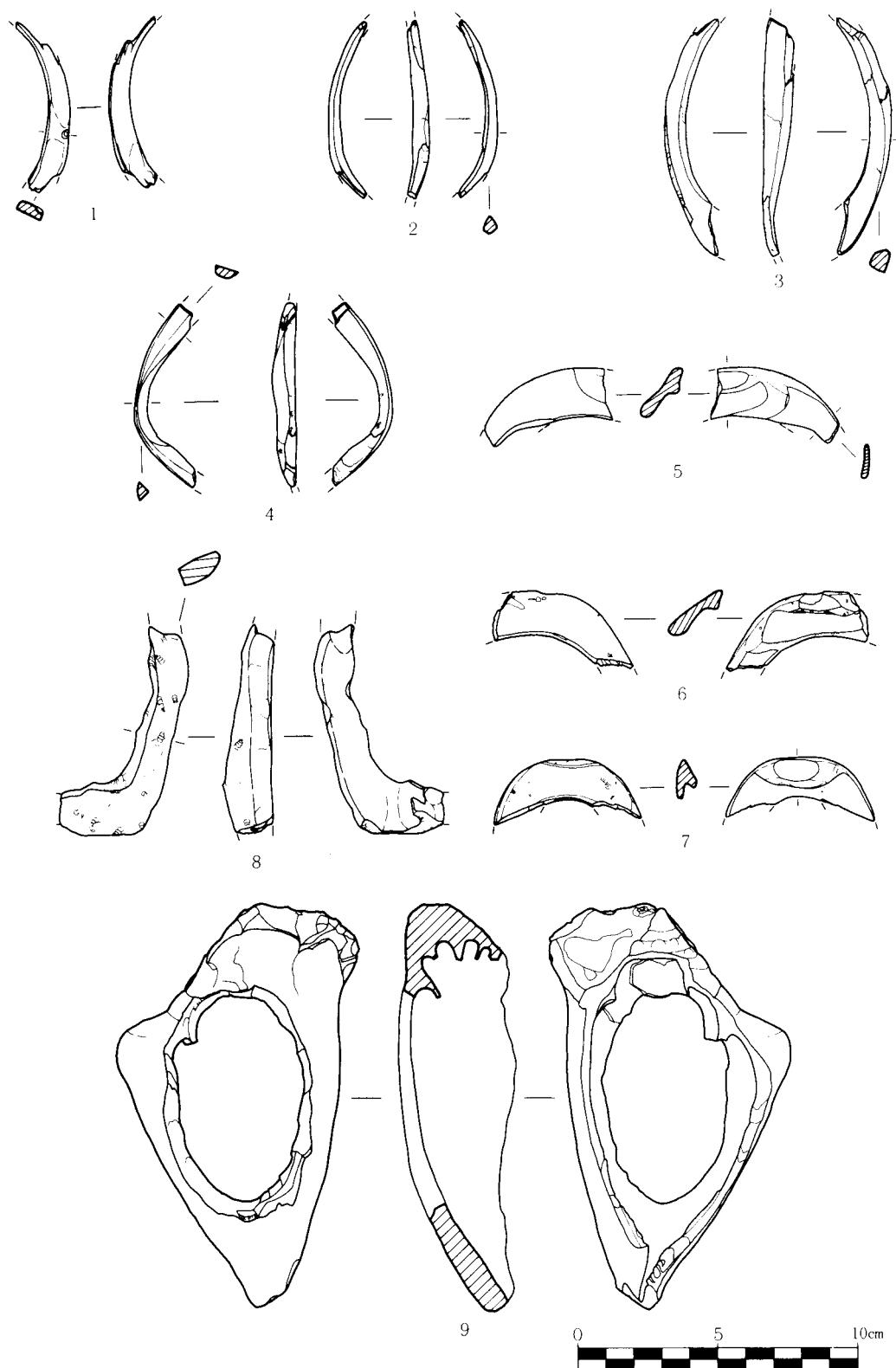
No	挿図番号	貝種	法量				孔縦	孔横	残存状況	加工状況
			最大長	最大幅	最大厚	重量				
1	第39図1	オオツタノハ	☆69.5	10.0	3.5	☆5.0	—	—	破損	水槽を受けているため、本来の文様が消えている。背に加工は見られない。
2	タ2	オオツタノハ	74.5	13.0	3.0	☆9.0	—	—	破損	表面の周縁部には研磨痕が見られる。
3	タ3	オオツタノハ	☆72.0	11.0	5.0	☆6.0	—	—	破損	表裏面とも研磨調整が施されている。本来の文様を僅かに残す。
4	タ4	オオツタノハ	80.0	16.0	4.0	16.0	52.5	35.0	完形	表裏面ともいねいな研磨調整が施されている。
5	タ5	オオツタノハ	☆68.0	9.5	4.0	☆6.0	—	—	破損	表面はていねいに研磨が施されている。
6	タ6	オオツタノハ	☆60.0	12.0	4.0	☆6.0	—	—	破損	表面・内面にいねいな研磨調整が見られ、表面には更に小円状の文様が施されている。
7	タ7	オオツタノハ	☆81.3	12.0	3.0	☆10.0	—	—	破損	表面や周縁に研磨が施されている。
8	タ8	オオベッコウカサガイ	☆53.0	14.0	2.5	☆5.0	—	—	破損	貝の肉厚な場所を利用しており、表面の剥離面には研磨が施されている。
9	タ9	オオベッコウカサガイ	☆43.0	11.5	3.0	☆3.0	—	—	破損	貝の肉厚な場所を利用しており、表面は研磨が施されている。
10	タ10	オオベッコウカサガイ	☆44.0	7.0	3.0	☆2.0	—	—	破損	貝の肉厚な場所を利用しておるだけで、背に調整痕は見られない。
11	タ11	メンガイ	71.5	12.0	10.0	26.0	53.5	37.0	完形	貝に孔が施されているだけで他に調整痕は見られない。アバタや水槽を受けていることから死貝を利用したものであろう。
12	第40図1	ゴホウラ	☆59.0	9.0	9.0	☆4.0	—	—	破損	表裏面ともいねいに研磨が施されている。
13	タ2	ゴホウラ	☆62.5	4.0	6.0	☆2.0	—	—	破損	他の製品と比べて細身に作られており、表裏面ともいねいに研磨が施されている。
14	タ3	ゴホウラ	☆84.0	5.5	9.5	☆7.0	—	—	破損	外側面には剥離が見られ、表面や内側面は研磨が施されている。
15	タ4	アツソデガイ(?)	☆65.0	5.0	6.0	☆5.0	—	—	破損	表面・両側面とともに研磨が施されている。
16	タ5	ゴホウラ	☆45.0	22.0	8.0	☆9.0	—	—	破損	鞍頂付近が残っており、平になっている。
17	タ6	ゴホウラ	☆48.0	23.0	6.0	☆12.0	—	—	破損	表面・裏面の凸部分、周縁は研磨が施されている。周縁には剥離も見られる。
18	タ7	ゴホウラ	☆48.0	15.0	8.0	☆7.0	—	—	破損	表面・裏面ともいねいに研磨が施されている。アバタが見られることから死貝を利用したものであろう。
19	タ8	ゴホウラ	☆72.5	12.0	9.0	☆26.0	—	—	破損	輪状を呈しているが、ひどく風化している上に、死貝を利用(アバタやヘビガイの付着により)し、調整痕が全く見られないことから概に製品と断定することはできない。
20	タ9	ゴホウラ	147.5	80.0	5.0	220.0	—	—	完形	背面・ゾテを除去し、腹面を利用しているが、本来の形を残している。アバタやヘビガイの付着が見られることから死貝を利用したものであろう。

(注)

1. ☆は残存部計測値。



第39図 貝輪(1)



第40図 貝輪(2)

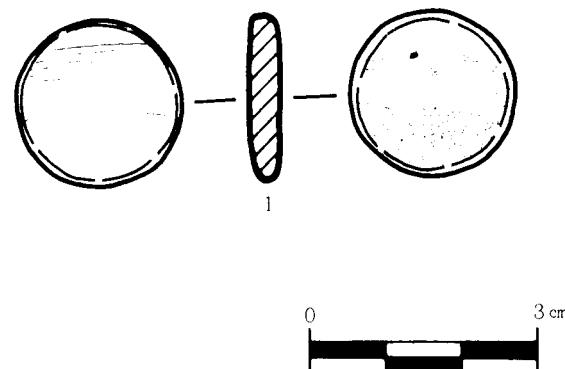
遊 具

①貝製碁石(第41図)

貝を円状に取り、碁石状に加工したものである。直径2.2cm、厚さ0.5cm、重量2 gを測る。

本資料は表採によって得られたことから近世の遺物と思われる。

用途不明品



第41図 貝製碁石

②イモガイ製品(第42図2・3)

2点の出土で、2はイモガイ螺塔部を利用しており、全体に丁寧な研磨調整が施されている。長径4.6cm、厚さ0.6cm、重量19 gを測る。3はイモガイの体層部を利用しており、右辺以外の縁は丁寧に研磨調整が施されていることから貝札の製作途中で放棄されたものと思われる。

③スイジガイ有孔品(第42図1)

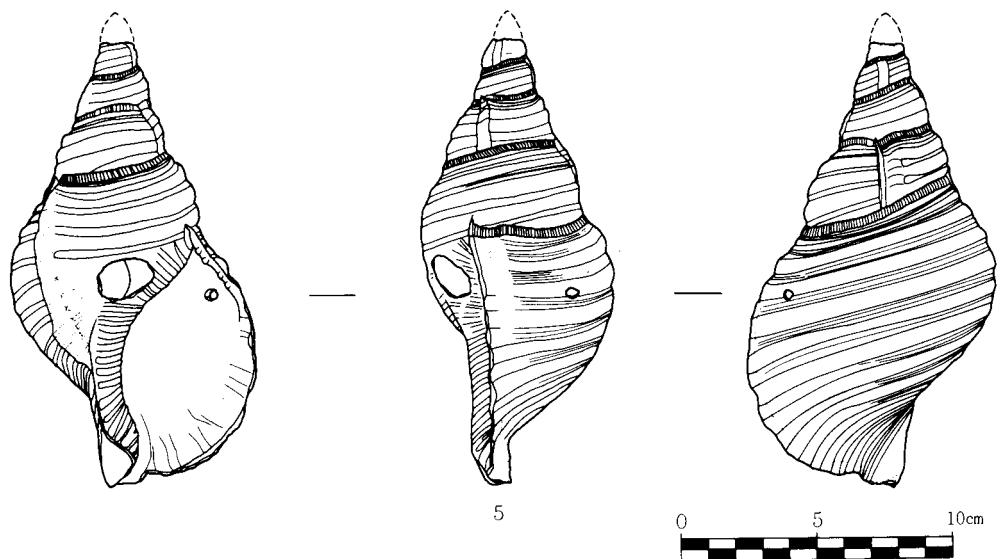
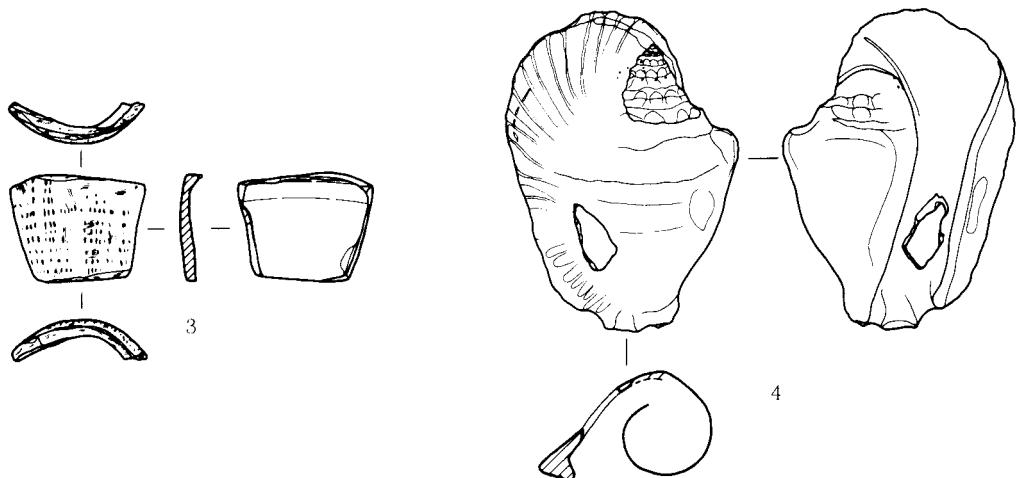
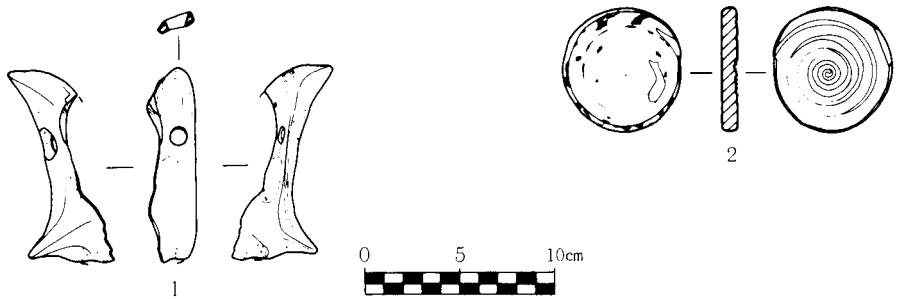
スイジガイの第1突起と第6突起部分(註3)を残すもので、その間には 0.7×0.7 cmの孔が穿たれているが、紐ズレ等の痕跡が認められることから自然孔の可能性もある。残存部の長さ7.7cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm、重量18 gを測る。

④ゴホウラ有孔品(第42図4)

本資料は、背面のソデ側に 3.6×2.7 cmの孔が施されているだけで、特に加工痕は見られない。殻高17cm、殻径11.7cm、重量392 gを測る。この種の製品は久米島清水貝塚(註4)、本部町具志堅貝塚(註5)等の貝塚時代後期に属する遺跡で出土しており、製品の素材として扱われている。本貝塚においてもゴホウラの集積が検出されており、製品作成のための素材であろう。図示はしなかったが、背面が切り取られ、切断面が平になっているものも出土している。その形状から、貝輪の製作途中のものであると思われる(図版9)。

⑤ホラガイ有孔品(第42図5)

本資料は殻頂が欠損しているもので、背面のソデ側に 0.5×0.8 cm、腹面に 2.7×3.1 cmの孔が施されている。残存部の殻高23cm、殻径10.4cm、重量230 gを測る。用途については煮沸用具として考えられているが、火を受けた痕跡が見られること、背面と腹面にそれぞれ1孔を有することから別の用途の可能性が考えられる。



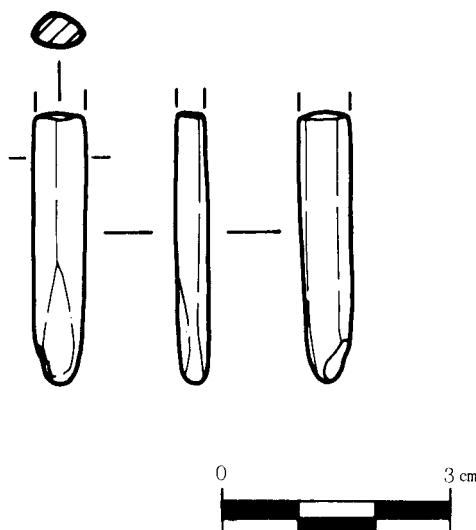
第42図 貝製品

4 骨製品

①尖頭状製品(第43図)

パイプウニ属の棘を利用するものである。表面は丸味を帯び、裏面は研磨が施され、平滑に仕上げられる。尖端付近では研磨痕と剥離が見られる。残存部の長さ3.6cm、幅0.7cm、厚さ4mm、重量2gを測る。

類例資料として時期は異なるが、仲泊貝塚(註6)で見られる。



第43図 尖頭状製品

註

1. 沖縄県具志川村教育委員会『清水貝塚発掘調査報告』「具志川村文化財調査報告書第1集」
1989年3月
2. 沖縄県教育委員会『カンドウ原遺跡－灌・排水工事に係る緊急発掘調査』「沖縄県文化財調査報告書第58集」1984年3月
3. 上原 静「いわゆる南島出土の貝製利器について(特にスイジガイ製利器とホラガイ系利器について)」『南島考古第7号』沖縄考古学会1981年12月
4. 1と同じ
5. 沖縄県本部町教育委員会『具志堅貝塚発掘調査報告』「本部町文化財調査報告書第3集」
1986年3月
6. 沖縄県恩納村教育委員会『仲泊遺跡 1975・1976年度発掘調査報告書』「恩納村文化財調査報告書第1集」1977年3月

5 陶磁器

嘉門貝塚A区では土器とともに大量の陶磁器類が出土した。各調査区における出土頻度については表-6において表示した。しかしながら、これらの陶磁器は他の遺物と同様に散布して検出されたものが多く、出土状況から遺構・遺物の組み合わせや年代などについて検討することはできない。

そこで、ここでは出土陶磁器の中から主なものを取り上げ、例示した上で、従来の研究動向を踏まえて検討を加えることにする。

表-7 陶磁器出土一覧

分類	陶 器						磁 器			合 計	
	沖縄産焼き締め陶器	沖縄産施釉陶器	ルリ釉	沖縄産軟質陶器	瓦	瓦質土器	青磁	白磁	染付		
個数	2061	1578	2	1696	256	1	66	12	197	274	6143

(1) 磁 器

①青磁(第44図1~10・図版44-1~10)

1~6は碗の破片であるが、3を除いてはすべて小片である。1は口縁部外面に雷文帯を施した破片である。内面にも笠彫りによる雷門状の施文がみられるが、小片のため全体の構成は不詳である。青磁釉は褐色に濁る。2は無文口縁部片で、復元口径17.0cmを測る。釉がやや青味がかった褐色を呈する。3は口縁部の3/4を欠くが、全形の知れる資料である。復元口径17.2cm・器高7.9cm・高台径6.4cmを測る。全面にやや緑がかった青磁釉が厚く施され、高台内のみを露胎にする。見込みに花文を印刻するが、釉が厚いため、形状は不明確である。高台露胎部には高台削りの際の工具痕が見られ、左回転のロクロで成形されたことが知れる。

4は高台部のみの破片で、現存部分には施文が見られない。復元高台径6.8cmを測る。やや緑がかった青磁釉を厚く全面に施した後、高台内の釉を輪状に剥ぎ取る。剥ぎ取りの際のロクロの回転は左回転であり、この部分に焼成の際に本資料を置いた台の痕跡がみられる。5は器表面がかなり劣化した高台部片である。高台径5.7cmを測り、現存部分に施文は見られない。器表面の劣化によって全体に黄変するが、本来の釉調は灰青色で、高台内には施釉しない。高台内の露胎部分には削り成形の痕跡が見られ、その際のロクロの回転方向は左回転である。6はやや小さい碗の底部片で、復元高台径4.1cmを測る。高台から胴部下半にかけてロクロ回転を利用した削り成形を行い、高台内を除いて施釉する。釉はやや褐色を呈し、現存部分に施文は見られない。

7は小破片のため、復元器形が不明確であるが、皿状の低平な器形となる資料である。あるいは蓋状のものかも知れない。現存部分に施文はなく、釉は緑がかった青色を呈する。8は皿

あるいは盤の底部片である。見込み内底部の釉下に浮き彫り状の印花が見られる。高台内を除いて緑青色釉が厚く施釉され、露胎の高台内では左回転のロクロ成形痕が観察される。

9は摺鉢の口縁破片である。口唇部から器外面にかけて褐色がかった青磁釉を施し、器内面は露胎とする。この露胎部分に5～6mmの間隔を開けて、櫛描線が描かれるが、現存部分からは櫛目数とその幅を観察することはできない。

②白磁(第44図10.11・図版44-10・11)

10は碗と考えられる底部片である。現存する高台部分は露胎で、径5.0cmを測る。見込み部分にのみ透明の釉薬が施され、灰白色に発色する。見込みの釉下には線描状に見える印花が観察される。高台は左回転のロクロを利用して削り成形される。11は盃片で、全体の1/3が残る。薄い素地の上から全体に透明釉を施したもので、乳灰色に発色する。復元口径4.2cm・器高2.4cmを測る。

③青花・染付磁器(第44図12～22・図版44-12～22)

12は器の外面にルリ釉、内面に透明釉を掛け分けたもので、小碗の口縁部片と考えられる。ルリ釉は薰したコバルト色に発色し、内面の透明釉に対してやや厚めに施釉される。また、掛け分けの口唇部は露胎となり、口銹状に発色する。復元口径10.8cm程である。

13・14は小碗で、13は口縁部、14は底部のみが残る。13は復元口径8.1cmを測り、口縁外面に輪状文を呉須描きする。14は復元高台径4.5cmを測り、高台部と胴部にロクロ回転を利用した線文を施す。

15～18は盃など小型の製品と考えられる破片である。15は底部のみの破片で、見込み内底部に線描きによる菊花状の文様を描き、これを上から同じ呉須でダミ塗りする。器外面は畳付部分を除いて、やや緑がかった青磁釉が施される。高台部復元径3.0cmを測る。16は口縁部外面と高台内に呉須による施文が見られる底部片である。小片のため、文様の内容は不詳である。呉須は鮮やかで、高台畠付部分を露胎にする。復元高台径3.0cmである。17は盃の1/5ほどの破片である。器外面に縦位の線文を呉須描きし、高台畠付部分のみを露胎にする。復元口径4.0cm・同器高2.2cmを測る。18は底部のみの小破片で、全体の器形は不詳である。畠付部分を削り調整によって露胎とし、器内面に呉須を用いた文様を描く。呉須の発色は鮮やかである。

19～22は碗である。19は口縁部のみの破片で、器外面に唐草文の一部である花文部分の図柄が呉須描きされる。20は底部1/4の破片で、復元高台径7.8cmを測る。高台畠付部分を露胎とし、口縁部内外面および高台内にそれぞれ縁文、ロクロ回転を利用した線文、抽象化されて内容不詳の文様などを呉須描きする。21も底部のみの破片で、復元高台径7.6cmを測る。高台畠付部の釉はきれいに剥ぎ取られ、露胎となる。胴部外面の高台近くに粗い蓮弁文が描かれる他、器内外面および高台内にロクロ回転を利用した線文が呉須描きされる。呉須の発色は良好である。22もやはり底部のみの破片である。復元高台径8.0cmを測る。高台畠付部分および見込み内底部は輪状に露胎となるが、これは釉剥ぎ取りによるものではなく、掛け分けの方法によるもの

である。現存部分に呉須描き文様はないが、製作技法や器形などが19~21と共通することからこの類に含めた。見込み内底部には焼成の際、重ね積みして窯詰めした痕跡が明瞭に残る。

(2) 陶器

① 沖縄産施釉陶器(上焼)(第45図・図版45)

1~10はいわゆるマカイ(碗)である。この中で、1~6は素地土で成形した碗の底部を手に持って釉薬を口縁部内外面のみに直掛けする「フィガケ」技法を用いた灰釉碗の類である。1は口縁部のみの破片で復元口径14.4cmを測る。素地は焼き締まり、灰褐色を呈する。灰釉は褐色に発色し、器外面ではやや厚く掛けられた釉が流れて文様状になっている。2は底部3/4の破片で、高台径6.2cmを測る。磁器に近く焼き締まり、素地は青灰色、灰釉はやや緑がかった褐色を呈する。高台から胴部外面にかけてロクロ回転を利用した削り成形が見られ、ロクロの回転方向は左回転である。3も底部1/2の破片である。復元高台径6.7cmを測る。2と同様に焼き締りも良く、素地は灰褐色、灰釉はやや緑がかった褐色を呈する。高台部から胴部下半にかけて、左回りのロクロ回転を利用した削り成形が見られることも2と同様である。4は底部が完全に残る資料で、高台径6.6cmを測る。焼き締りが良く、露胎部は青灰色、灰釉は褐色に発色する。底部周辺は左回りのロクロ回転を利用して削り成形され、高台脛付部分には砂粒が大量に付着する。5は底部1/2の破片である。やはり良く焼き締まっており、素地は褐色、灰釉は緑がかった灰色を呈する。高台復元径は6.4cmで、高台脛付および見込み内底部に窯詰めの際の重ね積み痕跡が残る。

6は1~5と同様にフィガケの技法によって口縁部に釉掛けする碗であるが、掛けられる釉が鉄釉であることと、見込み内底部を薄い鉄釉薬で蛇の目状に塗り込める点に違いが見られる。底部1/3ほどの破片であり、復元高台径6.0cmを測る。素地はやや焼き締りが甘いためか橙白色を呈するが、鉄釉は充分に溶け褐色に発色する。高台周辺に左回転を利用した削り成形が見られる。

7~10は素地に白土を化粧掛けし、その上から透明釉をかける技法で製作された碗である。7は口縁部3/4ほど欠く破片で、復元口径13.6cm・器高7.0cm・高台径5.7cmを測る。器外面の三方にコバルト呉須と鉄釉で蓮華文を抽象化したと考えられる絵付けを施す。見込み内底部に透明釉を剥ぎ取った蛇の目釉剥ぎ、高台脣付に釉剥ぎの後、耐火度の高い白土を塗布する。見込みの蛇の目釉剥ぎ部分に窯詰めの際の重ね積み痕跡が残る。焼成・化粧土の定着・釉薬の発色などすべて良好である。8は底部のみ1/2の破片である。復元高台径5.8cmを測る。現存部分に絵付けは認められず、見込みに蛇の目釉剥ぎと窯詰めの際の重ね積み痕跡、高台脣付部分の釉剥ぎと耐火土の塗布が見られる。7と同様に焼成・化粧土の定着など良好である。9も底部のみ1/2の破片である。高台径7.0cmを測る。やはり現存部分に絵付けは見られず、見込みに蛇の目釉剥ぎと高台脣付部の釉剥ぎ取りが認められる。やや焼成が甘いため、白化粧土は定着しているものの透明釉は黄変気味となり、素地は赤橙色を呈する。10は底部1/4の破片で、

復元高台径7.3cmを測る。現存部分に絵付けは見られない。見込みに蛇の目釉剥ぎと窯詰めの際の重ね積み痕跡、高台畳付部の釉剥ぎと耐火土塗布が見られる。焼成・化粧土の定着など良好であるが、化粧土に貫入が見られる。

11～14は小碗である。11は口縁の一部を除いてほぼ全形が知れる。口径7.8cm・器高3.9cm・高台径3.6cmを測り、焼成・化粧土の定着なども良好である。見込みに蛇の目釉剥ぎと窯詰めの際に重ね積みされた製品の高台の一部が溶着した状態が観察される。また、高台の畳付部分には釉剥ぎと耐火土の塗布が見られるが、やはり高台の一部が溶着して折れている。12は底部のみの破片である。高台径4.0cmを測る。見込みに蛇の目釉剥ぎ、高台畳付部に釉剥ぎと耐火土の塗布が見られる。焼成がやや甘く、化粧土の上から掛けられた透明釉にも定着ムラが見られる。13も底部1/3の破片である。復元高台径4.0cmである。11・12と同様に器内面には白化粧土を塗布し、透明釉を掛けるが、器外面には素地の上に直接飴釉を掛け、内外面掛け分けを行っている点が異なる。見込みに蛇の目釉剥ぎ、高台畳付部に釉剥ぎと耐火土の塗布が見られる。焼成・化粧土と飴釉の定着なども良好である。14は口縁部外面を多角形に面取りした角碗の底部片である。口縁部がほとんど欠損しているため詳細は不詳であるが、16面体前後の面取りが行われていたものと考えられる。見込みに蛇の目釉剥ぎ、高台畳付部に釉剥ぎと耐火土の塗布が見られる。焼成は良好であるが、白化粧土と耐火土の塗布がやや粗くムラがある。高台径3.6cmを測る。

15・16は袋物の底部破片である。15は1/8ほどの破片で、復元底径5.3cmとなる。底部は高台内の削り出しを行わず、なだらかな上げ底状に仕上げる。器外面に黒色に発色する釉薬を直掛けし、器内面は無釉である。焼成は良好であるが、黒色釉薬は鈍く光沢がない。16は1/4の破片で、復元底径は6.0cmである。削り出し成形によって碁笥底状に仕上げた底部はきわめて薄い。器内面および底部内面は無釉、器外面に飴釉を施す。焼成は良好であるが、飴釉の発色は表面に光沢がない。

17は香炉の口縁部と考えられる破片で、1/3ほどが現存する。復元口径10.0cmで筒形の器形を呈すると考えられる。素地の器内外面に白化粧土を掛け、さらに器外面では口唇部にコバルト呉須を掛けた上から全面に透明釉を掛けている。口唇端部が細かく欠けていることを除けば焼成・釉薬の発色など良好である。

18・19は瓶子の口唇部および肩部破片である。18は口径4.8cmで、現存部器高3.0cm余りである。細めの頸部からロート状に口唇部が開く。器内外面に化粧土掛けした後、口唇内面にのみコバルト呉須を掛け、全体を透明釉で覆っている。焼成・釉薬の発色など良好である。19は復元最大径10.2cmを測る。器外面肩部に放射状の沈線を入れ、その上から鉄釉を直に流し掛けする。このため鉄釉は斑に発色し、文様状となる。器内面は無釉である。焼成・釉薬の発色ともに良好である。

20～23は蓋である。20は1/2の破片で、復元最大径5.6cmである。現存部高2.1cmである。やや小型の器形で、蓋の上面にのみ透明に近い灰釉を掛け、その他は露胎に作る。蓋上面の灰釉下にはスタンプによる印刻を施し、ここに灰釉が溜って緑灰色に発色する。つまみ部分が欠けているが、その横に径5mmほどの通気孔が開けられる。素地土は白土を選んだものと考えられ、

焼成・灰釉の発色も良好で、一見磁器状を呈する。21は茶家類の蓋と考えられ、つまみ部分を欠くものの1/2が残る。復元最大径8.8cm・現存部高2.3cmである。成形した素地の上に化粧土を掛け、蓋上面のみに線彫りで六区に文様帯を区切り、鉄釉と呉須を注した後、透明釉掛けする。鉄釉と呉須は本来線彫り部分に注するものであった考えられるが、滲んで広がっているものの発色は良好である。化粧土の定着・焼成も良好である。22・23も蓋の破片であるが、20・21に比べて素地土を成形した後、蓋の上面だけに鉄釉を直掛けし、さらに一部を蛇の目状に剥ぎ取っている。焼成は良好であるが、鉄釉がやや鈍く発色する。23は蓋上面に膨らみを持つ形態のもので、1/6ほどの破片である。復元最大径11.4cm・現存部高2.4cmである。素地土を成形した後、蓋の上面に飴釉を直掛けし、その他は露胎とする。焼成・釉薬の発色とも良好である。

24・25は茶家あるいはカラカラの底部片である。24は1/4ほどの破片で、復元底径6.4cmである。白土で成形した素地の内面に透明釉、外面にコバルト釉を掛け、底部は露胎に作る。焼成・釉薬の発色とも良好である。25も白土で成形した素地の内外面に透明釉を掛けたもので、底部周辺は露胎に作る。1/2ほどの破片であり、復元底径6.0cmを測り、底部三方に突起状の支脚が付けられる。焼成・透明釉の定着も良好である。

26・27は低平な皿状の底部破片である。26は1/6ほどの破片で、復元高台径8.4cmを測る。成形した素地に白化粧土を塗り、その上に透明釉を掛けたもので、現存部分に絵付けは見られない。見込みに蛇の目釉剥ぎ、高台畳付に釉剥ぎと耐火土の塗布が見られる。焼成などは良好である。27は高台部がほぼ残った破片で、高台径6.0cmを測る。素地を成形した後、飴釉を直掛けしたもので、飴釉は現存部では高台を除く器外面にのみ認められる。焼成がやや甘く、素地は赤褐色を呈し、飴釉は鈍く発色する。

28は高台1/6ほどが残る破片で、壺などの底部と考えられる。復元高台径10.0cm・現存部復元最大径17.4cmであることから、胴部最大径20cmほどの製品と考えられる。成形した素地に飴釉を直掛けするもので、現存部分では高台部を除く器外面に施釉が見られ、一部には施釉の際に釉薬が指先に付いて流れた状況が確認される。焼成・釉の発色とともに良好で、素地は茶褐色・釉は褐色を呈する。

②沖縄産軟質陶器(サーク)(第46図1～3・図版46-1～3)

1～3は火力による煮炊きや炭火の使用に際して用いられた製品である。

1・3はともに土鍋と考えられる。1は胴部1/3ほどの破片で、復元口径15.8cm・現存部高11.7cm・胴最大径16.6cmである。外反する口縁部と胴部最大径がほぼ等しい。全体に器壁が薄く、最厚部で5mm・最薄部では2mmほどとなる。素地土は白色で粒子が細かく、器外面上半部と器内面の口縁部くびれ部分と胴部下半部に飴釉が直掛けされる。釉薬は良好に発色し、器底部には使用の際のものと考えられる煤が付着する。2は口縁部1/8ほどの破片で、復元口径16.2cmである。1と同様に器壁が薄く、最厚部で5mmほどである。現存部器外面に飴釉を

掛け、内面は露胎とするが、口唇部のみに耐火土を塗布する。焼成・釉薬の発色とともに良好である。3は現存部分から全形を知ることはできないが、火種の保存のための火取(ヒートウイ)などの口縁部破片と考えられる。復元口径24.0cmほどの筒型容器の内側に突起を作り出したもので、現存部分では突起の裏側を除いて全面に飴釉が直掛けされる。素地土はやや白っぽいが、火に接したと考えられる突起裏は赤く変化している。

③沖縄産焼き締め陶器(荒焼)(第46図4～13・図版46-4～13)

4～11は摺鉢の破片である。4は口縁部の小片で、縁部5cmほどが現存する。したがって、口径の復元は難しいが、およそ28cmほどと考えられる。胴部から口縁部を水平に折り曲げ、口縁部の下に指ナデによる凹帯を造る。このため凹帯下は三角凸帯状に隆起して見える。器内面の口唇部よりやや下がった位置に間隔を置いた櫛目が施されるが、現存部からは櫛目の幅や単位などは不詳である。焼成は良好で赤橙色を呈し、器外面には焼成時に窯内に置かれた石灰の作用と考えられる自然釉が付着する。5も口縁部小片で、縁部6cmほどの破片である。本例も口径復元に難があるが、およそ27cmほどと考えられる。胴部から折り曲げられた口唇部はやや下部へ垂れ気味となり、口縁下の突帯は不明瞭な稜となる。内面の櫛目は12本を一単位とし、幅1.8cmを測る。櫛目と櫛目の間には口縁近くで5～7mmほどの間隔が開けられる。焼成は良好で、赤褐色を呈する。6も縁部4cmほどの破片である。復元口径はおよそ30cmとなる。口縁部の折り返しは小さく、口縁下の突帯もロクロ成形時の水挽き痕と区別がつかない。内面の櫛目は間断なく連続して施される。焼成良好で、赤褐色を呈する。7も縁部4cmほどの小片で、口径はおよそ30cmほどになるとと考えられる。5と同様に口唇端部がやや垂れ気味となり、口縁下の突帯はほとんど痕跡のみとなる。内面の櫛目は現存部分から細かく観察できない。焼成は良好で、黒褐色を呈する。8は口縁部を鍔状に広く作るもので、縁部10cmほどの破片である。胴部はやや膨らみを持ち、内面の櫛目は間断なく、丁寧に施される。焼成は良好で、器外面に自然釉が付着し、内面は赤褐色を呈する。

9は底部破片で、復元底径9cmである。底部外面にヘラ状工具による削り調整痕、内面に間断なく施された櫛目痕が見られる。焼成良好で、外面褐色、内面赤褐色を呈する。10は復元底径10cmほどの底部破片で、底部外面にヘラ状工具による削り調整痕、底部から立ち上がる胴部に叩き調整痕が見られる。内面の櫛目は間断なく施され、観察される櫛目は一単位10本で、幅2cmあまりである。焼成は良好で、外面暗褐色、内面小豆色を呈する。11も復元底径13.5cmほどの底部片で、内面に間断のない櫛目、底部外面から胴部にかけてヘラ状工具による削り調整痕が見られる。内面黒褐色、外面赤褐色を呈する。

12は高台を持つ底部1/3の破片であり、復元高台径9.4cmを測る。壺もしくは鉢などの器形に復元できるものと考えられるが、現存部のみでは不詳である。本来、高台部から胴部にかけて白色土によってロクロ回転を利用した線文が施されており、一部にその痕跡が残っている。

ただし、この白色線の上から釉薬を掛けた形跡はなく、白線を含めて素焼きの状態で用いられていたと考えられる。内外面ともナデ調整によって仕上げられ、一部高台内に左回転のロクロを利用した削りの痕跡が見られる。焼成はやや甘く、内外面とも赤橙色を呈する。13は底部1/2の破片で、底径12cmを測る。底部から胴部へ緩やかに立ち上がる甕や壺などの破片と考えられる。底部外面にヘラ状工具による削り調整、内面にロクロ回転を利用したナデ調整痕が確認される。焼成も良好で、内外面とも赤橙色を呈する。

(3) 小結

本遺跡で検出された陶磁器類は前述のように青磁・白磁・青花(染付)など沖縄以外の地から搬入された磁器類と上焼・荒焼・軟質陶器(サーク)などの沖縄で生産された陶器類があった。この中で沖縄以外から搬入された磁器の青磁・白磁は主に15・16世紀に位置付けられるものと考えられるが、青花(染付)類は大半が中国清代の所産と考えられ、17~20世紀代のものが多く含まれている。

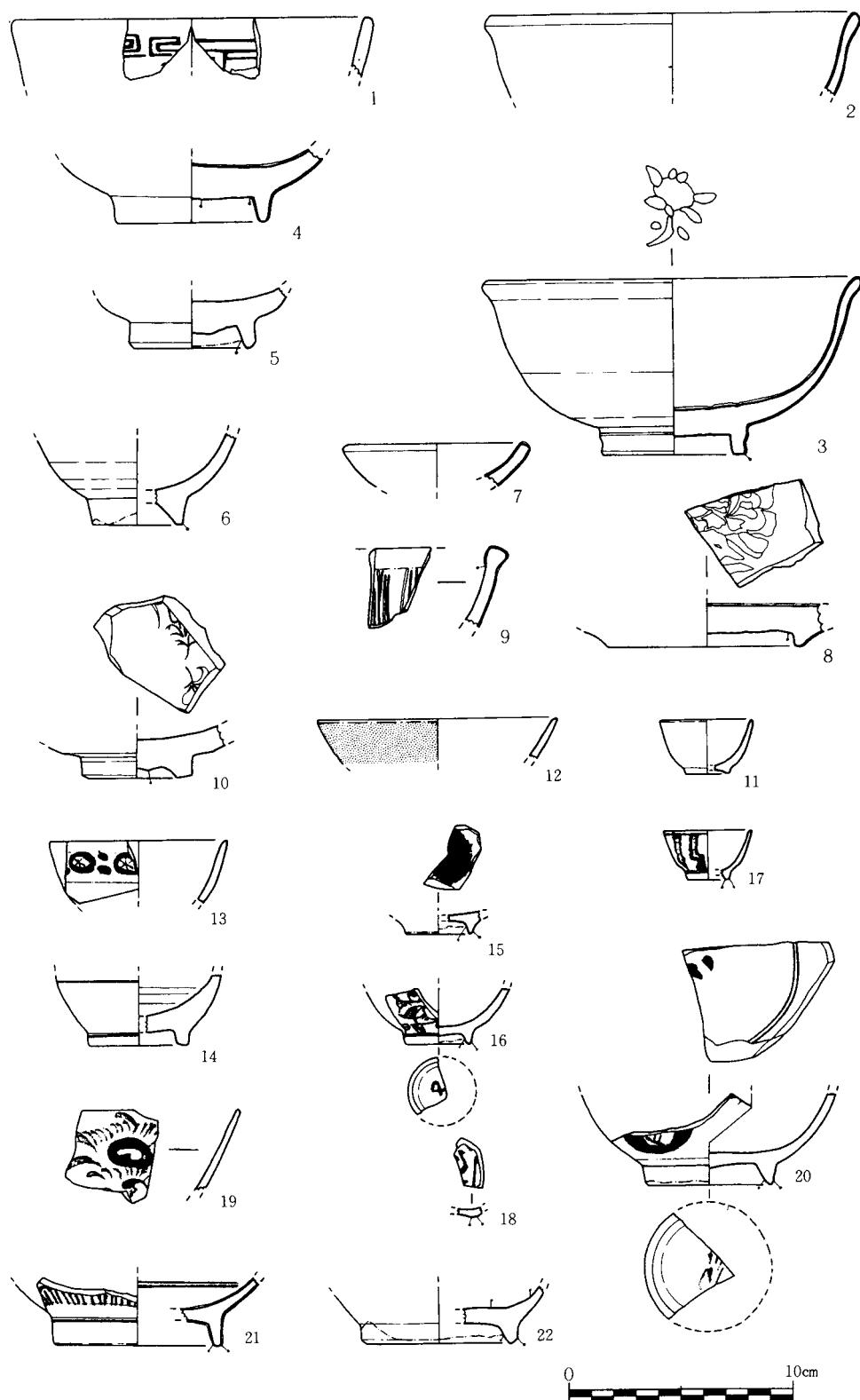
また、上焼・荒焼・軟質陶器などの沖縄産陶器は文献記録の上からは17世紀から生産が開始され、現在でも壺屋焼として存続しているものである。この約400年の長きに及ぶ沖縄産陶器については、現在、文献記録と各窯跡からの採集資料との検討をはじめとして、摺鉢や灰釉碗などの個々の器種を対象とした、編年的研究などが行われている。しかしながら、窯の構造やその製品の組合せとその変遷などの総合的な検討作業はまだまだ確立していない。そこで、手掛かりがある摺鉢や灰釉碗の研究動向などを踏まえて本遺跡の資料を見れば、まず摺鉢では安里氏編年^①のⅡ(第46図4)・Ⅲ(同図5~7)・Ⅳ(同図8)類があり、17~19世紀の間に間断なく位置付けられるものが検出されている。また、灰釉碗をはじめとする碗類には17世紀に位置付けられる知念氏編年^②の灰釉碗Ⅰ・Ⅱ類(第45図1~5)、Ⅲ類(同図6)から、近代以降に導入されたコバルト呉須を釉薬として用いたもの(第45図7)までが見られる。このコバルト呉須を用いた資料は碗以外の器種(第45図17・18・24)にもあり、これらの沖縄産陶器も製作年代の上でかなりの時間的幅が見られることが観取される。

これらのことからすれば、本遺跡で検出された陶磁器類は中・近世の資料が混在していたこととなる。したがって、文頭にも述べたが、これらの遺物と遺構との関係が明らかでない現状では、これらの陶磁器の年代幅はそのまま本遺跡の大まかな年代幅を示すものと考えられる。

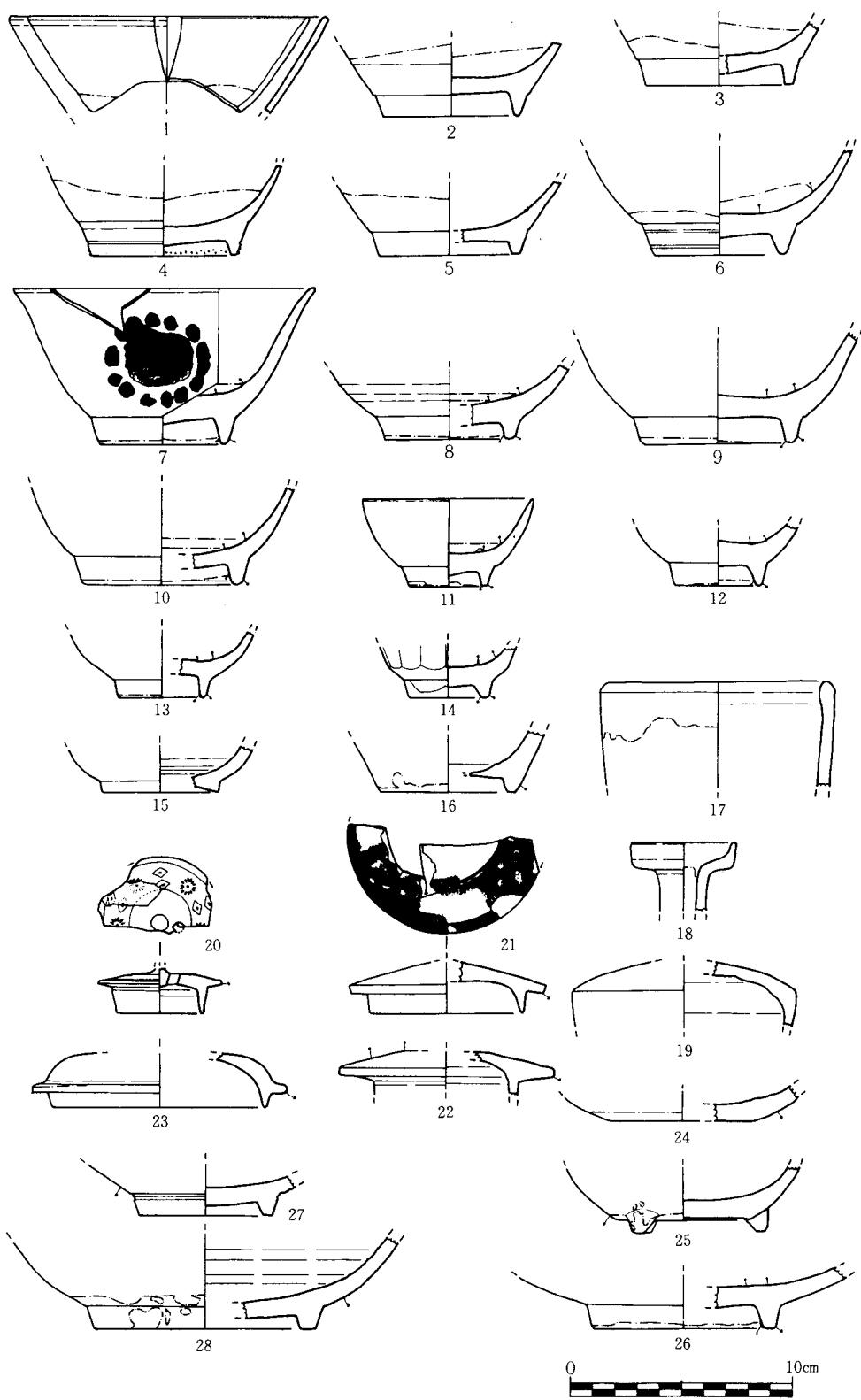
(註)

①安里 進他「摺鉢編年からみた沖縄近世陶器窯」『名護市立博物館紀要』3 1987.3

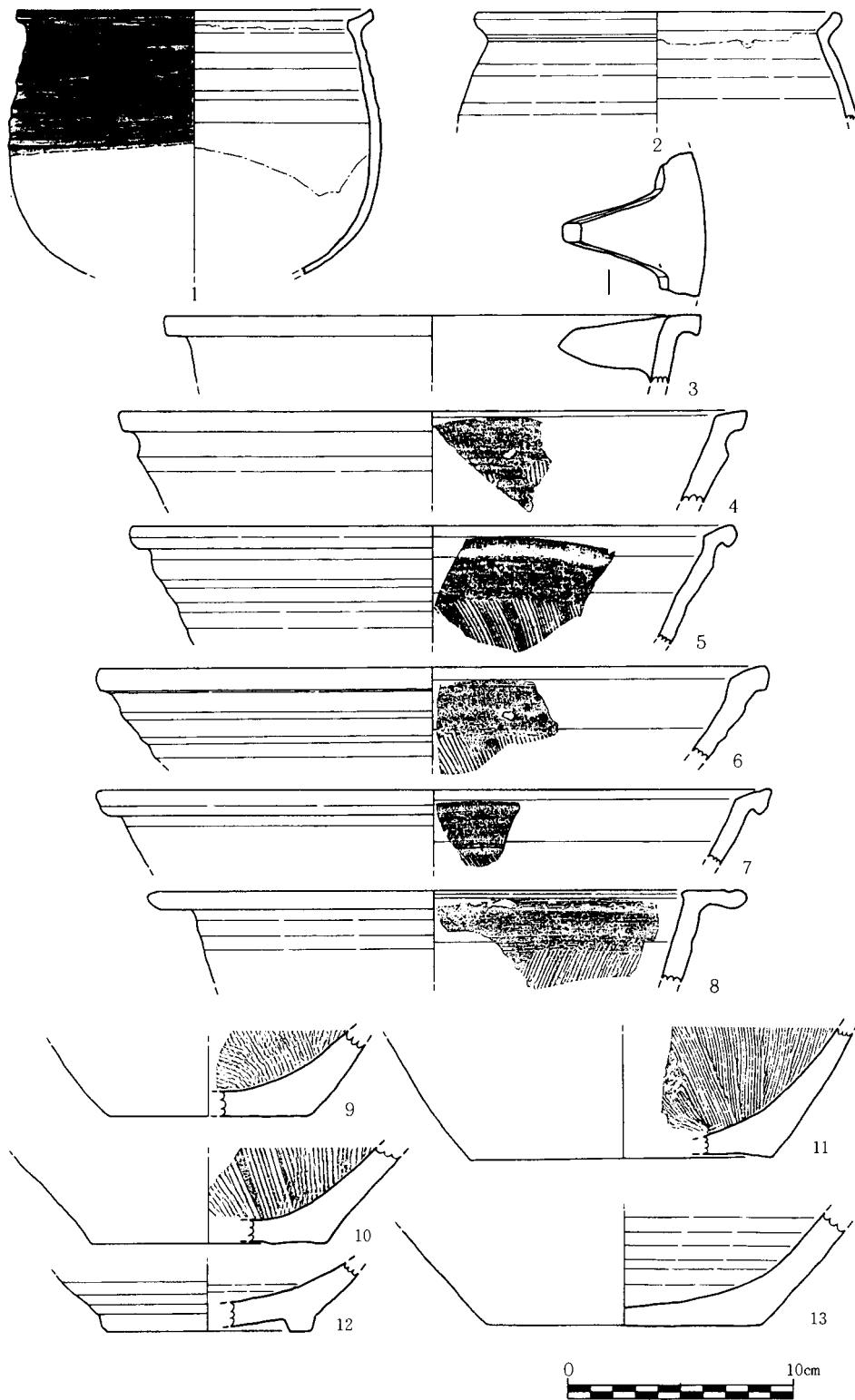
②知念 勇他「灰釉碗からみた沖縄近世陶器窯の編年」『沖縄県立博物館紀要』14 1988.3



第44図 陶磁器



第45図 陶磁器



第46図 陶磁器

6 土製品

本製品は、上下部分を欠損するが、平面形は橢円形杓状、横断面は「U」の字状を呈する。

内面には、縦走する指ナデ状の整形痕が2条認められ、面の整形もやや丁寧である。前述の内面に比較すると、外面の作りはやや雑である。縁部分は、丸く整形する。大きさは、長さ6.9cm、幅5.2cm、厚さ2.9cmを測る。本製品は、すでに報告されている貝製杓子状製品(註1)あるいは、土製匙(註2)に近似すると思われる資料であるが判然としない。

(註) 1. 沖縄県具志川村教育委員会『清水貝塚発掘報告書』1989年3月

2. 沖縄県伊江村教育委員会『伊江島ナガラ原西貝塚緊急発掘調査報告書』1979年3月

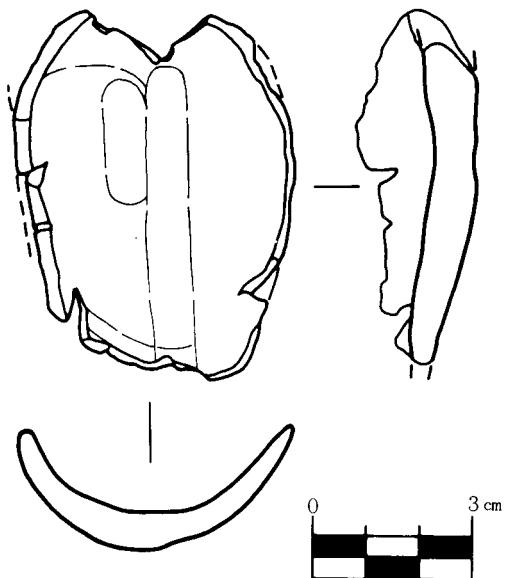
7 古 錢

て-18グリッド表土層より南宋の嘉熙重寶(初鑄造1234年)が1点採集された。同種の古銭は浦添城跡(註1)においても得られている。

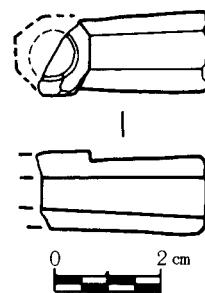
(註) 1 当真嗣一他『浦添城跡発掘調査報告書』浦添市文化財調査報告書第9集 1985年3月
浦添市教育委員会

8 雁 首

第48図に示す陶器製の膺首が1点得られている。こ-18グリッド第Ⅱ層の出土。



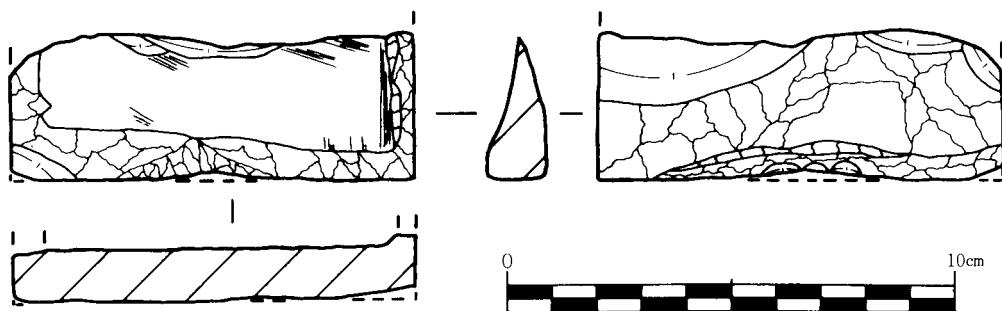
第47図 土製品



第48図 雁首

9 琥

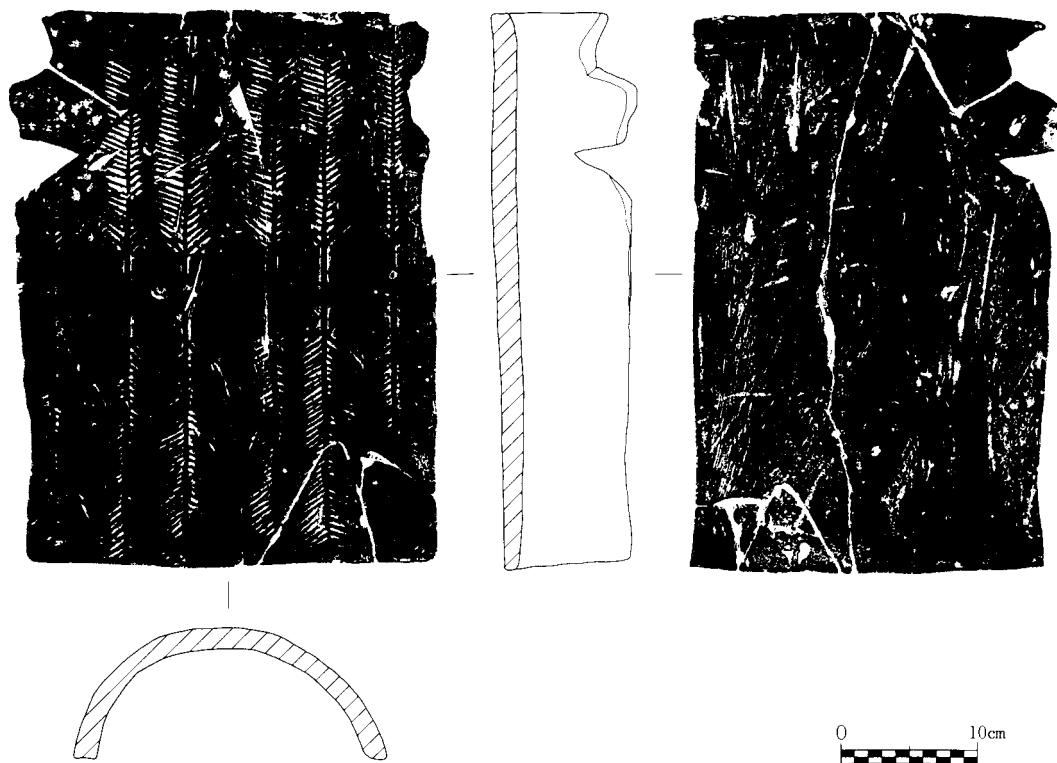
第49図に図示する琥池部の破片が1点得られている。表採資料で、黒色片岩製。



第49図 琥

10 古 瓦(第50図)

高麗系丸瓦が1点得られている。ほぼ完形で全形を窺える資料で、外面には「大天」在銘の有軸羽状の叩き目がみられる。内面には模骨に巻き付ける布目痕と微砂粒が付着し、右側縁には棒状痕が認められる。また、両面に粘土板から切り取る際の糸切り痕を残し、特に凹面は顕著である。側面は2分割する際の切除痕がみられ、右側面は調整され僅かにその痕跡を残す。法量は長さ41.1cm・幅21.3cm・厚さ約1.80cm、重量は現存で3.05kgを測る。調査区南西部のテストピットNo. 1(そー9グリッド)の白砂層直上より出土。



第50図 古瓦

11 円盤状製品(第51図、表一8)

陶器、瓦、磁器等の体部あるいは底部を打割することにより円形あるいは略円形(多角形)に仕上げる二次加工製品である。本種製品の用途については石蹴り、かわら運び、おはじき等の遊戯具として推定されている(註1)。

今回の調査では71点の円盤状製品が採集され、素材でみると沖縄産陶器(瓦を含む)と近世磁器の2類に大別され、前者は67点、後者は4点である。多くは表採資料である。

素 材

沖縄産陶器製と近世磁器製の2類に大別される。沖縄産陶器は粘土、製作技法、焼成温度等の相違から次の4種に細分される。(1)無釉焼き締めの荒焼、(2)釉薬が施され高温で焼成される上焼、(3)無釉低温度焼成のアカムヌーと称される淡橙色の軟質陶器、(4)瓦の4種で、出土量は荒焼製が56点と最も多く、次いで瓦製6点、軟質陶器3点、上焼2点である。荒焼が多用される理由としては①日常使用され素材として比較的入手しやすい、②荒焼自体が比較的大型で、湾曲の度合いが弱いこと、③上焼や磁器に比べ打割調整等の加工が容易であること等があげられる。

使用部位

荒焼では体部54点、底部2点、上焼は体部と底部の各1点、軟質陶器は体部3点で、体部使用例が圧倒的に多く、口縁部を使用するものはない。体部使用が他の素材に比して優越する理由としては、円盤状製品自体が陶器等の破損品の再利用と考えられることから体部資料が多く入手できる、器厚が他の部位に比べて薄く、湾曲していることから打割調整が容易である。瓦製の資料については内外面ともほぼ平坦な平瓦が素材として使用される。

大きさ

最小は近世磁器製で縦1.65cm、横1.40cm、器厚0.35cm、重量2gで、最大は荒焼製で縦6.30cm、横6.05cm、厚さ1.15cm、重量66gである。素材別にみてみると荒焼製、瓦製は縦及び横とも3.01~4.00cmに仕上げるものが多い。近世磁器底部製の円盤状製品は素材入手の段階で、大きさが決定されるが、3点とも3.01~4.00cmの範囲に納まるものである。軟質陶器は3点とも縦と横の長さが2.51~3.00cmに整形される。

整 形

打割によるものが一般的であるが、打割後研磨を施すものもある。前者は①外面からの打割に終始するもの、②外面から打割を行ない、細部調整で内面から打割を加えるものがある。近世磁器底部製の円盤状製品は高台脇から打割調整される。底部資料では第51図8の上焼底部のように高台部を除去するものもある。打割後、周縁部に研磨を施すものは、瓦製(4点)の資料にみられ、他の資料には確認されなかった。瓦を素材とする円盤状製品に研磨調整がみられるのは上焼製、荒焼製、磁器製に比して素材自体が脆く、研磨を施しやすいのであろう。

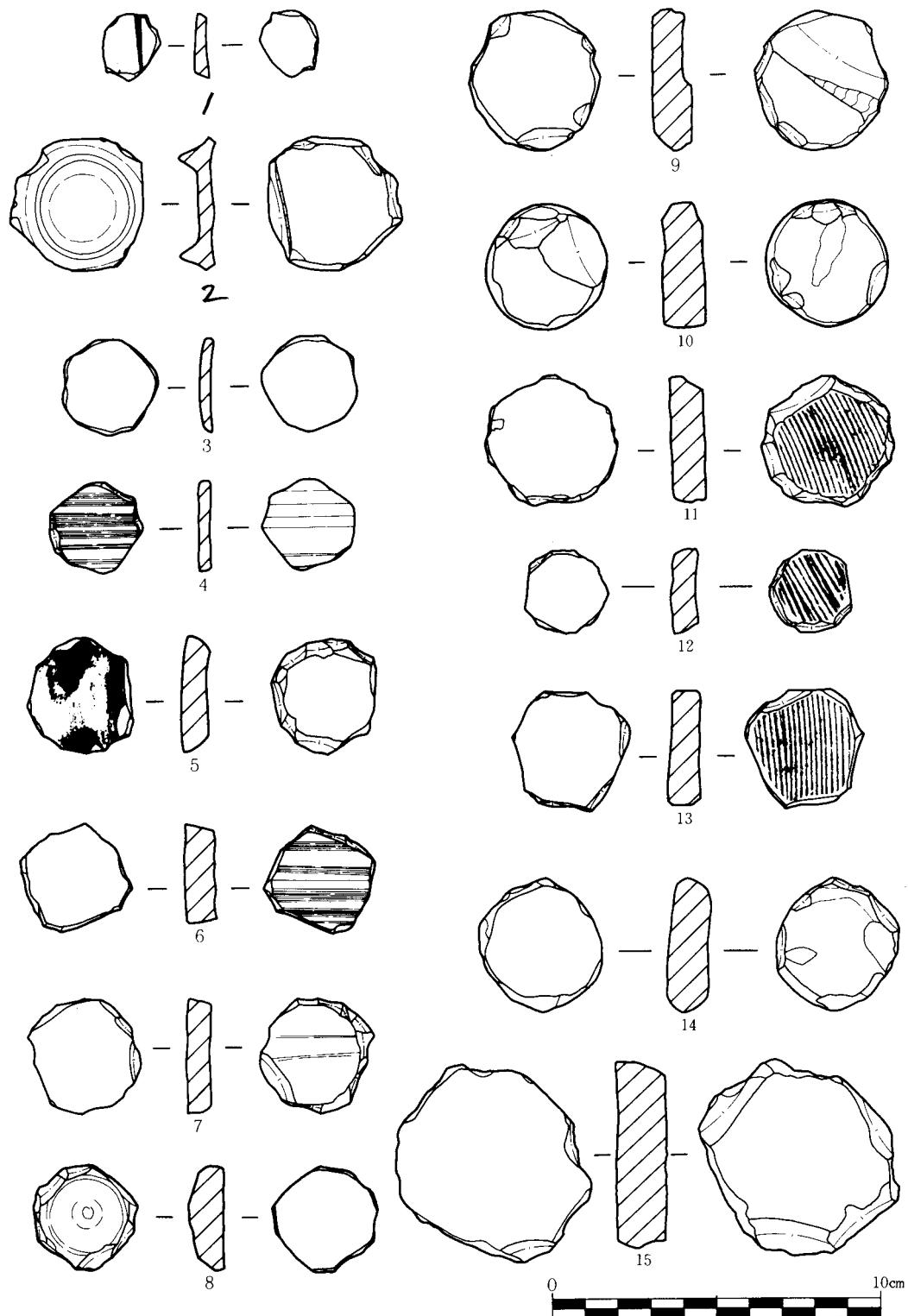
(註1) 上原 静「ゲスク時代・近世出土の円盤状製品」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第

表一8 円盤状製品観察一覧表

単位 mm/g

No.	出土地点	層位	素材	縦	横	厚さ	重量	備考
1	不 明	表採	荒焼体部	5.90	6.00	1.40	84.0	打割は外面より。表面の側縁に研磨痕あり。
2	Bトレンチ	夕	夕	4.80	5.40	1.40	57.0	打割は外面より。横楕円形をなす。
3	こ - 17	Ⅲ	夕	4.90	4.70	1.20	48.0	打割は外面より。六角形をなす。
4	不 明	表採	夕	5.50	5.35	0.95	46.0	打割は主に内面より。
5	Aトレンチ	夕	夕	4.20	3.90	0.95	30.0	打割は主に外面より。
6	不 明	夕	夕	4.20	3.90	0.90	26.0	打割は外面より。
7	O - 3	I	夕	3.80	3.60	1.00	22.0	打割は内外面より。方形状をなす。
8	A - 3	表採	夕	3.70	3.50	1.15	28.0	打割は主に外面より。
9	O - 3	I	夕	3.00	3.60	1.25	21.0	打割は外面より。
10	夕	表採	夕	4.35	4.45	1.30	43.0	打割は外面より。
11	Bトレンチ	I	夕	3.90	4.65	0.90	26.0	打割は内外面より。壺の肩部使用か。
12	4トレンチ	表採	夕	4.20	4.25	0.70	22.0	打割は主に外面より。
13	Aトレンチ	夕	夕	4.10	3.75	0.80	22.0	打割は内外面より。円形状をなす。
14	Aトレンチ	夕	夕	3.50	3.70	1.10	26.0	打割は主に内面より。円形状をなす。
15	Dトレンチ	夕	夕	3.65	3.85	0.85	22.0	打割は外面より。
16	Eトレンチ	I	夕	3.60	3.60	1.20	27.0	打割は内外面より。
17	Aトレンチ	表採	夕	3.30	3.20	1.10	15.0	打割は主に内面より。
18	こ - 18	Ⅱ	夕	2.85	3.00	1.20	20.0	打割は細かく外面より。円形状をなす。
19	つ - 11	IV	夕	3.40	3.45	1.20	23.0	打割は内外面より。円形状をなす。
20	グリッド不	表採	夕	3.50	3.10	0.90	15.0	壺の肩部使用。打割は主に外面より。
21	Bトレンチ	夕	夕	3.00	3.65	1.25	24.0	打割は外面より。
22	不 明	夕	夕	2.20	2.40	0.85	10.0	打割は主に外面より。
23	Bトレンチ	夕	夕	2.95	2.90	0.95	16.0	細かい打割を外面より。円形状をなす。
24	不 明	夕	夕	3.65	3.05	6.00	11.0	壺の体部使用。打割は外面より。
25	O - 2	夕	夕	3.20	2.70	1.05	17.0	打割は主に外面より。
26	Bトレンチ	夕	夕	3.20	2.95	0.70	13.0	外面より打割。円形状をなす。
27	2トレンチ	夕	夕	6.30	6.05	1.15	66.0	外面から細かい打割調整。
28	O - 2	I	夕	5.40	4.35	1.15	40.0	打割は外面より。縦楕円形。
29	夕	I	夕	4.80	3.90	0.90	28.0	比較的胴径の大きい荒焼を使用。打割は外面より。
30	不 明	表採	夕	4.60	4.20	0.90	28.0	外面より打割。
31	不 明	夕	夕	3.50	4.10	1.00	30.0	胴径の大きい荒焼を使用。打割は外面より。
32	O - 2	夕	夕	3.90	3.80	1.20	30.0	打割は主に外面より。円形状をなす。
33	夕	I	夕	4.00	4.25	0.95	23.0	打割は主に内面より。周辺部に研磨痕有り。
34	O - 3	夕	夕	3.50	3.70	1.20	30.0	比較的大型の荒焼を使用。打割は主に外面から。
35	O - 2	夕	夕	3.30	3.35	1.30	25.0	内外面より打割。

No.	出土地点	層位	素 材	縦	横	厚さ	重量	備 考
36	不 明	表採	々	2.95	3.00	0.85	13.0	打割は主に内面よりなされ、円形状をなす。
37	Aトレンチ	々	々	4.25	3.10	1.00	19.0	主に外面より打割。縦楕円形。
38	Bトレンチ	々	々	3.70	3.20	1.00	21.0	内外面より打割。方形状をなす。
39	O - 2	I	々	3.15	2.95	0.90	14.0	主に内面より細かい打割。円形状をなす。
40	不 明	表採	々(スリ鉢)	4.80	4.65	0.95	35.0	擂鉢体部使用。打割は外面より行なう。
41	Bトレンチ	々	々(スリ鉢)	3.85	4.00	0.70	24.0	擂鉢の体部使用。打割は主に外面より。
42	つ - 11	IV	々(スリ鉢)	3.70	4.00	0.70	22.0	擂鉢体部使用。外面より打割。
43	O - 2	I	々(スリ鉢)	3.50	3.35	0.50	16.0	擂鉢体部使用。主に外面より打割。
44	Bトレンチ	表採	々(スリ鉢)	3.55	3.20	0.80	18.0	擂鉢体部使用。打割は主に外面より。
45	不 明	々	々(スリ鉢)	3.55	3.50	0.80	17.0	擂鉢体部使用。打割は外面より。円形状をなす。
46	々	々	々(スリ鉢)	2.30	2.20	0.70	8.0	擂鉢体部使用。主に外面より打割。
47	Aトレンチ	々	々(スリ鉢)	2.80	3.05	1.00	14.0	擂鉢体部使用。外面より打割。円形状をなす。
48	々	々	々(スリ鉢)	3.20	2.80	0.70	10.0	擂鉢体部使用。打割は主に外面より。
49	4トレンチ	々	々(スリ鉢)	2.30	2.20	0.70	8.0	擂鉢体部使用。内外面より丁寧に打割され、円形状をなす。
50	つ - 11	IV	近世磁器底部	4.05	3.95	0.90	19.0	高台脇から打割を行なう。
51	不 明	表採	々	3.80	3.55	0.75	16.0	打割は高台脇を外面より。
52	々	々	々	1.65	1.40	0.35	2.0	周縁は細かい打割調整。
53	Aトレンチ	々	上焼体部	3.20	2.85	0.80	10.0	打割調整は外面より行なう。
54	Bトレンチ	々	近世磁器底部	3.70	3.65	0.75	16.0	高台脇から打割。
55	不 明	表採	荒焼底部	2.85	2.80	1.00	10.0	高台部を除去し、底部を使用。
56	Bトレンチ	々	々(スリ鉢)	4.15	3.65	0.75	20.0	擂鉢体部を使用。打割は外面より。
57	2トレンチ	々	荒焼底部	3.60	3.50	1.70	36.0	胴下部から外底部を使用。打割は主に外面から。
58	Aトレンチ	々	軟質陶器体部	2.90	2.80	0.30	4.0	外面に煤の付着が見られる。全体的に摩耗する。
59	O - 3	I	々	2.80	2.85	0.30	4.0	打割調整後、周縁の一部に研磨を施す。
60	O - 2	表採	々	2.90	2.80	0.45	4.0	打割は主に内面より行なう。全体的に摩耗する。
61	Aトレンチ	々	上焼体部	3.20	3.25	0.70	12.0	打割は外面より。
62	O - 1	々	荒焼体部	2.90	3.05	0.85	14.0	打割調整は外面より行なう。
63	不 明	表採	々	4.90	4.40	1.35	43.0	打割は主に内面から。縦楕円形。
64	々	々	赤瓦	3.95	3.85	1.30	22.0	打割は外面より。全体的に摩耗する。
65	Bトレンチ	I	々	3.75	3.40	1.15	21.0	周縁は打割後、研磨を施すが徹底せず。方形状をなす。
66	々	表採	々	5.30	5.60	1.50	61.0	打割は外面より行なう。
67	不 明	々	荒焼体部	4.06	4.10	0.80	21.0	外面より打割。多角形。
68	々	々	々(スリ鉢)	3.86	4.13	0.90	22.0	擂鉢体部使用。打割は外面より行なう。
69	々	々	赤瓦	4.32	3.95	1.20	22.0	打割後、周縁の一部を研磨調整。
70	こ - 10	II	々	5.85	5.61	1.30	48.0	内外面より打割後、周縁を部分的に研磨。
71	々	々	々	3.80	3.67	1.20	20.0	周縁は打割調整後、全面研磨仕上げされる。ほぼ円形。

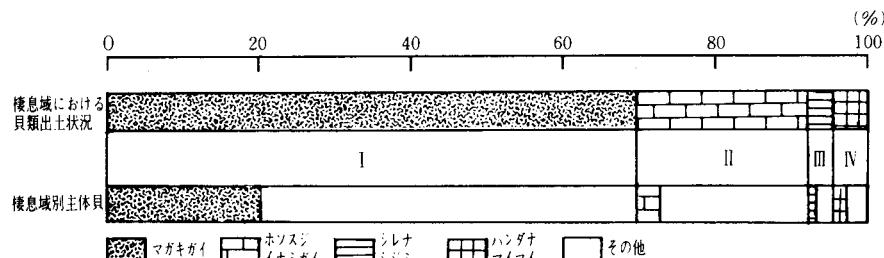


第51図 円盤状製品

第4節 自然遺物

1 貝類遺存体

本貝塚から出土した貝は総数14,806個体、58科183種が得られた。内訳は、陸産貝 6 科10種、河口干潟・マングローブ域に棲息する貝 1 科 1 種、海産貝51科172種である。尚、淡水産貝の出土は認められなかった。表-9に出土量の多い「こ-17」、「こ-18」、「さ-16」、「さ-18」の4グリッドの出土状況を示した。棲息域における貝類出土状況は宇佐浜遺跡(註1)を基本に分類を行った。最少個体数の算出において巻貝は殻頂部を有するものと殻頂は欠損しているが3/4以上残存しているものを1個体とした。リュウテンサザエ科の貝はヤドカリの使用痕の見られるものは抜き出した後、殻数と蓋数を把握し、その多い方を最少個体数とした。二枚貝は殻頂部を有する貝を左右それぞれ集計し、その多い方を最少個体数とした。

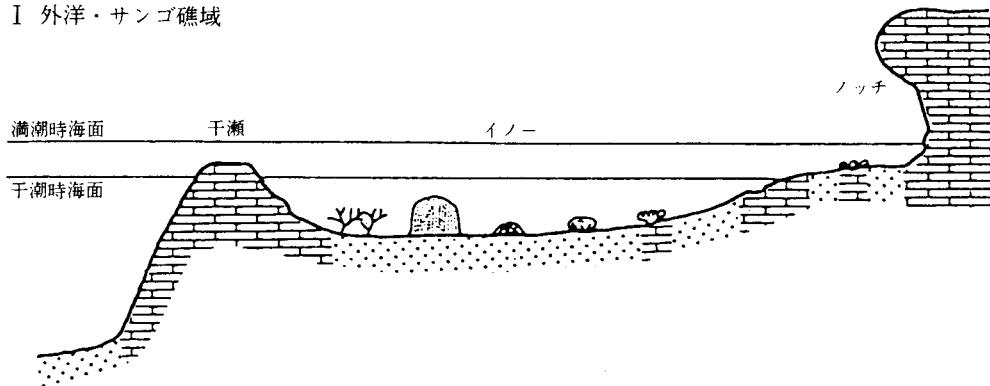


第52図 食料残滓貝類の組成

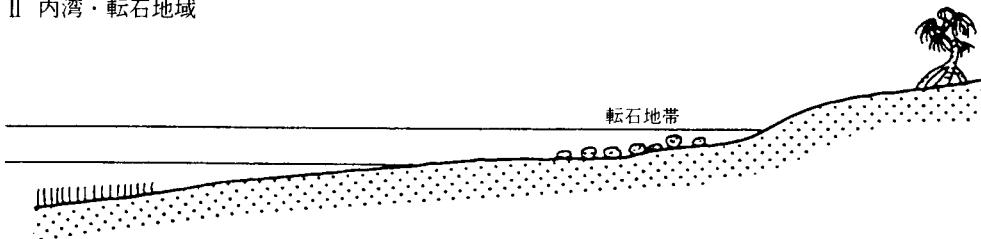
各棲息域ごとの頻度を第52図に示した。棲息域別主体貝の構成比較は古我地原貝塚(註2)の分類に基づいた。それから見ると、本貝塚で出土した貝類の棲息域は外洋・サンゴ礁域(I)、内湾・転石地域(II)、河口・マングローブ域(III)、陸域(V)に大別される。更に外洋・サンゴ礁域は潮間帯中・下部(I-1)、礁池内〈イノー内〉(I-2)、干瀬〈リーフ〉(I-3)、礁斜面(I-4)と4つに区分され、底質区分を岩盤地帯(a)、転石地帯(b)、泥・砂・礫底地帯(c)、マングローブ植物上(d)、河川礫底(e)に分類し、第56図に示した。Iに棲息する貝が最も多く、全体の69.8%を占め、次いでIIに棲息する貝は22.8%、IIIは2.5%、Vは4.9%である。次に底質の区分も含めて棲息地別における貝種の出土数を見ると、I-2-cが47種と多く、全体の29%を占めており、次いでI-2-aが26種で16%、II-2-cは20種で12.3%である(第55図参照)。

貝種別の出土状況を見てみると、特にマガキガイの出土が目立ち、全体の20.1%を占めている。次いでヒメジャコ18.2%、イソハマグリ12.1%でいずれも外洋・サンゴ礁域に棲息する貝である。出土量の多い貝の中からマガキガイ・ヒメジャコ・イソハマグリ・チョウセンサザエ(フタ)・サラサバティの採取された大きさを知るために殻長又は殻高の計測を行い、それぞれの分布を示した。

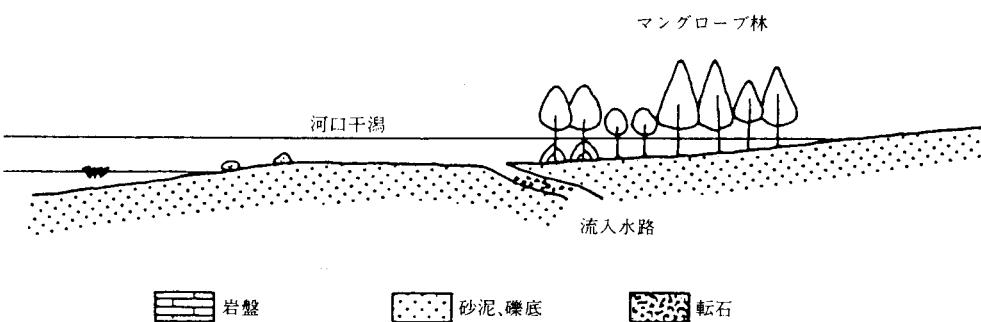
I 外洋・サンゴ礁域



II 内湾・転石地域



III 河口干潟・マングローブ域

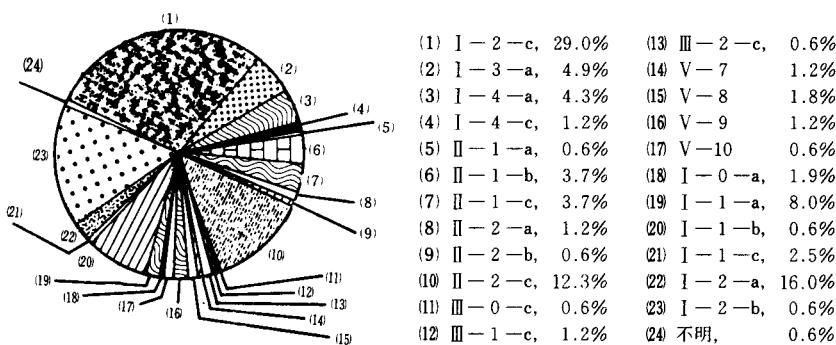


岩盤

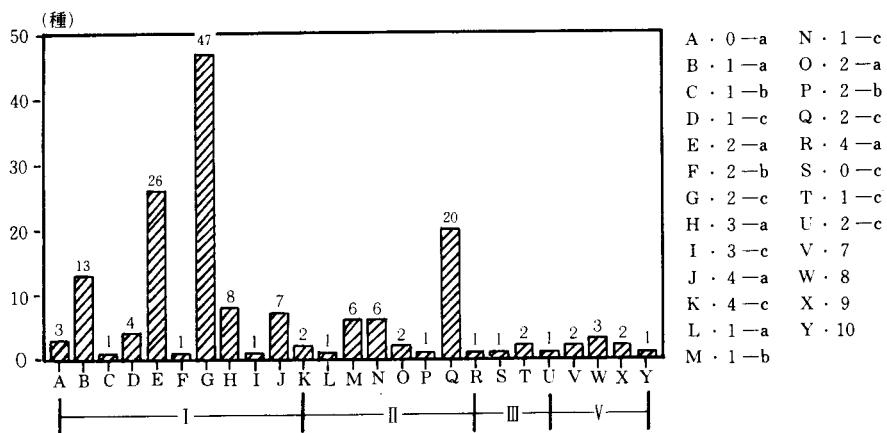
砂泥、礫底

転石

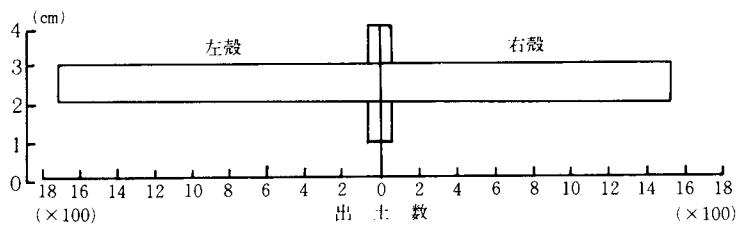
第53図 波浪の変化に基づく海洋地形の3タイプ(模式図・古我地原貝塚より転載)



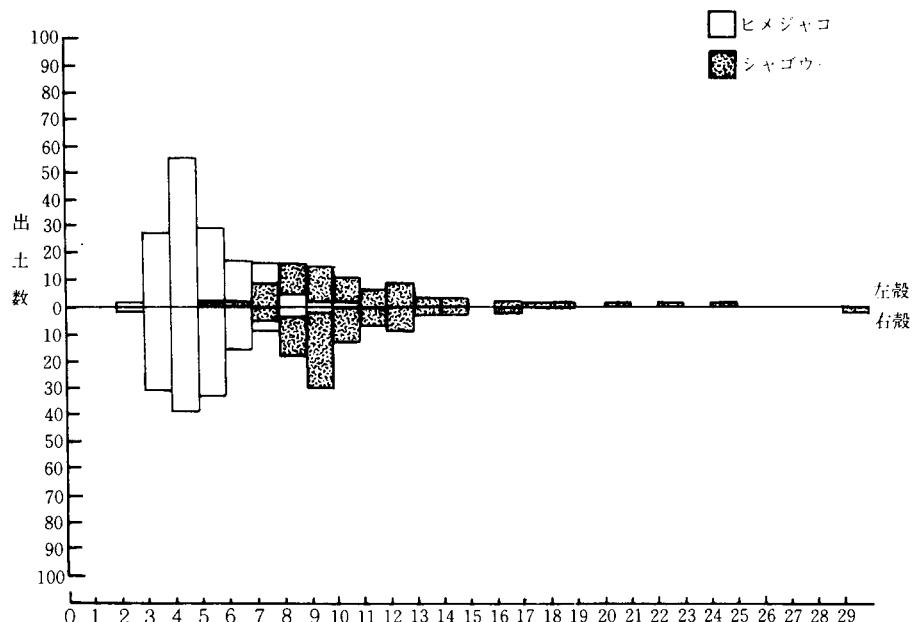
第54図 横断地別における貝類の構成比較



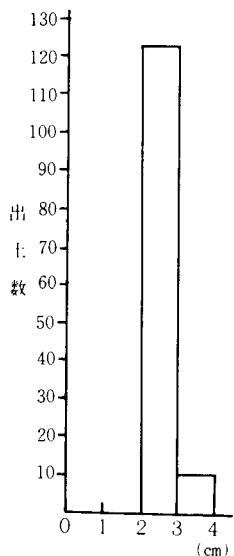
第55図 横息地別における貝類の分布



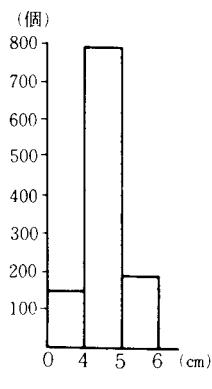
第56図 イソハマグリの殻長分布



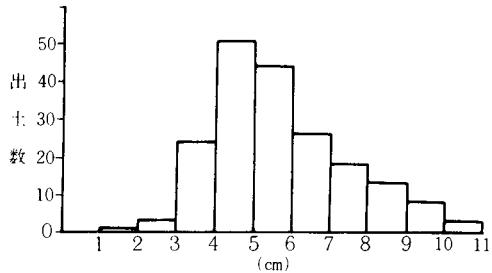
第57図 ヒメジャコ・シャゴウの殻長分布



第58図 チョウセンサザエのフタ長径分布



第59図 マガキガイ殻高分布



第60図 サラサバティの殻高分布

イソハマグリは殻長2cm台の個体が多く、1cm台、3cm台の個体は極めて少ない。第56図に殻長分布を示した。ヒメジャコは最小殻長2cm台、最大殻長10cm台の個体が見られ、4cm前後に集中している。

シャゴウは最小殻長5cm台、最大殻長29cm台の個体が見られ、9cm台に集中している。ヒメジャコと共に第57図に殻長分布を示した。チョウセンサザエは殻の数よりもフタの数のほうが約1.1倍多いことからオカヤドカリ類による殻の持ち去りがあったと思われる。第58図にチョウセンサザエのフタの長径を示した。その結果、長径2~3cm台のフタが見られ、特に2cm台のフタが多く見られた。マガキガイは殻口から体層にかけて破損しているものが多く、貝の肉を取り出すための行為であったと思われる。第59図に殻高分布を示した。サラサバティは最小殻高1cm台、最大殻高10cm台で5cm前後の個体が最も多い。第60図に殻高分布を示した。

以上、主体貝について述べた。本貝塚より採取された貝の棲息地分布を見ても分かるようにI-2-c地帯やI-2-a地帯の貝が多く採取されていることは前にも述べたとおりである。採取される貝の多くはリーフの発達が見られる礁池内(イノー内)に棲息しており、礁池内が生業の主な場所であったことが窺える。殻長・殻高分布の図が示す数値はおおまかではあるが、本貝塚前面の海に棲息していた貝の大きさであると思われる。

本貝塚の特徴を知るため、同時期遺跡との主体貝出土状況の比較を行った。この時期における海産貝の占める割合の高い遺跡は大宜味村喜如嘉貝塚(註4)の貝類出土比率93.8%、そのなかでマガキガイの出土比率は15.3%に対し、イソハマグリは1.0%と出土比率が低くなっている。本部町具志堅貝塚(註5)は貝類出土比率61.5%のうち、マガキガイは3.9%と出土比率が低いのに対し、イソハマグリは37%と高い比率を占めている。同町兼久原貝塚(註6)は貝類出

土比率74.9%のうち、マガキガイは22.2%の出土比率を占めているが、イソハマグリの出土は認められなかった。恩納村伊武部貝塚(註7)では貝類出土比率76.9%のうちマガキガイ22.7%を占めているのに対し、イソハマグリは2.4%と出土比率が低くなっている。久米島具志川村清水貝塚(註8)は貝類出土比率91.3%のうち、マガキガイ21.3%、イソハマグリ10.1%の出土比率を占めていることから、本貝塚の貝類出土比率97.9%で、そのうちマガキガイ20.1%、イソハマグリ12.1%の出土比率は他遺跡より近いことが分かる。本貝塚と清水貝塚以外の他遺跡との出土比率は近似しないが、それぞれの遺跡の貝類出土状況を見てみるとマガキガイやイソハマグリのような中・小型貝が主体をなしていることから本貝塚の貝類出土状況と類似していると思われる。これら主体となる海産貝は現在でも食用となっていることから貝類に対する嗜好性に大きな変化は認められない。

註

1. 沖縄県教育委員会『宇佐浜遺跡発掘調査報告』「沖縄県文化財調査報告書第93集」1989年3月
2. 沖縄県教育委員会『石川市古我地原貝塚』－沖縄自動車道(石川～那覇間)建設に伴う緊急発掘調査報告書(6)－「沖縄県文化財調査報告書第84集」1987年3月
3. 2と同じ
4. 沖縄県大宜味村教育委員会『喜如嘉貝塚発掘調査報告書』「大宜味村文化財調査報告書第1集」1979年3月
5. 沖縄県本部町教育委員会『具志堅貝塚発掘調査報告』「本部町文化財調査報告書第3集」1986年3月
6. 本部町教育委員会『兼久原貝塚発掘調査報告』「本部町文化財調査報告書第1集」1977年
7. 沖縄県教育委員会『伊武部貝塚発掘調査報告書』遺構・貝製品・石器・貝殻編 国道58号線拡幅工事に伴う緊急発掘調査－「沖縄県文化財調査報告書第51集」1983年3月
8. 沖縄県具志川村教育委員会『清水貝塚発掘調査報告』「具志川村文化財調査報告書第1集」1989年3月

表-9 貝類遺存体出土状況(こ-17・18、さ-16・18)

科名	学名・命名者	出土箇所番号	貝種	こ-17				こ-18				さ-16				さ-18				棲息地																																															
				完形	破片	小計	完形	破片	小計	完形	破片	小計	完形	破片	小計	完形	破片	小計																																																	
ニンボンマイマイ科 Camaeidae	1 シューリマイマイ PFEIFFER	3	2	6	11	3	5	11	19	4	9	18	1	1	3	1	3	V-8																																																	
ヤマタエシ科 Cyclophoridae	2 オキナワヤマタエシマイ PFEIFFER	6	2	7	15	6	5	11	22	21	3	10	34	28	16	9	53	V-7																																																	
オナジマイマイ科 Bradybaenidae	3 Cyclophorus tangidus PFEIFFER	Acusta despecta GRAN	4 ウスカラマイマイ Bradybaena circulus PFEIFFER	1	1	2	1	1	4	1	1	1	3	1	1	6	16	V-9																																																	
アフリカマイマイ科 Achatinidae	5 Achatina fulica BOWDICH	6 アフリカマイマイ Achatina fulica	7 カツレンマイマイ Achatina fulica	8 オオガサマイマイ Achatina fulica	9 マイマイ不明 Achatina fulica	10 フヤキセルガイ Achatinidae	11 シンナシミガイ Gelona papua (LESSON)	12 シジミガイ 不明 Gelona papua (LESSON)	13 ガンゼキボラ Chicoreus:Triplex brunneus(LINK)	14 テツボラ Purpura panama (RODING)	15 ツブレインシ Monathus tuberosa (RODING)	16 ムラサキイガレイシガイ Drupa morum (RODING)	17 アカイガレインシガイ Drupa spathularia BLAINVILLE	18 シラクモカイ Mancinella armigera LINK	19 ハナフレインシガイ Nassa francolina (BRUGUÈRE)	20 クチベニレイインシダシ 21 アクキガイ不明 Nassa francolina (BRUGUÈRE)	22 オキニシ Bursidae	23 オタルトボラ Tutu lissostoma SMITH	24 ニシキアオヅネガイ Amphibalanus polita LINNE	25 アマオヅネガイ Thelesta albicilla LINNE	26 イシタミアオヅネガイ Ritella helcionoides laevi- labris (PILSBRY)	27 キハアマガイ Ritella plicata LINNE	28 マルアマヅネガイ Ritella squamulata RECLuz	29 アマオヅネ不明 Ritella squamulata RECLuz	30 アンボンンゴザメガイ Lithoconus littoratus LINNE	31 ヤナギボリイモガイ Rhizoconus miles LINNE	32 ミカドミナシガイ Rhombus imperialis LINNE	33 ニシキミナシガイ Striiconus striatus LINNE	34 ポマトイモガイ Puncticulus pulchellus HWASS	35 サラサミナシガイ Rhizoconus capitaneus LINNE	36 マダライモガイ Virroconus ebreaus LINNE	37 クロミナシガイ Conus marmoreus LINNE	38 サヤカダイモガイ Virroconus fulgetum (SOWERBY)	39 アジロイモガイ Darioconus praetulus BRUGUÈRE	40 イボシマイモガイ Virgiconus lividus (HWASS)	41 アカシマミナシガイ Leptoconus generalis (LINNE)	42 ヤキイモガイ Pinoconus magus (LINNE)	43 クロザメガイモドキ Lithoconus eburneus (BRUGUÈRE)	44 カバミナシガイ Rhizoconus vexillum (GMELIN)	45 キヌカツギイモガイ Virgiconus flavidus (LAMARCK)	46 タガヤサンミナシガイ Darioconus textile (LINNE)	47 オトメイモガイ Virgiconus virgo (LINNE)	48 コモンイモガイ Puncticulus arenatus (HWASS)	49 ロウソクイモガイ Cleobula quernea (LIGHT FOOT)	50 アンボイナガイ Gastridium geographus (LINNE)	51 ヒラマキイモガイ Dauciconus planorbis (BORN)	52 ヤセイモガイ Virgiconus emarginatus (REEVE)	53 クロフモドキガイ Lithoconus littoratus pardus (RODING)	54 ジュズカケサヤガタイモガイ Virgiconus coronatus (GMELIN)	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	I-2-C
イモガイ科 Conidae	72 オタルトボラ Tutu lissostoma SMITH	73 オタルトボラ Tutu lissostoma SMITH	74 ニシキアオヅネガイ Amphibalanus polita LINNE	75 アマオヅネガイ Thelesta albicilla LINNE	76 イシタミアオヅネガイ Ritella helcionoides laevi- labris (PILSBRY)	77 キハアマガイ Ritella plicata LINNE	78 マルアマヅネガイ Ritella squamulata RECLuz	79 アマオヅネ不明 Ritella squamulata RECLuz	80 アンボンンゴザメガイ Lithoconus littoratus LINNE	81 ヤナギボリイモガイ Rhizoconus miles LINNE	82 ミカドミナシガイ Rhombus imperialis LINNE	83 ニシキミナシガイ Striiconus striatus LINNE	84 ポマトイモガイ Puncticulus pulchellus HWASS	85 サラサミナシガイ Rhizoconus capitaneus LINNE	86 マダライモガイ Virroconus ebreaus LINNE	87 クロミナシガイ Conus marmoreus LINNE	88 サヤカダイモガイ Virroconus fulgetum (SOWERBY)	89 アジロイモガイ Darioconus praetulus BRUGUÈRE	90 イボシマイモガイ Virgiconus lividus (HWASS)	91 アカシマミナシガイ Leptoconus generalis (LINNE)	92 ヤキイモガイ Pinoconus magus (LINNE)	93 クロザメガイモドキ Lithoconus eburneus (BRUGUÈRE)	94 カバミナシガイ Rhizoconus vexillum (GMELIN)	95 キヌカツギイモガイ Virgiconus flavidus (LAMARCK)	96 タガヤサンミナシガイ Darioconus textile (LINNE)	97 オトメイモガイ Virgiconus virgo (LINNE)	98 コモンイモガイ Puncticulus arenatus (HWASS)	99 ロウソクイモガイ Cleobula quernea (LIGHT FOOT)	100 アンボイナガイ Gastridium geographus (LINNE)	101 ヒラマキイモガイ Dauciconus planorbis (BORN)	102 ヤセイモガイ Virgiconus emarginatus (REEVE)	103 クロフモドキガイ Lithoconus littoratus pardus (RODING)	104 ジュズカケサヤガタイモガイ Virgiconus coronatus (GMELIN)	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	I-1-a																

科名	学名・命名者	出上グリード N	貝種	ニ-17		ニ-18		ニ-16		ニ-18		棲息地		
				完形 殻頂 破片	小計	完形 殻頂 破片	小計	完形 殻頂 破片	小計	完形 殻頂 破片	小計			
イモガイ科 Conidae	Daucusconus vitalinus HWASS	55	サラサミナシガイモトキ	1	4	5						2	I-2-C	
	Virgiconus distans HWASS	56	ツボカハノモガイ		2	2							I-2-C	
	Daracenus Regoceras guelicus LINNE	57	ツボイモガイ										I-2-C	
		58	イモガイ不明					1	52	234	287			
ツシマガイ科 Cymatiidae	Charonia tritonis LINNE	59	ホラガレイ		4	4	1	19	11	1	6	7	I-4-a	
	Gasterosteum muricatum RODING	60	シオボラ	1	1	3	3			5	3	8	2 1 3 I-2-C	
	Cymatina neobairicus RODING	61	ミツカドボラ	1	2	3			1	2	3	3	3 I-2-a	
アトマキボラ科 Fasciolariidae	Pleuroloica trapezium LINNE	62	イドマキボラ	5	26	65	96	14	12	62	88	41 40 112 193	11 35 93 139 I-2-a	
	Pleuroloica filamentosa RODING	63	ナガイトマキボラ	1	4	5	21	1	3	1	4	5	2	I-2-a
	Fusinus neobairicus RODING	64	テトセボラ		2	2	1	4	5	1	12	13	1 3 6 10 II-2-c	
	Laticardia belcheri REEVE	65	ツノマタカイモトキ						3	2	5		I-3-a	
	Latirolagena smaragdulus LINNE	66	マールコシ	1	1								I-3-a	
		67	イトマキボラ不明						1	3	4			
オニコフシガイ科 Vasidae	Vasum turbinellum LINNE	68	オニコフシガイ	14	9	30	107	7	5	15	27	18 4 12 34	19 2 12 33 I-2-a	
	Vasum ceramicus LINNE	69	オニコフシガイ					3	4	7	1	1 2	2 12 14 I-3-a	
		70	オニコフシガイ不明									1 1		
オニノツノガイ科 Cerithiidae	Cerithium nodulosum BRUGUIERE	71	オニノツノガイ	19	116	91	326	30	102	44	176	47 159 77 283	55 147 43 245 I-2-c	
	Cypremorus chemnitzianus PILSBRY	72	クワノミカニモリガイ					8	4	12				I-1-a
	Rhinochlaes aspera LINNE	73	ヨコワカニモリガイ										I-2-c	
		74	オニノツノガイ不明											
オリイレヨハハイ科 Nassariidae	Reticunassa chiba HABE	75	チビムシロ							2		2	II-2-c	
		76	イバヨフハイ		1		1						II-2-c	
	Nassarius granularis LINNE	77	リュウキュウムシロハイ							1		1 1	1 II-2-c	
	Nassarius aculeatus LINNE	78	オリイレヨハハイ										II-2-c	
	Taracussus mucronatus A. ADAMS	79	ヒメヨフハイ										II-2-c	
タモトカイ科 Pectinidae	Euploea scripta LAMARCK	80	フトコロガイ						1		1		II-2-a	
リュウテンザザエ科 Turbinidae	Marmorostoma argenteum LINNE	81	ショウセンザザエ	3	6	18	27	4	9	21	34	18 11 30 59	2 11 10 23 I-3-a	
	Lunella granulata Gmelin	82	カシギタ	2	2	5	9	1	3	3	7	1 1 4 6	7 7 II-2-b	
	Lunatica marmorata LINNE	83	ヤコウガイ		7	7			9	9	5 40 54		8 8 II-4-a	
	Marmorostoma stenocayrum FISCHER	84	コシタカザザエ											
ニシキウズガイ科 Trochidae	Purpura squamosa (PEASE)	85	コイワニシ										I-1-a	
	Monodonta labio LINNE	86	オキナワイダタミガイ			1	1	2			4	1	II-1-b	
	Tectus Rochia maximus PHILLIPPI	87	サラサバティ	29	18	114	662	46	10	15	50	740 34 39 87 1201	83 16 136 478 697 1 4 3	
	Trochus maculatus LINNE	88	ニシキウズガイ	7	4	14	25	2	2	10	14	5 3 15	3 12 15 I-2-a	
	Tectus pyramis BORN	89	キンタカハマガイ		2	9	11	2		8	10	2 4 7 13	2 4 6 12 I-4-a	
	Chrysostoma paradoxum (BORN)	90	サラサタダメ	1	10	11		1	2	3			I-2-c	
シデガイ科 Strombidae	Conomurex luhuanus (LINNE)	91	マガキガイ	218	467	55	740	177	378	29	584	305 586	43 934 370 479 44 893 I-2-c	
	Canarium mutabile (SWAINSON)	92	ムカシタモトガイ	2	1	1	4	1		1	3			I-2-c
	Gibberulus gibberulus bosus (RODING)	93	ネジマガキガイ	6	8	1	15	3	5	8	11	2 2 15	8 5 13 II-2-c	
	Harpago chraga (LINNE)	94	スイジガイ		4	4		2	8	10		5 11 16	1 5 6 II-2-c	
	Lambis lambis (LINNE)	95	クモガイ	1	85	208	294	3	113	389	505	172 552 724	2 125 462 589 I-2-c	
	Tricorncis latissimus (LINNE)	96	ゴボウラ		8	8			4	4		2 2	3 2 5 I-2-c	
	Lambis truncata (LIGHT FOOT)	97	ラクダガイ		1	1		1	4	5		1 2 3	4 4 I-2-c	
	Lentigo lentiginosus (LINNE)	98	イボソデガイ	5	2	2	9	4	2	3	9	2 3 1 6	1 2 3 6 I-2-c	
	Tricorncis theristes (SWAINSON)	99	アツソデガイ					2		2			1 1 I-4-c	
	Canarium labratum (RODING)	100	ヒダトリガイ	1		1				1		1	I-2-c	
		101	ソデガイ不明											
タカラガイ科 Cypraeidae	Cypraea tigris (LINNE)	102	ホシタカラガイ	6	6	20	32	3	12	12	27	5 3 21 29	2 10 26 38 I-2-c	
	Arabica arabica (LINNE)	103	ヤクシマタカラガイ					1	1	2	1	3 4 8	2 3 3 8 I-2-a	
	Ponda carneola (LINNE)	104	クチムラサキタカラガイ						1	1			1 1	
	Ponda (Myastapona) (LINNE)	105	ホシキヌタガイ	2	2	6	1	2		3	5	1 1 7 1 5	6 I-2-a	
	Monetaria (ornamentaria) annulata (LINNE)	106	ハナビラタカラガイ	1		1		2	2	4	9	1 3 13 1 2	3 1 I-1-a	
	Erronea erronea (LINNE)	107	ナツメガイモドキ				1			1	1		1 1 I-2-a	
	Ravitrona caputserpentis (LINNE)	108	ハナマルユキガイ		1	1	2			2			I-3-a	
	Staphylaea limacina (LAMARCK)	109	シボリタカラガイ				1		1				I-2-a	

科名	学名・命名者	出土地 No.	貝種	ニ-17			ニ-18			ヨ-16			ヨ-18			棲息地						
				完形	殻頂	破片	小計	完形	殻頂	破片	小計	完形	殻頂	破片	小計							
タカラガイ科 Cypraeidae	Erroena cylindrica (BORN)	110	ウスマラサキダカラガイ														I-2-a					
	Monetaria moneta (LINNE)	111	ヒロクチダカラガイ														I-2-a					
	Cypraea(Lyncina)lynx LINNE	112	キヨダカラガイ														I-1-a					
		113	ヒメホシダカラガイ																			
タマガイ科 Naticidae	Polinices pyriformis (RECLUSE)	114	タカラガイ不明																			
	Mammilla opaca (RECLUSE)	115	トミガイ														I-2-c					
	Tectonatica lurida (PHILLIPPI)	116	リスガイ	3	3	5	4	4	13	5	2	3	10				I-2-c					
		117	ホウシノタマガイ	1		1											II-1-c					
ウミニナ科 Potamididae	Batularia multiformis (LISCHKE)	118	ウミニナ				1			1	1	1	2	1	1	1	I-1-b					
		119	ウミニナ不明																			
ヤツシロガイ科 Tonnidae	Tonna perdix (LINNE)	120	ウズラガイ				1				1	1	2	4	4	4	I-2-c					
	Tonna cepa (RODING)	121	スクミウズラガイ	1	1							1	1				I-2-c					
	Malva (Quimalea) pomum (LINNE)	122	イワカワトキワガイ														I-4-c					
		123	ヘビガイの一種	3	3	6	4	2	6	2	2	4	4				4					
ムカデガイ科 Vermetidae	Oliva minacea (RODING)	124	ジュドウムカラガイ														1					
	Oliva (Neocyclindrus) annulata (GMELIN)	125	サツマビナカイ														I-2-c					
ナツメガイ科 Bullidae	Bulla cruentata venicosa GOULD	126	ナツメガイ														I-2-c					
	Echinotoma lunigera (PILSBRY)	127	コンベイトウガイ														I-0-a					
フデガイ科 Mitridae	Mitra mitra (LINNE)	128	ショウセンフデガイ														I-2-c					
	Mitra episcopalis LINNE	129	ヒメショウセンフデガイ														I-2-c					
タマゴガイ科 Atyidae	Alculastrum cylindricum (HELBING)	130	カイゴガイ														II-2-c					
	Terebra subulaia (LINNE)	131	タケノコガイ																			
エゾバイ科 Buccinidae	Oxymeras maculatus (LINNE)	132	リュウキュウタケガイ														I-2-c					
	Japetbia cingulata (REEVE)	133	シマベッコウバイ														II-1-b					
オカミミガイ科 Ellobiidae	Melampus luteus (QUOY ET GAIMARD)	134	ツヤハマシノミガイ														V-10					
	Ovula ovum (LINNE)	135	ウミウサギガイ														I-2-a					
その他	卷貝 不明	136		4	44	100	148	1	24	25	7	5	75	87								
	貝月小			443	1106	2034	3745	456	1048	1811	3313	690	1874	3159	3660	793	1278	2170	4222			
バカガイ科 Mactridae	Mactramaculata (GMELIN)	137	リュウキュウバカガイ	1	3	14	7	2	4	1	5	6	4	9	15	4	3	4	6	1	11	II-2-c
	Mactra cuneata GMELIN	138	タママキ																			II-2-c
フネガイ科 Arcidae		139	バカガイ不明																			
	Andara antiqua (LINNE)	140	リュウキュウサルボウガイ	18	15	35	19	42	1312	64	10	29	2529	46	19	54	1720	34	9	33	II-2-c	
イガイ科 Mytilidae	Barbeta (Abbarbeta) decussata (SOWERBY)	141	エガイ	6	6	11	1	8	24	22	2	8	16	6	11	17	19	21	32	14	1	I-2-a
	Barbeta (Usturaca) decolorata (DILLWYN)	142	ベニエガイ														1	1	1	1	1	I-2-a
マルヌダレガイ科 Veneridae	Arcia ventricosa LAMARCK	143	オオタカノハガイ																			I-2-a
	Tegillarca granosa (LINNE)	144	ハイガイ																			III-2-c
イガイ科 Mytilidae	Modioius agripeta IREDALE	145	フネガイ不用																			I-1-a
	Tapes literata (LINNE)	146	リュウキュウヒバリガイ																			
マルヌダレガイ科 Veneridae	Gofarium pectinatum (LINNE)	147	ホツヌジナミガイ	35	36	98	2	47	3627	65		42	3427	23	2	39	816	11	1	18	II-1-c	
	Bonar tems histrio (GMELIN)	148	オイノカガミガイ	2			2						15	10		6	12				2	II-2-c
ペリグリガイ科 Periglyptidae	Pitar (Pitarina) striatum (GRAY)	149	ユカゲハマドリ	2		1	3	41	1		5	67	30	2	12	543	3	11	11	II-2-c		
	Periglypta puerbra (LINNE)	150	ヒメリュウキュウエアザリ																			II-2-c
ニッコウガイ科 Telliidae	Periglypta manzoni (LINNE)	151	ヌメヌメガイ	10	48	40	58	72	35	14	26	836	95	24	49	46	41	5	15	II-2-c		
	Tapes (Amygdala) variegata (SOWERBY)	152	オミナエシガイの一種																			II-2-c
リュウキュウマスオガイ科 Asaphidae	Katelyna (Hemitepes) japonica (GMELIN)	153	リュウキュウマグリ																			II-1-c
	Gastrarium divaricatum (GMELIN)	154	アラスジケマンガイ	2	1		3															III-1-c
ニッコウガイ科 Telliidae	Tapes (Amygdala) jorveana (SOWERBY)	155	ヒメアザリ																			II-1-c
	Lioconcha jorensiana (DILLWYN)	156	チャイロサラサガイ																			II-2-c
ニッコウガイ科 Telliidae	Quidni pagupalatum IREDALE	157	ヌメヌメシラトリガイ	1		1																III-1-c
	Tellinella staurella (LAMARCK)	158	マルヌダレガイ不明																			II-2-c
モチヅキザラガイ科 Cyclotellidae	Cyclotellina remes (LINNE)	159	モチヅキザラガイ		3	3						20		2	4			4	4			I-2-c
	Scutaropaga scobinata (LINNE)	160	サメザラガイ	22	3	12	17	1	1		26	1	20		8	1			1	1	I-2-c	
リュウキュウマスオガイ科 Asaphidae	Quidni pagupalatum IREDALE	161	リュウキュウシラトリガイ	65	12	2	10	42	3		735	16	51	27	67	4	14	6	3	23	II-1-c	
	Asaphis dichotoma (ANTON)	162	ニッコウガイ不明	4	1	3	8	3	13	4	10	30	20	2	7	33	14	1	8	II-1-c		
リュウキュウマスオガイ科 Asaphidae	Psammo taea elongata LAMARCK	163	マスオガイ	5	3	1	9	1	1	1	3	21			2							II-2-c
		164	リュウキュウマスオガイ不明																			

科名	学名・俗名	出土グリバ No.	種類	こ-17			こ-18			こ-16			こ-18			棲息地					
				完形 殻頂 破片	殻頂 破片	小計	完形 殻頂 破片	殻頂 破片	小計	完形 殻頂 破片	殻頂 破片	小計	完形 殻頂 破片	殻頂 破片	小計						
ショコガイ科 Tridacnidae	Tridacna (Chametacea) crocea (LAMARCK)	168	ビメジコ	54.26	46.16	311	1023	303.00	51.08	287	698	56.68	55.85	317	1048	60.55	48.05	356	1199	I-2-a	
	Tridacna (Vulgodona) maxima (RODING)	169	シラナミ	62.02	38.70	152	351	10.16	31.40	125	309	57.24	61.07	187	351	202.02	21.43	153	398	I-2-a	
	Hippopus hippopus (LINNE)	170	シヤゴウ	10.12	2.9	63	84	31.29	14.17	73	121	34.30	0.31	312	59	106	25.21	11.12	53	90	I-2-a
	Tridacna (Flodacna) squamosa (LAMARCK)	171	ヒレジコ	16.21	11.16	22	59	35.38	11.5	29	78	33.48	15.17	62	127	16.26	4.14	36	76	I-2-c	
	Persicima derasa (RODING)	172	ヒシナシジャコ	9.12			8	3.2	1.2	2	6	0.4	0.1	7	12			4	4	I-2-c	
		173	シヤコガイ不明										0.1		1	2					
	Atactodes striata (Gmelin)	174	ソハマグロ	34.79	15.98	17	464	39.39	29.75	7	407	52.56	82.90	6	619	38.78	43.36	4	343	I-1-c	
ツドリマスオガイ科 Mesodesmatidae	Codakia tigrina (LINNE)	175	ツドリマスオガイ不明					1.4	1		5	2.1			2			1	1	I-2-c	
	Codakia paytenorum (REDALEK)	176	ツキノモガイ	2.2			4	2	1		3	14.19	0.1	1	21	8.2	2.1	1	11	II-2-c	
	Anomia edentula (LINNE)	178	カブランギガイ								4	2	7.5	4	18	1.2			2	II-2-c	
	Ctena divergens (PHILLIPPI)	179	ヒメツキガイ																	I-2-c	
ウダイスガイ科 Pterinidae	Pinctada maculata (GOULD)	180	ミドリアオリガイ	14.21	10.10	11	42.8	14.14	11	19	47.18	24.21	21.33	28	85	58.60	30.42		102	I-1-a	
	Pinctada magisterifera (LINNE)	181	クロチョウガガイ	4.1	15.8	26	45	4.4	14.15	31	50	9.9	32.39	87	135	10.12	29.30	99	141	I-4-a	
		182	ウダイスガイ不明																		
シモクアオリガイ科 Isognomonidae	Isognomon perna (LINNE)	183	カシシアオリガイ																		I-1-a
	Spondylus regius (REEVE)	184	ウミギターガイ																		
		185	メンガイの一様	18.8	5.7	46	71	8.7	7.6	22	37	25.20	10.5	69	104	9.6	5.4	26	40	I-2-a	
ザルガイ科 Cardiidae	Fragum undatum (LINNE)	186	ウミギターガイ不明												3	3					
	Vasticardium (Regozara) flavum (LINNE)	187	リュウキュウザルガイ	1	1	2	4	4	4	2	3	9	16.8	4.3	1	15	3.9	2	1	12	II-2-c
	Corculum cardissa (LINNE)	188	リュウキュウアオイガイ																		I-2-a
イタボガキ科 Ostreidae	Dendostrea crenularis (SOWERBY)	189	カワラガイ												2.0		2	1			I-1-b
	Pretostrea hyottii (LINNE)	190	シヤコガキ												1.0		1				I-2-a
	Saxostrea mordax (GOULD)	191	オハグロガキ																		I-1-a
タマキガイ科 Glycymeridae	Glycymeris (Veletuceta) reevei (MAYER)	192	カキの一種	1			1					1.0			1						I-2-c
	ナミノコガイ科 Donaciidae	Latona faba (Gmelin)	193	リュウキュウナミノコガイ												5.2		5			I-1-c
キツザルガイ科 Chamidae	Chama solstoma (CONRAD)	194	カネツケザルガイ	1			1	1			1										I-1-a
		195	ヒオウギガイの一種																		
イタヤガイ科 Pectinidae	Pectenidea (edistellina) saccharinata (REEVE)	196	リュウキュウウノアシ	1		1						1	1								I-3-a
		197	ユキノカサガイ不明																		
ヒザラガイ科 Pectinidae	Cellana testudinaria (LINNE)	198	ヒザラガイの一種								1	1						2	2		I-1-a
		199	オオベッコウカサガイ																		
アメフラシ科 Aplididae	Dolabella auricularia (SOLANDEK)	200	タツナミガイ				1			1											I-1-a
	Ovinnitis ovina (Gmelin)	201	マアナゴウ																		I-2-a
その他		202	二枚貝不明	1.1			1	1	2	1	28	31	2.2	20	22	2.1	3	8	13		
		203	チョウセンサザエ(フタ)	48	4	52	22	1	5	28	34	3.3	1	38	31	1	4	36			
		204	ヤコウガイ(フタ)	1	1	2			1	1	2	2	8	12	2			2			
		205	カシギク(フタ)	2		2	1			1											
		206	化石																		
		207	セマガキ																		
		208	モガイ化石																		
		209	イモガイ化石																		
		210	枚貝小計	1394.75	778	2548.942	266	661	2146	1710	519	996	3352	1392	345	817	3836				
		合計		956	374	961	329		1546	589		1385	421						54124		

貝の棲息場所

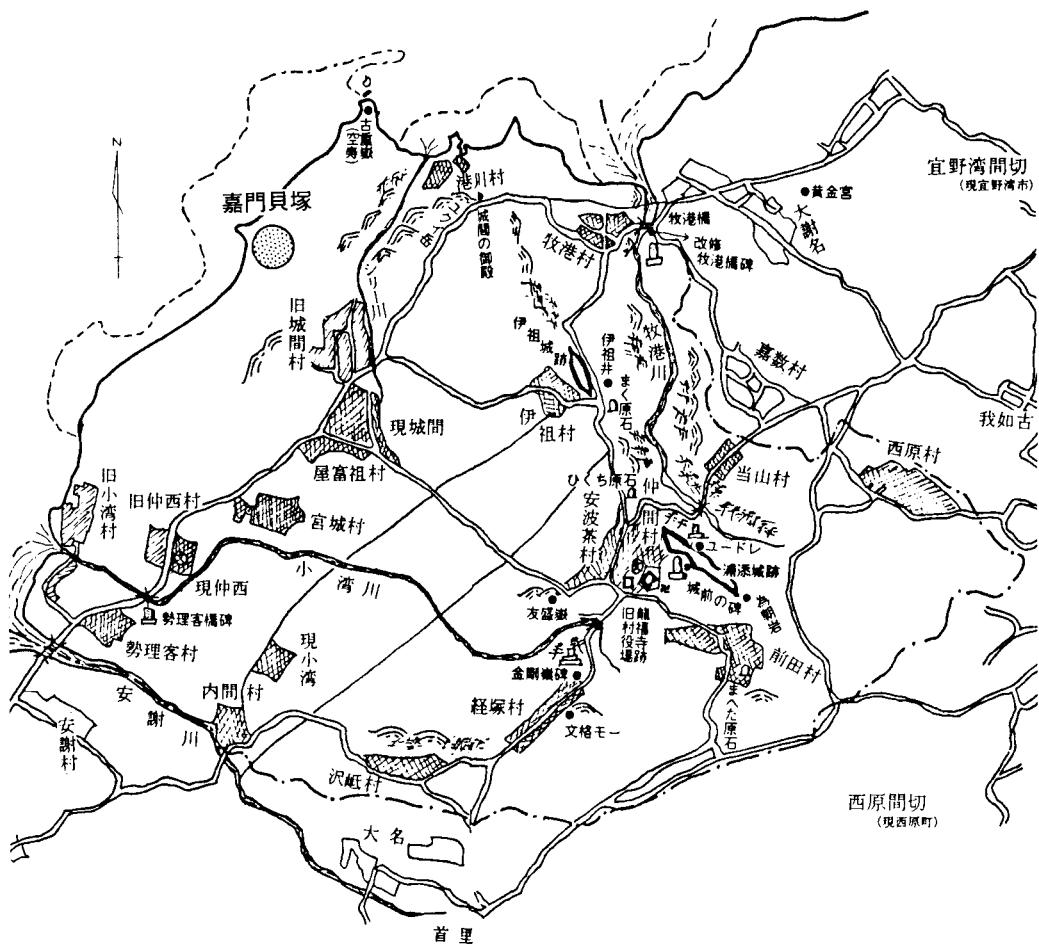
I. 外洋・サンゴ礁域	0. 潮間帶上部 (Iではノッチ、IIIではマングローブ)	a. 岩盤
II. 内湾・転石域	1. 潮間帶中下部	b. 転石
III. 河口干潟・マングローブ域	2. 亞潮間帶上縁部 (礁池内<イノーネ>)	C. 泥、砂、礫底
	3. 干灘 (Iにのみ適応)	d. マングローブ植物上
	4. 礁斜面及びその下部	e. 河川礫底
IV. 淡水域	5. 止水	
	6. 流水	
V. 陸域	7. 林内	
	8. 林縁部	
	9. 海浜部	
VI. その他	10. 打ち上げ物	
	11. 化石	

嘉門貝塚A区出土の動物遺体

金子浩昌(早稲田大学考古学研究室)

はじめに

嘉門貝塚は沖縄県浦添市城間にあり、浦添市の西側東シナ海に面する海岸砂丘上にある遺跡で、砂丘が赤土地帯に湾入していく地点に形成されている。貝塚時代後期に属し、赤土地帯にはいると前期の遺構がみられる。なお、グスク時代の遺物は全面に散布しているが、沖縄貝塚時代後期の遺物包含層は約20~40cmの厚さを有し、東(陸側)から西(海側)へ傾斜して堆積する。遺構は地山面(白砂)で51例のピット群を検出したが、明確なプランを確認することはできなかった。動物遺体については、この時期の貴重な資料として注目されるが、量的には嘉門貝塚B区における出土が多い。B区については次回に報告する予定であり、その際に嘉門貝塚としての考察、総括をしたいと思うので、今回は遺物の表示と記述を中心としておきたい。



第61図 遺跡の位置 (浦添市史第2巻より転載)

節足・脊椎動物遺存体種名表（貝塚時代後期所屬）

I 節足動物門 I Phylum ARTHROPODA

甲殻綱 Class Crustacea

軟甲亜綱 Subclass Malacostracea

十脚目 Order Decapoda

短尾亜目 Suborder Brachyura

ワタリガニ科 Family Portunidae

ノコギリガザミ *Scylla Serrata*

オウギガニ科? Family Xanthidae?

属・種不明 Ge. et sp. indet.

II 棘皮動物門 II Phylum ECHINODERMATE

ウニ綱 Class Echinoidea

目・科不明 Ord. et fam. indet.

III 脊椎動物門 III Phylum VERTEBRATA

a. 軟骨魚綱 a. Class Chondrichthyes

サメ目 Order Lamniformes

ネズミザメ科 Family Lamnidae

ホホジロザメ *Carcharodon carcharias*

b. 硬骨魚骨 b. Class Osteichthyes

ウナギ目 Order Anguilliformes

ウツボ科 Family Muraenidae

属・種不明 Ge. et sp. indet.

スズキ目 Order Perciformes

スズキ科 Family Serranidae

マハタ属 *Epinephelus* sp.

フエダイ科 Family Lutjanidae

属・種不明 Ge. et sp. indet.

タイ科 Family Sparidae

ミナミクロダイ *Acanthopagrus siuicolus*

フエフキダイ科 Family Lethrinidae

ハマフエフキ *Lethrinus nebulosus*

ベラ科	Family Labridae
属・種不明	Ge. et sp. indet.
ブダイ科	Family Scaridae
ナガブダイ	<i>Scarops rubrouiolaceus</i>
イロブダイ	<i>Bolbonmetopom bicolor</i>
ナンヨウブダイ	<i>Scarus gibbus</i>
フグ目	Order Teraodontiformes
フグ科	Family Tetraodontidae
属・種不明	Ge. et sp. indet.
モンガラカワハギ科	Family Balistidae
属・種不明	Ge. et sp. indet.

c.爬虫綱	c. Class Reptilia
カメ目	Order Chelania
ウミガメ科	Family Chelonidae
アオウミガメ	<i>Chelonia mydas</i>

d.哺乳綱	d. Class Mammalia
クジラ目	Order Cetacea
属・種不明	Fam. et gen. indet.
食肉目	Order Canirora
イヌ科	Family Canidae
イヌ	<i>Canis familiaris</i>
海牛目	Order Sirennia
ジュゴン科	Family Dugongidae
ジュゴン	<i>Dugong dugon</i>
偶蹄目	Order Artiodactyla
イノシシ科	Family Suidae
リュウキュウイノシシ	<i>Sus lecomystax riukiuanus</i>

動物遺体の概要

I. 節足動物

甲殻綱

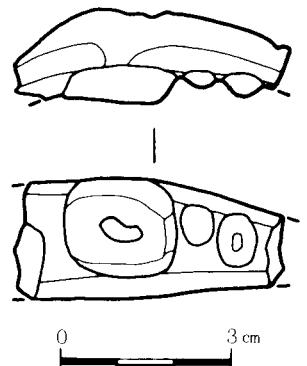
ノコギリガザミ

大型のハサミ脚が検出されている。8点が検出されているが、これがすべてであったとは思えない。多くの標本が腐食し、消滅していると思われるからである。現存しているハサミ脚は、おそらく火を受けて石灰化しているものに限られると思われる。

これらの標本は、不動指(前節)、可動指(指節)部分に分離し、またその先端を欠損するなどして原形を知り得る標本は一つもないが、推定できる大きさは、不動歯の最大のもので、歯をつける部分の長さ60mmになる。このハサミの部分の大きさで推定される甲幅は、甲幅20cmを越え、脚をひろげた状態で幅50cm位になる。現生ノコギリガザミで最大のものは甲幅45cmに達するという。それには及ばないにしても、巨大なノコギリガザミが捕れていたのである。

表-10 カニ（ハサミ）出土状況

種	部 位	個 数
モグズガニ	左 可動 指	1
	右 可動 指	
	左 不動 指	
	右 不動 指	1
小 計		2
ノコギリガザミ	左 可動 指	1
	右 可動 指	4
	左 不動 指	2
	右 不動 指	1
小 計		8
合 計		10



第62図 ノコギリガザミ右可動指

II. 棘皮動物

ウニ類 棘と甲羅が出土している。

表-11 ウニ出土状況

グリッド	層 位	部 位	個 数
さ - 16	第 IV 層	棘	1
さ - 18	第 IV 層	棘	3
し - 14	第 IV 層	棘	2
不 明	不 明	棘	1
不 明	不 明	甲	3

III. 脊椎動物

a 魚 類

サメ：ホホジロザメの歯が出土しているが、化石である。他にサメ類の椎体を検出することはなかった。

表-12 サメ出土状況

出土グリッド	層 位	部 位	個 数
不 明	表 採	歯	1

ウツボ類：僅かに1点が検出されている。沖縄でのウツボの出土は一般にこのように少ない。

マハタ属：この魚も前上顎骨が1点のみ出土している。顎骨の全長70mmに達する。

表-13 魚骨出土状況

				こ - 16				こ - 17				こ - 18				さ - 16				さ - 17									
				I	II	III	IV	不明	I	II	III	IV	不明	I	II	III	IV	不明	I	II	III	IV	不明	I	II	III	IV	不明	
ウ ナ ギ 目 科	ウ ツ ボ 科	R + L																											
			鰍骨																										
			小計																										
ス ズ キ 目 科	ヌ キ 科	ハタ	R + L																										
	ノ ム ダ 科	フエ ダイ	R + L																										
	フ エ キ ダ イ 科	フエフ キダイ	R + L																										
	ハ マ フ エ キ ダ イ 科	ハマフ エキダイ	R + L																										
	ス イ 科	不明																											2
		小計																											2
	タ イ 科	クロ ダイ	R + L																										
	ペ ラ 科	ベラ	R + L																										1
	ベ ラ 科	ベラ	下咽頭																										
		小計																											1
キ ブ ダ イ 科 目 科	キ ブ ダ イ 科	不明	R + L																										
	イ ロ ブ ダイ	イロ ブダイ	R + L																										
	咽 頭 骨	咽頭骨	R + L																										
	ナンヨウ ブ タイ	ナンヨウ ブタイ	R + L																										1
	咽 頭 骨	咽頭骨	R + L																										
	ナ ガ ブ ダイ	ナガ ブダイ	R + L																										1
	咽 頭	咽頭	R + L																										
		小計																											2
	マ ン ク 科	フグ	R + L																										
	カ ハ 科	カワ ハギ	R + L																										
フ グ 目 科	ハ リ セ ン ボ ン	ハリ セン ボン	—																										2 3
		小計																											5
	種 不 明		R + L																										
		R L																											
総合計								3				1		3															6
破片重量								10				2		1															12
脊椎重量								4				2		1															2 4

フエダイ科属・種不明

大型の前上顎骨、歯骨が出土している。種名が確認されていないが、フエダイ科では体長70～80cmになるような大型の種が幾種類がある。そのなかの一つであろう。こうした大型種になると少ないので普通である。

ハマフエフキダイ

ややまとまった数が出土している。しかし、発掘の面積からすればむしろ少ない方ではないかと思われる。前上顎骨、歯骨長では30～50mmはある標本である。

ミナミクロダイ

ミナミクロダイは歯骨が1点検出されたのみである。ミナミクロダイはクロダイの中では大型になる種類である。標本の歯骨全長38mmあり、これも大型のものである。

ベラ科の一種

顎骨の破片と咽頭骨片があるが、種名は不明である。大・小の個体が含まれている。大型の前上顎骨は顎骨全長50mm位になる最大型の個体であろうか。

ブダイ類

イロブダイ、ナンヨウブダイ、ナガブダイといった代表的な種類が含まれ、ナガブダイだけ少ないようである。標本の保存は良好とは云えないが、大型の標本の多いことは他の遺跡例とも共通する。ただ、土壤のブロックサンプリングから、現在得られている標本よりはるかに小さい個体の骨を得ることも可能な場合がある。この点について今後注意しなければならないと思う。

マフグ科の一科

極めて大型の前上顎骨が1点検出されている。歯のエナメル質部分の全長が68.00mmにもなる。

カワハギ

モンガラカワハギ科の大型種の前上顎、歯骨が出土している。前上顎の全長38.00mmになる。数は少ない。

ハリセンボン科

大型のこの種の前上顎骨と歯骨が多数あり、その数はどの魚種よりも多かった。顎骨咬合面でエナメル質のみられる部分の幅が35～60mm位になるものが含まれていた。ハリセンボンが最も多く獲られていたという例はこれまで経験することがなかった。

b 爬虫類

アオウミガメ

多くの骨が出土しているが、その大部分は肋骨板と腹甲板の破片で、四肢骨のうち部位の確認できたのは上腕骨2点である。上腕骨2点は大きさのかなり違うもので、一つは全長200mmになろうという大型のもの、他の一つは全長80mm程度の大きさである。

表-14 ウミガメ出土状況

出土地点 部位	こ-17		こ-18		さ-16		さ-17		さ-18				し-16		し-17		し-18		グリッド不明			合 計		
	IV	不	IV	不	IV	不	IV	不	II	III	IV	不	IV	不	IV	不	IV	不	II	III	IV	不		
上腕骨												1												1
肋骨板片	1	1	6	2		4	4	2	1		14	24	1		1			2						63
肋骨片												1								1		3	5	10
腹甲板											1													1
縁骨板					1		1				3	1												6
小計	1	1	6	2	1	4	5	2	1	0	18	27	1	0	1	0	0	2	1	0	3	5	81	
合計	2		8		5		7				46		1		1		2						9	

c 哺乳類

クジラ類

ゴンドウクジラと思われる位の大きさの肋骨片を1点検出している。

表-15 ゴンドウクジラ

出土地点	層位	部位	個数
Dトレーナー	不明	肋骨	1

ジュゴン

検出されたジュゴンの骨は肋骨1点と上腕骨1点の2点のみであった。ジュゴンの骨の出土は遺跡によってかなり違うが、四肢骨の出土が多く、その場合でも主要な部位が1~2点というのが普通である。本遺跡でも肋骨片と上腕骨があって、その大きさからみて肋骨は大型成獣の個体、上腕骨は幼獣である。このような小さい個体の出土は珍しいのではないかと思われる(古我地原貝塚での出土例がある)。

表-16 ジュゴン出土状況

出土地点	層位	部位	個数
こ-17	不明	肋骨	1
こ-18	第IV層	左上腕骨	1

イヌ

今回の発掘で検出された骨は層序不明のものも含めて頸骨1、上腕骨、大腿骨などの不完全な骨であった。いずれも小型のものであるので、おそらく古い時期のものであろう。

表-17 イヌ出土状況

出土グリッド	層位	部位	個数
さ-18	不明	左大腿骨(S)	1
し-16	第IV層	右上腕骨(S)	1
テストピットNo.1	不明	左上腕骨(P)	1
Bトレーナー	不明	左脛骨	1

イノシシ

イノシシは歯牙総数32点、骨格298点が検出されているが、最小個体数からみるとすれば、四肢骨のうち特定部位の出土の最も多い上腕骨遠位端の7個体分になる。他の部位はこれよりはるかに少ない。イノシシのような比較的大型の獣では、上腕骨の他に主要な四肢骨でのこる骨が少くないはずであるが、今回確認できた標本には、それらの骨が極めて少なかった。例えば脛骨遠位端、距骨、踵骨などは普通には数が今少し多い場合が多い。本遺跡ではこうした標本が上述のように少なかった。おそらくそれは小さい骨のために早く分散、消失しているのではないかと思う。出土している歯の数が推定個体数に比べて非常に少ないのもそのためと思われる。

その他の鳥・獣骨

別表にあるように、嘉門貝塚A区の発掘に当たっては、ニワトリ、ネコ、ブタ、ウマ、ヤギ、ウシなどの家畜、ウサギの骨が出土している。これらの動物は筆者がこれまでに見てきた出土例では貝塚時代後期以後のものである。ただ、出土状況からするとIV層という後期の層からの出土例もないわけではない。しかし、その場合でも上層からの混入とみなければならないと思う。いずれ、こうした標本については、B区においても出土していると思われる所以、それを述べる際に一括して記述しておきたいと思う。

表-18 イノシシ部位別出土状況

注 p→近位端 s→骨体 d→遠位端

グ リ ッ ド序 号	R 頭 蓋	L 下 脊 肋 頸 椎	肩 甲 骨	上 腕 骨	橈 骨	尺 骨	中 手 骨	寛 骨	大 腿 骨	脛 骨	腓 骨	膝 蓋	距 骨	踵 骨	中 手 足 骨	指 基 部	趾 中 間 節	趾 末 節	骨 骨 片
こ 16	R 骨 骨	L 骨 骨	p(s)d	p(s)d	p(s)d	p(s)d	p(s)d	p(s)d	p(s)d	p(s)d	p(s)d	p(s)d	p(s)d	p(s)d	p(s)d	p(s)d	p(s)d	p(s)d	
こ 17	R 不	N L																	4
こ 18	R 不	N L																	
明 小 計 不	R 不	N L																	12
	R 不	N L																	4
	R 不	N L																	16
	R																		

グ リ ッ ド 序 序	R	頭 蓋	下 頸	脊 椎	肋 骨	肩 甲	上 腕 骨	橈 骨	尺 骨	中 手 骨	寬 骨	大 腿 骨	脛 骨	腓 骨	膝 蓋	距 骨	踵 骨	中 指 基 節	趾 中 末 節	骨 節	骨 骨	破 片	
	L	頸 椎	骨	骨	骨	骨	p s d	p s d	p s d	p s d													
16	R																						
	L																						
	不																						
	明																						
	不																						
	小																						
	計																						
	不																						
17	R																						
	L																						
	不																						
	明																						
	不																						
	小																						
	計																						
	不																						
18	R																						
	L	1																					
	不																						
	明																						
	不																						
	小																						
	計																						
	不																						
19	R																						
	L																						
	明																						
	不																						
15	R																						
	L																						
	不																						

グ リ ッ ド 序	R	頭 蓋	下 頸	脊 椎	肋	肩 甲	上 腕	橈	尺	中 手	骨	寛 骨	大腿	脛	腓	膝 蓋	距 骨	踵 骨	中 手	足 指 基 節	趾 骨 中 節	骨 末 節	骨 骨 骨 骨	破 片
し 不 16明	R																1							
	L																							
し 不 17	R																							2
	N	L					1																	
し 不 18明	R							1										1						17
	L																							
小 計 不	R							1										1						37
	L								1	2	1													
	計																							54
す 15	R																							
	L																	1						
せ 12	R																							
	V	L								1														2
グ リ ッ ド 不 明	R							1																
	L																							
グ リ ッ ド 不 明	不																							5
	R									1	1	1												
	L																							
グ リ ッ ド 不 明	不	1	5	1	1					1														71
	R										1	1	1											
	L																							
グ リ ッ ド 不 明	小																							
	R																							
	L																							
グ リ ッ ド 不 明	計	不	1	5	1	1					1													76
合 計	R	3					2	1	1	6	4	1	2	2		1	4	4	1	1	1	1	2	1
	L	1	3				3	4	1	3	7	1	4	1	1	4	1	5	2	2	1	1	1	2
	不	1	1	8	1	1					1	1	1			2						1	1	1
																								298

表-19 イノシシ歯牙出土状況

	上 頸 骨												下 頸 骨												切 歯 骨 R	犬 歯 破 片 L	上 左 右 顎 不 骨 明 R	下 左 右 顎 不 骨 明 L	臼 歯 破 片 合 計							
	R						L						R						L																	
	I ¹ i ¹	2	3	C	m ²	3	P ¹	2	3	4	M ²	3	I ¹ i ¹	2	3	C	m ²	3	P ¹	2	3	4	M ¹	2	I ¹ i ¹	2	3	C	m ²	3	P ¹	2	3	4	M ¹	2
17	I																																	0		
	II																																	0		
	III																																	0		
	IV																																	4		
	不明																																	0		
18	I																																	0		
	II																																	0		
	III																																	0		
	IV																																	0		
	不明																																	1		
19	I																																	0		
	II																																	0		
	III																																	1		
	IV																																	1		
	不明																																	0		
20	I																																	0		
	II																																	0		
	III																																	1		
	IV																																	1		
	不明																																	0		
21	I																																	0		
	II																																	0		
	III																																	1		
	IV																																	1		
	不明																																	0		
22	I																																	0		
	II																																	0		
	III																																	0		
	IV																																	0		
	不明																																	3		

表-20 ニワトリ遺存体出土状況

出土地点	層位	部位	個数
こ - 18	第Ⅳ層	破片	1
表採	不明	々	1
不明	々	々	11

表-21 ウサギ遺存体出土状況

出土地点	層序	部位	個数
O - -	2	第Ⅱ層 左上腕骨(P)	1
Aトレーナー	不明	右上腕骨(d)	1

表-22 ウシ遺存体部位別出土状況

出土地点	層序	R L	頭 蓋	肋 骨	上 腕 骨	橈 骨	寛 骨	踵	中 手 足 骨	合	計
し + 14	層	R			1	1					2
		L									0
		不									0
す + 14	層	R									0
		L									1(完形) 1
		不									0
グリッド 不明	不 明	R	1						1		2
		L	1						1		3
		不							1		1
合 計			1	1	1	1	1	2	2	9	

表-23 ウシ歯牙・顎骨出土状況

出土地点	層位	部位	個数
グリッド	第Ⅳ層	下顎(右M4)	1
不明	々	臼歯破片	9
	不明	々	1
Aトレーナー	々	々	1
Bトレーナー	々	々	1
Dトレーナー	々	々	4
トレーナー不明	々	下顎(左M1)	1

表-24 ブタ遺存体部位別出土状況

出土地点	層序	R L	頭 蓋	下 脊 椎	肋 骨	肩 甲	上 腕 骨	橈 骨	尺 骨	中 手 骨	寛 骨	大 腿	脛	腓 蓋	膝 距	踵	中 手 足 骨	指趾骨			頸 破				
																		p	s	d	基 節	中 節	未 節		
し + 18	層	R																							
		L			1																				
		不																							
グリッド 不明	不 明	R				1						1		1		1	1								
		L	1			1	2	1				1	1									1		1	
		不	1	1	6													1							
合 計	層	R					1					1		1		1	1								
		L	1			1	2	1				1	1					1					1		
		不	1	1	6												1								

表-25 ウマ遺存体出土状況

出 土 地 点	層 位	部 位	個 数
D トレンチ	不 明	破 片	1
	ク	ク	1

表-27 ヤギ歯牙骨出土状況

出 土 地 点	層 位	部 位	個 数
A ト レンチ	不 明	右 M ₃	1
	ク	右 M ₁	1
	ク	右 M ₂	1
	ク	右 M ₃	1
3 ト レンチ	ク	右 M ₃	1

表-28 ヤギ遺存体部位別出土状況

出 土 地 点	層 序	P	頭 蓋	下 顎	脊 椎	肋 骨	肩 甲 骨	上 腕 骨	桡 骨	尺 骨	中 手 骨	寬 骨	大 腿 骨	胫 骨	腓 骨	膝 蓋	距 踵	中 足	指趾 骨	破 片		
		L	骨	骨	P	S	d	P	S	d	P	S	d	P	S	d	P	S	d	基 本 節 骨	中 間 節 骨	末 節 骨
さ I 17	R																					
	L																					
	不																					
D ト レンチ	不	R																			1	
		L																				
	明	不																				
C ト レンチ	不	R																				
		L																				
	明	不																				
不 明	不	R																			1	
		L																				
	明	不																				
合 計	不	R																			1	
		L																				
	不																				1	

表-29 ネズミ遺存体出土状況

出 土 地 点	層 位	部 位	個 数
さ - 17	第Ⅳ層	右 寛 骨(S)	1

表-26 ウマ歯牙・顎骨出土状況

出 土 地 点	層 序	部 位	個 数
B トレンチ	不 明	臼歯破片	1
D トレンチ	ク	ク	1
不 明	第 I 層	ク	2

表-30 ネコ遺存体出土状況

出 土 地 点	層 位	部 位	個 数
B トレンチ	不 明	左 上腕骨(O)	2

嘉門貝塚A区における動物遺体の特徴

I 節足動物 甲殻綱

比較的保存の良いカニ類のハサミ脚の部分が検出されている。沖縄の海岸ではカニ類の生息は豊富である。種類も多い。従ってその補食は当然考えられるが、保存の条件が限定され、そのままでは保存されない。しかし、火を受けると硬化して骨と同様になる。全身で、ハサミ脚の部分が頑丈でよくのこる。大型のノコギリガザミその他が検出されており、ノコギリガザミ



第63図 遺跡周辺の古環境(マングローブ林)推定図

昭和22年浦添村現況地形図

が多い。このガザミは河口のマングローブ域や内湾に生息する。おそらく、嘉門貝塚の近くには、このような水辺の環境が開けていたに違いない。嘉門貝塚の立地は砂丘上にあり、その前面には礁湖(ラグーン)が開け、主たる漁場になっていたはずであるが、遺跡の北東側低い丘を越えた東側には現在のシリソ川谷が南北にのびて内湾を形成していたはずである。貝塚時代後期、ここは上流から流され堆積した土砂によって次第に埋められ河口の状況を次第につくって来ていたと思う。マングローブ林が育っていたと思う。このような環境下にノコギリガザミは生息する。現在では刺網を使ったり、巣穴をみつけて捕ったりしているが、同じような方法は当時もあったのではないかと推測している。ノコギリガザミがどの程度補食されていたか、カニ類の遺骸の保存の条件の特殊性を考えると(つまり補食したものすべてが遺存するわけではなくさうなので)、実際にはさらに多かったのではないかということも推測される。カニ類については今後も注意していく必要があろう。

棘皮動物

ウニ類の棘が採集されている。沖縄でのこの種の遺骸の出土は多くない。多量に補食できる生息量はなかったかも知れない。

脊椎動物

魚類

発掘の面積の割には魚類骨の出土は少なかった。ブダイ、ベラ類とハマフエフキダイ等で魚類の主体が占められていたが、ハリセンボン科の魚が他の種類に比べて多かったことが注目された。貝塚時代後期の貝塚では、ハリセンボン科の比較的多いことは、伊江島のナガラ原西貝塚などでもみることができたが、ブダイ類よりも多いと云うことはなかった。これについてもB区資料の調査結果を待ちたい。

爬虫類

ウミガメ類の多いのもこの時期の特徴であるが、本貝塚の場合でもそうした傾向をみることはできたと思う。また、ウミガメの捕獲で容易なのは産卵のために上陸している場合であろうが、小型のウミガメは外海での捕獲かと思われる。

哺乳類

哺乳類の種類、骨の数量は多くなかった。しかし、クジラ類、ジュゴン、イヌ、リュウキュウイノシシは大型の沖縄哺乳類の代表的な種類であって、これらを出土する遺跡は貝塚時代からグスク期に至るまでみることができる。このうちクジラ、イルカ類の骨はごく少ないので普通で、ジュゴンについても普通に検出されているのは肩甲骨、上腕骨そして肋骨が最も多い。これは骨器の素材として保管されていたことが考えられ、胸椎などと肋骨も集められていたことが推測される。リュウキュウイノシシは野生する唯一の陸棲大型獣で、捕獲のためにいろいろな工夫がこらされたと思う。イヌは狩猟のために飼われた唯一の家畜であったが、その確かな埋葬例を今回も確認することはできなかった。

第V章 ま と め

今回の嘉門貝塚の発掘では、沖縄貝塚時代後期と、古琉球・近世琉球から近代にいたる遺物と沖縄貝塚時代後期の集落址と近世琉球の畠道の石組遺構と畠区画とみられる石列遺構などが発見された。このほか少量だが沖縄貝塚時代前期の土器も出土している。

この発掘の最大の成果は、沖縄貝塚時代後期中葉ころの集落の状況が明らかにされたことだと考えられるので、ここでは遺物・遺構の分析では果たされていない遺跡の全体構成について概略をまとめておきたい。

今回の調査報告は、発掘調査のうちの嘉門貝塚A区と呼んでいる地区であり、A区東隣りのB区については次回に行う予定である。嘉門貝塚全体の集落構成については、次回のB区の報告においてまとめることにして、ここでは、A区の集落構成についてその概略を述べることにしたい。

A区では沖縄貝塚時代後期の層から、貝層や純黒色土層の広がりと、掘建柱建物の柱穴とみられるピット群や作業用の台石(石皿)、ゴホウラ貝やアンボンクロザメ貝の集積地点などの遺構相互の位置関係がおさえられた。第64図は、第5図と第13図を合成した集落構成の模式図である。ここでは、当時地表に露出していたとみられる石灰岩岩盤で囲まれた約40m四方の範囲の中に、居住区・作業場・特殊な貝の集積場などに機能分割された集落像を描くことができる。

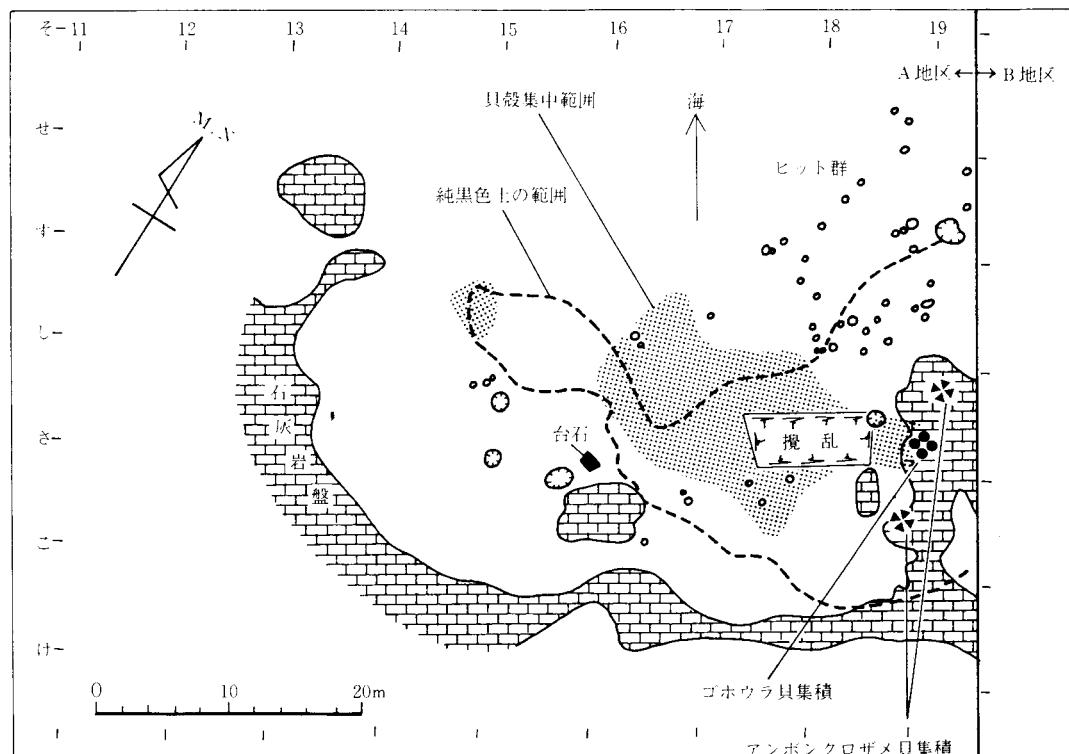
居住区だと考えられるピット群では、建物プランを復元することはできなかったが、検出されたピット数からみて、数棟の建物ついどの小集落だったと考えられる。この居住区の南側に貝集中地区がある。そこには77Kgもある大きな台石(石皿)が据えられ、そして叩石や、石斧、小さい石皿などの道具も多く出土している。この貝集中地区が、貝の処理をふくめた作業場だと考えられる。そして、この作業場から居住区にかけては有機物をふくんだ純黒色土が広がっている。この純黒色土の広がりは、集落内日常生活の活動域を意味するものであろう。このような日常生活の空間の東端にアンボンクロザメ貝やゴホウラ貝の集積場が設定されている。この特殊な貝の集積場は、貝製品加工用の素材や九州との交換用の貝の保管場所であったと考えられているが、あるいは結界などの意味もあったのかもしれない。

隣接B区では、A区の居住区からつづく住居址、貝集中地点、土壙墓、集石遺構などが確認されている。したがって嘉門貝塚の集落構成の全体像は、B区の分析と合わせて行わなければならないが、このような嘉門貝塚の集落構成は、宜野湾市の真志喜安座間原第一・第二遺跡の沖縄貝塚時代後期中葉ころの集落構成と類似している。安座間原第一・第二遺跡では、多数の竪穴住居址群、大きな台石(石皿)をともなう貝集中地区、アンボンクロザメやゴホウラなどの貝集積、集石遺構・土壙墓などの他に炉址・区画の溝などが確認されている(註1)。しかし、いっぽうでは、安座間原第一・第二遺跡は規模・内容ともに嘉門貝塚をしのぐ大集落である。

本書第Ⅱ章の「位置と環境」で述べたように、安座間原第一・第二遺跡は嘉門貝塚とともに

一まとまりの遺跡群を構成している。そこで、嘉門貝塚を、安座間原第一・第二遺跡との関連においてとらえてみると、集落の規模・内容ともに嘉門貝塚をしのぐ安座間原第一・第二遺跡は拠点的集落の様相を呈し、嘉門貝塚は枝集落的な様相を呈していることがみててくる。嘉門貝塚の集落構成を考えていくうえで、安座間原第一・第二遺跡との遺物・遺構の比較作業が今後重要な課題となるだろう。

註1 岩屋義勝・他『土に埋もれた宜野湾』(宜野湾市教育委員会、1989年)



第64図 嘉門貝塚A区の集落構成

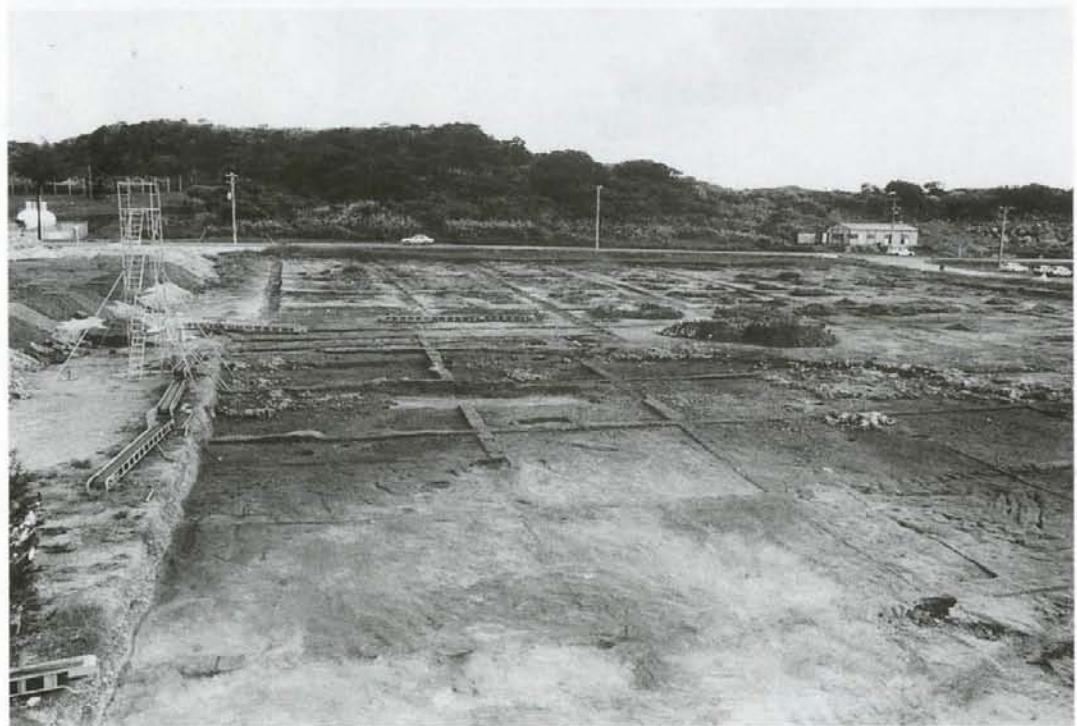
図 版



図版1 遺跡周辺の航空写真



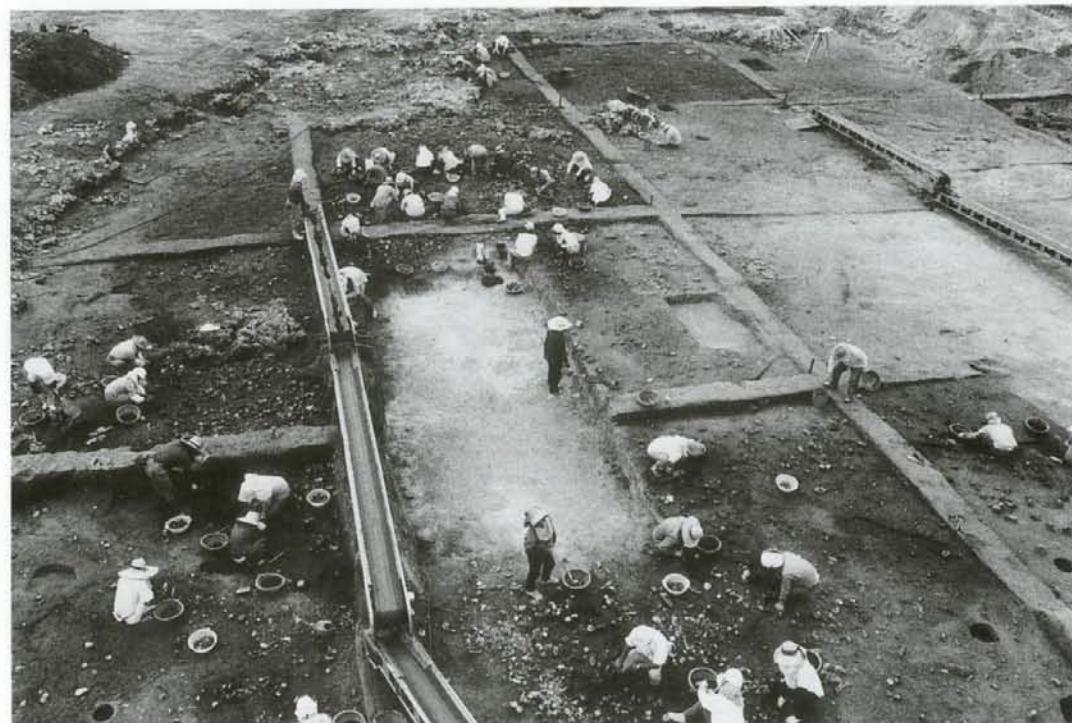
図版2 調査区東側(北より)



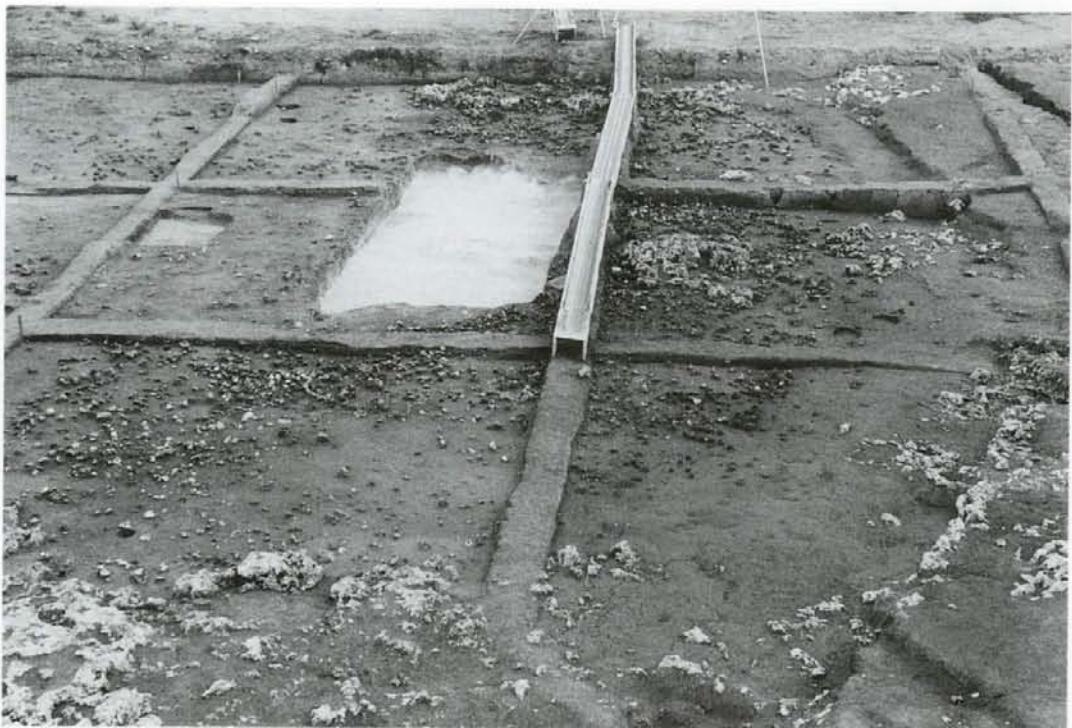
図版3 調査区西側(西より)



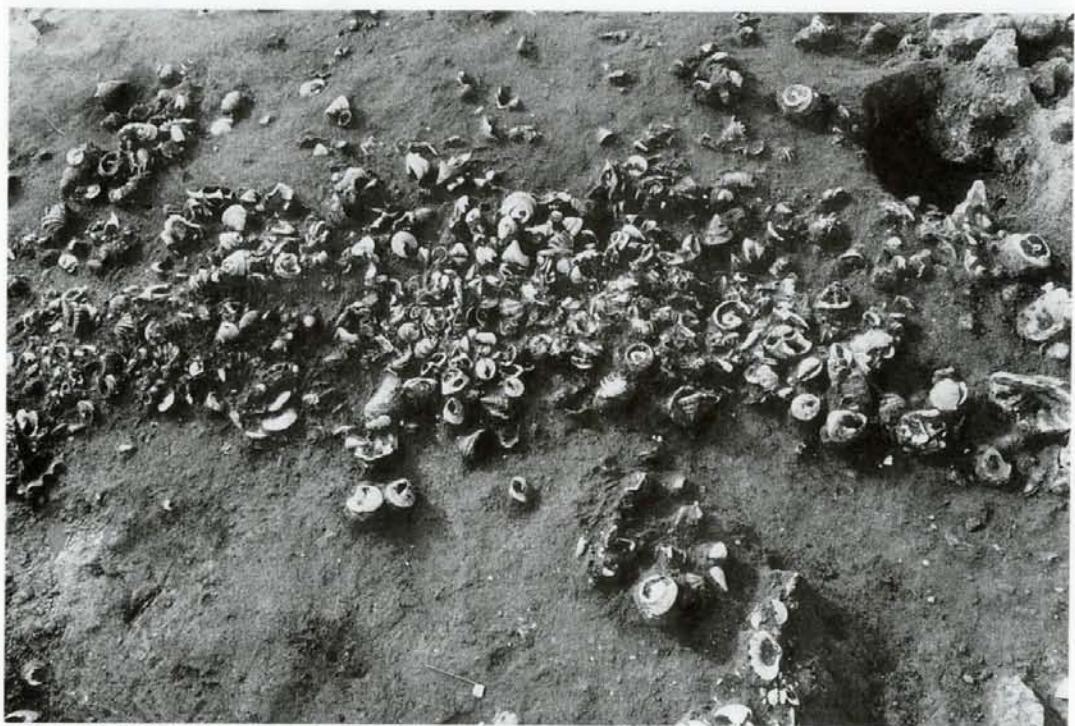
図版4 発掘作業状況(調査区東側)



図版5 発掘作業状況



図版6 遺物出土状況



図版7 遺物出土状況



図版8 18ラインの層序



図版9 加工ゴホウラ出土状況



図版10 古瓦出土状況



図版11 テストピットNo.3 遺物・軽石出土状況



图版12 第1号石列遗构



图版13 第2号石列遗构



图版14 第3号石列遗构



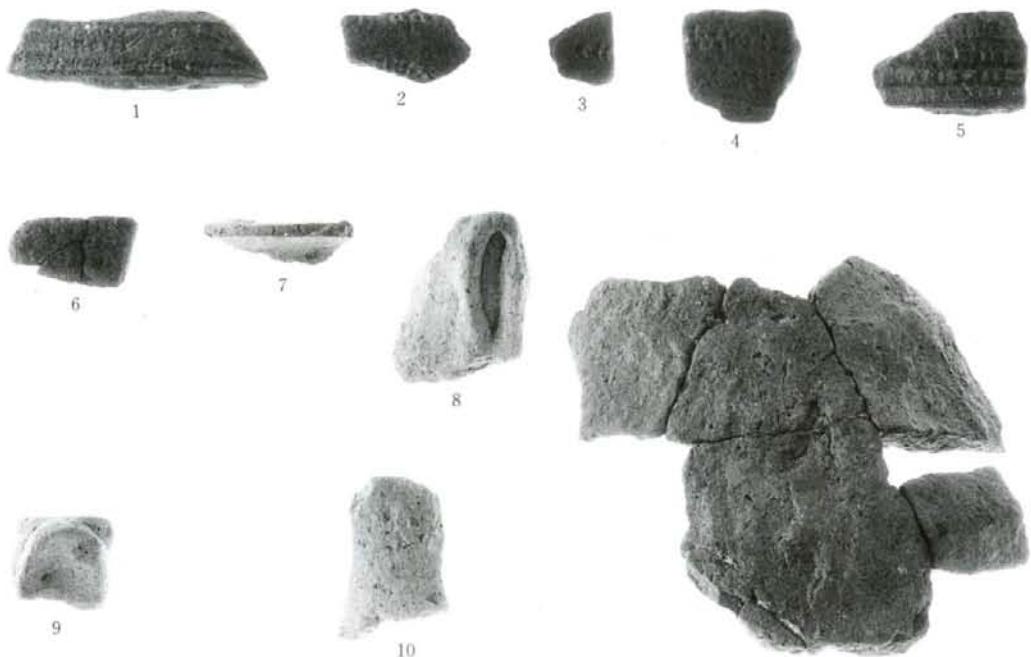
図版15 第1号貝集積遺構



図版16 第2号貝集積遺構

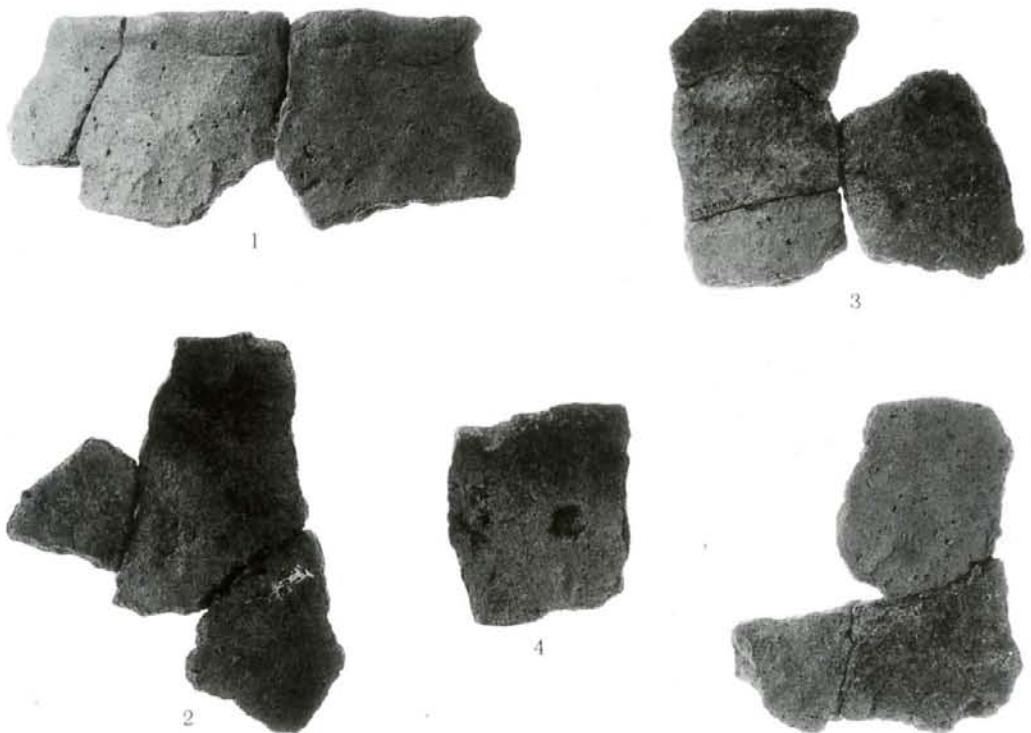


図版17 第3号貝集積遺構



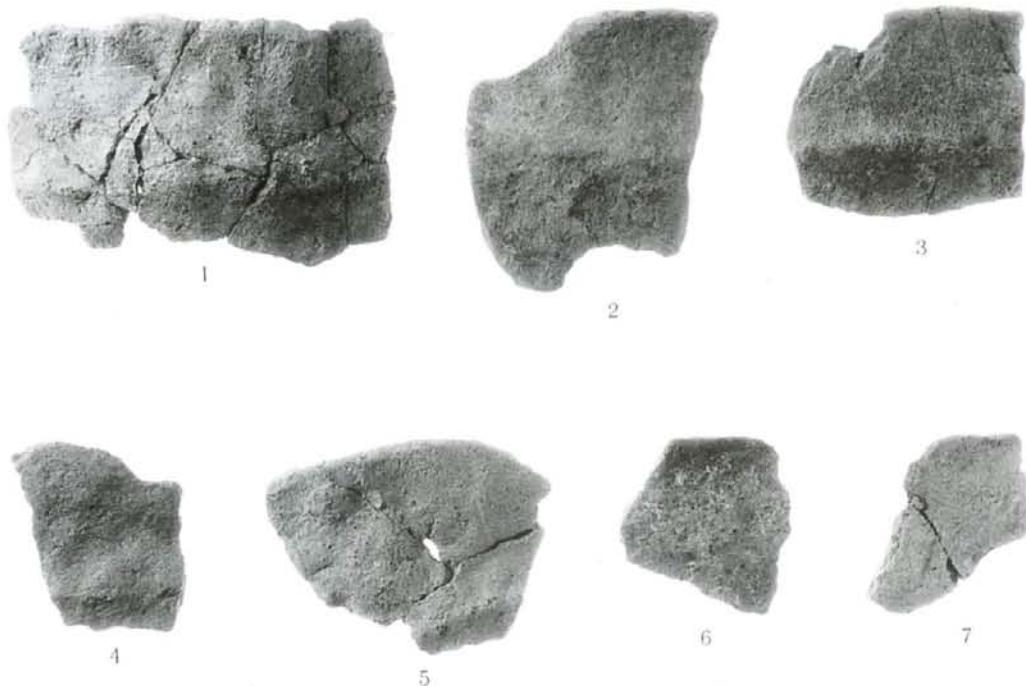
図版18 土器（高宮暫定編年前IV期相当1～6、後期相当・壺形7～11）

11

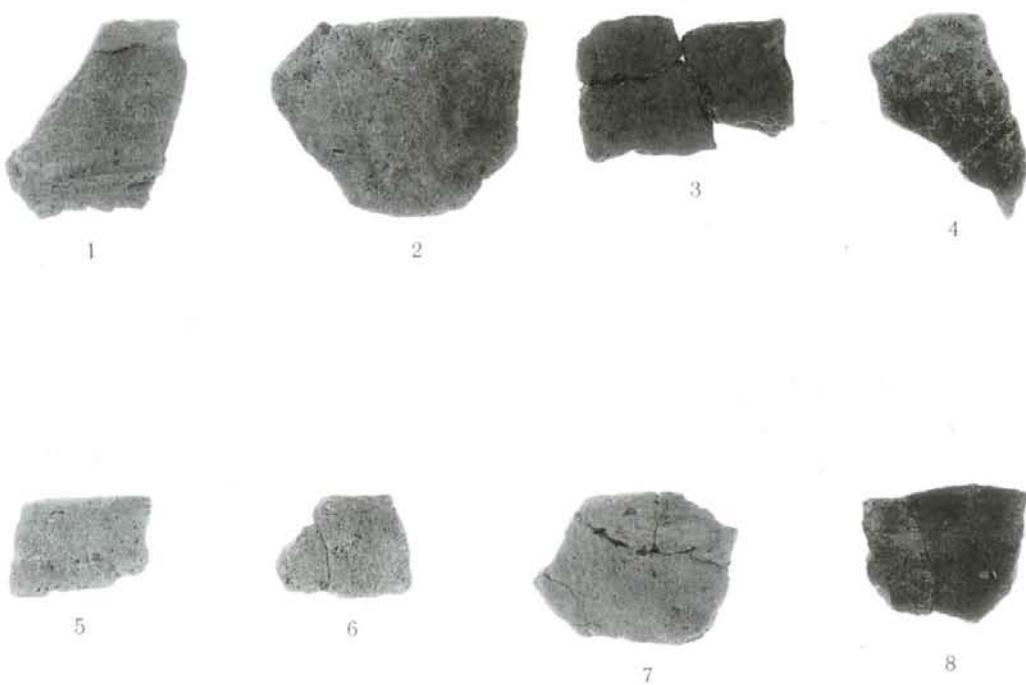


図版19 土器（高宮暫定編年後期相当・壺形1～5）

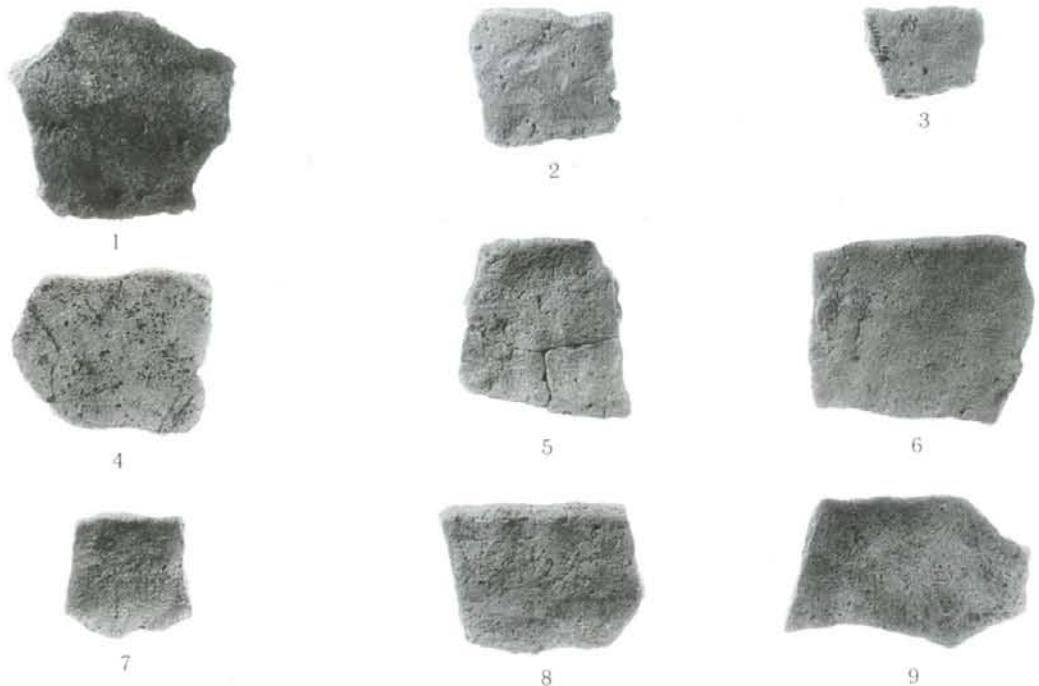
5



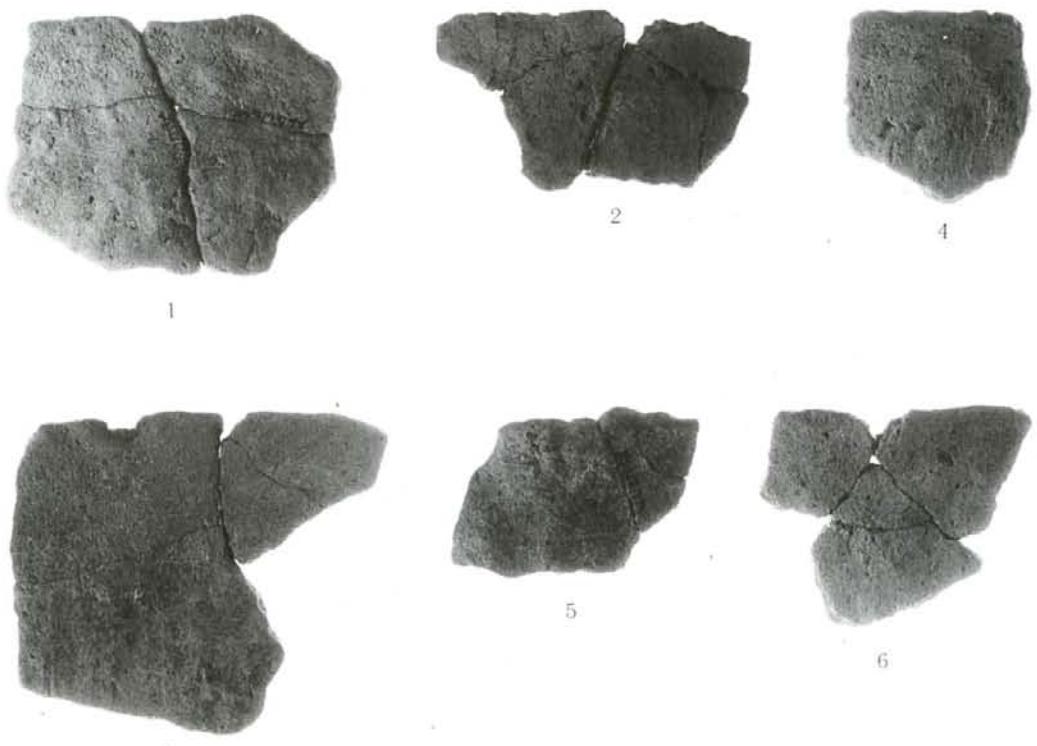
図版20 土器（高宮暫定編年後期相当・甕形1～7）



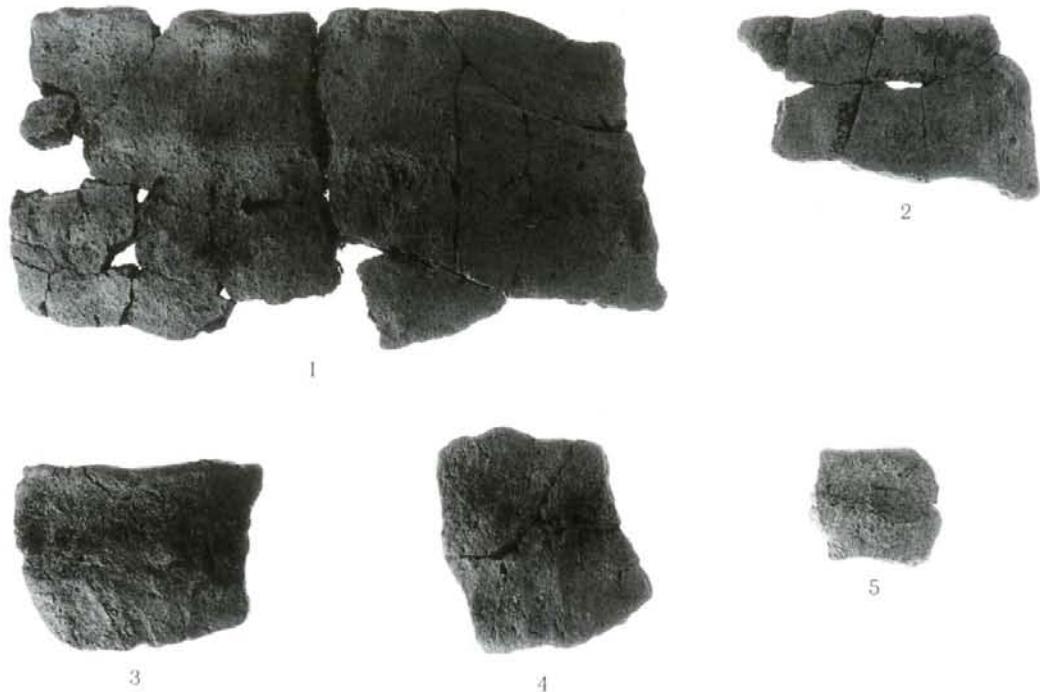
図版21 土器（高宮暫定編年後期相当・甕形1～8）



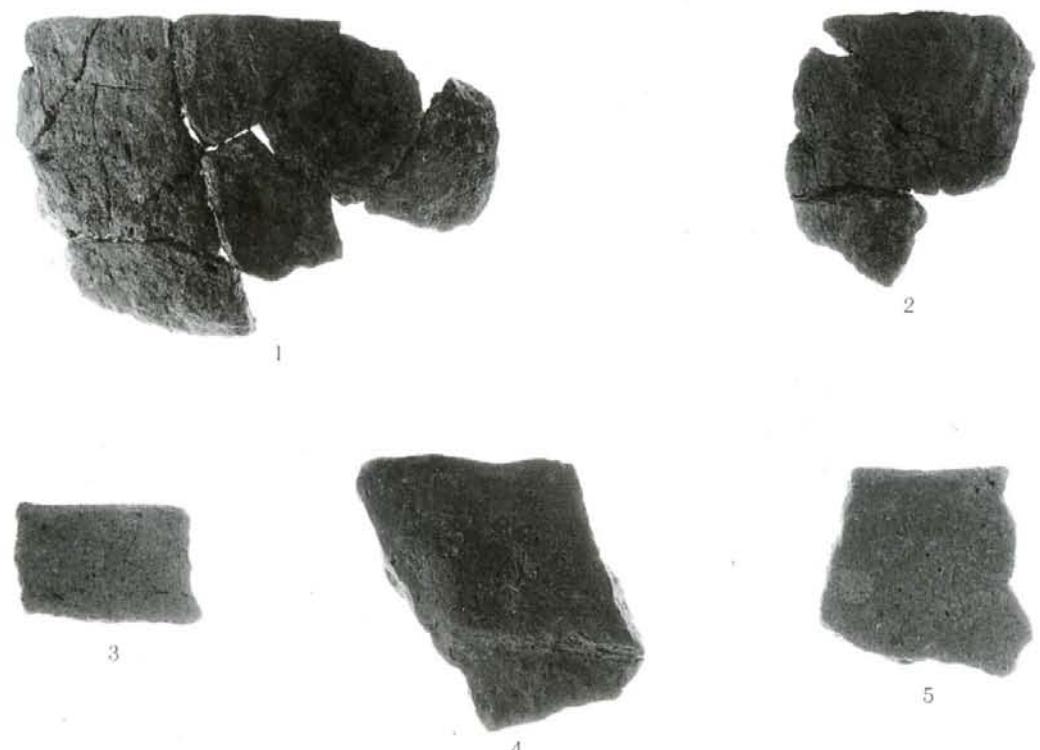
図版22 土器（高宮暫定編年後期相当・甕形1～9）



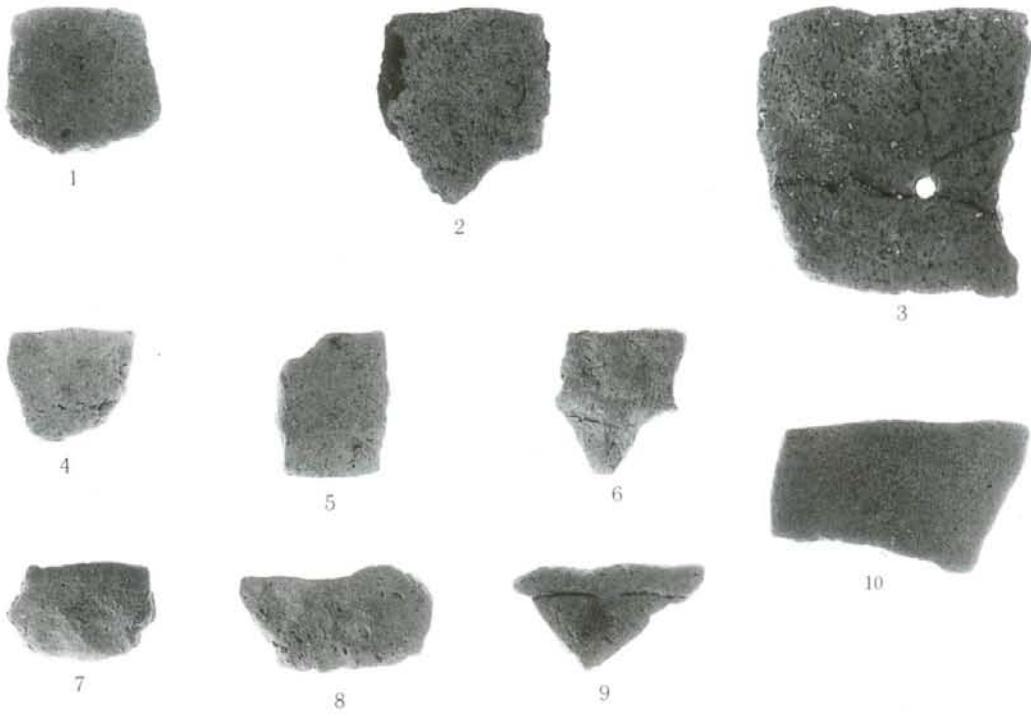
図版23 土器（高宮暫定編年後期相当・甕形1～6）



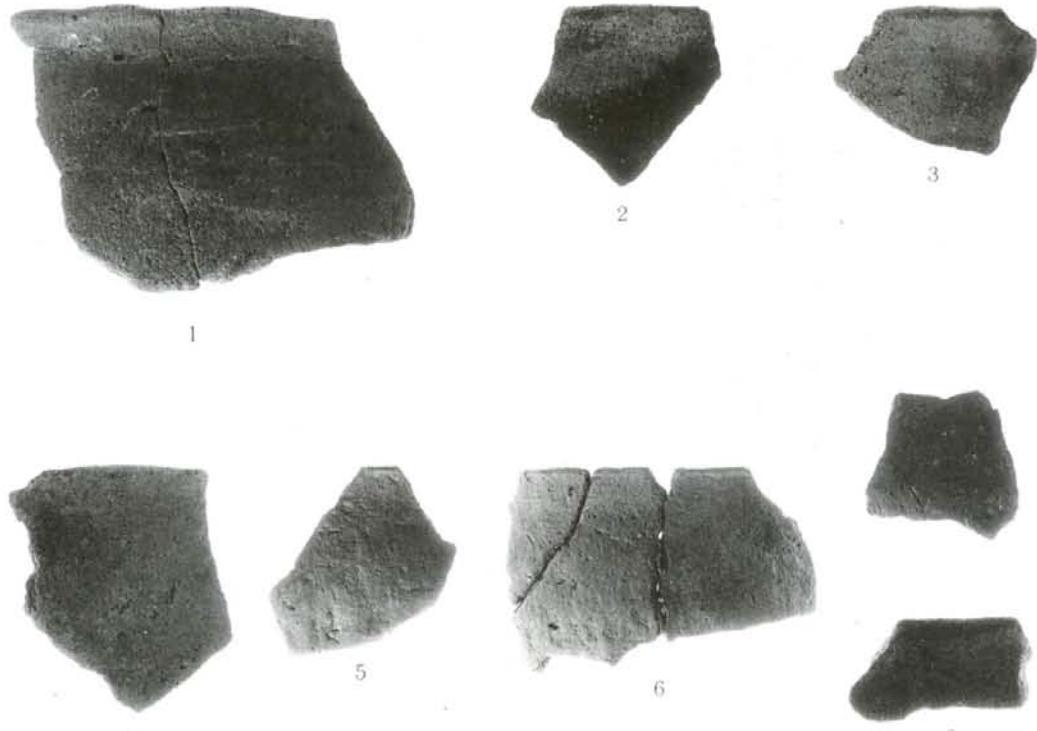
図版24 土器（高宮暫定編年後期相当・甕形1～5）



図版25 土器（高宮暫定編年後期相当・甕形1～5）



図版26 土器（高宮暫定編年後期相当・甕形1～10）



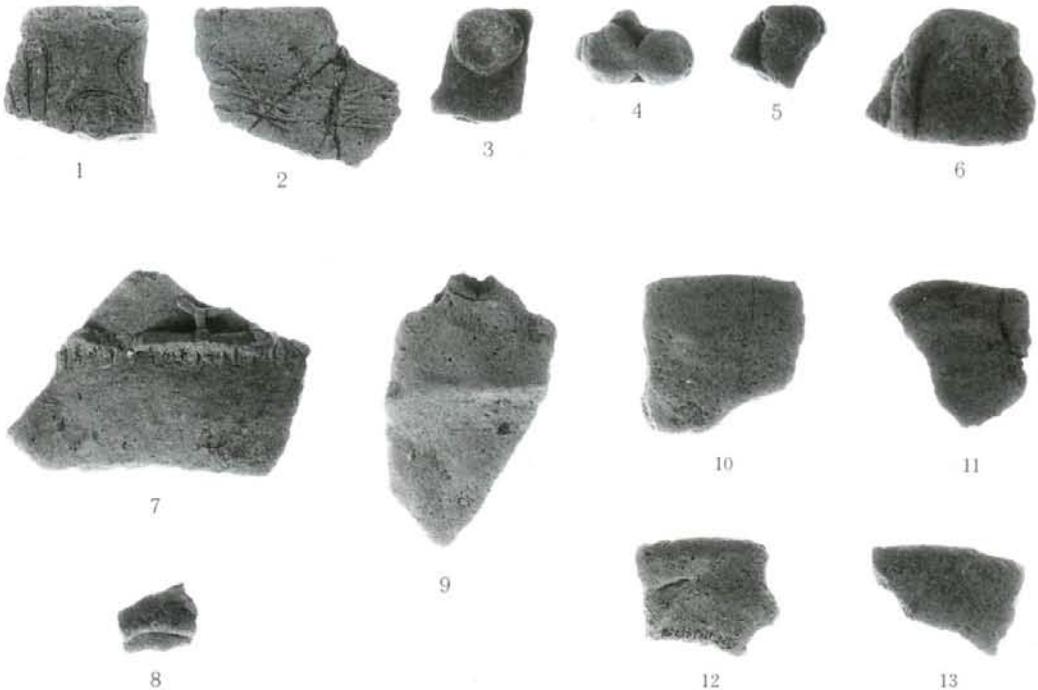
図版27 土器（高宮暫定編年後期相当・甕形1～8）



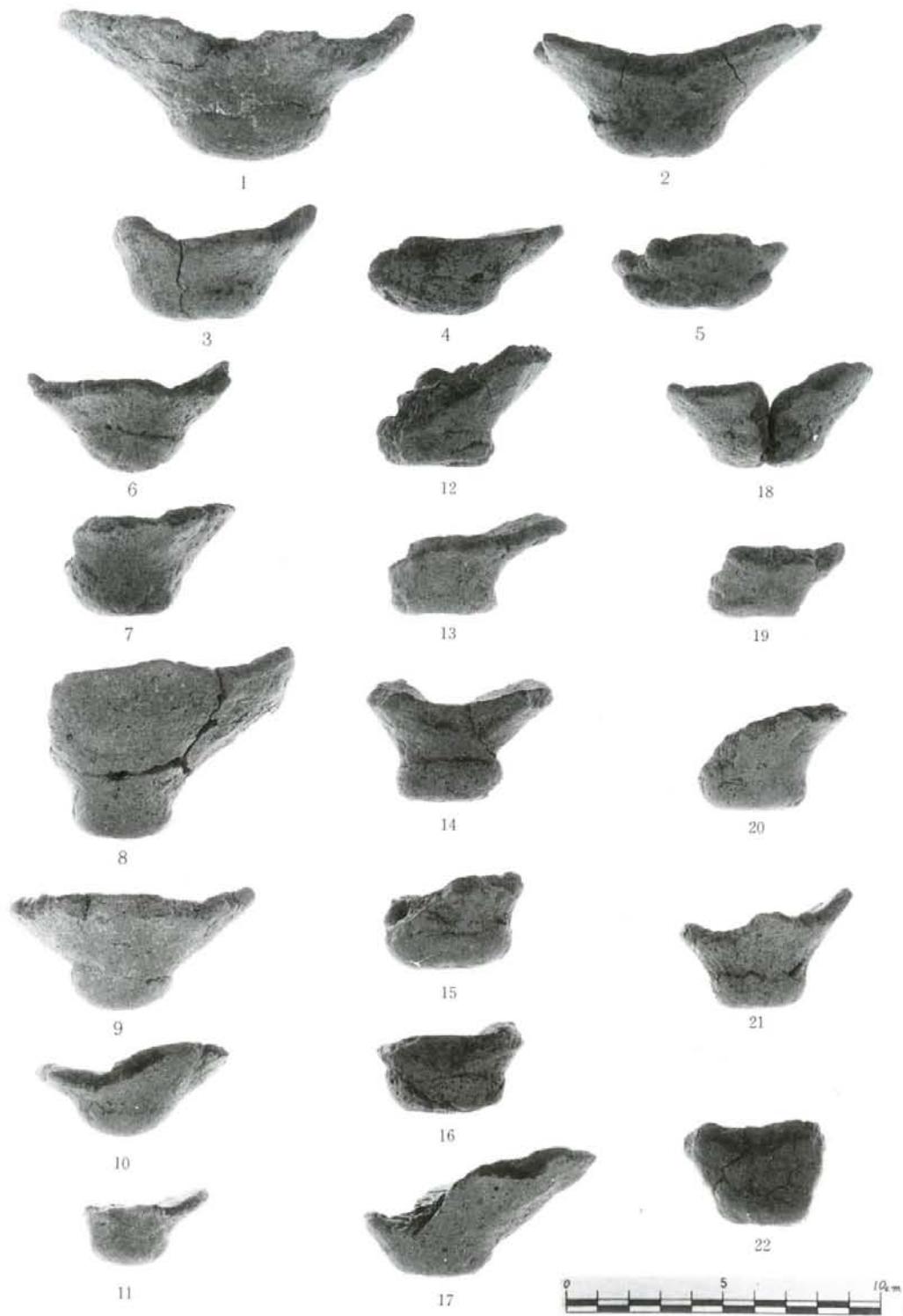
図版28 土器（高宮暫定編年後期相当・甕形1～7）



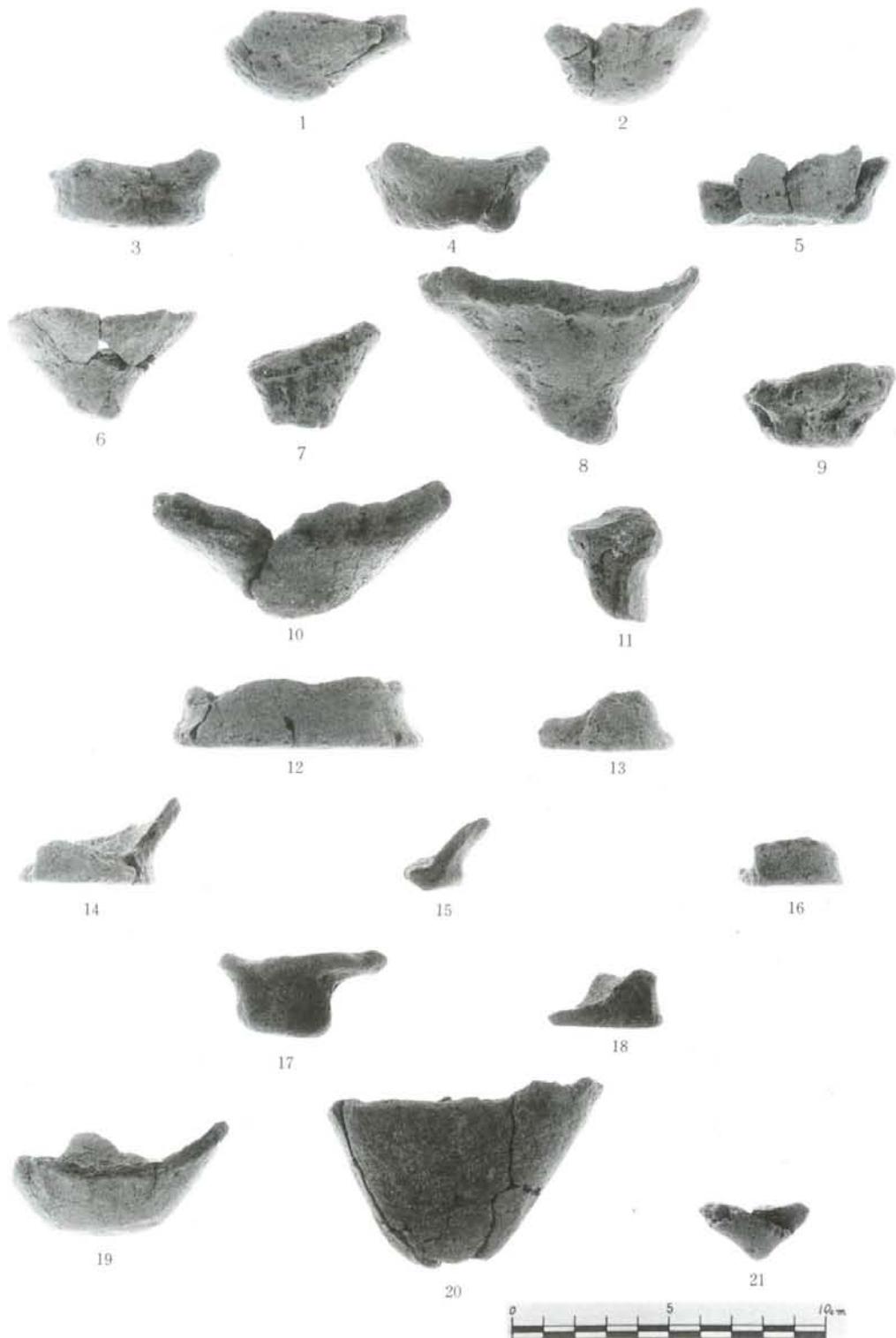
図版29 土器（高宮暫定編年後期相当・甕形1～8）



図版30 土器（高宮暫定編年後期相当有文 1～8、その他 9～13）



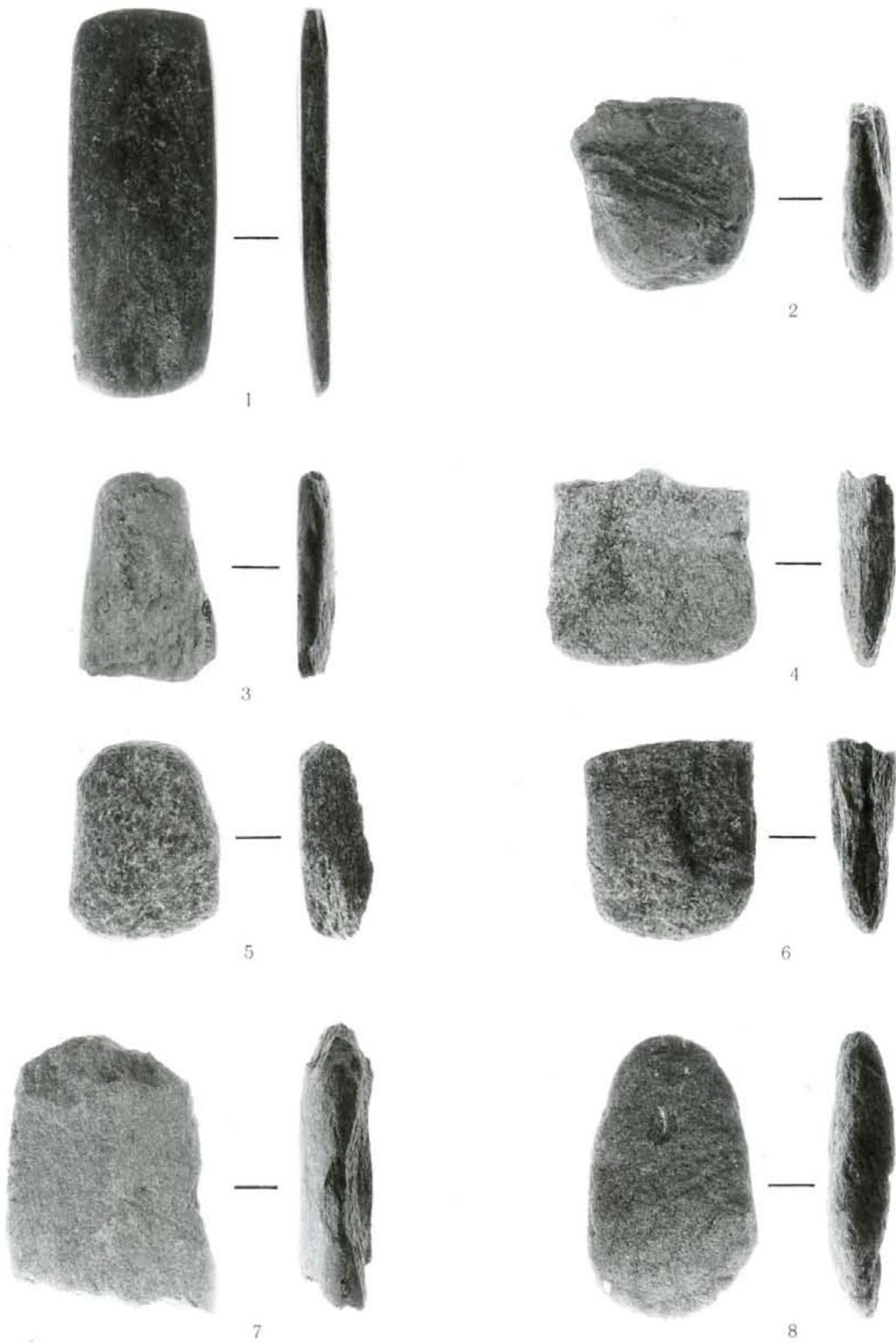
図版31 土器（底部）



図版32 土器（底部）



図版33 石斧



図版34 石斧



1



2



3



4



5



6

図版35 石斧(1・2)、敲石(3~6)



1



2



3



4



5



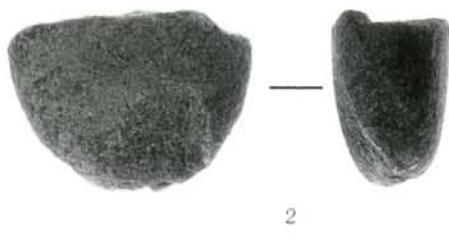
6



図版36 敲石



1

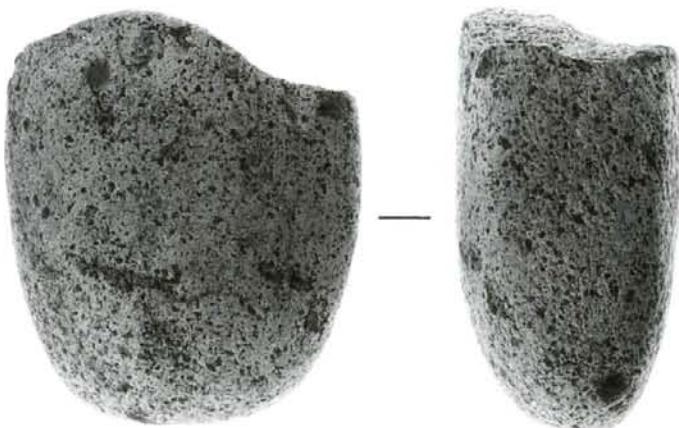


2



3

4



5

図版37 敲石



1

2



3

5



4

6

図版38 敲石



1

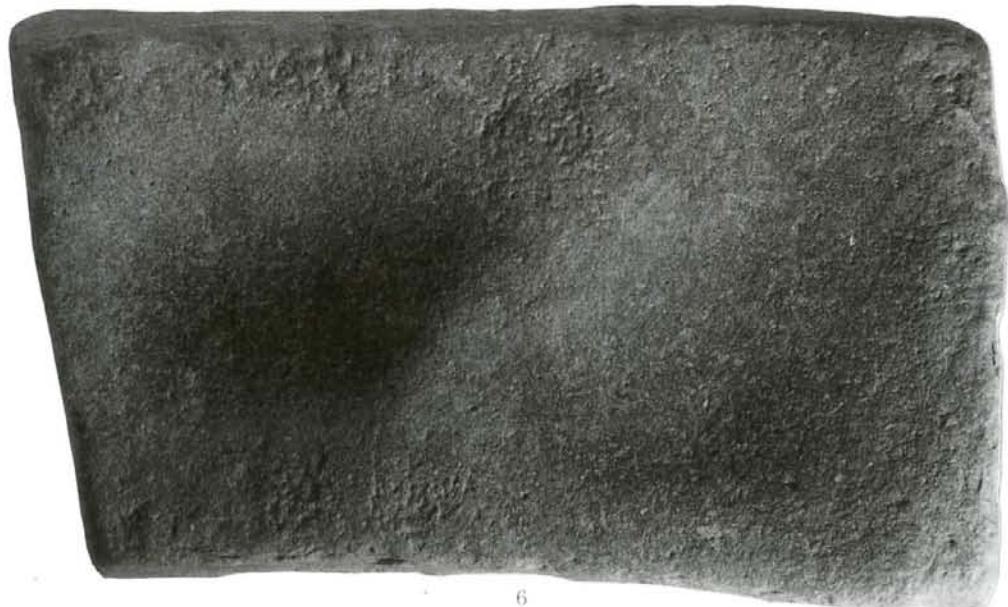
2

3



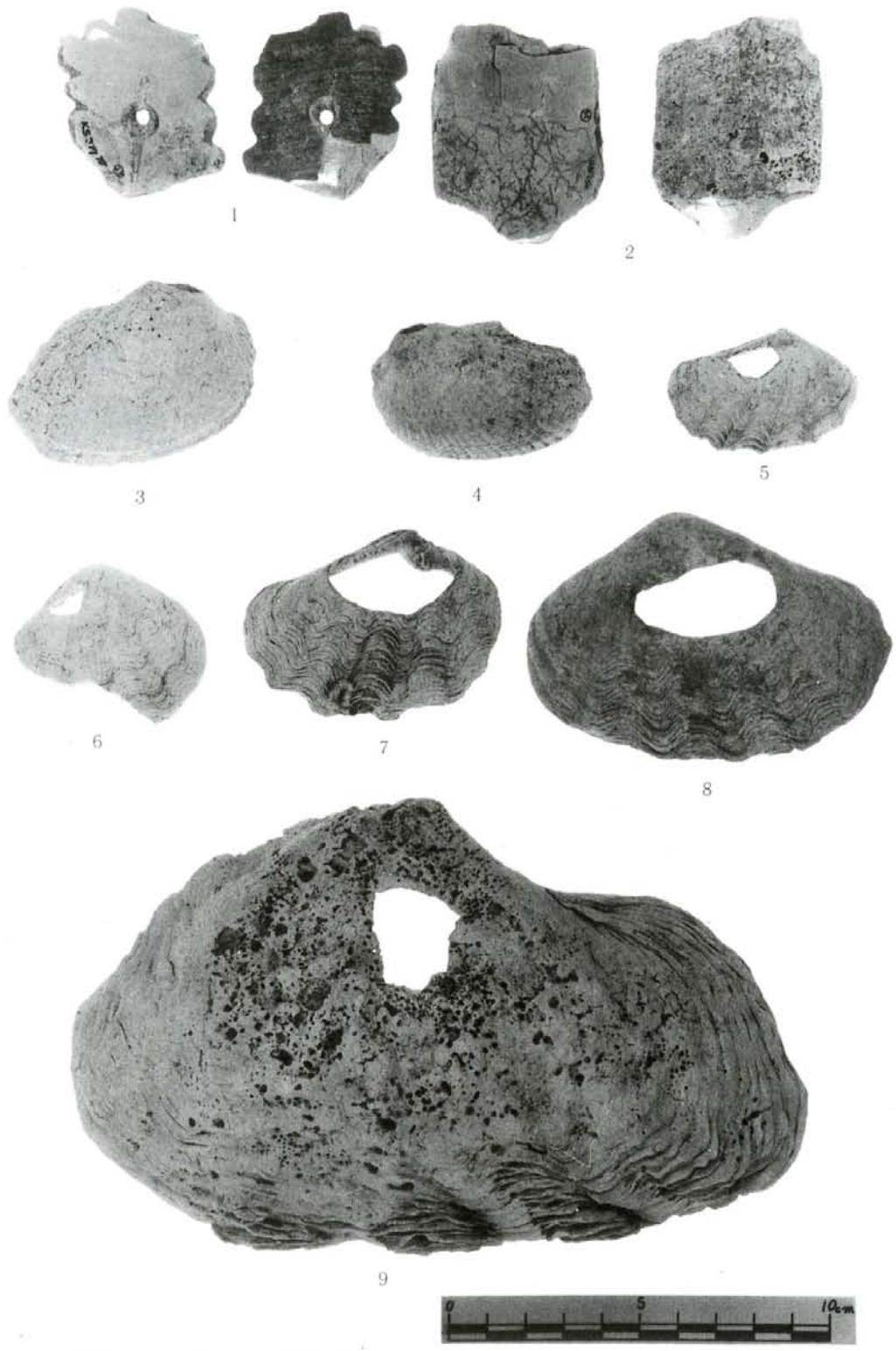
4

5



6

図版39 小形扁平石器(1・2)、有孔石器(3)、石皿(4~6)



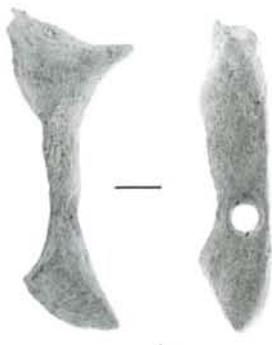
図版40 枠子状製品(1・2)、二枚具有孔製品(3～9)



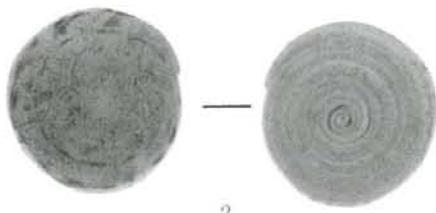
図版41 貝輪(1)



図版42 貝輪(2)



1



2



3

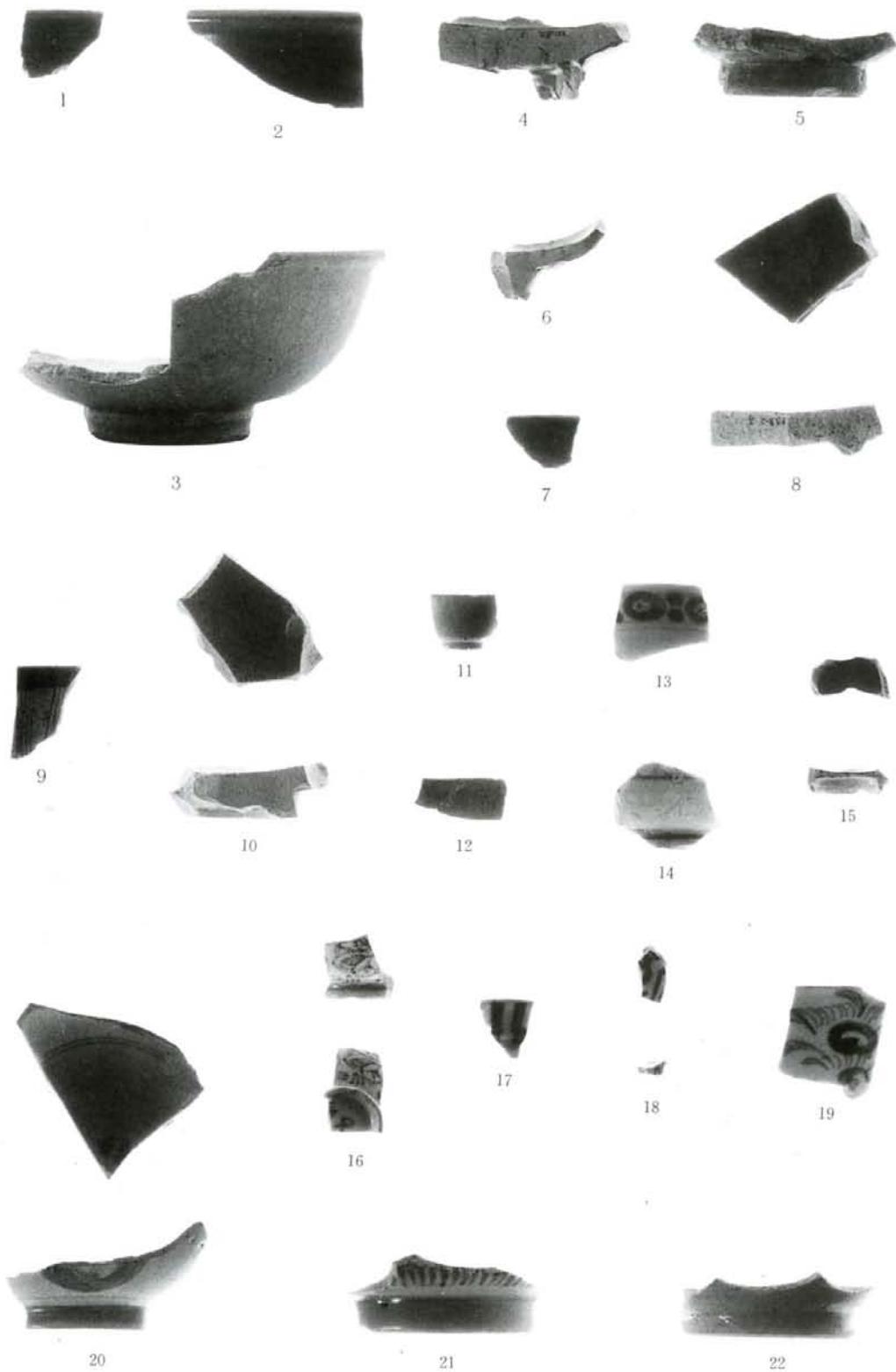


4

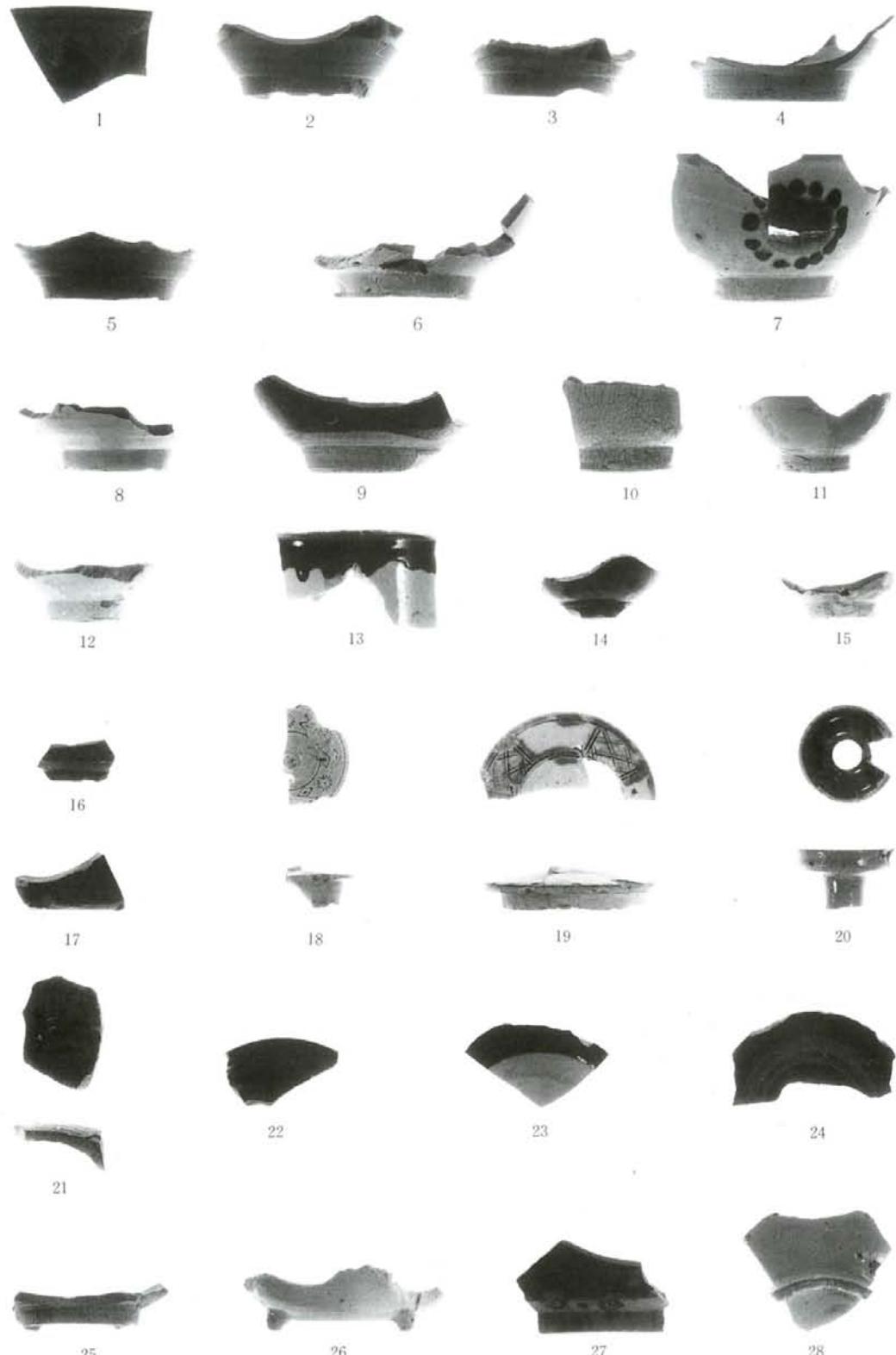


5

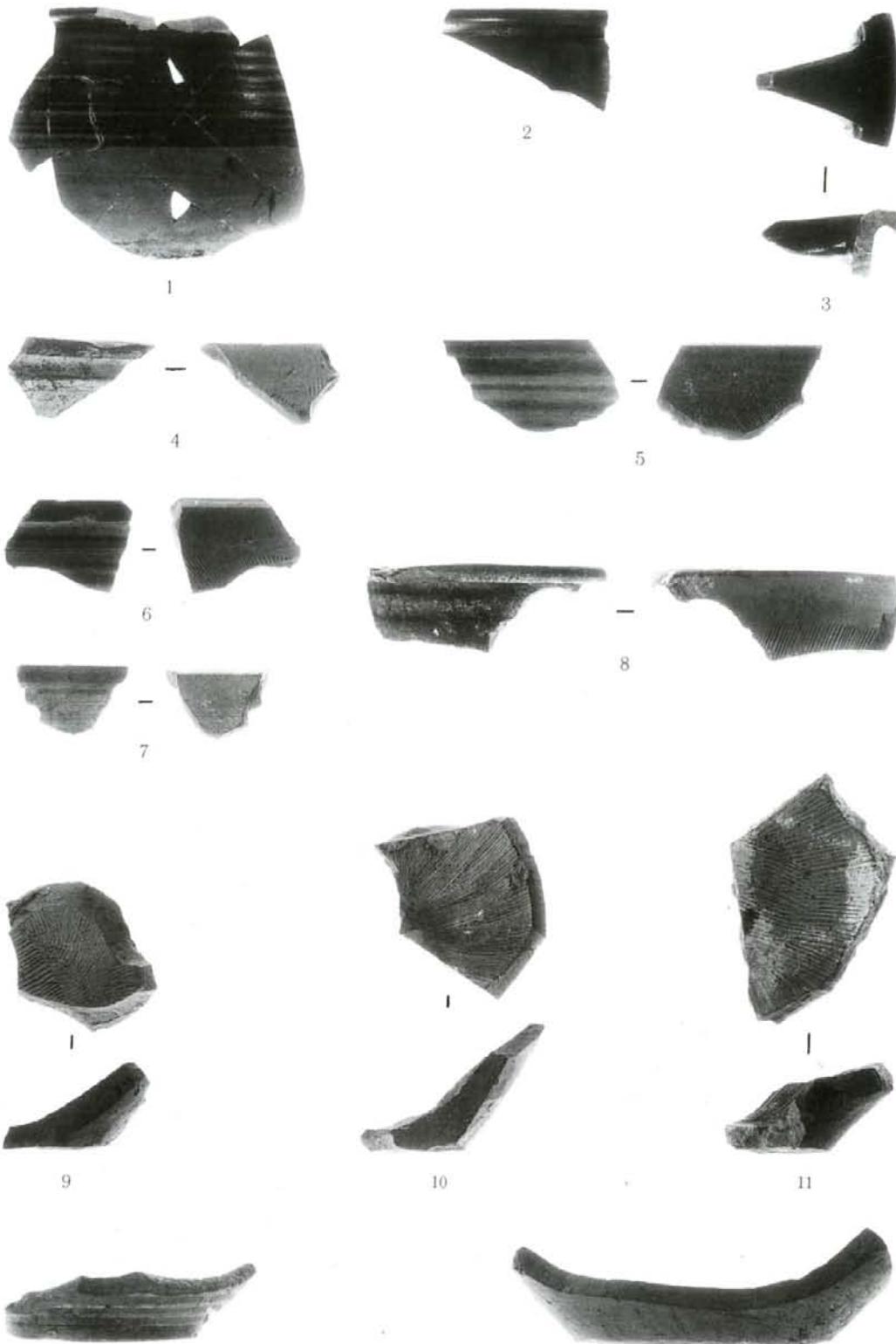
図版43 貝製品



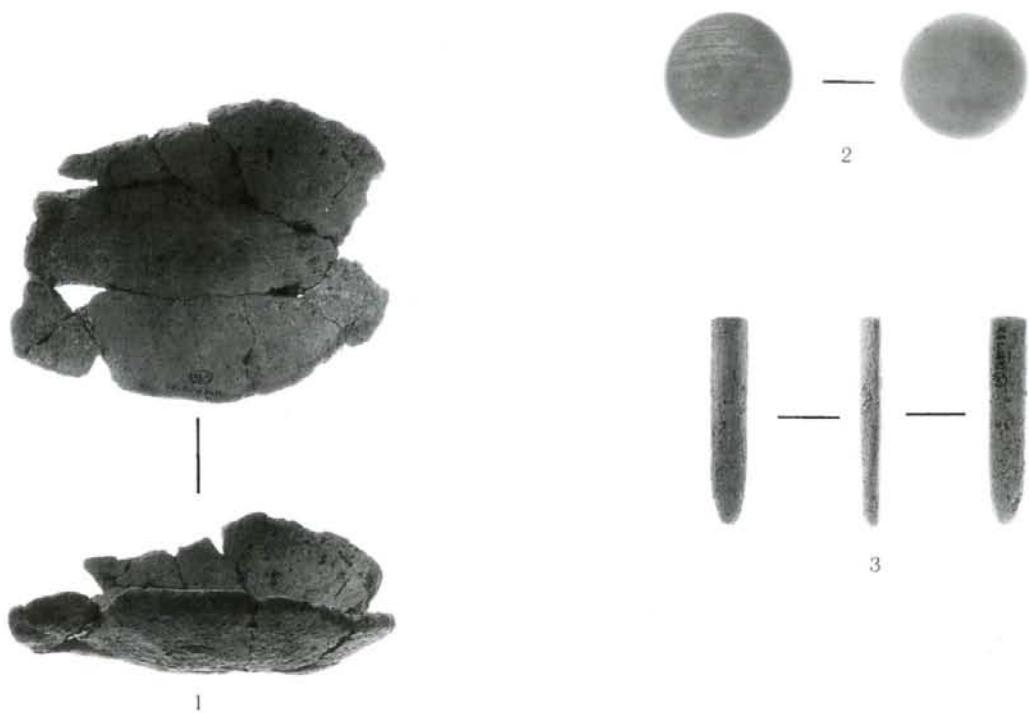
図版44 陶磁器



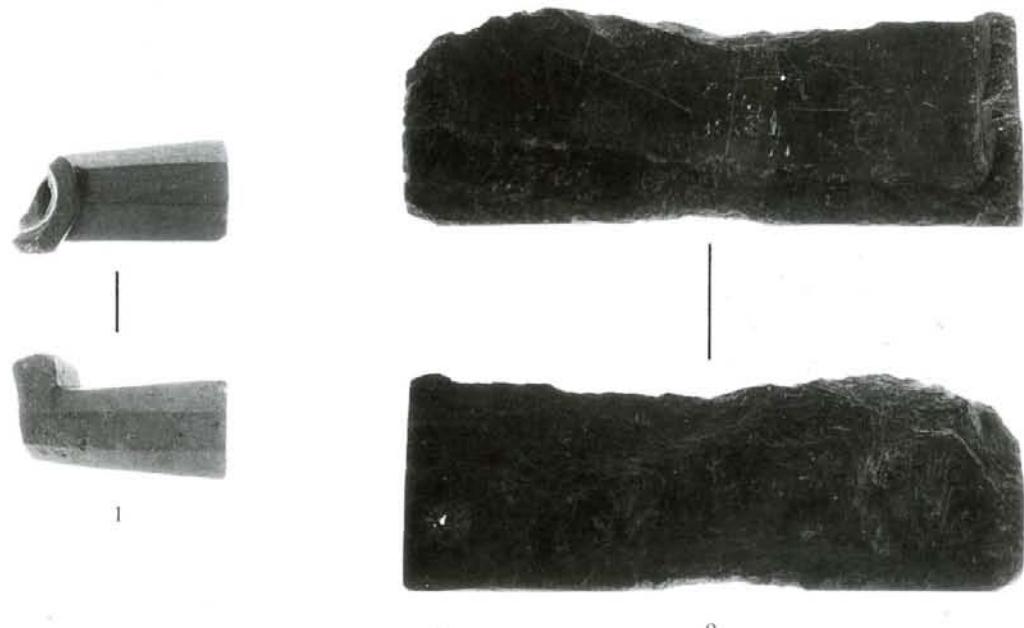
図版45 陶磁器（沖縄産施釉陶器）



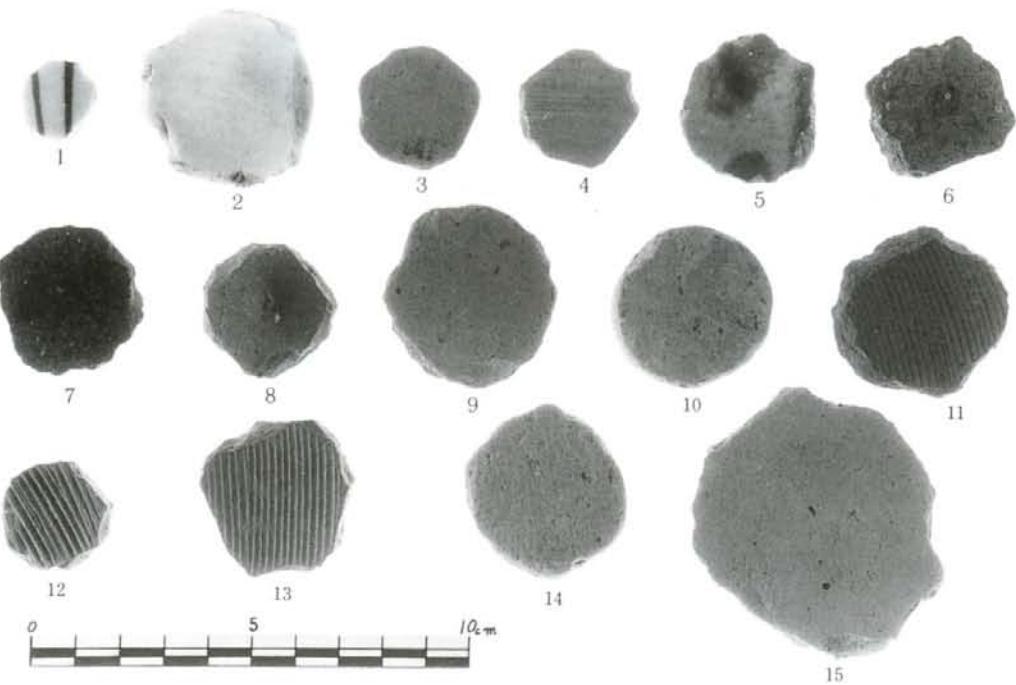
図版46 陶磁器（沖縄産軟質陶器 1～3、沖縄産焼き締め陶器 4～13）



図版47 土製品(1)、貝製碁石(2)、骨製品(3)



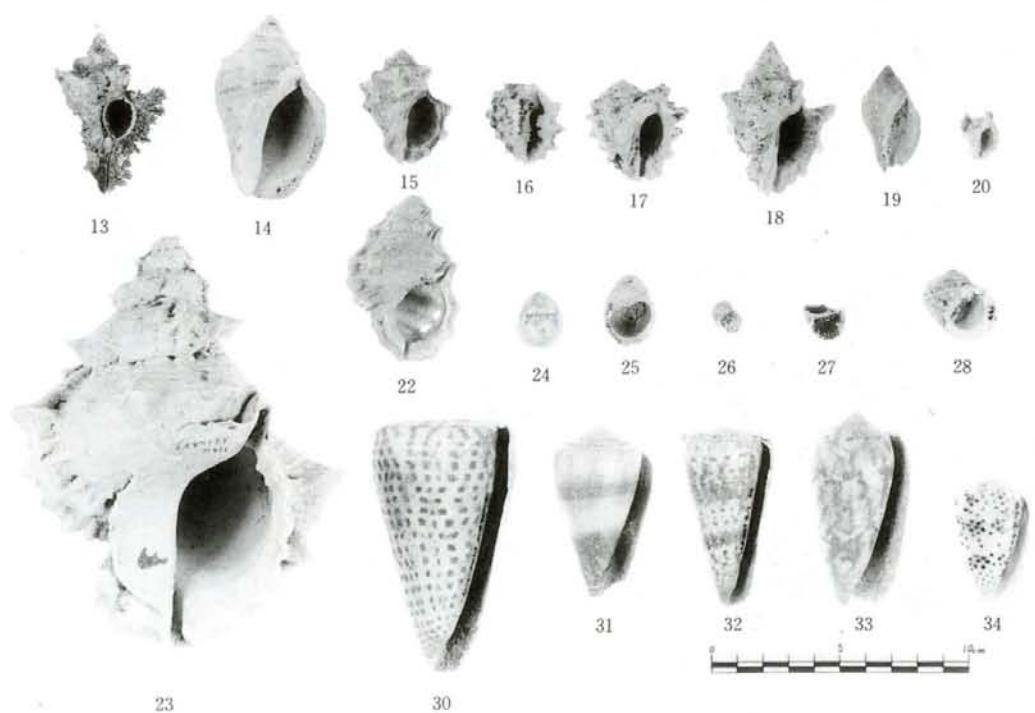
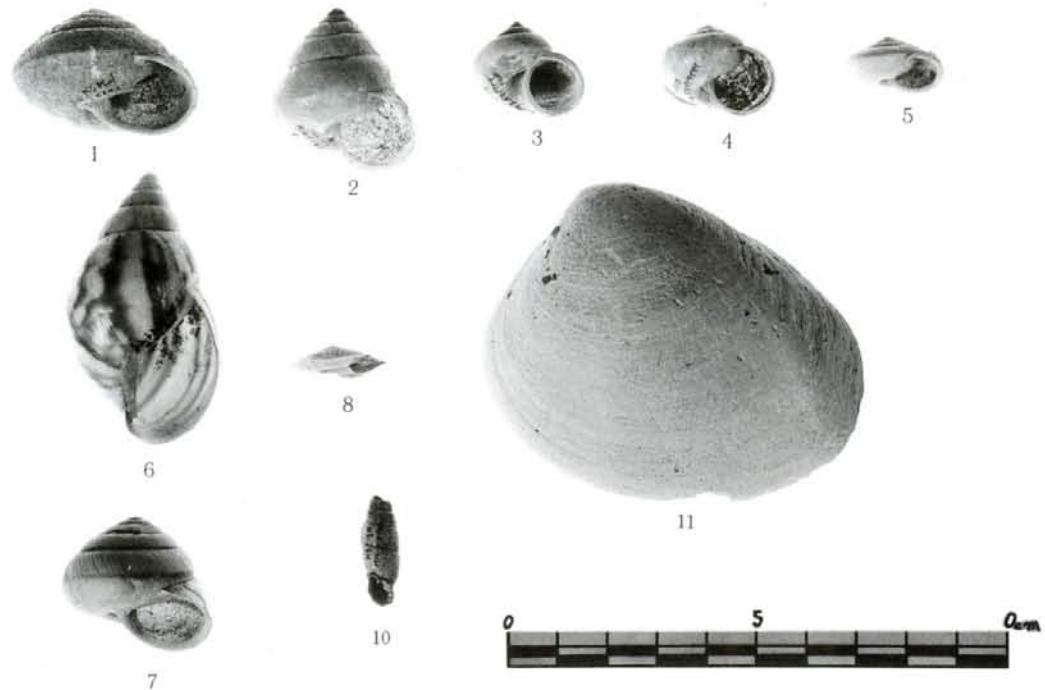
図版48 雁首(1)、硯(2)



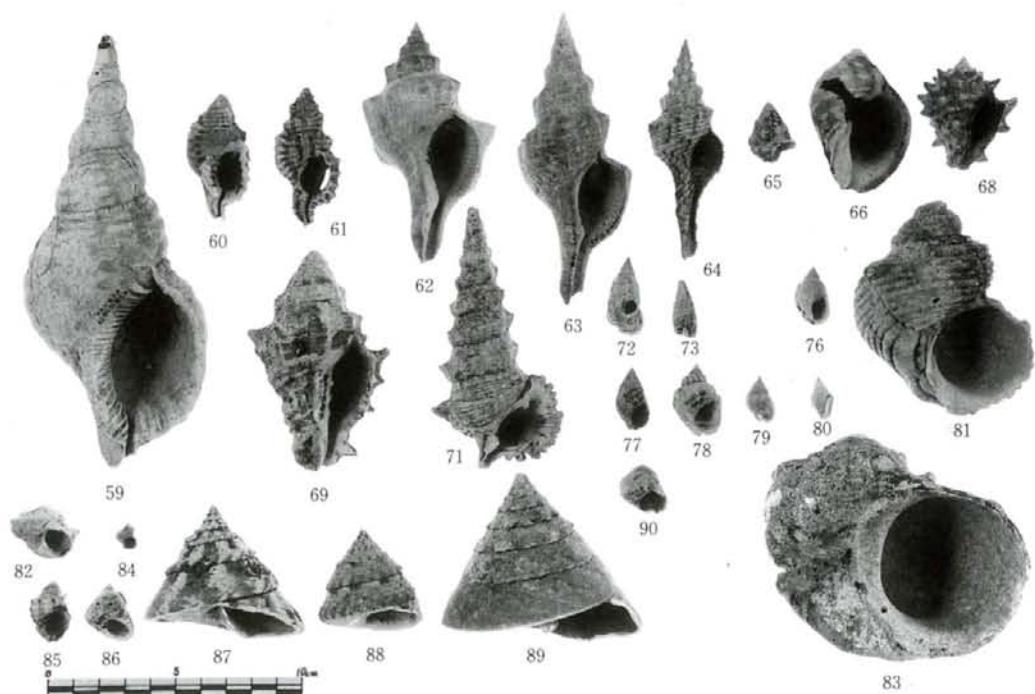
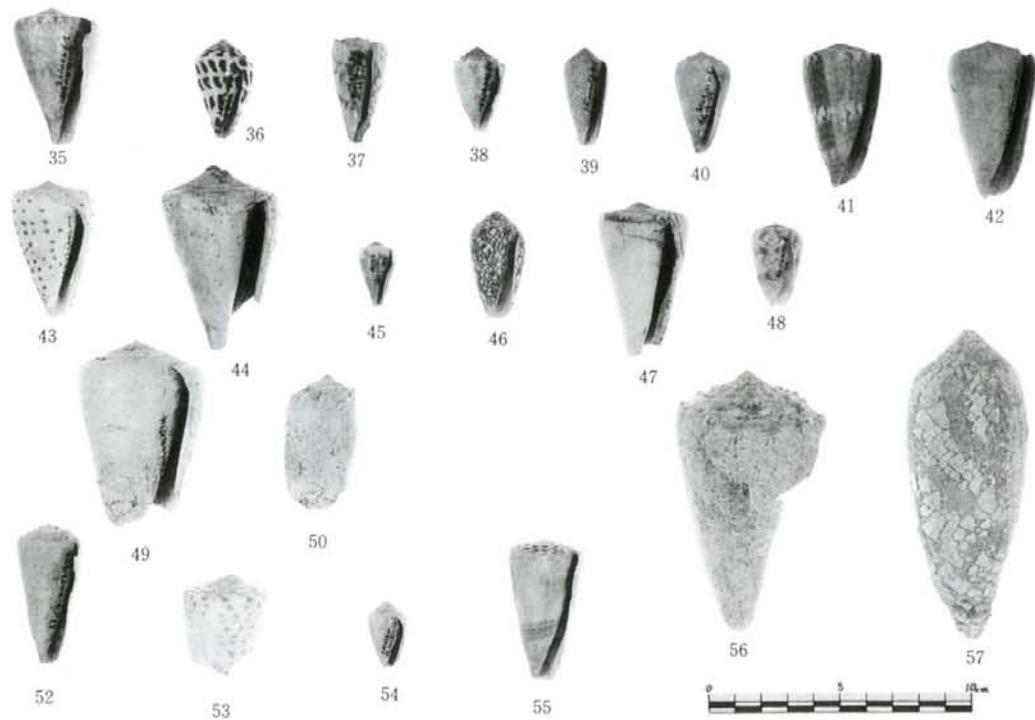
図版49 円盤状製品



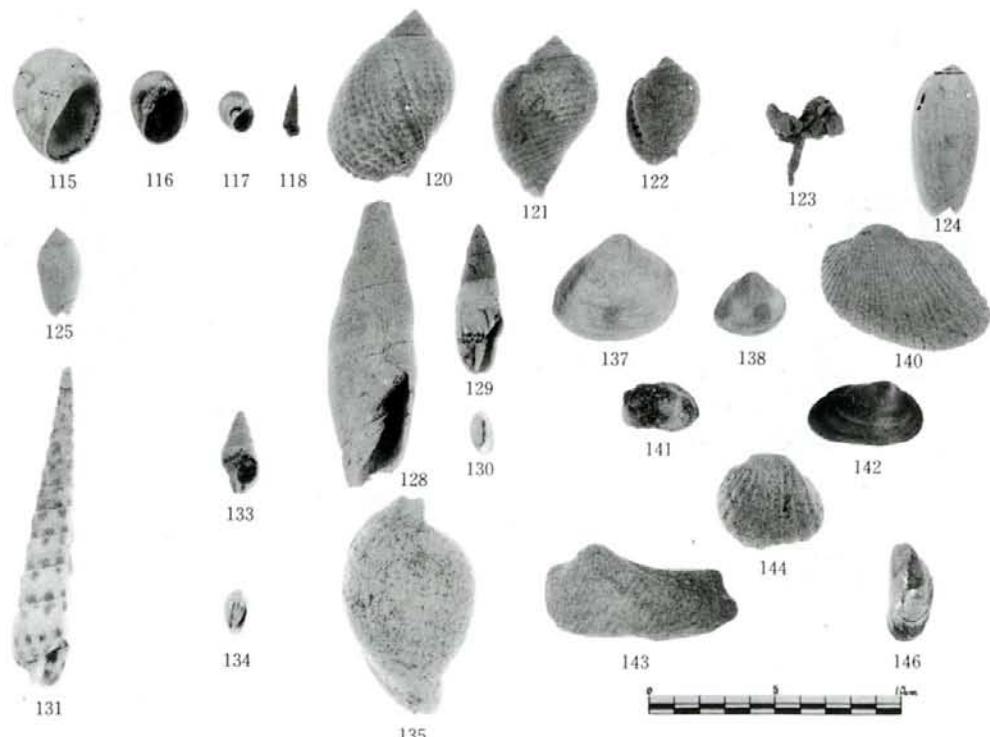
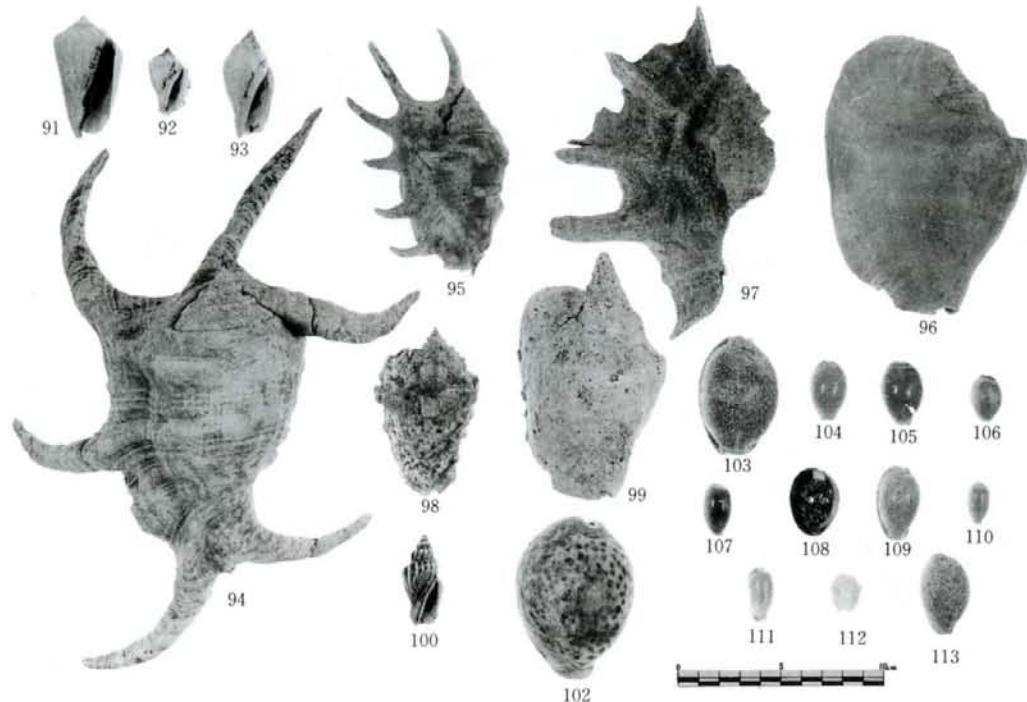
図版50 古瓦



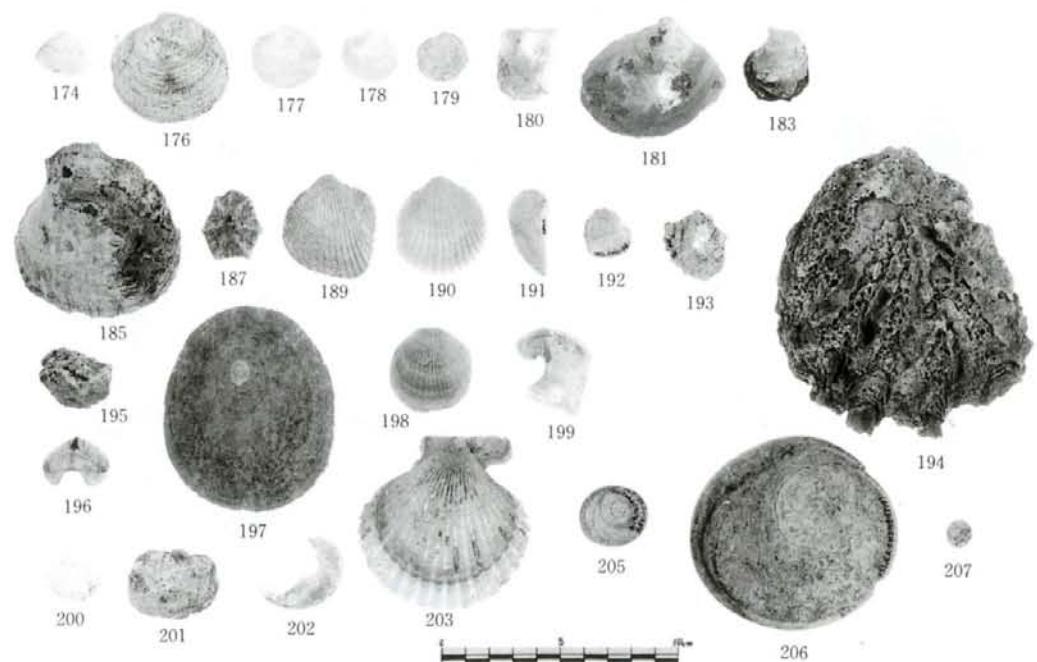
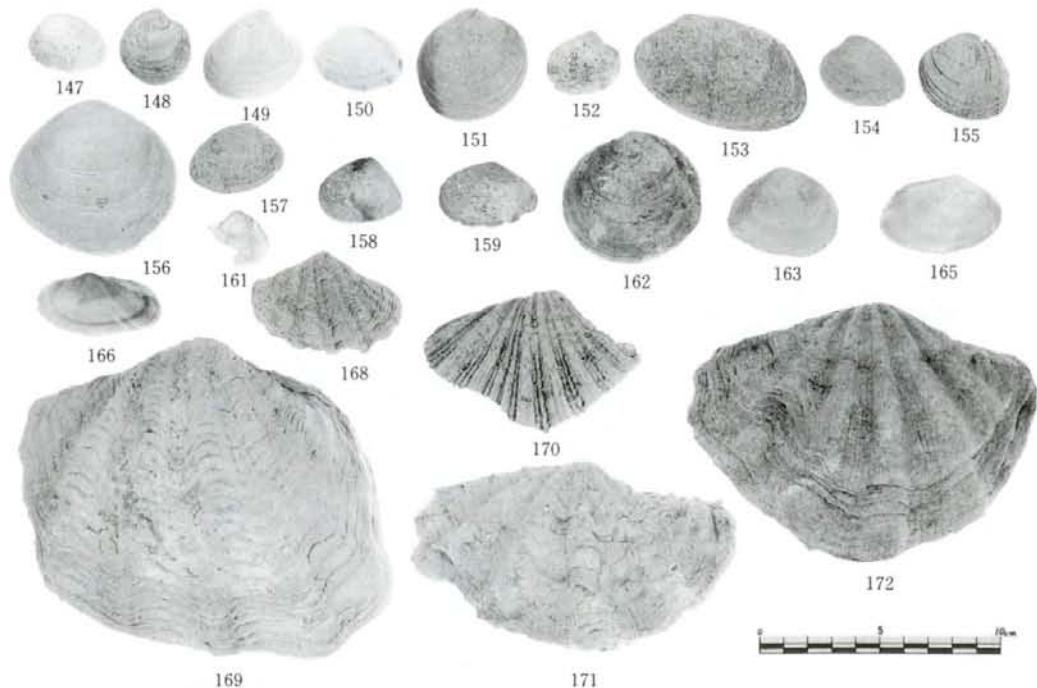
図版51 貝類遺存体(1)



図版52 貝類遺存体(2)



図版53 貝類遺存体(3)

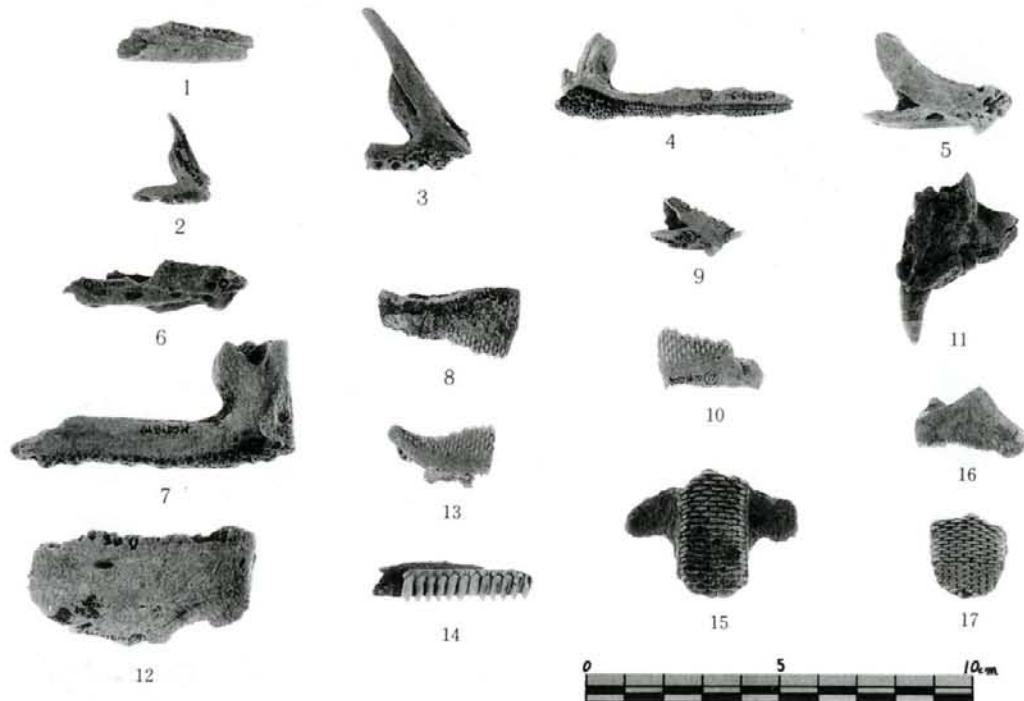


図版54 貝類遺存体(4)



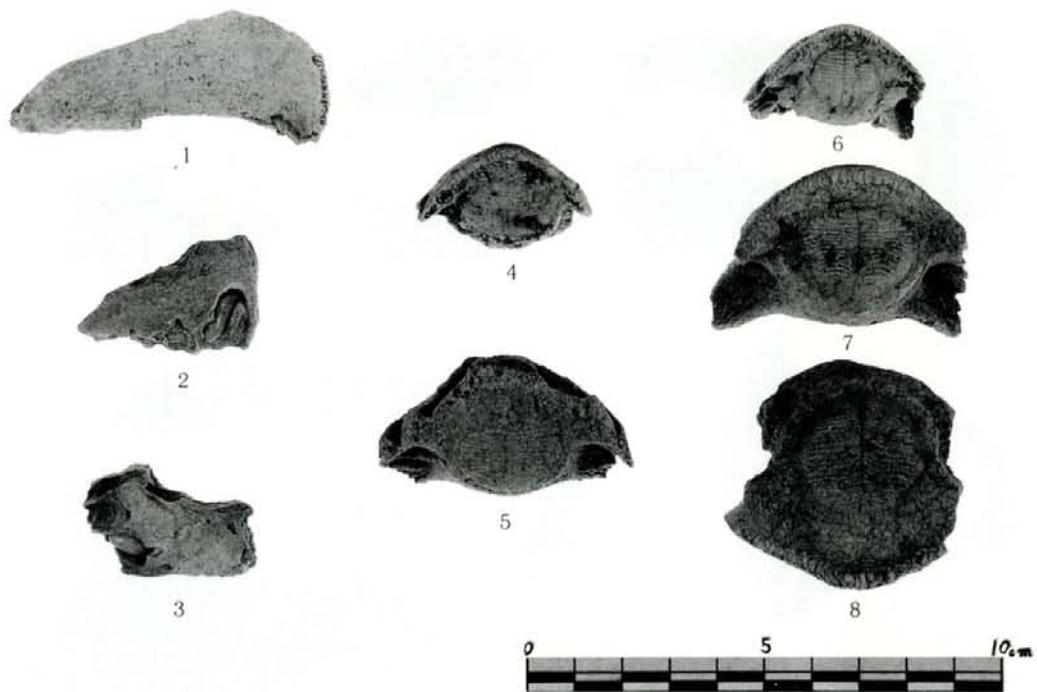
図版55 甲殻類

- | | |
|---------------|----------------|
| 1 ノコギリガザミ右可動指 | 2 ノコギリガザミ右可動指 |
| 3 ノコギリガザミ右可動指 | 4 ノコギリガザミ右可動指 |
| 5 ノコギリガザミ右可動指 | 6 モグズガニ左可動指 |
| 7 モグズガニ右不動指 | 8 ノコギリガザミ左可動指 |
| 9 ノコギリガザミ左不動指 | 10 ノコギリガザミ左不動指 |



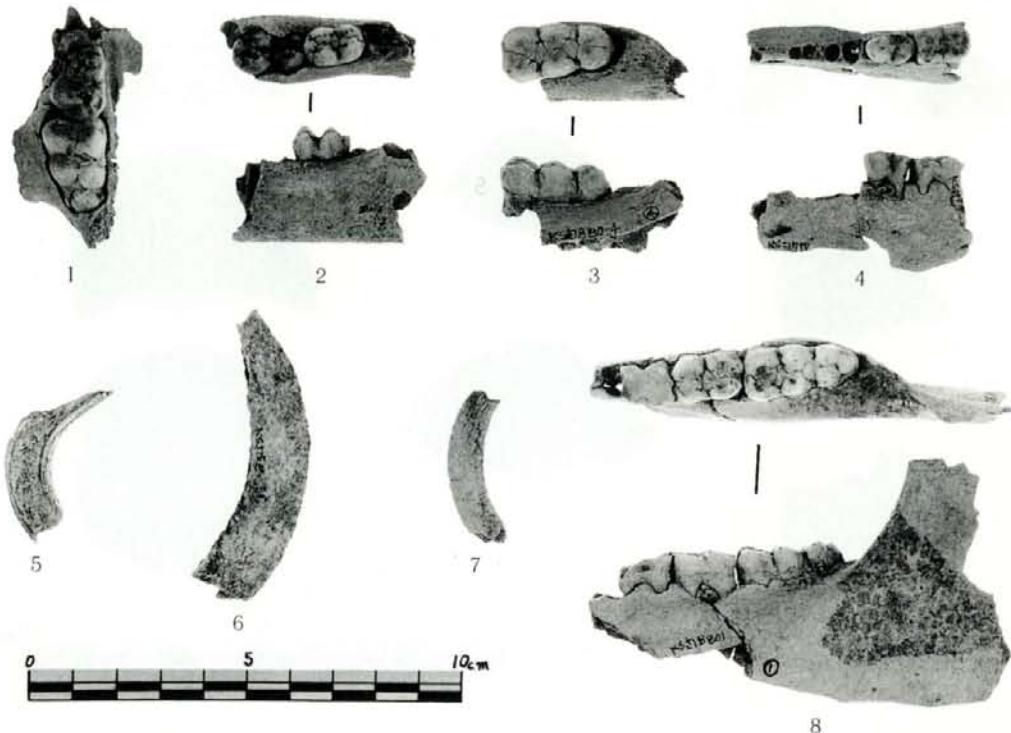
図版56 魚類

- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1 ウツボ類 L d (歯骨) | 2 ハマフエフキダイ L Pm (前上顎骨) |
| 3 ハマフエフキ L Pm | 4 マハタ属 L Pm |
| 5 クロダイ R d | 6 ハマフエフキ R d |
| 7 フエフキダイ L Pm | 8 ブダイ科 R Pm |
| 9 ベラ類 R d | 10 ブダイ科 R Pm |
| 11 ベラ R Pm | 12 フエダイ R d |
| 13 ブダイ科 R d | 14 ブダイ科 (ナンヨウ) L 上咽頭骨 |
| 15 ブダイ科 (ナンヨウ) 下咽頭骨 | 16 ブダイ科 L Pm |
| 17 イロブダイ 下咽頭骨 | |



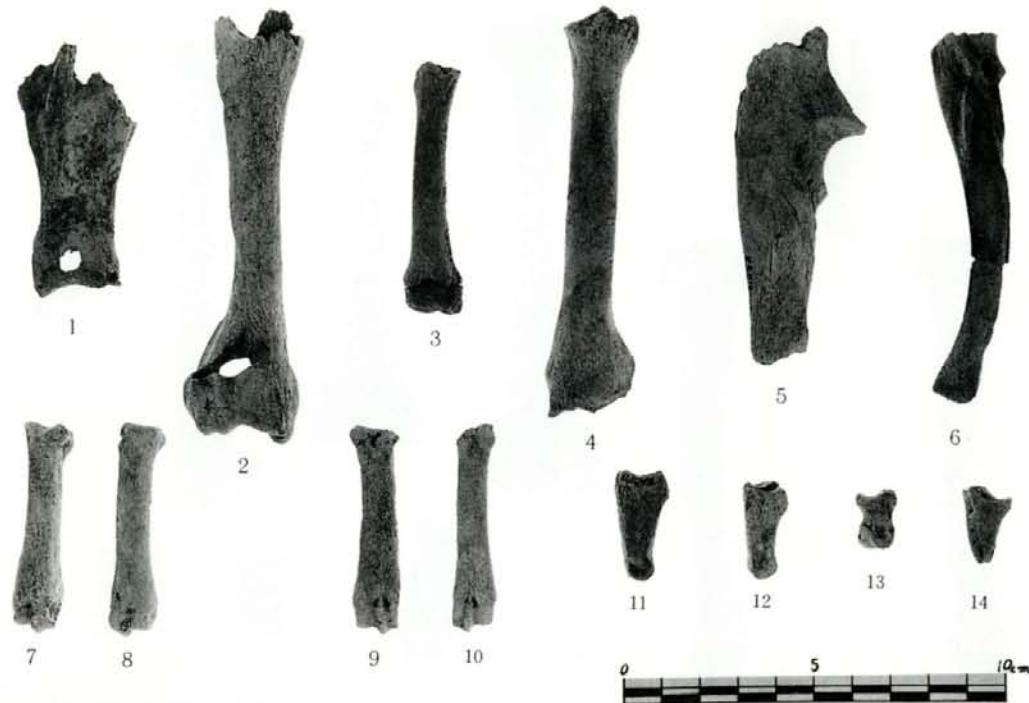
図版57 魚類

- | | |
|---------------|---------------|
| 1 フグ類 R Pm | 2 カワハギ R Pm |
| 3 カワハギ L d | 4 ハリセンボン 前上顎骨 |
| 5 ハリセンボン 前上顎骨 | 6 ハリセンボン 齒骨 |
| 7 ハリセンボン 齒骨 | 8 ハリセンボン 齒骨 |



図版58 イノシシ骨

- | | |
|--------------------------|----------------------------------|
| 1 R上顎骨 (M^2 、 M^3) | 2 L下顎骨 (P_2 、 M_1 、 M_2) |
| 3 L下顎骨 (M_3) | 4 L下顎骨 (P_4 、 M_2) |
| 5 R上顎骨 Rc | 6 L下顎骨 (犬歯) Lc ♂ |
| 7 R下顎骨 (犬歯) ♀ | 8 L下顎骨 |



図版59 イノシシ骨

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1 L肩甲骨 | 2 R上腕骨 d |
| 3 R桡骨 | 4 L桡骨 |
| 5 R尺骨 | 6 R尺骨 |
| 7 L中手足骨 Mc III IV | 8 L中手足骨 Mc III IV |
| 9 R中手足骨 S 完 Mc III IV | 10 R中手足骨 S 完 Mc III IV |
| 11 指骨 (基) | 12 指骨 (基) |
| 13 指骨 (中) | 14 指骨 (末) |



図版60 イノシシ骨

- | | |
|-------------------|-----------------|
| 1 R寛骨 p (近位部) | 2 R脛骨 per (完存) |
| 3 L脛骨 per (完存) | 4 L大腿骨 p欠 (近位部) |
| 5 L大腿骨 p欠 | 6 R大腿骨 p depはずれ |
| 7 L大腿骨 (幼) depはずれ | 8 L踵骨 |
| 9 L距骨 | 10 R距骨 |



図版61 ウミガメ・哺乳類

- | | |
|--|-------------|
| 1 ウミガメL上腕骨 | 2 ウミガメ肋骨板片 |
| 3 ウミガメL上腕骨（幼） | 4 ウミガメ縁骨片 |
| 5 ウミガメ腹板（棘） | 6 ウミガメ肋骨板片 |
| 7 ジュゴンL上腕骨（幼） | 8 イヌR下顎骨歯なし |
| 9 イヌL下顎（P ₂ 、P ₄ 、M ₁ ） | 10 ジュゴン 肋骨 |
| 11 ゴンドウクジラ 肋骨 | |



浦添市民憲章

わたくしたちは、
古い歴史と新しい希望にみちた、
てだこの都市・浦添の市民として、
この憲章を定め 誇りをもって
その実践につとめます。

1. わたくしたちは、
自然を愛し、みどり豊かなまちをつくります。
1. わたくしたちは、
きまりを守り、住みよいまちをつくります。
1. わたくしたちは、
働く喜びをもち、活気にみちたまちをつくります。
1. わたくしたちは、
平和を愛し、文化の香り高いまちをつくります。
1. わたくしたちは、
心と体をきたえ、明るく健康なまちをつくります。

浦添市文化財調査報告書第18集

嘉門貝塚 A 区

牧港補給地区開発工事に伴う

緊急発掘調査報告書 II

発行日 平成 3年 3月

発行所 浦添市教育委員会

印 刷 浦添市宮城2丁目4番1号

(有)サン印刷